

---

# 東方天剣録

高島 雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方天剣録

### 【Nコード】

N4557J

### 【作者名】

高島 雄

### 【あらすじ】

答えを追い求め、旅を続ける若者。だが、その彼に突如として襲う異常な事態が……果たしてその異常とは？ 答えは見つかかるのであろうか。

『るろうに剣心』のとあるキャラ（タイトルでバレバレですが）が現代の幻想郷へと迷い込む、いわゆる版權キャラの幻想入り作品です。

＊原作キャラの崩壊、チート有り、キャラクター同士の恋愛要素を含みます。読まれる方はその点をご注意下さい。

## 序章 ― 消えた天剣 ― (前書き)

＊注意！＊

主人公には若干のチート能力を持たせる予定です。

主人公と東方キャラとの恋愛要素を含みます。

原作キャラの性格改変（崩壊）要素も含みます。

原作設定と食い違う場合があります。又、原作と二次創作設定との混同もあります。

作者は厨二病を発症している可能性があります。

以上の注意点になんらかの不満、不快感を覚える方にはこの作品はあまりお奨めできません。

それでもよろしければ本文へとお進み下さい。

## 序章 ― 消えた天剣 ―

緑溢れる山々が軒を連ねる、とある山道。

山頂から流れる涼やかな風が上気した頬を心地よく刺激し、運ばれてきた豊かな森の香りが鼻孔をくすぐる。

木々の合間から零れ落ちる日差しのカ―テンが幻想的とも言える空間を演出し、

初夏の訪れを祝うかのように山鳥達はその歌唱力をもってコーラスを告げると、

主役の登場とばかりに山の獣達が山道へとその姿を現す。

そこはまさに山々を舞台とした大自然の劇場であった。

その劇場のただ一人の観客――旅人が、その舞台を楽しみつつ歩を進めているのが見える。

一見、のんびりとした歩調で山道を進んでいる旅人。

だが、登り道にもかかわらず、その歩調は乱れることなくしつかりとしており、並みの者では着いていくこともできず、置き去りの憂き目を見ることになるであろう。

そんな驚異的なペースで進む旅人であったが、その外見は一見すれば女性と見紛うほどの整った容姿をしていた。

見紛うほどの……とは、つまりは男性である。

年の頃は十代後半ぐらいであろうか、女性的な容貌が実年齢を判別させ難くさせている。

体格は細身で背も高くはなく、同年代の女性と並べてもそれほど差はないように見える。

服装は白の立ち襟シャツに青い着物と紺色の袴の典型的な明治期の書生スタイル。

更に腕や脚を保護するための手甲脚絆（てこうきやはん）を身に着け、足には足袋と草履、肩に担いでいるのは振り分け荷物と、これまた典型的な旅装束姿の若者であった。

「ふゝゝ……もう少し行けば下り坂になりそうだなあ」

若者はそう呟くと、一休みしようかと思いついたところか適当な場所がなにか辺りを見渡す。

すると少し先の道端に、座るのに丁度よさそうな石畳が置かれているのが目に入った。

大きさは畳み半畳ほど、高さは膝丈くらいの石畳であったが、今まで幾人もの旅人が腰を下ろしてきた為であろうか、

元は平面であったはずの石畳は丸く凹んでおり、人の腰の形に削れている。

元々は城か砦の建材用に削り出されたのであろう。

しかし、なんらかの理由でこの山道の脇に置かれ、そのまま放置

されたようである。

どれほどの年月を経てきたのか、凹みの部分以外はびっしりと苔に覆われ、  
長年の風雨に晒され続けてきた為か、角もすっかり取れて丸みを帯びている。

幾百、幾千もの旅人がそうしてきたであろうに、若者もその石畳に腰を下ろす。

ホッと一息……

しばらくは、なんととはなしに山林の風景を眺め、山鳥の歌声に耳を傾けていた若者であったが、  
ふと思いついたように懷から竹筒を取り出すと、先端にある同じ竹製の細長い栓を抜いた。

竹をくり抜いて作った水筒である。

その竹製の水筒に口をつけ、中の水を一口含む。  
水はまだ湧き水から汲んだ時の冷たさを十分に保っていた。

そのままゴクリと喉を鳴らして胃へと流し込むと、ふう〜と一息吐いて、  
口元に残った水滴を手の甲で拭う。

そして直ぐに栓をして再び懷へと戻した。

旅人にとって飲み水は貴重である。

そのまま水筒を手を持っていると、つい何度も飲みたくなってしまうからであった。

尤も、常人としてはそのような初歩的なミスを犯すつもりはなかったのだが、

そこはやはり長年染み付いた習慣というものであろう。

……もう何年前になるであろうか……

“あの人”に出会ってからというもの、様々な土地を放浪し――時には暗躍し――てきた。

しかし今はその人物とも袂（たもと）を分かち、こうして当てもない放浪の旅をしている。

この山道を越えた北の地を目指したのも、別に目的があったからではない。

途中で立ち寄った山茶屋で聞いた話から、

『これから暑くなるから丁度いいかな』と思った程度である。

一応は政府からお尋ね者として追われる身であるから、なるべく首都から離れた土地であればどこでもよかったのだ。

たとえ警官隊に見つかったとしても逃げ足には自信がある。囲まれたとしても、警官程度の相手なら十分切り抜けられるだろう。

——尤も、元新撰組三番隊組長であった“あの男”が出て来たら話は別であるが——

それに何より、政府にとって“あの事件”は表沙汰にはできない事情がある。

人相描きが出回っているとは思えなかった。

だが、追っ手ぐらいは掛かっている可能性はあるから樂觀視はできない。

この旅を始める前の若者であれば、それは大した問題とは思わなかったであろう。

それは彼が持っていた価値観……

——所詮この世は弱肉強食、強ければ生き、弱ければ死ぬ——

もし自分が殺されたり捕らわれたりしたら、それは自分が弱いから……

只、それだけのことだと思っていたからだ。

しかし、“ある人物”との出会い——闘い、そして敗北——がそれを変えた。

変えたと言っても、別に明確にこの価値観を否定されたわけではない。



かと言って、明解な答えを出してくれた訳でもなかった。  
それ所か 『答えは自分で見つけ出すもの』 とまで諭されたのである。

自分自身の生き方。そして犯した人斬りの答え……

—— 自分はまだその答えを見つけてはいない ——

故にこそ、自分はまだ捕まるわけにはいかないのだ。

今まで付き従っていた “あの人” と袂を別けてまで選んだ道である。

せめて、その答えが出るまでは旅を続けよう……そう、十年ぐらいは。

かつて、その人物がそうやって “流浪人（るろうに）” となつたように。

「さて、そろそろ行かなきゃ。日が暮れるまでには麓の町に着かないと……」

誰にともなくそう呟くと、腰を下ろしていた石畳から立ち上がって再び山道を歩き始める。

上を見上げれば木々の合間から覗く空に、まだ高い位置にある太陽が見え隠れしていたが、麓の町まではまだかなりの距離を歩かな

ければならない。

それを考えると早く出発の方がいいと判断したからである。

……彼が本気で走れば一刻（約二時間）も掛からずに辿り着くであろうが……

だが、追われている身である以上、あまり目立つ真似をする訳にはいかない。

故にこそ、本来の街道を使わずにこんな山道のルートを選んだのだ。

人通りがほとんどない山道とはいえ、どこに人の目があるのか分からない。

用心するに越したことはないのだ。

そう思いながら歩き始めたその瞬間。

「……え!？」

不意に若者は立ち止まった。

別段、追っ手と見られる者の姿が見えた訳でもなければ気配を感じた訳でもない。

ましてや、警官隊の姿が見えた訳でもなかった。

「なっ!？」

急激に目眩のような感覚が彼を襲う。

それも只の目眩ではない。辺りの風景がぐるぐると回転するような錯覚まで起こっている。

身体を強張らせて倒れないように足腰に力を入れるも……

「ち、力が……ぐっ……うう!？」

まったく言っていないほど力が入らず、それどころか急速に視界が暗転していく。

更にダメ押しとばかりに強烈な頭痛が襲い掛かってきた。

「ぐっ……があ!！」

たまらず両手で頭を抱え込むが、それも気休めにもならず益々頭痛が強まるばかり。

ザワザワと周囲の木や茂みが強風に煽られたようにざわめき、それが頭痛に拍車を掛ける。

「があああああああああああああっ!!!！」

がくんと両膝を着き、仰け反って叫び声を上げる。

急速に意識が遠のいていく……そして。

(な、なんだ……これは……?)

遠のく意識の中で、彼は想像を絶する光景を目の当たりにする。

それは歴史……それも戦争の歴史であった。

見たことも無い合戦場で、見たことも無い兵器が飛び交う。

鳥のような形をした機械らしき物に風車が付き、それが高速で回転して空を飛び回る。

——かつての同士に空を飛ぶ者が居たが、それに比べればまるで児戯である。

鉄の箱に大砲を乗せ、鉄の車輪に帯のようなものが付いた兵器が戦場を駆け巡る。

——それに比べれば大型馬車など人力車以下だ。

自分が知る鉄甲艦がまるで小船に見えるほどの巨艦。

それが巨大な大砲を振りかざして荒波を疾走する。

——その巨砲に比べればアームストロングカノンなど豆鉄砲にさえ見える。

次々と移り変わる戦場の光景。だが、やがてそれも終わりをみせる。

江戸の風景を色濃く残す東京の町並みよりも遙かに発展した都市に、突如として光る強烈な閃光……

暴虐なまでの死と破壊を振り撒き、やがてキノコのような巨大な雲を作り上げていく。

まるでこの世の終わりのような光景……

だが、そこからは急激な発展の歴史へと移り変わっていく。

次々と建てられていく四角い箱のような巨大な建築物。

道路は黒い何かに覆われていき、そこを馬のない馬車のような乗り物が走り回る。

道行く人々は西洋風のモダンな服装で着飾り、文明の恩恵受けてそれを謳歌している。

文明開化でこの世の春を謳歌していた明治政府の世など比較にならない発展ぶりであった。

それらの光景がまるで走馬灯のように激しく浮かんでは消え、消えてはまた浮かび上がる。

永劫とも思える時間が過ぎたかのような感覚であったが、実際は数瞬ほどであったのであろう。

なぜなら、仰け反って叫び声を上げてから前のめりに倒れるまでの間であったのだから……

「あ、ああ……」

もはや声にもならない呟きを発した若者が最後に見たのは。

（緋村さん……すみません。答え……見つけられそうに……ないです……）

彼を打ち負かし、自身で人斬りの答えを見つけ出すよう施した本

人――

『人斬り抜刀斎』 と呼ばれた男、緋村 剣心（ひむら けんしん）であった。

……やがて “誰も居なくなった” 山道に山鳥の声が遠く響いていく……

この日、山奥の山道にて誰にとも知られず姿を消した若者が居た。

その若者の名は……

――《 瀬田 宗次郎（せた そうじろう） 》――

かつて明治政府転覆を狙う組織であった志々雄一派において、首領たる男、志々雄 真実（ししお まこと）の側近を務め、要人暗殺用の特攻部隊 『十本刀』 にて最強と呼ばれた男である。

“天から与えられし剣術の才” という意味から 『天剣の宗次

郎』と呼ばれ、  
その天賦の才は、宿敵とも言えた男 『人斬り抜刀斎』 をも超え  
ていたとされる。

志々雄一派が壊滅した後、彼の足跡は完全に途絶えており――

――それ以降、彼を目撃した者は誰も居なかった……

## 序章 ― 消えた天剣 ― (後書き)

皆様初めまして。今回、この作品が初の投稿小説となります。

これまで数多くの優れた作品を読み、私も以前より暖めていた構想で書いてみたくなり投稿させて頂きました。

まだまだ勉強中の初心者ではありますが、この拙作に多少なりとも感銘を受けて下されば幸いです。

＊追記…携帯で表示を確認してみましたが、どうにもルビがある所で改行しているようです。

又、他の文も改行がおかしい所がありましたので修正してみました。少しは見易くなったとは思いますが……



## 第一話 ― 気が付いたら幻想郷 ―

「う……う、ん……」

意識がゆっくりと覚醒していく。

全身に若干の気だるさを覚えるが、たいしたことは無いようだ。

手足にも異常は感じない。

呼吸、脈拍も共に正常。

頭は……

「……っ！ ……つう……」

そこまで考えた瞬間、軽い頭痛が襲ってくる。

思わず右手の甲を額に当てるが、そう酷いものでもなく直ぐに治まっていく。

それと同時に感じた布の感触。

どうやら布団に寝かせられているようだ。

近くに人の気配はないが、一応は用心して注意深く感覚を研ぎ澄ませ周囲の様子を探る。

……どうやら何者かが近づいてくるようである。

素早く眼を開けて起き上がり、周囲の状況を確認する。

「知らない天……いや、ここは……？」

眼を開けた瞬間に何かを口に仕掛けた気がするが、かまわず辺りを見回した。

……何やら “ みよん ”    な電波を受信しかけらしいが、気のせいにしたようである……

（……お座敷……どこかのお屋敷の中かな？）

広さは十畳……いや、十二畳はありそうな広い和室である。

正面と右側にふすま。左側に障子。そして後ろ……枕側には床の間に掛け軸。

ふすまと天井の境にある欄間（らんま）には見事な彫刻が彫られており、

先ほどの掛け軸と合わせて、この家がかなり格式の高い屋敷であることを容易に想像させる。

障子からは日の光が薄く差し込み、部屋を薄暗く灯している。

朝方か夕刻なのかは分からないが、腹の減り具合からみてほぼ一昼夜は経っているようだ。

（……着替えさせられている）

自身を見ると白い着物……いわゆる寝巻き姿であることを確認する。

（着替えは？ それと僕の荷物も……あ、あった）

それらを探そうとして、直ぐにその必要がないことに安堵する。

どちらも彼の真後ろ、枕元に置かれていたからであった。

着物はきちんとたたまれており、その横には荷物と……

（短刀もそのまま……か、どうやらあまり警戒する必要はなさそうだね）

短刀……自身が主に使っていた刀——菊一文字則宗（のりむね）——は、

抜刀齋との戦いで折られ、志々雄から授かった脇差も当人に返上した今、

彼にとって最後の武器となった短刀である。

短刀と言うよりは合口に近いこの刃物は、携帯に便利である為、常に懷に収めていたのだ。

それを手に取り、フツと小さく笑みをこぼす。

自嘲的な笑み……以前の彼を知るものならば驚きの表情を浮かべるであろう。

だが、今の彼の顔はそんな表情を“自然に”浮かべていた。

自分がどんな顔をしているかなど知ってか知らずか、手にした短刀から刃をわずかに引き抜く。

（暗殺の為に使っていたモノが自分を守る最後の武器になるとは……ね）

そう。大久保卿暗殺の時に使用され、これまで幾度となく暗殺に使われてきた短刀であった。

刃に映る自分の眼を見ながら己の所業を思い返し、皮肉な現実に再び己を自嘲する。

ふと右側のふすまに目を向ける。

どうやら近づいてくる人の気配がすぐそこまできたようだ。

ふすまの外側はおそらく板張りの廊下であろう。

板張り特有の足音が聞こえてくる。

（この足の運び方……間違いなく剣術かなにかの武術を身に付けている人……だね）

足音からそう判断した宗次郎は手にした短刀をどうするか一瞬迷ったが、

すぐに刃を戻し、枕元に置く。

武器をそのままにしてあるということは、すなわち敵意が無いという証であろう。

もしくは武器一つ持たせた所で問題なく無力化できるという自信の表れなのか……

どちらにせよ、向こうが誠意を示しているのならばこちらも誠意を持ってあたるべきだと判断し、短刀を戻した後、そのままの姿勢で開かれるであろうふすまを注視する。

「……失礼します」

間を置かずしてふすまの向こう側から声を掛けられる。

声からして若い女性……おそらくはまだ少女と呼ばれる年頃だろうと彼は予想する。

どうやら向こうも宗次郎が起きていることを気配で察知したようである。

一瞬戸惑う気配があったものの、そのまま声を掛けたようだ。

「どうぞ」

と、宗次郎も返事をして入室を施す。

「はい。もう起きられていたんですね」

そう言いながらすうつと軋みなく開かれるふすま。

両膝をきちんと揃えて床に着け、現れたその姿は予想した通りの年若い少女であった。

歳は十五か十六か、どちらにしても宗次郎より年下の少女にしか見えない。

だが、先ほどの足の運び方に加え、油断なく彼を窺う鋭い目線。間違いなくこの少女が潜り抜けてきた修羅場の数は一つや二つではないであろう。

（白髪……いや銀髪か……いやいや、それよりも “アレ” はい  
つたい……？）

現れた少女を目にした時、まず思ったのがそれであった。

一瞬、白髪とも見間違えたようだが、よく見れば薄い銀色に輝く  
美しい髪の色であった。

瞳の色も深い青色であるため、もしかしたら西洋人の血を引いて  
いるのかもしれない。

顔立ちは幼さの中に凜々しさがあり、それが年相応の可愛らしさ  
と相まって不思議な魅力を感じさせる。

服装は白の半袖シャツに襟には黒いリボン。緑色のベストのよう  
な上着と、同じ色のスカート。

背中には少女が持つにはやや大振りとも言える長刀に、脇差くら  
いの短刀。

長刀の鞘の先には何故か一輪の花が括り付けられており、小さな  
帯も巻かれている。

髪型は癖の無いサラサラとした感じのストレートヘアで、それを  
京人形のようにきれいに切り揃えられたボブカットにしており、大  
きめの黒いリボンがアクセントとなって、銀色の髪に良く映えてい  
る。

—— ちなみに彼の時代の日本にボブカットという呼び方はまだ  
無い ——

だが、何よりも宗次郎が注目したのは少女の頭上に浮かぶふよふ  
よとした白い物体であった。

何やら人魂のような形であるが……

「あ、あのう……」

「はい？」

「ええと……いきなりぶしつけな事をお聞きますが……」

遠慮がちに尋ねる宗次郎の言葉に、少女は不意をつかれたように眼をきよとんと丸くする。

それが彼の思った年齢よりも少女を幼く見せ、なんとも言えない愛らしさを醸し出していた。

「“それ” はなんなのでしょうか？」

だが、当の宗次郎の目にはまったく入っておらず、浮かぶ白い物体を指差しながら少女に質問する。

「ああ、これは……」

そう言い掛けた少女であったが、不意に口を閉ざしてしまった。

そして何やら右手を顎に当てて思案顔。

同時に警戒した様子も薄れたが、当の宗次郎は何か不味いことを聞いたのかと小首を傾げる。

「あ、とりあえず自己紹介しておきましょう。

私は魂魄 妖夢（こんぱく ようむ）と申します。妖夢と呼んで下さい。

それと尋ねるのが遅れましたが、お体の加減はいかがですか？」

唐突な自己紹介ではあったが、名乗られた以上は名乗り返さないのは無礼に当たる。

その為、宗次郎も正座をし姿勢を正して向き直った。

「これはご丁寧に。そう言えば僕も名乗っていませんでしたね。

僕は瀬田 宗次郎と言います。どちらでも好きに呼んで下さい。

体の方は問題ないようです、ご面倒をお掛けしたようで申し訳ありません」

自己紹介を返した宗次郎は体調を気遣ってくれた彼女に謝意を述べ、頭を下げる。

妖夢と名乗った少女はそれにいいえと答えると、ホッとした様子を見せた。

どうやら宗次郎の礼儀正しい対応に安堵らしく、警戒していた様子も一段と薄れたようだ。

「それでは、宗次郎さんと呼びますね。まずは朝食を摂られて下さい。

その時に質問のことも含めて “ココ” のことをご説明します」

その言葉に宗次郎はココ？ とオウム返しに尋ねると妖夢もハイと頷き。

「朝食の席で私の主（あるじ）も紹介しますので、詳しい説明は主がすると思います。

では、あと四半刻（約三十分）しましたら呼びしますので着替えてお待ち下さい」



それでは失礼しますと言いながらふすまを閉めようとする妖夢。  
それを見た宗次郎は少し慌てて声を掛ける。

「あ、すいません。せめて “ココ” の名前だけでも教えて頂  
きませんか？」

宗次郎としては、せめて土地の名前だけでも確認しておきたかっ  
たのだ。

なにしろ自分は追っ手が掛かっている身である。

倒れていた自分を助けてくれたであろう人達にあまり迷惑は掛け  
たくなかったからだ。

以前の彼ならあまり気にしなかったのかもしれない。

それだけ彼の心にかつての感情が戻ってきている証であろうか。

もしかしたら、自分を助けてくれた目の前の少女に志々雄の姿を  
重ねたのかも知れない。

それが真であるか否かは宗次郎自身にも分からないであろう。

だが、今のこの気持ち嘘偽りではないことだけは、はっきりと  
言えるようである。

妖夢は半ば閉じ掛けていたふすまから顔を覗かせるとこう言った。

「この屋敷は白玉楼と言います。そして “ココ” は……」

そう言って一旦は口を閉ざすと若干戸惑うように間を置き、やが  
て意を決したように土地の名を口にした。

「…… 《幻想郷》 ……そう呼ばれております……」

それではと今度は呼び止められることもなくそう言ってふすまを

閉じる。

そして、やや早足で歩き去っていく足音が宗次郎の耳に響くのであった。

残された宗次郎は呆然とし、正した姿勢のまま固まっていた。

「白玉楼……幻想郷……」

そう呟く宗次郎。

どちらも聞いたことが無い地名であった。

それに妖夢の“時代に合わない服装”と言い、何よりあの白い物体と言い……

「ひょっとして僕はとんでもない所に来てしまったんじゃない……」

押し殺すように呟く宗次郎であったが、後（のち）にその言葉通りであることを思い知らされることとなる。

『答え』 はまだ、見つからない……

おまけ。

「あ、着替えないと……って」

「……これ、着せてくれたのって……まさか妖夢さん……？」

「……………ま、いいか」

どうやら彼の感情は、まだ完全には戻っていないようである。

……だが、喜怒哀楽の内、羞恥心はどれに当たるのだろうか……

**第一話 ― 気が付いたら幻想郷 ― (後書き)**

序章と同じく、こちらも修正してみました。

## 第二話 ― 亡霊姫 ― (前書き)

明治期の貨幣については一応調べてみましたが、  
詳しい方から見ればおかしい点があるかもしれません。  
その場合は本作品のみの設定と認めてください。

## 第二話 ― 亡霊姫 ―

着替え終わった宗次郎は荷物のチェックを行っていた。

とは言っても精々が下着の替えや小物ぐらいであつたが、特に無くなった物はなかった。

チェックを行つたのは荷が解かれて締め直された形跡があつたからだが、別段、咎（とが）める気などはなかった。

行き倒れとは言え、見知らぬ余所者を家に入れるのだ。当然の処置だと思っているぐらいである。

それと所持金もそのままであつた。

元々宗次郎は志々雄が組織を立ち上げた頃から各地を飛び回ることが多かった。

支配下に置いた村や各支部との連絡、調整など志々雄が天下を取る下準備に奔走していたのだ。

方治が組織の纏め役となつた以降は、大久保卿暗殺や甲鉄艦『煉獄』の出航準備等の重要任務にのみ彼が単身で任務を請け負う形となつていったが、それだけに多額の活動資金なども渡されていたのだ。

宗次郎はそれをそのまま逃走資金として拝借していたのである。

そのことに關しては別段、思うところは無い。

どの道お金は必要なのだ。手切れ金代わりに大いに使わせて貰うつもりであつた。

尚、その金のほとんどは江戸幕府の貨幣。

それも携帯に便利な万延小判や二朱金、四文錢である。

明治政府が発行した紙幣は作りが粗悪で信用も乏しいものが多く、金銀貨などは貿易用であり、明治十一年に発行されたばかりの国内用新銀貨もまだ全国的に流用していなかったからだ。

だが交換レートを知る必要上、新銀貨も所持しておく必要がある為にいくつか交換してあつた。

しかし、どちらにせよ個人で所有するにはかなりの大金である。そのことについて不信に思われているのではないかと懸念するが、直ぐにそれも今更だと判断した。

白玉楼の主とやらから得られる情報を得たら直ぐにでも出立すればいいだけなのだ。

不信に思われて警官を呼ばれようとも、その前に逃げ切れればいいのである。

更にここの家人 —— 例えば先ほどの少女 —— などが取り押さえようとしたとしても問題はない。

確かにあの妖夢と名乗った少女はかなり腕が立ちそうだが、逃げるに徹すれば逃げ切れる自信はある。

ココの家人に迷惑を掛けたくは無いという思いに嘘偽りはないが、それも相手の出方次第だ。

いずれにせよ、どう考えても今更であるし、判断したように何も問題は無いのである。

「うん。何も問題無い……とは思っただけだね」

確かめるように呟いてはみたものの、やはり懸念は残る。

やはり気になるのは妖夢にまわり付くように漂っていた白い人魂のような物体と……

「幻想郷……ね。やっぱり見たことも聞いたことも無いなあ」

一人になるとつい独り言が多くなるクセを持つ宗次郎。  
だが、この時の独り言はいつにないほど “ ナニか ” におびえるような色をにじませていた。

そして言葉を続ける。

「……見たことも無いと言え……」

そう言って思い浮かべるのは、やはり倒れる前に見た “ あの光景 ” であつた。

「どうして……」

そう呟いて眉にぎゅっとシワを寄せる宗次郎。

「どうして僕は、見たことも無いはずの “ アレを識っている ” んだ？」



彼の心の中にとある感情が小さく渦巻き始めていた。

もし今の彼の心を覗くことができる者が居れば、その感情をこう  
呼んだであろう――

――  
“恐怖” と……



「こちらです」

「すみません。わざわざ……」

いいえと返しながら妖夢は思う。

この端正な顔立ちをした若者に、これから残酷な現実を知らせなければならぬと。

そう考えるとどうしても憂鬱な気持ちになってしまう。

こうして到着を告げててもその言葉はついついぶっきらぼうなものになってしまっている。

朝食を摂る部屋まで彼を案内してきた彼女であったが、その間、交わした言葉はまったくなかった。

彼女自身がそんな気分にはなれなかったのもあるが、彼に目覚めたときにはなかった陰のようなものを感じたからであった。

あの短い時間で何があったのかは分からないが、何かがあったのだらうとは十分に推察できた。

だが、だからと言って自分に何かが出来る訳でもないし、それらの判断を下すのは自分の仕事ではないと思い直す。

判断するのは自らの主であり、自分はただそれに従うまで……と、そう結論付ける。

そして、待ちくたびれているであろう主に、客人の到着を告げた。

「失礼します。客人をお連れしました」

「ああ、やっときた。早く入ってもらってちょうだい。もうお腹ペコペコよ」

ふすま越しに返ってくる主の返答に思わず頭を抑えると、ふすまを開き、宗次郎を部屋へと招く。

「どうぞ、入ってください」

「はい。失礼します」

そう言って妖夢に続いて入室してきた宗次郎。

その顔が若干引きつっているように見えたのは決して妖夢の見間違ではないだろう。

……たぶん。



「はあゝご馳走様。お腹いっぱいよ」

「……ご馳走様でした。とても美味しかったです」

「いいえ。お粗末様です」

それぞれ誰の台詞であるかは明記する必要もないであろう。

自己紹介もそこそこに始まった朝食の席であったが、宗次郎は食事を摂りながら目の前の非常識な現実には終始圧倒されていたのだ。

(ど、どうやったらあの量がああの中……? ? ? ?)

はつきり言ってどう考えても一人で食べきれぬ量ではなかったのだ。

だが目の前で片付けられる大量の空になったお皿が、それが現実であることを如実に物語っている。

ちなみに朝食の献立は、白米と豆腐のお味噌汁に焼き魚と根野菜の煮付け。

白菜と大根の葉の漬物にほうれん草のおひたしと、宗次郎にとっても食べ慣れた普通の献立であった。

しかし、席の上座に座る女性の目の前に並べられた量が普通ではなかったのだ。

大人 五、六人分の量は確実にあったはずだが、彼が食事を終えるまでに全て消えてしまっていた。

（特にがつついて食べていた様子はなかったんだけどなあ……）

そう思いながらも目の前で起こった不可思議としか思えない現象に脳内が混乱しかけていた。

（ああ……やっぱり……）

一方の妖夢も主との初対面の相手が絶対に思うであろうことを想像し、それは決して間違いではないであろうと結論付けていた。

だが、どうせ “嫌でも” 慣れるだろうと思い、何も言わずにテキパキと後片付けを済ませると、食後のお茶を入れ、まずは落ち

着かせるために宗次郎の前に湯飲みを置く。

「あ、ありがとうございます」

そう言って受け取った宗次郎であったが、その眼はどう見てもうつろであった。

「いいえ、どういたしまして……（ボソボソ）気にしないで下さいね？ アレはいつものことですから」

「……………ゑ？」

礼を返した後、さすがにフォローがいるかなと思ひ小声でそう言った妖夢であったが、それは宗次郎の頭を更なる混乱の坩堝（るつぼ）へと落とすものでしかなかったりする……



（綺麗な女性（ひと）だなあ……でも、あまり生きているって感じがしないのは何故だろう……）

（あら、やっぱり可愛らしい坊やねえ♪ でも、ちょっと死の気配を振り撒きすぎね……）

これが宗次郎と、この白玉楼の主——西行寺 幽々子（さいぎようじ ゆゆこ）——との初対面での印象であった。

正確に言えば、幽々子は運ばれてきた宗次郎を見ていたのだが、やはりお互いに起きて顔を会わせた時を初対面と言うべきであろう。

だが、お互い名前だけを名乗り合った後、幽々子はもう一秒でも待てないと妖夢に訴え、とりあえず説明は朝食の後にしましょうと妖夢が答えると、いただきますの言葉と同時に勢いよく食べ始めたのであった。

そして朝食も終わり、食後のお茶で一服して落ち着いた——主に、幽々子のお腹と宗次郎の頭が——頃合いを見計らって、まずは妖夢が口を開いた。

「宗次郎さん。改めて紹介しますね。  
こちらが白玉楼の主、西行寺 幽々子様です」

続けてその当人から、幽々子って気軽に呼んでねえと、威厳もへったくれもない言葉が出る。

その言葉に妖夢は軽く溜め息を吐いて片手を額に当てるが、直ぐに気を取り直すと姿勢を正した。

「幽々子様。いつも申し上げておりますが、客人の前で「堅っ苦しいことはなしよ」ぐ……」

なんとか苦言を呈しようとするが、幽々子本人に言葉を遮られ、

渋面のまま黙り込む妖夢。

その様子に宗次郎はあはたと乾いた笑い声を漏らすが、コホンと咳払いをしてこちらにも姿勢を正す。

「それでは改めまして。幽々子……さんでよろしいですか？」「いいわよ」では、幽々子さん。

この度はお助け頂き真にありがとうございます。この瀬田宗次郎。ご恩を一生のものとさせて頂きます」

そう言って改めて幽々子を観る。

歳は自分と同じか、少し年上のようにも見えるが、幼く見える容姿もあって今一つ判別が尽かない。

かなりの美人で、どこことなく威圧感があるが本人のふわふわとした雰囲気があるのを打ち消している。

桜を思わせるような不思議な髪の色をしており、波打つようなその髪を肩口で切り揃えている。

髪と同じ色の瞳はまるで夢見るかのように儚げで、じっと見ていると吸い込まれそうだ。

大陸風を思わせる古風な空色の着物に、腰には黒い帯。それらが女性らしい豊満な体つきの彼女をピッタリと覆っており、体のラインをくっきりと浮かび上がらせていた。

頭には服と同じ色の帽子を被っているが……

（あれは……確か死者の頭に付けるモノだったと思うけど……）

宗次郎が思う通り、帽子の前に付いた、どこか蛇を思わせる模様の入った三角形の布は、天冠と呼ばれる死に装束の一種であった。

（確かにこの女性はあまり “ 生きている ” 　って感じはしないんだけど……まさか、ね……）

そう考えていると、当の幽々子はどこからか扇を取り出して開くと、口元を隠しながら話し出す。

「まあ、礼儀正しいわねえ。いいのよ、そんなに気にしなくても。礼を言うなら妖夢に言っただけいいね。貴方をここまで運んだのは妖夢なんだから」

ニコニコとしながら幽々子がそう告げると、宗次郎もそうだったんですかと返して妖夢に向き直る。

「妖夢さん。改めて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました」

「い、いいえ。気にしないで下さい。たまたまお使いの帰りに宗次郎さんを見つけただけですから」

真正面から礼を言われ、妖夢は慌てるようにわたわたと手を振りながら言う。

照れているのか顔が赤くなっており、その様子があまりに可愛らしく、宗次郎は思わず笑みを零す。

「あらあら。妖夢ったら照れちゃって、可愛いわねえ」

「ゆ、幽々子様！」



なんとも微笑ましいやり取りであったが、一通り妖夢をからかって満足したのか、幽々子はやおら扇をパチンと閉じると宗次郎に向き直り、真面目な顔で話しかける。

「さて、これから貴方に話すことは貴方にとってとても信じられない話になるでしょうけど  
気をしっかり保って最後まで聞いてちょうだいね」

その言葉と雰囲気思わず宗次郎は居住まいを正してハイと頷く。  
妖夢もからかわれて慌てふためいていたのが嘘だったかのように姿勢を正した。

二人の様子を見て分かるように、そんな姿勢を自然と取らせた幽々子の雰囲気は、先ほどまでのふわふわとした様子を微塵も感じさせないほど威厳に満ちたものであった。

だが、何を話されても動じないように身構えていた宗次郎であったが、幽々子が放った最初の言葉によってそれが突き崩されることになる。

「まず、最初に言っておくわね。宗次郎……宗君と呼ぶわね。

—— 貴方はもう、人間（ひと）とは呼べないモノになっているわ……」

「……………え？」

その言葉に思わず呆けたように返す宗次郎。

妖夢も思わず眼を伏せて深刻な表情となる。

「さっきも言ったけど、気をしっかり保ってちょうだいね。  
貴方には知らなければならぬこと、知って貰わなければならぬ  
ことがたくさんあるのだから」

宗次郎は聴く。 《亡霊姫》 と呼ばれる人間（ひと）とは言え  
ない人外（ひと）の話しを……

そして語られる。 《幻想郷》 と呼ばれる人外が集う地の物語  
を……

『答え』 は、遙か遠く……

## 第二話 ― 亡霊姫 ― (後書き)

宗次郎を人外にしちゃいました。

彼のファンの皆様、申し訳ありません。

追記..また更に改行ミスを発見して修正.....いかなあ。O R Z

### 第三話 ― 人間（ひと）から人外（ひと）へ ― （前書き）

今回からは少しは会話文が増えます。

ですが、相変わらず地の文が多いです……

それと妖夢の能力を独自に解釈しております。

漢字の意味の違いを強調するためですが、それも意味の捉え方が違うかもしれません。

読む上でその点をご注意下さい。

### 第三話 ― 人間（ひと）から人外（ひと）へ ―

「「「……………」」」

沈黙。

長い話を終え、咽が渴いたのか、幽々子のゆったりとお茶をすすめる音だけが響く。

「あ、あの……………宗次郎さん……………」

沈黙に耐えかねたのか、妖夢が宗次郎に話しかけるが、その本人から手で制されて口を閉ざす。

そして、彼が俯いていた顔を上げると、その顔には妖夢が感じていた陰がすっかり薄れていた。

「大丈夫ですよ。妖夢さん。色々と理解の追いつかない所もありますが、納得のいくこともあります」

そう言って温くなってしまったお茶に手を伸ばす。

こちらは咽が渴いたというより気持ちを落ち着かせるためであろう。

「……………貴方が知るはずの無い知識のことね？」

宗次郎の言葉に幽々子が確かめるように問うと、彼もハイと頷き返す。

幽々子の話しによるとこうであった。

最初、運ばれてきた宗次郎を見て人里の人間が迷ってしまったのかと思われていたが、

その服装が幻想郷では “ありえない” 旅装束であったこと。

個人が持つには多すぎる所持金があり、それが江戸時代の通貨にしては保存状態が良すぎたこと。

そして何より、幽々子が彼を診た時に感じた人間が持つはずのない “妖力” を感知したこと。

それらのことを検証した結果、彼女は長年の友人にしてこの幻想郷の管理者。

大妖怪の八雲 紫（やくも ゆかり）に彼の調査を依頼したとのことである。

そして彼女の持つ能力 —— 『境界を操る程度の能力』 —— を用いて彼を記憶に至るまで調べた所、最初に幽々子が話したように、もはや人間とはいえない存在になってしまっているとの事。

又、幻想郷で唯一とも言える医者 of 八意 永琳（やごころ えいりん）にも調査を依頼したという。

彼女には外傷の有無、妖力の発生による身体への影響、脳内部に異常が見られるかどうかの診察を行ってもらったとの事。

—— ちなみに着替えさせられていたのはこの為だそうである

又、妖力が発現した原因ははっきりとは分からないものの、ある程度は推察できたと言う。

### 《博麗大結界》

幻想郷を外界と隔てる結界。この為、通常的手段では行き来することができないとされている。

その数少ない例外として “スキマ妖怪” とも言われる紫の能力などが上げられる。

又、外界で起こる神隠しの類いは彼女の仕業であることがほとんどであるそうだが、今回の件に関しては関係していないため供述はしていない。

通常、迷い込んだ外来人を送り帰すのは博麗神社の巫女が担当しているとの事。

博麗 霊夢（はくれい れいむ）という名で、異変解決などが主な仕事だそうである。

……尤も、百数十年も過ぎている現在。彼が帰る意味はほとんどないが……

話が逸れたが、この博麗大結界が張られた時期と、宗次郎の居た時代が一致しており、この結界が張られた際に巻き込まれた可能性が高いと言う。

又、最近では守矢という神社がこの幻想郷に現れており、それが宗次郎の居た山道にも近かったらしく関連性が指摘されているが、少々時期がズレているためはつきりとしたことは言えないらしい。

『ま、ズレたと言っても百数十年の時間を考えると、ほとんど誤差でしかないけどね』

とは、紫の言だそうである。

そして、永琳の診察によると体にはなんら異常はなく、普通に生活できるとのこと。

だが “ 妖化 ” の影響により身体能力が大幅に向上しているらしく、しばらくは様子を見たほうがいいとの事だそうである。

そして話しは幻想郷の起源や歴史、最近の異変に関することや幽々子と妖夢の正体についても語られ、しばらくはこの白玉楼に逗留して今後の宗次郎の身の振り方を考えましようと思われた。

それが冒頭の前に語られた幽々子の話であった。

「宗君がそれらの知識を持っているは、百数十年分の歴史の記憶が貴方に刷り込まれたからだと思うわ。本当なら脳への負担は半端なものじゃなかったはずんだけど……」

「……妖化によってその負担が軽減された……ですか？」

「その通りよ。理解が早くて助かるわ。でもね、なぜ貴方が百年以上の時の流れを体験しても

体が老いることなく妖化……言ってみれば “ 半人半妖 ” になったのかは私達にも解らなかったわ」

博麗大結界の影響としか言い様がないわね、と言葉を続けた幽々



子。

一方の宗次郎は氣になった言葉に首を傾げる。

「半人半妖……ですか？」

「そ。つまり半分が人間、半分が妖怪ね。

こんな事例はほとんどないんだけど前例がないわけじゃないわ」

そこでそれまで黙っていた妖夢が口を挟んだ。

「慧音さんのことですね？」

その言葉に幽々子はそうよと頷くと。

「上白沢 慧音（かみしらさわ けいね）。

彼女も元は人間だったらしいけど、なんらかの理由でハクタクという妖怪との間のワーハクタクという半人半獣の妖怪になったそうよ。理由については本人も語らないから分からないけど」

今は人里で寺子屋の先生をしているわと続け、再び扇を広げて姿勢を崩した。

そして真面目な話はこれまでとばかりに首を左右に振ってコキコキと鳴らす。

その様子を見て妖夢はなんとも言えない顔をする。  
もっとと長続きはしないものかとも思っているのだろう。

「半人半妖と言えは……」

と、幽々子が何かを思い出したのか再び口を開く。

「確か香霖堂の店主もそうだったわねえ」

「香霖堂の店主？」

「ええ。森近 霖之助（もりちか りんのすけ）。

こっちは生まれながらの半人半妖で、片親が妖怪だったそうよ。

今は魔法の森の近くに香霖堂という店舗を構えてそこで道具屋を営んでいるわ」

新たに聞く名前と説明に宗次郎ははあゝと息を漏らす。

「本当に色んな方が居るんですねえ、幻想郷って」

その言葉に幽々子は楽しそうに眼を細めて再び扇で口元を隠し、これまた楽しそうな声を出した。

「ええ。さっきも説明したけど、幻想郷にはホントに色んな人（？）が居るわ」

妖怪と一口に言っても、妖獣、半獣、半妖、天狗、河童に鬼、吸血鬼から一人一種の妖怪。

私達のような亡霊や半霊に幽霊。騒霊や妖精に精霊から果ては死神に閻魔様まで居るし」

閻魔さま！？ と最後の言葉に反応してすっとんきょうな声を上げる宗次郎。

“今の彼が” ここまで感情を表に出すのは珍しいと言える。

対する幽々子は、そう言えば説明してなかったわねえ」と楽しそうにしたり顔。

その様子に妖夢はどこか諦めたように溜め息を吐くと、宗次郎に同情の視線を向ける。

こうやって今後も何かと弄られるんだろうなあと思ったようだ。

彼女を知る者がその言葉を聞いたら、普段から弄られている人が何を言うかと思うであろう……

（あっ。今後と言えば……）

と、何かを思い出したのか、妖夢は宗次郎に向き直って話しかける。

「宗次郎さん。何かなし崩し的に今後のことまで決まってしまうとしたけど……

本当にそれでよろしかったんですか？」

妖夢としては彼が今の状況をどう思っているのか気がかりであった。

何しろ目が覚めたらココは妖（あやかし）の集う異郷の地であると言われ、

今は既に百数十年も過ぎ去っていて、その上 人外にまでなっていると説明されたのだ。

当の本人としてみれば、とても納得できないことであろうと思っただけである。

確かに彼の過去については妖夢も聞いているが、接してみてもとても悪人とは思えないし、何より彼にとって自分達こそ人外であり、赤の他人なのである。

そんな自分達にそこまで決められてよかったのだろうかと妖夢は氣遣った。

一方、そう言われた宗次郎は直ぐに驚き顔をいつもの顔に戻し、妖夢に向き直る。

「よろしいものにも、僕にとってはありがたいくらいです。むしろ心苦しいくらいですよ。

それに記憶を見られたのならご存知でしょうけど、僕はお尋ね者の大罪人なんです。

そんな僕を受け入れてくれた上に氣遣ってまでくれる妖夢さんには本当に感謝しています」

そう言った彼も完全に納得してはいないが、彼女達が嘘を吐いているとも思っていないかった。

嘘を吐くならもっと真実味を持たせたことを言うであろうし、何より自身が体感した事実もある。

そして妖夢が自分を本当に氣遣ってくれているという事実が何より“嬉しかった”のだ。

「わ、私は別に……ゆ、幽々子様が紫様たちと話し合われて決められたことですから……」

宗次郎に真っ直ぐな瞳で返された妖夢は、またもわたたと慌てて言い繕う。

今度は耳まで赤くなっている妖夢であつたが、その耳に「んふふう」　と何やら笑い声が……

嫌な予感がして声のした方を見ると、案の定幽々子が扇で口元を隠しながらこちらを見ていた。

しかもその目は狐目のように弧を描いており、まるっきりどこかのエロ親父のようである。

「な、なんででしょうか？」

ひっきりなしに嫌な予感の警鐘の音（ね）が鳴らされ、冷や汗が止まらない妖夢であつたが、  
せめて彼の前で無様な真似は晒すまいと精一杯の虚勢を作り主に尋ねる。

そんな妖夢の心情などお見通しとばかりに笑い顔のまま幽々子は返答代わりににじり寄つた。

しかも立ち上がることなく座つたまま横滑りにつつつうーと……

おそらく座つた状態で少しだけ体を浮かび上がらせたのであろう。  
器用なことである。

「ゆ、幽々子様？」

思わず仰け反る妖夢。だが、彼女はおかまいなしに口元を扇で隠しながら妖夢の耳までもつていく。

「……（ボソボソ）惚れたでしょ？」

「ぬなっ!？」

ボンッ! と、そんな音が聞こえるかのように今度は首まで真っ赤に染まる。

「ななななななななな……!?!?!」

もはやまともな言葉にさえならず、パニック状態となった妖夢。あらあらどうしたの〜と特大の爆弾を放り込んでおいてのん気に尋ねる幽々子。

(……え〜っとお……)

一方、放置状態の宗次郎は目の前のカオス空間から目を逸らしつつ別のことを考えていた。

(そういえば、起きてからやたらと感覚が鋭くなっているな……)

そして今朝のことを思い返す。

確かに近づいてくる妖夢の気配を察知してはいた。

だが、それは今まででよりも遥かに遠い距離からであったのだ。

そして、さきほど小声で妖夢の耳元で囁いた幽々子の声もしっかり聞こえていたりする。

(これも妖化の影響なんだろうなあ……)

そんなことを考えながらこれからのことに思いを馳せる宗次郎。

……どうやら目の前の光景から現実逃避を決め込んだようである。

だが、彼は気付いているのであろうか？

先ほど感じた感情が “ 嬉しかった ” という事実……



カオスな空間も終息し、まずは気を取り直して今後のことについて話し合う……はずであった……

「だ、大丈夫なんでしょうか……」

「大丈夫よお。しばらくすれば復活するわ」

その言葉を信じた宗次郎であった。

尚、彼の視線の先に居る机に突っ伏したままピクリとも動かなかった物体……

本人の名誉のために、仮に “ 辻斬り少女みよん ” としよう。その辻斬り少女みよんの口からは、なにやら白いモノが吐き出され、天井へと上っていた。

どこからともなく チーン という音色が響いたような気がする。半霊である彼女の口からも出てくるのかと色々と突っ込み所満載

な光景である。

しかし、自らの反応一つをネタにからかわれた程度でこの有様とは……

これからは辻斬り少女みよん 改め、純情半霊っ娘みよんとも改名したほうがいいのかもしれない。

「って。誰が純情半霊っ娘みよんですかあ!？」

「……え？」

「ホラ。復活した♪」

突如としてガバッと起き上がって復活した純情半……もとい。妖夢は自分の発した言葉に戸惑う。

「え? あ。わ、私は何を……」

「ホラ、妖夢。話しを続けるわよ?」

「あ、ハイ。申し訳ありません。何やらみよんな電波が……」

（……みよん?）

戸惑う妖夢に幽々子は何事もなかったかのように話しかけ、宗次郎はその言葉の意味が解りかねて首を捻る。

どうでもいいが、先ほどからまったく話が進んでいなかったりする。



とりあえずは彼の身の振り方を決める為にも、彼の能力がどういうものか分からなければならず、話題は自然と『どのような能力でどんなことができるのか』となっていた。

「紫の話によると宗君が使える能力は『剣術を操る程度の能力』ね。

ま、これは元々の能力みたいだけど」

「私と同じですね」

と、能力に関しては聞いていなかった妖夢が口を挟む。

「そうなんですか？」

宗次郎も興味を持ったのか、妖夢に尋ねるが、続く幽々子の言葉がそれを否定した。

「いいえ。違うわ」

「「え？」」

幽々子の言葉に声を揃える二人。

「妖夢。貴女の能力は『剣術を扱う程度の能力』よ。“扱う”と“操る”じゃかなり違うわよお？」

「「あ……」」

又も声を揃える二人……何気に息がぴったりである。

「いいこと？ 妖夢が剣術を扱うためには、まずその扱い方を覚えなければならぬでしょ？」

でも、宗君のは操ろうとする剣術を理解すればそのまま使えるってことなのよ」

「……つまり、一度その剣術の技を見れば直ぐに使えることができるってことですか？」

「直ぐには無理でしょうけれど概ねはそうねえ。まあ、道具が違ったりしたら使えないと思うけど……でも、要はその剣術の本質を理解することができれば大抵の技は使えるってことなんですよねえ」

さすがは “天剣” よねえと続けた幽々子の言葉に、宗次郎も本質ですかと呟く。

彼としては今更他の剣術を使うつもりはなかったが、本質と聞いて真っ先に思いついたのが……

「ん？」

不意に視線を感じて顔をそちら向けると、ナニそれずっとこいと言わんばかりの眼がそこにあった。

視線から妬ましい妬ましいと声が聞こえてきそうである。いつの間にか嫉妬妖怪へと変わったのやら。

「そ、そう言えばこれは元々の能力だと言いましたけど、他にも何かあるんですか？」

パル……いや、妖夢の視線から逃げるように話題を変える宗次郎。何気に弱気である。

「そうね。むしろそっちが本題ねえ。たぶん妖化してからの能力でしょうけど……」

——— 宗君。貴方の能力は……」

そこで一度言葉を切る幽々子。

その様子に宗次郎は背筋を伸ばし、妖夢も真剣な眼で主を見る。

そんな二人の様子に幽々子は笑みを零しながら宗次郎の名を能力を告げた。

「『知識を操る程度の能力』と、『出来事を予測できる程度の能力』よ」

「「はあ？」」

能力の名を聞いて、三度声を唱和させた二人。やはり息が合っているようである。

果たして “知識を操る” とは何を意味するのか、そして “出来事を予測できる” とは……

『答え』 は、見つかるのであろうか……

おまけ。

「身体能力が向上してるって言いますが、そんな感じはしないで  
すね……」

「まだ貴方自身が自覚していないだけよ。しばらく休んだら妖夢と  
一緒に検証してみるといいわ」

「わ、私とですか？」

「あら、体を動かすことに関しては妖夢の方が得意でしょ？」

「そ、それはそうですが……」

「それとも宗君と一緒にイヤ？」

「そ、そんなことはありません！！」

「……ですって♪ よかったわねえ♪ 宗君。妖夢は貴方と一緒にいいそうよ♪」

「は、はあ……」

「ゆ、幽々子様……!」

「ハイハイ。それじゃごちそうさま♪」

「もう! 幽々子様ったら……あ! 宗次郎さん。これは違うんですからね!」

「ええ。分かっています。とにかくよろしくお願いしますね」

「は、はい……こちらこそ……」

（アラアラ♪ 妖夢ったら真っ赤になっちゃって♪ しばらくは楽しめそうねえ）

以上。この日の昼食語の会話である。

白玉楼はこの日も平和であった。

### 第三話　― 人間（ひと）から人外（ひと）へ ―（後書き）

はい。宗次郎の能力名が出ました。

その詳細な意味については次話かそれ以降にて説明いたします。

ですが、やはり本来の日本語の意味としては間違った捉え方かもしれません。

そう思った方は、作者の理解力が足りなんだなと思って下さい……

O r z

＊追記…またもちよこちよこと修正……見落としが多すぎる（汗）。  
それと彼の能力の強さについてですが、あくまで『若干のチート』  
であって、『最強』ではありませんのであしからず。

#### 第四話 ― 妖怪の賢者 ― (前編) (前書き)

色々と修正加筆をしていたら長くなりすぎてしまい前後編に分けました。

後編までは明日までに投稿できると思いますが、それ以降はかなり遅れます。

そして今回、サブタイでお分かりでしょうけど 『あの方』 が登場します。

それと妖夢の剣術の流派については私の独自解釈が入っています。読まれる方はその点を留意して下さい。

第四話 ― 妖怪の賢者 ― (前編)

―― カッ！ カカカカッ！！

広大な広さを誇る白玉楼の屋敷。その一角にある道場。

―― カン！ カンツカカッカン！！

そこに甲高い、木を打ち鳴らしているような音が響いている。

更に鋭い風を切り裂く音と、キュキュツと素足で板張りを擦る特有の音も同時に聞こえてくる。

そして、ピンと張り詰めた緊張感を漂わせる空気の中で、わずかに流れる二人分の息遣い。

一人は半身である半霊を身に纏わせている少女、妖夢。

もう一人は半妖となった元人間の少年、宗次郎であった。

今、二人は共に木刀を手に、先ほどまで激しく打ち合う実戦さながらの試合を行っていたのである。

(速い！ そして強い！！ これでもまだ本気じゃないなんて……これで能力まで使われたら)



（剣捌きが尋常じゃない……何よりも巧い！ 経験の差か……これで本来の二刀流だったら）

互いに相手の技量に感嘆しながらも、その本来の実力に畏怖を抱いていた。

そして次の一手を探り合いながら、徐々に互いの剣が届く間合いまで近づいていく。

（宗次郎さんの剣は速攻で相手を確実に葬ることに特化した型……ならば長期戦は避けるはず）

（妖夢さんの剣は相手を、戦いの場そのものを制して確実に隙を突く流派……長期戦は不利か）

お互いの剣の型を冷静に分析しつつ、次にどう仕掛けてくるかを予想する。

（ならば次で決めにくる……）

（次で決めるしかない……でも、向こうもそれを読んでいるはず）

間合いに入るまで後一步。

（私がそれを読んでいることは向こうも覚ってるでしょうね……）

（だとしたらお互い次が……）

そして後半歩で間合いに……

（最後の……）

（一手に……）

入った。

（（なる！）！）

その瞬間。互いに渾身の力を込めた一撃がぶつかり合った。

……古式ゆかしい風格が漂う広々とした道場に一際甲高い打撃音が響き渡る……



とりあえず能力の詳細と使い方については 『専門家』 に任せましょうという幽々子の言葉に、それならそれで最初に言っただけだったという妖夢の顔で話し合いの席はお開きとなった。

その後、昼食を挟んで向上したという宗次郎の身体能力を確かめ

ることになったのである。

場所は広大な庭の一角。

普段は妖夢が外での鍛錬に使っていて、適度に土が踏み固められている場所であった。

流石に見事な枯山水（かれさんすい）のある中庭を使う訳にはいかなかったが、折角だからと見せてもらった宗次郎は、その素晴らしさにしばし見入ってしまった。

そして、それを手掛けた庭師でもある妖夢の腕前に感嘆の声を惜しまなかったのである。

一方の妖夢は、照れながらもどこか誇らしげでな様子を見せるという一幕もあった。

話を戻す。

まず、その場所にやってきて宗次郎の眼に飛び込んできたのが見事な桜並木であった。

桜は既に満開を過ぎており、時折吹く風に多数の花びらが舞い踊っている。

まさしく幻想的な光景にまたも心を奪われそうになったが、当初の目的を思い出す。

そして、ココに来てから感受性が強くなっているなあ……と、ポソリと一言。

自身の変化を感じて零した言葉は、妖夢の耳に届くことはなかった。

その妖夢が見守る中での検証は、まず軽く体をほぐしてからを行うことになった。

走り回ったり、飛び跳ねたり、あるいは庭石を持ち上げてみたり。そんな中で宗次郎は自身の身体能力が飛躍的に向上しているのを実感したのである。

その結果、彼の身体能力は並の妖怪を上回ることが判明。

その上で彼の剣の腕を確かめたいと妖夢が希望し、剣術の試合を行うことになったのだ。

それが冒頭での二人のやり取りである。

試合はかなり白熱したものとなり、いつの間にか二人を応援する幽々子の姿があった。

……その手元にはしっかりと大量のお菓子が抱えられていたが……

剣の技量では長年研鑽を積み重ねてきた妖夢が上回るが、宗次郎も天剣の二つ名は伊達ではない闘いぶりを見せていた。

しかも、これはあくまで確認の為の試合であって“死合”ではな

い為、彼の持つ超神速の移動術……いわゆる “縮地” を使っている。はいなかったのである。

これは宗次郎自身がまだ自分の向上した身体能力の制御に不安があったからでもあるが、それをやると、この道場の床や壁（あるいは天井まで）を壊してしまうからであった。

—— ちなみに、妖夢が思った 『本気ではないなんて』 とは、このことを指している。

—— 更に言えば、彼女はまだ宗次郎の縮地を見てはいない。

技量的には一步を譲るが、力と、何より速さで圧倒する宗次郎。

身体能力では劣るが、経験の差による剣捌きの巧みさと “氣の先読み” で切り返す妖夢。

この一戦でお互いの力量の高さを確かめ合う二人。

そして最後に放った渾身の一撃がぶつかり合った。

果たして結果は……

……ここで場面は冒頭の続きへと戻る……



「……………」

———  
引き分け。

お互い、半ばから先が無くなった木刀を握ったまま無言で見詰め合う二人。

やがてどちらからともなく構えを解き、大きくかつ静かに息を吐いた。

———  
残心。

昨今の（一部を除く）武道ではまず教えられることのない心構え。

しかし、彼らが身に付けしは戦場（いくさば）における武術――  
―― 剣術である。

かの抜刀斎の師匠曰く 『剣は凶器。剣術は殺人術』 の言葉通り、それを身に付けて戦場に起つ者には斬る覚悟と斬られる覚悟が必要だとされる。

残心もまた然り。

戦いが終わったからといって直ぐに気を抜く者に生き残れる未来はない。

宗次郎は志々雄から徹底的に戦場で生き残る術を教え込まれていたのである。

……尤も、以前の彼は傍から見れば戦いを “楽しんでいる” ようにしか見えなかったが……

一方の妖夢も、祖父から心構えを耳にタコができるほど教え込まれていた。

技の方は教えるというよりも盗ませるスタイルではあるが、それは教え方の違いに過ぎない。

そんなまったく違う教えで剣術を学んだ二人であったが、行き着く先は同じであるようだ。

その思いが通じ合ったのか、妖夢は表情を崩すと微笑みながら宗次郎の腕を賞賛する。

「お見事です」

短いが万の意味が込められた言葉に宗次郎も “真剣な” 表情を崩した。

「いえ。妖夢さんこそ素晴らしい腕前でした」

いつものにこやかな顔で賞賛を返す。

その笑顔には以前、どこか空虚であったような様子は見られなかった。

互いに賞賛し、一礼を済ませると道場の壁際で観戦していた幽々子が二人に拍手を送る。

「良かったわよく、二人とも。それにしてもやっぱり宗君って強い  
のねえ」

「ありがとうございます。それで幽々子さん。僕の強さは幻想郷で  
どれほどなんでしょうか？」

幽々子に礼を返した宗次郎は彼女に問い掛ける。

やはり自分の強さがどれくらい通用するのか気になるのであろう。

問われた幽々子は「そうねえ」と、人差し指を顎に当て、  
小首を傾げながら思案顔。

そんなしぐさの一つ一つが妙に色っぽい。

ちなみに妖夢に尋ねなかったのは第三者からの感想を聞きたかったからである。

だが、その妖夢はそうは受け取らなかったようで、主と同じ思案顔になっていた。



（私では当てにならないんでしょうか……ならばもっと強くなれば。それにはやっぱり……）

何やらみよんな方向で思考が行き着いたらしく、主よりも早く口を開ける。

「そ、宗次郎さん！」

「あ。はい？」

幽々子の方を見ていた宗次郎は急に呼びかけられて困惑顔。

「あ、あの……私の稽古相手になって下さい！」

「……はい？」

（あらまあ、妖夢ったら。でも、また面白いことになりそうねえ）



唐突な頼みに宗次郎は呆けたように同じ言葉を繰り返した。

一方の幽々子はそんな妖夢の様子にアラアラとニコニコ顔。

彼女の性格を考えれば真剣勝負を挑んでそうだったからだ。

何しろ、妖夢の信条は『真実は斬って確かめる』である。

そんな物騒な信条を持つ彼女が、出会ってからまだ半日（宗次郎が寝ていた間の時間は含まない）の彼をここまで認める所など、長年彼女を見てきた幽々子ですら見たことがなかったのだ。

そんな幽々子の顔には、深い慈愛の表情が浮かんでいた。

……尤も、『紫にも教えてあげなくちゃね♪』と何やら不穏なことを呟いていたが……

そして、とりあえず場所を移しましょうという幽々子の言葉に、三人は中庭へと向うのだった。

縁側に三人が並んで座り、ゆったりと午後のお茶を楽しみながら幽々子の感想が述べられる。

「総合的にみて宗君の身体能力は上級妖怪クラスと言っていいでしょうね」

その言葉に思わず妖夢を見る宗次郎。  
妖夢も幽々子と同意見なのかコクコクと頷く。

「剣の腕もあるし、並大抵の相手には負けることはないでしょうし……

でも、鬼とかの大妖怪クラスが相手だと……まあ、勝ち目は薄いわねえ」

「そうですか……」

その評価にさすがに少し気落ちしたようであるが、そんな宗次郎に幽々子が言葉を続けた。

「尤も、宗君が能力を使いこなせるようになれば結構 “面白い”

勝負になりそうねえ」

そう笑顔でそう告げる幽々子に宗次郎も乾いた笑いを返すしかなかったようである。

「あ、あのく……」

そこへ遠慮がちに声を掛ける妖夢。

「「ん？」」

「それでそのお……私の頼みは聞いて頂けるんでしょうか？」

「「あ……」」

妖夢の頼みごとを思い出した二人は二度声を唱和させていた。

結局、妖夢の頼みを引き受けることになった宗次郎。  
それからは毎日彼女の稽古相手を務めることとなったのである。

又、日常でも妖夢の家事の手伝いをし、一日中二人でいる時間がほとんどであったりする。

それを事ある毎に幽々子がからかい、妖夢が慌て、宗次郎が苦笑して受け流すのが常であった。

尚、白玉楼で働く幽霊たちが飛び交う様子を見た宗次郎が啞然としたのは完全な余談である。

そんなこんなで平和でゆったりとした時間が流れるのであった。



宗次郎が白玉楼に滞在し始めて既に七日。

「よっ！ ととと……」

未だに『専門家』とやらが姿を現すことはなかったものの。

「その調子ですよ。宗次郎さん」

最初はぎこちなかった二人の（主に妖夢の）様子も大分打ち解けてきたようである。

「中々難しいですね……」

時は昼下がりの午後。

「慣れれば簡単ですよ。ではもう少し上がってみますね」

場所は白玉楼の庭。

「はい。すみません、妖夢さん。ご面倒ばかりおかけして……」

そこで二人が行っているのは。

「気にしないで下さい。さ、行きますよ」

「はい。お願いします」

空を飛ぶ練習であった。

事の発端はその日の朝。

『そろそろ空を飛んでみない？』

いつもの朝食の後、唐突に放った幽々子の言葉がそれであった。

幻想郷では妖怪や能力（ちから）のある人間は普通に空を飛んでいるのである。

妖化した宗次郎が飛べないはずはないわと幽々子は言葉を続けた。

どうやら幽々子は、半妖となった宗次郎の体が慣れる頃合いを見計らっていたようである。

何やら他にも色々と思惑がありそうな口振りであったが……

ともあれ、その言葉によって妖夢の仕事が増えたことだけは間違いなかった。

そして昼食後、いつもは剣の稽古の時間であったが、空を飛ぶ練

習へと変更されたのである

「かなり昇ってしまいましたけど、大丈夫ですか？」

そう言われて宗次郎は足元を見下ろしてみる。

高さはおよそ十階建てのビルぐらいであろうか。

遙か下には白玉楼の屋根があり、門前には長い階段が続いている  
のが見える。

その階段の先に薄くもやがかかったように（感覚的に）見える所  
があった。

（あれが幽々子さんの言っていた冥界と現世の境界。幽明結界の…  
…なごりなのかな？）

—— 春雪異変 ——

異変に関しては概要しか教えられていない宗次郎は、機会があれば詳しく聞いてみようと思った。

視界を移せばそこはまさに絶景である。

幻想郷のほぼ全土が一望できたからだ。

遙か山々の向こう側まで見えそうなほどの眺めであった。

（蝙蝠さんもこんな気持ちで空を飛んでいたんだろうか……）

かつての同士を思い出しながらも目の前の光景に夢中になった宗次郎。

「……宗次郎さん？ ……宗次郎さん！！」

「あっ！？ はい。すみません。つい……」

返事がないのを不安に思った妖夢が大声で呼びかけると、宗次郎がばつが悪そうに謝罪する。

「もう……気を抜いたらダメですよ？ 落ちてしまったらどうするんですか」

「はい。ごめんなさい……あ、もう大丈夫みたいですから手を離してもいいですよ」

「そうですか？ ……って、あっ！？」

そう、ここまで飛び上がるまでの間。妖夢はずっと宗次郎の両手を握っていたのだ。

その様子は初めて泳ぎを覚える子供に親が手を引いて教えるような感じであった。

「あああああ！？ ごごご、ごめんなさい！！」

今更ながらその事実気付いた妖夢は慌てて手を離した。

最初は自分が飛ぶのを実演してみせながら教えていたのだが、そ

れが中々うまくいかず、四苦八苦していた宗次郎を見かねた妖夢は思わず両手を取ると、その手を引きながら一緒に飛び上がって飛ぶためのコツを教えていたのだ。

あうあうとうろたえながら両手を胸に抱え込み、真っ赤になってうつむいてしまった妖夢。

そのあまりにも初心な様子に、思わず笑みが零れる宗次郎。

本当に異性に免疫がないんだなあと思わず笑ましく思った彼であったが、ふと……

（そう言えば幻想郷の妖怪ってほとんどが女性みたいだけど、他に男性は居ないのかな？）

とそう思い、今の所男性の名前は香林堂の店主という人しか聞いていないと考えを続けた。

「妖夢さん？」

「は、はい！？　なんででしょうか……」

慌てて返事を返した妖夢は、両手を後ろに回してうつむき加減に宗次郎を窺う。

その様子にまたも苦笑しかけた宗次郎だが、それを抑えて疑問を口にした。

「ココには霖之助さんという香霖堂の店主以外に男性の妖怪はいないんですか？」



「え？ あ、いえ。勿論男性も居ますよ。天狗や河童の中にも大勢居ますし……でも、どうして急に？」

「いえ。単に不思議に思っただけですよ。幽々子さんからココの主だった人たちのことも聞きました。が、そのほとんどが女性ばかりなんです。ちょっとお聞きしたかっただけなんです」

まさか妖夢の様子を見て、男慣れしていないようだから聞いてみたなどと言える訳がなかった。

「ああ、そう言えば確かに私が個人的に知ってる男性も霖之助さん以外は祖父しか知りませんし」

「おじいさん……ですか？」

「ええ。名前は魂魄 妖忌<sup>マユイ</sup>。

この白玉楼の先代の庭師兼剣術指南役であり、私の剣の師匠でもあります。

尤も、私を継がせた後はどこに行ったのかは私も知りませんけど……」

そう言って再び顔をうつむかせる妖夢。

おそらく行方をくらませた祖父のことを思い出しているのだろう。

「……すみません。変なことを聞いてしまって……」

妖夢の様子から色々事情があったのであろうと察した宗次郎が謝罪の言葉を口にする。

祖父しか知らないというのが父親は居ないのであろうか、他に兄弟は居ないのだろうか……

そう思ったものの、軽々しく聞いてはいけないことだと思い直す。

そして彼女に思い出させてしまったことを深く詫びたのである。

「いえ、いいですよ！ お詫びしなくても……それより空を飛ぶのは大丈夫のようですね」

暗い雰囲気になりかけた空気を察した妖夢は、当初の行動を思い出して話題を変えた。

「ええ、もう大丈夫ですよ。……ホラ！ こんなこともできますからね」

彼も妖夢の思いを察し、少々わざとらしく明るい声で応じてその場で宙返りをしてみせる。

その唐突な行動に妖夢は目を丸くし、宗次郎は得意気に胸を張る。

そしてどちらともなく笑い合う二人。

宗次郎は思う。

本当に楽しいと……

白玉楼の空にしばらく二人分の笑い声が響くのであった。



「アラアラ。二人とも随分と楽しそうねえ」

「ふうん？　なかなか仲良くしてるみたいじゃない。あの二人」

縁側でそんな二人の様子を見ていた幽々子が楽しそうに言う、同意する声が聞こえてきた。

「でしょう？　もう妬けちゃうくらいなのよ」

誰も居ないはずの所から唐突に声が聞こえてきたにもかかわらず、それ所か自慢するように言う。

声の方に振り向きもせず、相変わらず縁側に座りながら空を見上げる幽々子。

そんな彼女に呆れたのかそれとも感心したのか、どちらとも言えない声で更に話しかけられる。

「随分と入れ込んでるようだけど、そろそろ頃合いじゃないかしら？　他の連中も興味を持つ頃だし」

「分かってるわ。でも、盗っちゃダメよお？ それを知ったらあの子、絶対黙っちゃいないから」

その言葉に声の主は空中に上半身のみを晒した姿のまま、返答代わりに妖しい笑みを浮かべる。

幻想郷の管理者、妖怪の賢者とも呼ばれ、主にスキマ妖怪と呼ばれる女性。八雲 紫。

彼女は自身の能力によって様々な場所、それこそ外界にも自由に行き来することができる。

幽々子とは古くからの友人であり、唐突に現れるのはいつものことなので幽々子は驚きもしない。

そんな彼女がようやく空から紫に視線を移すと、紫も空中に開いた空間の境目――スキマから身を乗り出して下半身をよいしょとばかりに引き抜いた。

地面に降り立つと、折り畳んでいた日傘を傍らに置き、幽々子の隣に腰掛ける。

そして彼女との間に置かれてあった湯呑みを取ると、ゆっくりとお茶をすすった。

どうやら幽々子があらかじめ用意しておいたようである。

そんな無言のやり取りが自然にできるほどこの二人の付き合いは深く長い。

故にこそ、お互い相手がどういう行動をするのか分かりきっていた。

お互いにとって言葉を交わすのはもはや通過儀礼に等しいのである。

だが、それでも聞いておかねばならないことがある、確かめなければならぬこともある。

だから幽々子は問い掛ける。彼を、宗次郎をこの幻想郷においてどう扱うのかを。

「で、どうするつもりなの？ さすがに彼をずっと白玉楼に置いておくつもりはないんでしょ？」

「そうねえ……彼には知って貰わなければならないわ。この幻想郷という揺り籠の在り方を。その上で判断して貰うわ。自分がどうするべきか、どう在るべきかをね」

幽々子の問いにそう答えた紫。

宗次郎は久方ぶりに自身が関わることなく現れた外来人……いや、その呼び方は当てはまるまい。

半妖化してしまった以上、もはや彼に外界へ帰るという選択肢はないであろう。

ならばどう呼ぶべきか。

元来、妖怪とは個人で完結している存在である。当然、仲間意識は薄い。

自己の存在、利益、目的などに利害関係がなければ興味すら持たない。

強力な妖怪に従って主従関係になることはある。天狗などが顕著な例であろう。

それらは仲間意識が強いように見える。だが、それも己が生き残る為である。

手を差し伸べてくれない相手を誰が助けてくれるであろうか？  
自分より強い相手に逆らい、どう生き残っていくというのであるか？

それが本来の妖怪の在りかた……だった。

そう、“だった”である。

基本的な在りかた。それ自体は変わってはいない。

だが、幻想郷という決して広いとは言えないこの地で何百年と毎日のように顔を会わせていれば、自然と情が生まれ、情を交わせば友となり親友にもなりうる。無論、逆も然りではあるが……

故に、この二人のように親友と言える関係も生まれる。

……尤も、人間の言う世間一般的な親友関係とは言い難いが……

だからこそ彼女は創ったのかもしれない。この楽園を。この幻想郷を。

決して変わらないように見えて常に変化を求め、それでも尚変わらないこの地（ユートピア）を。

ならばこの地で共に生きる者という意味でこう呼ぶべきではないだろうか。

“仲間”と……

そんな想いがよぎったのか、この地を誰よりも愛する妖怪の賢者は言葉を続ける。

「でも、彼がどう判断するかは彼の自由。その上で受け入れるわ。瀬田宗次郎という新たな仲間をね」

そう、幻想郷は誰であろうと受け入れる場所である。だが、それは……

「とてもとても残酷なこと……よね」

紫の考えを読んだのか、そう続けた幽々子。そう、そこに慈愛という言葉はない。

そう言った彼女の様子はどこか寂しげであり、憂いてもいるようだ。

「そうね。でも、彼なら解ってくれるわ。そして受け入れてくれる。ココの在り方をね」

幽々子の様子を見てクスツと微笑んだ後、氣遣うようにそう告げた紫は更に言葉を続ける。

「彼の考え方は基本的に私達 《人外の者》 に近いわ。だからこそ断言できるんだけどね」

そう、彼の基本理念 ―― 《所詮この世は弱肉強食、強ければ生き、弱ければ死ぬ》 ――

この考え方は妖怪側の在り方にも近いと言える。

……だが、近いのであって、決して同じという訳ではない……

剣心に敗れ、諭された彼であったが、もはやこの価値観は半ば本能に近いのである。

他の答えを見つけようとはしていても、完全に否定してしまうことはできそうにないようだ。

だからこそ。

「祈りましょう」

彼が “ 答え ” を見つけられることを。

「ええ。そして歓迎しましょう」

新たなる “ 仲間 ” の誕生を。

まるで誓い合うように言葉を紡いだ二人は、お互いを見つめると、どちらともなく微笑みあった。

そして一緒に空を見上げる。

そこにはまるで追いかけているかのように、空中での遊戯を楽しむ二人の姿があった。



第四話 ― 妖怪の賢者 ― (前編) (後書き)

前書き通り今回はここで切ります。

それから宗次郎の能力ですが……

おそらくは次の次あたりまで待たないと出てこないです(大汗)。  
いや、本当に申し訳ありません。

これも作者に構成力が無いせいです……orz

第五話 ― 妖怪の賢者 ― (後編) (前書き)

今回も地の文だらけです……会話文がホント少ない(汗)  
それと感情が戻りつつある宗次郎ですが、見る人が見れば『キャラ  
崩壊ってレベルじゃねーぞ!』な感じかもしれません。  
一応、自分なりの理由付けをしているのですが……  
読む方はその点をご注意下さい。

## 第五話 ― 妖怪の賢者 ― (後編)

「能力の確認……ですか？」

「ええ。貴方の能力は貴方自身が思っているよりもかなり強力よ。それに弾幕ごっこ『スペルカードルール』のことも覚えてもらわなければならないし」

だから一度ウチに来て欲しいのよと続けた金髪美人。八雲 紫の言葉に宗次郎は少々戸惑う。

空中から帰ってきた二人を待っていたのは、幽々子とお茶を飲んでいた彼女であった。

その姿を見た瞬間、思いつき顔をしかめた妖夢の様子を見た宗次郎は、危険な相手とまではいかないまでも、やっかいな人物のようだ判断した。

(多分この女性が 『専門家』 の紫さん……だね、すごい美人だけれどちょっと胡散臭い気がするな)

それが紫を見た宗次郎の感想である。

実際はちよつとどころではない人物なのだが……

見た目は自分とそう変わらない歳に見えるが、その胡散臭気な雰

困気がそれを否定している。

彼自身が思ったようにかなりの美人であり、幽々子と比べても甲乙つけがたい。

波うつ見事な金髪を腰まで流しており、いくつかの房ごとにリボンで結んで分けられている。

頭には幽々子と似たような茶巾型の白い帽子を被り、前を赤い紐で大きな蝶々結びにしている。

瞳はその名を表すように濃い紫色で、こちらを興味深く眺める眼には妖しげな光りがあった。

服装は瞳と同じく紫色の半袖のロングドレスで、二の腕まである白い長手袋をしている。

大きく開いた胸元からは思わず目を見張るほどの豊満な胸の谷間が見えるが、彼は別段気にも留めていなかった。由美で見慣れているからであろう。

縁側に彼女のものと思わしきピンク色の古風な日傘があり、まるで明治期の貴婦人のようである。

そんなミステリアスとも言える金髪美人の紫であるが、今もどこから取り出したのか、古風な扇子を開いて口元を隠しながら宗次郎の様子を窺っている。

居間にて机を挟んで対面していても、その様子ははっきり言って“胡散臭い”の一言であろう。

ふと上座を見れば、幽々子が何やら愉しそうにニコニコとこのやり取りを見守っている。

だが、妖夢の様子は主とは正反対であり、客人を迎えた礼儀なの

か、主の後ろに控えていた。

無表情を装ってはいるが、その表情は硬く、紫を警戒するかのよう  
にこちらを窺っている。

そして宗次郎を心配そうな眼で不安気に視線を移してきた。

二人の視線が絡み合う。

宗次郎は安心するようにと微笑むと、妖夢もそれを受けて小さく  
頷いた。

そんな僅かなやり取りであったが、それを目敏く見ていた紫はわ  
ずかに目を細める。

おそらく扇子で隠した口元にはニヤニヤとした笑みが零れている  
のであろう。

それに気付いていた宗次郎であったが、気にした様子もなく言葉  
を返した。

「お話しは分かりました。ですが、それなら別にお伺いするまでも  
なくココでもかまわないと思うのですが……」

幽々子さんのお許しがあればですけど、とそう続けた彼はお茶を  
一口含む。

チラリと横を見れば、妖夢がその通りだとばかりに小さくコクコ  
クと頷いていた。

その様子にお茶を咽に流し込みながら苦笑すると、紫の反応を待  
った。

「そうねえ。確かにその通りだけど、別にそれだけの理由で呼んでいる訳ではないわ。

ウチの式も貴方に興味を持っていてね。八雲 藍（らん）って名前なんだけど……

妖化したのなら妖力の使い方、つまり妖術に関しては藍の方が適任なのよ」

弾幕ごっこをするにしてもそれなりの場所が必要でしょうし、と  
そう言葉を続けた紫。

それに対して宗次郎が口を開く前に別の声が彼女に反論した。

「でしたら藍様も呼ばれたらいいではないでしょうか？ それに弾幕なら 「妖夢」？」 あ……」

思わず口を開いてしまった妖夢だが、本来客人同士の会話に口を挟むなど失礼な行為である。

そんな彼女を幽々子が、もうこの子ったらあと言わんばかりの声で窘（たしな）めた。

「……申し訳ございません。口を挟んでしまいました」

そう言って深く頭を下げる妖夢。

これはこの場に居る全員に対しての言葉であった。

幽々子には、従者として主の顔に泥を塗ったことに対して。  
宗次郎には、自分のみつともない姿を晒したことに對して。  
紫には、……まあ、これは言わぬが華であろう。

そんな従者の様子を見た主の方とは言えば、こちら扇で口元を隠すと、コロコロとした笑いを零しながら親友に詫びる。

「ごめんなさいねえ。紫。この子ったらもうすっかり宗君にぞっこんで　「幽々子様!？」　違うの？」

「フフ。そうみたいね。でも、安心なさいな。別に貴女の宗君を取り上げるつもりじゃないんだから」

「紫様まで！　そ、それに別に私のって訳じゃ……ああ!？　宗次郎さん！　これは……」

またもカオス空間再来である。

しかも紫が加わって妖夢に対するからかいが倍ではなく乗にさえなっていた。

「まあまあ、みなさん落ち着いてください」

「あら。私と幽々子は落ち着いてるわよ？　慌ててるのは妖夢だけだし」

「紫様！　私は　「妖夢さん？」　……あ、すみません宗次郎さん。紫様。失礼しました」

とりあえずこの場を治めるために宗次郎が言うと、紫が反論し、妖夢がその言葉に反発しかけたが、宗次郎の窘める視線と共に呼びかけられると、嘘のように静まって謝罪した。

その様子に紫は彼の言うことなら素直に聞くのねといわんばかり

の視線を向ける。

妖夢は直ぐにその意味を察して何かを口にしかけたがグッと堪えた。

それらを見ていた宗次郎も再度苦笑しかけたが、それも抑えると紫に向き直る。

「では改めまして。紫さんでよろしいですか？　「かまわないわよ」  
ありがとうございます。  
では、紫さん。お話しは分かりましたが、僕を呼ぶ理由はそれだけではないと思いますか？」

「察しがいいわねえ。頭の良い子は嫌いじゃないわ　「それはどうも」　……可愛くないわね。  
まあいいわ。それで理由だけど貴方にはこの幻想郷を見て回って欲しいのよ」

「幻想郷を……ですか？」

紫の言葉に首を傾げた宗次郎はそう問い返すと妖夢へと顔を向ける。

「それはいずれ妖夢さんに案内してもらって見て回るつもりでしたけど……」

その言葉と視線に頷きを返した妖夢は主に話しかけた。

「幽々子様。宗次郎さんとはもうしばらくしたら幻想郷を案内する約束をしておりました。  
お話しするのが遅れて申し訳ありません」



それは宗次郎と空の追いかけて終わった後のことであつた。

幻想郷を一望した宗次郎はココを見て回りたいと妖夢に訴えた。彼女も主の許可を得てからならと答え、一緒に見て回る約束をしていたのである。

そして本当なら夕食の後にでも幽々子にその許可を取り付けるつもりであつたのだ。

「あら。それなら別に謝らなくてもいいわよ。どの道、紫が来たらそうして貰うつもりだったし……」

ねえ、紫。妖夢も一緒でもかまわないかしら？」

「ええ、私はかまわないわよ。というか、そうしなきゃ無理矢理付いてきかねないわね」

そう言つて意味ありげな視線を向ける紫。

それを見た妖夢は又も何かを言おうとしたが、どうせ倍にして返されるだけだと思ひ口を閉ざす。

「で、それでかまわないのかしら？　まだ貴方の返事を聞いてないんだけど」

妖夢の反応に苦笑し、それを扇子で隠しつつ宗次郎に問い掛ける。

「ええ。幽々子さんが許可されたのならばそれでかまいません。ですが、もう一つだけお聞きます」

その言葉に紫はなにかしら？ と答えると、宗次郎は居住まいを正した。

「あなたはまだ本当の理由を言っていないですね。

幻想郷を見て回らせて僕にどうして欲しいのですか？」

彼は察していた。

彼女の目的が見て回らせることではなく、その上で別の思惑があるのではないかと。

真っ直ぐな眼で紫を見つめながら彼は問い掛ける。妖怪の賢者に。

その顔にはいつもの笑顔はなく、その真意を確かめようとする強い意思を感じられる。

彼自身、この幻想郷に来てからずっと思っていたことであつた。

何故、自分はココに居るのか。

何故、自分は半妖化などという中途半端な存在になったのか。

何故、自分にあのような能力があるのか。

何故、自分でなければならなかったのか。

そして、自分はこの “楽園” で何をすればいいのか。どう在ればいいのか。

彼は思う。その答えこそ自分が捜し求める “あの答え” に繋がるのではないだろうか。

更に言えば、ここ最近気が付いたことがある。

それは……

——人外となった今の自分の方が人間だった頃よりも遥かに感情が豊かになってきている——

なんという皮肉な現実であろうか。

人外になった今の自分の方が、かつての自分よりも遥かに人間らしくなっているなどと……

確かに剣心との闘いに敗れ……いや、その最中から感情がよみがえってきてはいた。

だが、いかに彼女達との触れ合いがあつたとはいえ、長年封じていた感情がこの短期間でここまで甦ってくるものであろうか？

自分のことだからこそ解る。断じて『否』だと。

そして、よみがえりつつある感情から理解したことがある。

感情とは一つだけ独立して存在しても意味がないと。

自身に覚えの無い記憶に恐怖したこと。

それだけに氣遣われたことが嬉しかったこと。

感受性が強くなり、以前は何とも思わなかったことも感動できるようになったこと。

何より、先ほどの空で妖夢と笑い合い、追いかけてをしたことが心から楽しかったこと。

彼女達と、妖夢との触れ合いが『本当に楽しい』と感じたことが何よりの発見であった。

他の感情があつてこそ『楽』という感情に意味があり、心から楽しめるということを理解したのだ。

そんな今の自分ならばあの答えが見つかるのではないか。  
そんな自分だからこそ、この幻想郷にきたのではないか。  
そんな自分に幻想郷を見せようとする彼女の真意こそ答えに通じているのではないか。

だからこそ彼は問い掛ける。幻想郷の管理者とも呼ばれる彼女に。

彼は知りたいと願う。彼自身が求める答えを。

だが、その返答は彼の期待したものとは違っていた。

「フフ……焦っちゃダメよ？　“答えは自分で探すもの”……そうでしょ？」

その言葉にハッとする宗次郎。

それはかつて“人斬り抜刀斎”と呼ばれた男と同じ返答であった。

彼は大きく息を吐き出し、再び吸い込むと顔を引き締める。

ならば自分がすべきことは只一つ。

「……そうですね。では、探しに行きましょう。この幻想郷でその  
“ 答え ” を……」

彼の言葉に紫は大きく頷く。それこそ優秀な生徒が満点の解答を出したときの教師のように。

その様子に幽々子も満足そうな笑みを浮かべる。

そして自らの忠実な従者に振り向いた。

そこには困惑と不満と、そしてほんの少しの寂しさを同居させた顔がそこにあった。

「妖夢？」

「あ、ハイ!？」

「貴女も宗君と一緒に行きなさい。そして感じなさい。そうすればただ斬るだけでは得られなかったモノが貴女にも見つけられるはずよ」

「幽々子様……ハイ! 承知しました!!」

幽々子の言外の意図を察した妖夢は元気よく返事を返した。

そして思わず宗次郎を見る。

「妖夢さん。また面倒をお掛けしますけど、よろしくお願いしますね」

「は、はい！　こちらこそ……」

そこにはいつものにやかな雰囲気に戻った宗次郎の笑顔があった。

そんな二人を見た紫は茶目つ気たっぷりの声で親友に呼びかける。

「……ねえ、幽々子。なんだか私達お邪魔じゃないかしら」

「そうねえ。後はお若い二人だけでって感じよねえ」

親友の意図を察した白玉楼の主は、お見合いの席で言われるお約束の言葉で応じた。

そして笑顔で頷き合うと本当に席を立てて縁側の廊下へと退室して行ってしまう二人。

「え、ちょ。お二人とも!？」

慌ててその二人を追いかけていく妖夢。

一人残された宗次郎は慌てることなく温くなったお茶をすすった。

外から姦しく響いてくる三人の女性の声を聞きながら彼は独りごちる。

「幻想郷を見て回る……か」

そして視線を庭へと移す。

ココに來た当初はまだ残っていた桜もとうに散ってしまい、すっかり葉桜になっていた。

しかし、既に気候は初夏の日差しを感じさせる時期である。

桜が残っていたこと自体が異常だったのだ。

「異変の影響……」

『春雪異変』――数年前の春に起こった異変。

詳細については聞きそびれてしまったが、とある桜を咲かせるために『春度』を集めてしまった影響で春先まで雪が残ったのだという。

その為、今年の春も超遅咲きになった桜が何本もあり、この時期まで残ったそうである。

「気候を変えてまで咲かせたかった桜か……」

幽々子が何を思ってそれを成そうとしたか彼には分からない。だが、知る必要はないであろうと思った。

「それに、異変はそれだけじゃない……」

幻想郷全土が紅い霧に覆われた『紅霧異変』。

夜が明けなくなってしまった『永夜異変』。

六十年の周期で起こるといふ『大結界異変』。

その他、大小様々な異変が起こり、その度に解決してきたのが……

「博麗 霊夢……」

その名を呟く。

どんな人なのだろうと彼は思う。

「緋村さんみたいな人かなあ」

異変を解決し、この幻想郷を覆う結界の名を冠する博麗の巫女。

力無き人々の為に逆刃刀を振るってきた剣心とイメージが被るのも仕方ないであろう。

彼が、幻想郷を回れるなら是非会ってみたいと思っていた人物であつた。

「……明日も晴れるといいなあ」

見上げる空は雲一つないお天気日和。



明日もそうなって欲しいと思う宗次郎であった。

『答え』　への道は、今開かれる。

おまけ。

「あ。そう言えば紫さん」

「なにかしら？」

「僕的能力に関しての説明はどうなったんです？　まだ使い方もわからないんですけど」

「……………あ」

「紫さん？」

「あ……………宗君？　それはねえ……………」

「幽々子さん？」

「「また次回ってことで♪」」

「（ガクッ）お、お二人揃って……というか、次回ってなんですか？」

「宗次郎さん。気にしたら負けですよ……たぶん」

「妖夢さんまで……たぶんってなんですか。たぶんって……」

「「「……………」」」

「三人揃って眼を逸らさないで下さい！」

段々と弄られ役が似合いつつある宗次郎。

説明を入れ忘れたのは作者のせいではない……たぶん。

## 第五話 ― 妖怪の賢者 ― (後編) (後書き)

今回はここまでです。

次回から更新が遅れます。(おそらく一週間以上は……)

それと本文の補足説明を。

本作の時系列は原作でいう『風神録』の前に当たります。

なのに守矢神社が幻想入りしているのは何故? とお思いの方へ。

私は守矢神社が出現したのは結構早い時期じゃないかと思っております。

妖怪の山のだ真ん中ですから当然 山の妖怪達との軋轢があつたでしょう。

和解するまでには何度も交渉が行われたでしょうから時間もかかつたはずですよ。

そしてそれから布教活動が許可されたとしても、これも相当時間がかかります。

そこからやつと『他にも神社がある』↓『布教の邪魔』↓『分社にすればok』。

こんな感じの流れではないのかと解釈しました。

ですから早苗たちが出るのもしばらく先になるかと……

以上、補足説明でした。

本来、こういうことは本文で語るべきなんですけどね……orz

## 幕間 その一 ― 能力 ― (前書き)

お待たせしました。幕間の投稿です。

今回、幕間ということで試験的に宗次郎視点による一人称形式で書いてみました。

いつもの三人称形式ではありませんのでご注意ください。

＊注意！＊

今回は紫様が喋りまくりです。ずっとゆかりんのターン！

宗次郎の壊れっぷりが半端ないです。キャラ崩壊ってレベルじゃ

ry

読まれる方はその点を留意して本文にお進み下さい。

## 幕間 その一 ― 能力 ―

「あ、在りのまま今起こったことを話します……」

『紫さんの所に出かけようとしていたら既に到着していた』

……な、何を言っているのか分からないとお思いでしょうけど、僕にもどうしてそうなったのか分からないんです。

狐に化かされたとか超神速だとかそんなチャチなモノでは断じてありません。

もっと恐ろしいモノの片鱗を味わった気分です……」

「何を言っているのか分からんが、チャチとは酷いな。私もその化かす狐なんだぞ？」

いきなりな展開にちよつとパニックっていたようだ。

目の前に居る女性から呆れたような視線を向けられる。

たぶん、この人が紫さんの言っていた式の人（？）なんだろう。

「あ。す、すみません。ええと、あなたが藍さんですか？」

「ああそうだ。私が紫様の式。八雲 藍だ」

よろしくなとそう続けた藍さんに僕も名乗り返してよろしくお願いしますと続けた。

藍さんは見た目、僕と歳が変わらなそうだけど落ち着いた大人の女性って感じた。

ま、妖怪なんだから僕よりもずっと年上なんだろうけどね。

綺麗な金髪のショートボブ。頭に被ってる帽子には道化師のような二本のトンがり。

そこに耳が入ってるのかな？ 狐って言ってたし、さっきからピコピコ動いてる。

白のワンピースに導師服のような模様が入った青い前掛という服装。

たつぷりと広い袖口に手を入れて、前で両手を組んでいる様子はどこか中華系だ。

その所為で大きな胸が更に強調されてるけど、気にしていないようだ。

西洋風を思わせる整った顔立ちからは沈着冷静で理知的な印象を受ける。

でも、お堅い感じはしなくて全体的に穏やかな感じだ。温和な性格なんだろう。

そして山吹色の瞳からは深い知性の色が窺える。

その知性溢れる眼で今も僕をしげしげと観察するように眺めていた。

正直、あまりジロジロと見られるのはあまり気分がいいものとは言えない。

でも、僕もあまり人のことは言えないと思う。

だって最初に見たときから藍さんの見事な尻尾に視線が釘付けになっっているし。

黄金色に輝く見事な狐の尻尾が……九本？

狐の妖怪で九尾と言えは……

「ひょっとして、藍さんて金毛九尾の狐なんですか？」

「うむ。その通りだ、よく知っているな」

「ええ、まあ。有名ですから……」

好奇心で聞いてみたらあっさり答えてくれた。

九尾の狐で有名どころと言えは 『白面金毛九尾の狐』 だ。

……まさかご当人じゃないよね？

「まあ、ここで立ち話もなんだ。上がるといい」

さすがにそれを聞くのは憚（はばか）られるし、聞く必要もないだろう。

「はい。お邪魔します」

そう言いながら、ふと広い玄関を見渡す。

「あれ？ 妖夢さんは……」

確か妖夢さんも一緒に居たはずだ。

出立の準備をした後、白玉楼の玄関から一緒に出ようとして……

ああ。そこで急に目の前にスキマが開いて避ける間もなく入ってしまったんだった。

一応、妖夢さんから紫さんの能力については聞いていたけどね。  
正直、目がいっぱい漂っているのを見たときはちょっと気持ち悪かったなあ。

そして気が付いたら目の前に藍さんが立っていた、と。

「ああ……まあ、行けば分かるだろう」

僕の言葉に藍さんはバツが悪そうに答える。

なんとも言いにくそうにしている様子から見て、何か知ってるんだろうなあ。

たぶん、苦勞してるんだと思う。主に主人の無茶ぶりの意味で。

妖夢さんといいこの藍さんといい、どちらも苦勞人のようだ。

そんなことを考えながら案内してくれる藍さんの後を着いていく。

歩くたびに目の前にある尻尾がユラユラと揺れている……ああ、モフりたい。

……何を考えてるんだ僕は……



ちょっと自己嫌悪しながら八雲邸の廊下を進む。

白玉楼も広かったけど、この屋敷もそうとう立派だ。

場所は確か、幻想郷の北東辺りにある結界の境い目だったかな？

幻想郷の地理は大まかにしか聞いていないからなあ……

まあ、目的地に行くとき詳しく聞けばいいか。

「紫様。宗次郎殿をお連れしました」

藍さんの案内で部屋に到着。そのまま失礼しますと言って入ろうとしたら……

「……なんで皆さん揃ってるんですか」

応接間と思わしき部屋には、主の紫さんは元より妖夢さん、幽々子さんまで居た。

「いらっしゃい。宗君」

「あ……あはは。お先に失礼しています。宗次郎さん」

「（もぐもぐ）先に着てたわよ。宗君（もぐもぐ）」

紫さんはしてやったりという顔で。

妖夢さんは引きつった笑い顔で。

幽々子さんはニコニコの笑顔で。

それぞれ三者三様の顔で僕を迎えてくれた。

それと幽々子さん。モノを食べながら言うのは行儀が悪いですよ？  
又、饅頭を咽に詰まらせる気ですか。

「妖夢さんとはかく、幽々子さんまで居るのはどうしてですか？  
後、どうして僕だけ玄関から？」

「ん〜？ だって初めて来るお客様には玄関から入って貰った方が  
いいでしょ？」

それに幽々子も貴方の能力を見たがってたし、それにその方が面白  
そうだし」

僕の質問にそう答える紫さん。

後、最後のが本音でしょ？ 絶対。

紫さんとは知り合ったばかりだけど、それくらいは分かります。  
この人（？）、何事も楽しもうとするはた迷惑な性格をしてるっ  
て。

チラリと横を見ると、藍さんが困ったような申し訳なさそうな顔  
で僕を見ていた。

ホント、苦労してるんだろなあ……

「ひどいわ、宗君。私だけのけ者にするつもりなの？」

幽々子さんは幽々子さんでそう言ってヨヨヨと扇で顔を隠しながら  
泣き真似してるし。

後、口元は笑ってるんでしょ？ 絶対。妖夢さんが呆れて見てま

す。

こっちもこっちでなんだかなあ……

「まあ、宗君も座りなさいな。それと藍。橙は「紫しゃま」藍しゃま」あら来たようね」

紫さんが言い終わる前に縁側の庭から幼い女の子の声が聞こえてきた。

この屋敷の庭も白玉楼ほどではないけど、見事な日本庭園になっている。

そこからパタパタと走ってくる音と共に、七、八歳くらいの女の子が現れた。

「紫しゃま只今戻りました。藍しゃま、見回り終わりました」。あ！ お客しゃまだ！」

元気良く言いながら縁側から上がってきたその子は、好奇心丸出しの目で僕を見る。

鳶色の髪に緑色の帽子。その横には黒い毛の猫耳がピコピコと動いてる。

髪と同じ鳶色の瞳からは子供らしい好奇心溢れるキラキラとした光りでいっぱいだ。

白の半袖シャツに赤いワンピースの服。襟や肩には中華系の刺繍が施されている。

その襟元には薄いピンクのリボン。足には白のソックスを履いていた。

そして何よりも目に付いたのが……

「猫の尻尾が二本……ひょっとして猫又？」

「その通りだ。橙（ちえん）という名で私の式でもある。橙。お客様にご挨拶なさい」

僕の呟きに隣に居た藍さんが答えてくれた。

それにしても式神の藍さんが式神を持つて……やっぱり九尾の狐は別格なのかな？

「はい！ えっと、今日はです。藍しゃまの式で橙と言います！ よろしくお願いします！」

「はい、今日は。僕は瀬田 宗次郎。ええと、橙さんでいいのかな？」

元気の良い子だなあと思いながらそう尋ねる。

見た目は小さい女の子だけど、多分僕より年上だろうし、さん付けの方がいいだらね。

「橙でいいですよ。その代わりお兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

僕の言葉にそう返した後、小首を傾げながら尋ね返してきた。

可愛らしいなあ。この子を見ていると自然と頬が緩んでくるよ。チラッと紹介してくれた藍さんを見ると、こっちは頬が緩みっぱなしだ。

親馬鹿？ それとも姉馬鹿かな。あ、式だから式馬鹿……って言葉はないか。

でも、お兄ちゃんか……

「ん……たぶん橙の方が年上なんじゃないかな？  
だからお兄ちゃんって呼ぶのは 「いや、そうとも限らんぞ」  
って藍さん？」

普通に名前で呼んでもらおうと思ってたら藍さんが言葉を被せてきた。

はて？ 確か猫又って歳経た猫が変化（へんげ）した妖怪じゃなかったかな？

「橙はまだ生まれて百年も経っていないからな。  
宗次郎殿は確か明治初期の人間だったと聞いている。  
だとしたら宗次郎殿のほうが年上ではないかな？」

ああ、そうか。でも、どちらかと言うと時間を飛び越えてきたって感じだからなあ。

「まあ、いいじゃない？ 橙がそう呼びたいって言ってんだから」

「……そうですね。それじゃそう呼んでもいいよ」

「わ……い！ ありがと、お兄ちゃん！」

藍さんの言葉に考え込んでいた僕へ紫さんが助け舟（？）を出してくれた。

まあ、いつか。どの道深く考えることでもないし。橙も喜んでるし。

「藍しゃま！ お兄ちゃんって呼んでいいって！」

「うんうん。よかったな。橙」

はしゃぐ橙に藍さんが頭をなでて上げている。微笑ましいなあ。

でも、藍さん？ とりあえず鼻血は拭いて下さい。色々と台無しです。

「さて。皆も揃ったことだし、宗君の能力について話しをしましうか」

上座に座る紫さんの言葉に僕も対面の席に座ることにする。

話のメインが僕に関してのことだからココに座るべきだろうね。

縁側の方に幽々子さん、妖夢さんの白玉楼組が既に座っていた。反対の廊下側に藍さん、橙の式神コンビがそれぞれ座る。

「その話しをする前に宗君には謝っておかなきゃならないわね」

ごめんなさいね、と続けた紫さんの言葉に僕は戸惑った。

「はい？ 何にですか？」

謝るって……僕、紫さんに何かされてたのかな？

「普通、能力というのは本人が自覚してなくても使えるものなんだけど、

貴方には意識しても使えないように私が制限（リミッター）を掛けておいたのよ」

「制限……ですか？」

そう言われれば 『出来事を予測できる』 と言われても何も見えないし分からない。

『剣術を操る』 方は元々僕が持っていた技術でもあるから問題ないとして……

アレ？ なら 『知識を操る』 って能力はどうなるんだろ。

それだと僕が知るはずのないことを色々識ってるというのはおかしいよね。

「貴方が知るはずのない知識を持っているのは記憶への “刷り込み” よ。

今現在の外の人間たちが持つ一般常識は全て知ってるでしょうね。つまり、一般常識は記憶へ。その他の知識は能力へ “記録” されているのよ。

だから私が制限を解除しないと知識の記録を “読み取る” ことはできないわ」

僕の考えを読んだのか、紫さんがそう説明してくれる。

なんとまあ……御都合主義が過ぎるでしょ。常識的に考えて。

「え？ でもそれじゃ僕が幻想郷のことを何も知らないのは……」

記憶が能力の制限と関係がないならば、結界の内外関係なく知っているのでは？

「そこは博麗大結界の特性ってことなんでしょうね。

常識と非常識の境界。そこに貴方が “外から” 大結界に巻き込まれた。

だから外界の “常識” は知っていても幻想郷の “非常識” までは記憶されなかった。

まあ、そういう仕組みでそうなったのかは私にも分からないけどね」

そういうもんだと解釈するしかないわね、と続けた紫さん。

すみません。訳分かんないです。それ。

「で、なんで制限を掛けたかと言えば……まあ、解るでしょ？  
貴方の記憶の境界をいじって過去を読んだのはこの私なんだから」

うん。それなら解る。

あんな危険な過去を持つ僕を警戒しないはずはないもんね。

だから制限を掛けた……と。

アレ？ でも、それにしては……

「その割には幽々子さんも妖夢さんもあんまり警戒してなかったようですけど」

まあ、妖夢さんは初対面るときこそけっこう警戒してたみたいだね。



今はそんなことないけど。

「それはねー。宗君が何の為に旅をしていたのかってことも分かっていたからよ」

ああ、なるほど。でも、幽々子さん。それだけで警戒を緩めるのはどうかと。

「まあ、妖夢も居るし。それにいざとなったら私の能力で……ね？」

……流し目が怖いです。幽々子さん。

確か幽々子さんの能力は『死を操る程度の能力』だったよね。そりゃ警戒する必要もないよなあ。

「話を戻すわね。それでこの七日間。貴方のことを観察していたって訳なの。」

貴方が妖化した身体に慣れることも兼ねてね」

その後は紫さんによる僕への観察（監視の意味も含めて）の結果が語られた。

まずは僕の妖化した経緯の推察や、その後の身体への影響の有無。向上した身体能力がどの程度なのかの考察。

なにより僕がこの幻想郷でどう振舞うつもりなのかの監視。

その根底には僕の基本理念に対する懸念が含まれていた。

まあ、要するに僕がこの幻想郷に害成す存在かどうか見極めていたって訳だね。

でも、以前はともかく、今はそんなにこだわってる訳じゃないんだけどなあ。

僕がそう言うと、紫さんはこう反論した。

「その基本理念は半ば本能に近いのよ。貴方自身がそう思っているもね。

深層心理の境界をいじってまで調べたんだから間違いないわ」

サラッと怖いことを平気で言う紫さん。本当になんでもありませんね。

「貴方の基本理念はどちらかと言えば私達の在り方に近いわ。

近いと言っても同じじゃないけどね……でも、それだけに慎重に観る必要があった。

なにしろ、一歩間違えば危険思想に一直線ですもの。当然よね？  
貴方が普通に迷い込んできた外来人なら博麗の巫女の出番なんだけど……

でも、妖化した上に、百年以上前の人間が現れるなんてケースは初めてのことなの。

だからこそ、最初に運び込まれた白玉楼で観察期間を置いたって訳なの。

ま、結果は貴方にとっても喜ばしいことになったし……」

そこで一旦言葉を切ってチラリと妖夢さんの方を見る。

「中々面白いモノも観れたし……ね」

最後の“ね”の所でウィンクする紫さん。

……すごく……妖しいです。

まあ、喜ばしいことってことは無罪放免ってことなんだろうね。

そのことにホッとしながら紫さんの視線が気になって同じく妖夢さんの方を見る。

あ。妖夢さん。真っ赤になって俯いてる。

かく言う僕も、ちよっと赤くなってるんだと思う。頬が熱いし……何しろ妖夢さんとのやり取りを全部見られてたって思うと……ね。

う……ん……僕って妖夢さんをどう想ってるんだろうか。

はっきり言って僕は恋愛のれの字も知らなかったし、知る必要もなかった。

まあ、好きか嫌いかと聞かれれば、たぶん好きとしか答えようが無いんだと思う。

でも、それが恋心なのかどうなのかと聞かれても、正直分からない。

何しろ、感情が戻ってきてるって気付いたのはつい最近のことなんだし。

でも、この気持ちが決して不快なものじゃないってことだけははっきりと言える。

妖夢さんの僕に対する態度は、世間一般でいう好意の表れなんだろうけど……

正直言って、こんな僕が妖夢さんの気持ちに応える資格があるんだろうか？

……判らない。

恋愛初心者の僕にそれを判れと言う方が無茶だと思う。

でも、一緒に居て欲しいと思うし彼女が着いて来てくれると知った時は嬉しかった。

この気持ちに嘘偽りはないとはっきり言える。

……これが恋心というものなんだろうか。

チラッと妖夢さんを見れば、彼女もチラチラと僕を見ている。

可愛いなあと思う。でも、はっきりとは判らない。なにしろ初めてのことだしね。

はっきりしない内は打ち明けない方がいいよね？ うん。

正直、恥ずかしいし……ああ。これが恥ずかしいということなんだね。

なんだかこっちに着てから新しい発見ばかりだ。

これも妖夢さんや周りのみんなのお蔭なんだと思う。

これからはこの気持ちを大切にしていこう……少なくとも打ち明けるまではね。

「はいはい。お見合いの席じゃないんだから、あんまり見せ付けないでくれる？」

僕がそう考えてから結論を出していると、紫さんが手を叩きながらそう言ってきた。

みんなの顔を見回せば、妖夢さんは真っ赤になったまままだし、幽

々子さんはこれ以上ないくらいニコニコしてるし、紫さんはニヤニヤと妖しく笑ってるし、藍さんは微笑ましそうにしてるし、橙に至ってはお見合いってなんですか？ と藍さんに聞いてもう少し大人になれば分かるよって答えられてるし……

うわぁ……これが 『穴があったら入りたい』 ってことなんだろうなぁ。

「ほらほら。話を戻すわよ？ 貴方の能力のことなんだから真面目に聞いてね」

僕が又新たな発見をしていると紫さんから注意された。

うう……元はといえば紫さんが原因なのに……

「まあ、制限を掛けた経緯は分かったと思うけど……

これも貴方の場合だからできたことなのよ。誰に対してもできなくて訳じゃないわ。

貴方がまだ能力を意識する前だから、意識と能力との境界を弄れたの。

意識した今なら私が制限を外すと再度掛けることはできないわ。

だからこそ改めて聞くわね。宗君。貴方はこの幻想郷に永住する覚悟はあるの？」

その質問に対する答えははっきりしている。

だから僕は姿勢を正して真っ直ぐ紫さんを眼を見ながら答えた。

「はい。僕はこの幻想郷に住みたいと思っています。できればずっと……」

僕のその言葉に紫さんはニツと笑って扇子を閉じた。

「その言葉を聴いて安心したわ。それじゃ、制限を外すわね」

その言葉と同時に扇子をスッと僕の方に向ける。

何かがカチリと外れるような音が聞こえた……気がする。

「……特になにも起きませんけど……」

「それはそうよ。貴方が何かを予測しようとか、何かを知りたいと思わなければね。」

基本的に貴方の能力は受動的なものじゃなくて能動的なものに分類されるわ。

あ。でも、予測する能力はまだ伸びる余地がありそうだから、なんとも言えないわね」

「伸びる余地ですか？」

「例えば唐突に何かの出来事を予知したりしてね。あ、予測と予知は違うわよ？」

予測は予想できる範囲内の出来事のこと。予知は……これは説明は知らないわね。

要するに、予測は外れることもあるけど、予知にはそれがないってことなのよ」

なるほど……と、僕が紫さんの言葉を反芻してみる。

予知って言えば預言者みたいなもんだろうか？ それとも予知夢の方かな。

僕が考え込めると、幽々子さんが紫さんに話しかけていた。

「それにしても紫い。随分と宗君に肩入れしてるみたいじゃない？  
貴女がそんなに懇切丁寧に説明してあげるとこなんて滅多に見ないわよ」

「幽々子お。あんたにそれを言われたくはないわよ。まったく……  
まあ、そうね。肩入れしたくもなるわよね。分かるでしょ？

この幻想郷に新たな変化をもたらせてくれるってことを思えば……  
ね」

そう言い合ってから僕と妖夢さんを交互に見る二人。

あの……すみません。意味。分からないです。

あ。妖夢さんがこれ以上ないくらい真っ赤になってる。

このままだと暴発するのが容易に予測でき……あ、これは予測でもなんでもないか。

「あ、あの。それで具体的にはどうすれば分かるんでしょうか？」

とりあえず話題を逸らさなきゃ。

僕の質問に紫さんも 「そーねえ」 と少し考えてから閉じていた扇子を再び広げる。

「それじゃ、この扇子を飛ばしてみるからどこに落ちるか予測してみなさい」

どこに落ちるか、か……これは普通には予測できないからうってつけだね。

不規則に落ちる扇子の軌道は読もうとしても読めないだろうし。

僕はじつと紫さんの扇子を見詰める。

すると……

「……こう飛んでから、あのふすまに当たって僕の隣に落ちます」

僕はそう予測できた。

なんというか、映像（ビジョン）って言うのかな？　それが頭に浮かんできた。

僕はその見えた映像通りの軌道を指し示しながら言葉で説明も付ける。

すると紫さんはニヤツと笑ってから扇子を指先で弾くように天井に向かって飛ばした。

結果は……

「……予測通りね。これが貴方の能力 『出来事を予測できる程度の能力』 よ」

「……すごい」 「うわあ！　すごいですう！」 「さすが宗君ねえ」

「拡げた扇子がどう落ちるかの軌道を読むのは極めて困難だ……すごいな」



僕の予測した通りの結果にみんながそれぞれ感嘆の声を上げて誉めてくれた。

最後に藍さんが冷静に分析してくれる。やっぱり理知的なんだなあ。

「この能力は貴方が時間を超えたことによる影響なんでしょうね。文字通り未来を見ているんですものね。今の貴方は。

さすがに予知能力とまでは言えないけど……ま、これでも十分強力だわ」

そう言って紫さんは指先で空間をスツと滑らせると、空中にリボンが現れた。

そのリボンが指先の軌道に沿って二つに分かれると、そこにスキマが開く。

やがてポトリとスキマから扇子が落ちてきて、それを手で受け止めた。

僕が隣を見ると、扇子が落ちていた畳にスキマがポツカリと開いている。

……すみません、紫さん。あなたの方がよっぽど強力です。

「これでこの能力の使い方はだいたい分かったでしょう？」

この能力のすごい所は普通なら予測できない所までできるってことなのよ。

もうほとんど予知と言ってもいいかもしれないけど、不測の事態までは読めない。

だから予知ではなく予測って言い方にしてる訳なのよ。

まあ、今の所はほんの数秒先の予測……先読みにすぎないけどね。

それでも敵対した相手の数手先を読めるってことは十分な武器よ。  
そしてこの能力は貴方の“勘”にも作用しているわ。  
半人半妖だけに、霊的な靈感と、妖怪の動物的直感も兼ね備えている。

今の貴方の勘は、あの博麗の巫女以上かもしれないわね」

そこで一旦言葉を切ってお茶を一口含む。

説明が長くなって咽が渴いたんだろうね。

でも、紫さん。それってなんてニュータ○プ能力……

「ま、普通の人間なら予測した情報の処理に脳が追いつかないでしょうね。

でも、貴方の場合は能力そのものが処理してくれる。妖化したのなら尚更よ。

そして更に伸びる余地まで残している……ホントにすごいわね。  
この能力に慣れていけば能動的にだけじゃなく受動的に……  
つまり、限定的とはいえ、予知もできるようになるでしょうね」

紫さんの言葉に、みんなが感心した目を向けてくる。

……ちよつと照れくさいです……

「さて、この能力についてはこれでいいわね。

もう一つの『知識を操る程度の能力』についてだけ……

宗君。貴方が知りたいと思った事を思い浮かべてみなさい。

あ。でも、能力が記録していない情報までは得られないから注意してね」

ん……そう言われてもなあ。

あ。これはどうかな？

「日本の総面積は……377835平方km……すごい。ホントに出た」

なんて言うか、ポンっと頭に浮かんできた。

しかも “読んで理解する” 必要もなく、そのままダイレクトに理解でるなんて。

「思った通りね。しかもその能力は知らない情報を知れば新たに書き加えられるわ」

……なんというWiki。もしくはGoogle先生だ。あ。後者は伏字になってないや。

しかし、すごいな。まさに歩く電子辞書……いや、それ以上だよ。そして、その結果に又もみんなから、へえとか。はあとか。感嘆の溜め息が漏れた。

かつては由美さんから 『腕は立っても頭はパー』 とか言われてたけど……

もう、そう言われることはないんだ。『百識』の二つ名で呼ばれてた方治さん以上だ。

「まあ、宗君の持ってる知識の大半はこの幻想郷じゃ役に立たないんだけどね〜♪」

バタッ！

その言葉に僕を含めて幽々子さん以外の全員が座卓に突っ伏す。

た、確かにそうですね……そこでそれを言いますか!？

上げて落とすってどこの週刊誌のやり方なんですか……この人マジで鬼だ。

僕はちよつと恨めしそうに紫さんを見るけど、当の本人はどこ吹く風で笑ってる。

「まあまあ。ここからがこの能力の本領なんだから聞きなさいな」

うう……先にそれを言っして下さいよ。

「これだけなら『知識を得られる程度の能力』と呼ばなきゃいけない。

でも、操ると言うからにはそれなりの効果があるのよ。

貴方が得た知識の中にはその道の職人の情報もあるはずよね？」

「ええと。例えば料理人とか鍛冶師とかですか？ ……ええ。確かにありますね」

試しに料理の職人の情報を検索してみる。

料理の種類やその調理方法。道具の手入れの仕方までが浮かんできた。

種類の多さにちよつと混乱するけど、適当に選んだら他の情報は全てカットされた。

その代わりその関連項目が分かり易く浮かんでくる……ホント便

利だな。これ。

「それなら、その知識通りにやってみたら？　その通りに体を動かせるはずよ」

その言葉に幽々子さん以外の全員が「ええっ!？」と声を上げる。

幽々子さんは聞いていたのかまったく動じていない。

……素で動じてないのかもしれないけど。

「なんとまあ……」

「つまり宗次郎さんは知りうる全ての職人の技を再現できるんですね？」

「ホントにすごいでしゅ……」

藍さん、妖夢さん、橙の順番で又も感嘆の声。もういい加減みんな疲れてると思う。

ボクも疲れたよ……パトラッシュ……

……どうも現代人の一般常識って変なのが多いなあ……

「まあ、さすがに熟練の域までは無理でしょうね。それこそ訓練が要るわ。」

要するに、そこそこの職人には今直ぐ成れるけど、一流には成れないってことね」

……それってなんて器用貧乏の典型……

「それって器用貧乏って言うんでしゅよね？　藍しゃま」

橙……君の純真な言葉が心に痛いよ。

藍さんも引きつった顔で曖昧に頷かないで下さい。余計に痛いです。

「あらまあ。それなら今度お料理も作ってもらおうかしら。ねえ？　妖夢」

幽々子さん。そこで妖夢さんに振らないで下さい。妖夢さんが困ってます。

だいたい、厨房には生前板前さんだった幽霊の方達が居るじゃないですか。

さすがにあの量を一人でこなすのは無理がありますよ。

それに……

「その技術もこの幻想郷では大半が生かせないんじゃないですか？　紫さん」

電気工事士とかF1レーサーの運転技術とかね。電気も通ってないだろうし。

「あら、分かってるじゃない♪　まあ、その通りだけど無駄にはならないでしょ？」

その通りなんですけどね。ええ。分かっていたいたとも。

ハア……いい加減疲れましたよ。

「まあまあ。話しは最後まで聞きなさいな。まだ先があるんだから」  
紫さんが僕たちの反応を見て楽しんでるからでしょうに……

「そんな恨めしそうな顔をしないの。  
この能力の本領はね、“他の能力との連携役” になっていること  
なのよ」

他の能力？

「それって 『予測』 と 『剣術』 の能力との連携ってことで  
すか？」

ここで初めて妖夢さんが発言してきた。やっと立ち直ったみたいだ。

「そうよ。『予測』 された情報を 『知識』 で処理して 『剣術』 で対処する。  
こと、戦闘に関してはこの三つの能力が連携してフルに発揮できる  
ってことなのよ」

つまりは 『イージス艦』 みたいな物を想像すればいい訳か……  
予測をリーダーに、知識をコンピューターに、剣術を兵器に例え  
れば分かり易いな。

「あら、上手い例えね。そんな感じのモノだと思えばいいわ」

あ。口に出してみたいだ。気をつけないと。

それにしても、よく知っていますね？ 紫さん。イージス艦なんて。

他のみんなの頭には “？” マークが浮かんでるのが見えそうになっているのに。

「私は時々外の世界を見て回っているからそれくらいは知っているわ。特に軍事関係は見ておかないといけないしね」

なるほど。それも幻想郷を守るために必要なことですよ。

対応できるかどうかは兎も角として……

僕がそう思っていると、今度は藍さんが口を挟んできた。

「ですが、帰ってくる度に“まんが”や“てれびげーむ”を持ち帰られるのは困ります。

もう倉庫にはそれらがいっぱいになってきているのですからご自重下さい」

……なにやってるんですか紫さん。だいたい電気とかどうしてるんですか。

苦言を呈した藍さんもほとんど諦めモードみたいですけど。

「いいじゃないの。それに電気なんて外の送電線をちょちょいといじればいいし、電気代も只よ」



紫さん。マジで自重して下さい。高圧電線だったらどうするんですか。

って言うか、幽々子さん？　なんであなたが目を逸らしてるんですか？

「あう……だってえ、紫が面白いものがあるわよって言うんだもん」

僕がジト眼で見ていると、何も聞かない内から白状してきた。

『だもん』　じゃありませんよ、子供じゃないんですから。

「幽々子様……時々居られなくなると思っていたら……」

「あゝゝん。それもこれも紫が悪いのよ。私だって冥界の管理があるのに紫が」

「ちよっと幽々子！　人聞きの悪いこと言わないでよ！

私が『そろそろ戻ったら？』って言っても『もうちよっと』って帰らないじゃない！」

「紫様……本当に自重して下さい！　橙の教育にも悪影響が出ます！　そもそも結界の管理は私に押し付けているじゃありませんか！　私だって橙と——」

以下、延々と四人の口論が続き、僕は橙と縁側に避難することにしました。

「……お茶が美味しいねえ。橙」

「そうでしゅねえ。所で “まんが” とか “てれびげーむ”  
ってなんでしゅか？」

「それはね、橙。もうちょっと大人になれば分かることだよ？」

そうでしゅか、と納得してくれる橙。

うんうん。ホントに良い子だよねえ。

温くなったお茶を美味しそうに飲む橙を見て、やっぱり猫舌だな  
あと思う僕でした まる

あ。スペルカードの説明はこの後、ちゃんと教えて貰いました。

## 幕間 その一 ― 能力 ― (後書き)

以上で今回は終わりです。

初の一人称形式でしたが、いかがでしたでしょうか？

三人称と比べてずっと書き易かったです。一人称形式が多いのも頷けます。

ですが、この形式は幕間や外伝のみにするつもりです。

やはり小説初心者としては三人称で書き慣れた方がいいと思いますので。

これは私がそう思っているだけで、他の作家様方に価値観を押し付けるつもりはありません。

それと今回、宗次郎の全能力が明らかになりました。

基本的に本文で書いたように 『イージス艦』 をイメージして頂ければ解りやすいと思います。

但し、これだけでは留まりません。本編が進みましたら順次明らかになっていきます。

それと、今後投稿は一週間ぐらいのペースになりそうです。(予定は未定ですが……)

読者の皆様方、この駄文でよろしければ最後までお付き合いをお願い致します。

## 第六話 ― 鬼は外 ― (前書き)

六話目を投稿します。

今回、別に節分と合わせたわけではありませんが、ちょうど良かったのでサブタイに使わせて貰いました。

そして、そのサブタイ通りにあの人が登場します。

今回は初のバトルシーンとなりますが、上手く描写できずに四苦八苦(汗)。

それと、毎度のことながらキャラ崩壊中w

宗次郎。もはや原作の面影が残っていませんw (いや、ちょっとは……あるかなあ?)

毎回言ってますが、読まれる方はご注意のほどを……

では、本編です。

＊追記…矛盾した記述があった為に修正しました……『昨日』ってなんだよ……当日のことだろうに。orz

## 第六話 ― 鬼は外 ―

「『拝啓。志々雄様。』

お元気ですか……と言うのはおかしいですね。

志々雄さんの事ですから、とつくに地獄の鬼達と殺し合いをしていることでしょう。

それとも、もう閻魔様と殺（や）り合ってるんでしょうか？

僕がそちらに逝くのは、たぶんかなり先のことになりそうです。

では僕が来るまでの間、楽しい地獄ライフを満喫していて下さい。

敬具』」

「何をぶつぶつ言ってんのさ。さっさと始めるよ〜？」

「『追伸。鬼って地獄にしか居ないと思っていましたが、そうでもないようです。』

なにしろ ――

「ほ〜ら。この萃香さまの弾幕、避けきれるかなあ？」

―― 今、目の前に居るんですから』……」



宗次郎は思った。

どうしてこうなった？ と……

確か、昼間は紫による能力の説明から使い方とその応用まで教わった。

そしてスペルカードの説明と作成作業まで行ったのだ。

スペルカードに入れる技の名前と効果にはかなり頭を悩ませたが、彼自身が持つ現代知識の応用と、妖夢たちの協力もあってなんとか完成させることができた。

その結果、彼は現在五枚のカードを所持するに至る。

- ・ 剣符 『花剣乱舞』
- ・ 盾符 『イージスの盾』
- ・ 弾符 『銃砲弾雨』
- ・ 疾符 『韋駄天・轟』
- ・ 識符 『孔明の罭』

正直、彼はこのネーミングセンスのなさはどうよと思った。特に最後。

どうやらいい具合に厨二病を患（わづら）ってしまったようである。

宗次郎、軽く凹む。

だが、意外にも他の皆からは好評だったりする。特にゆかりん。お蔭で名前の変更が出来そうに無い雰囲気になされたようだ。

宗次郎、更に凹む。

……と言うか、彼の持つ知識は本当に一般常識なのだろうか？……

尚、彼自身が持つ唯一の剣技。『瞬天殺』はカードに入れなかった。

何しろ“ごっこ”に即死系の技など入れる訳にもいかなかったからだ。

そして、何よりも彼が所持できる刀が無かったのが大きな理由である。

白玉楼にも何振りかの刀はあったが、どれも彼の力に耐えられる物はなかった。

対人戦なら兎も角、人外の戦いに耐えられるほどの業物などそうそうないのだ。

妖夢が所持する二刀。

幽霊十匹分の殺傷力を持つ長刀 『楼観剣』。  
人の迷いを断つ短刀 『白楼剣』。

彼女の師匠にして祖父。妖忌より託されたという人外との戦いの  
為の刀。

妖夢曰く 『斬れぬものなどあんまりない』 であるらしい。妖  
怪が鍛えし業物。

試しに持たせて貰ったことがあるが、そのあまりの軽さに彼は驚  
きを隠せなかった。

妖夢も人外の者とは言え、霊とのハーフなのだ。妖怪ほどの力を  
持つてはいない。

彼女はあくまでも剣の業と霊力によって強力な妖怪達に対抗して  
いたのである。

宗次郎はそのことに改めて彼女の “業” に感嘆の溜め息を吐  
いたものだった。

何しろ、今の彼の力は並の妖怪を上回っているのだ。

彼女の太刀の合わせ方、力の逃がし方が極めて秀逸なのである。

しかし、これは彼の剣の腕が劣っているという訳ではない。むしろ  
匹敵するだろう。

どちらかと言えば、わずか十数年足らずの経験しかないにもか  
わらず、おそらくは数百年の経験と実績を持つであろう妖夢に匹敵  
している彼の方が異常なのだ。

これは単純に人外との戦いの経験の差なのだが、彼はそれに気付



いていない。

流石は『天剣』　　と言うべきところあるが、彼の天然ぶりもある意味流石である。

……まあ、彼のかつての仲間達もある意味人外ではあったが……

話を戻す。

結局、彼が所持できる刀はなかった。

いや、あるにはあるのだ。この幻想郷に流れ着いた刀は多数に上る。

だが、そのほとんどが曰く付きの厄介な代物ばかりで、封印されているのである。

封印を解けば最悪。この幻想郷に災厄をもたらしかねないのだ。そんな物を“幻想郷の管理者”　　たる紫が放っておくはずがなかった。

その紫によれば、封印されていない刀は宗次郎が持つには力不足であると言う。

そして、そのほとんどが人間の里に居る妖怪退治屋が所持しているそうである。

ちなみにその妖怪退治屋の実力は『人里の守護者』とも呼ばれる慧音程ではない。

年に何回か里の周辺に居る妖怪退治を共同で請け負っている程度であるという。

妖怪は人を襲い、人は妖怪を退治する。

これが人と妖怪との正しい在り方であるという。  
この幻想郷ではその均衡が保たれているのだ。

尤も、最近ではほとんど恒例行事と化しており、かつてほどの殺伐さはない。

その原因こそ博麗の巫女が制定し導入したという 『スペルカードルール』 である。

故にこそ、彼はその博麗の巫女に会うのを楽しみにしているのだ。

何しろ、本来はもっと殺伐とした関係にある人間と人外との争いを、（比較的）平和的かつ遺恨も出さない “ごっこ” という形を導入し浸透させたのだ。

これはある意味、彼の求める “答え” の道筋に光明をもたらせてくれたと言える。

だからこそ、自分の持つ技を入れたくなかったのかもしれない。

その為スペルカードは彼の知識を活かした霊力、妖力に頼るものとなってしまった。

それだと、彼の三つの能力を 『イージス艦』 に例えた意味がないのだが……

だが、紫によれば 『剣術』 が彼の霊力、妖力に取って代わったに過ぎないと言う。

どちらにしても、彼の持つ『力』であることに変わりが無いのだそうである。

霊力の扱いに関しては、妖夢が日々の稽古と共に指導していたので問題は無い。

そして、妖力の扱いに関しては、藍と、意外なことに橙も一緒に指導してくれた。

聞けば橙の能力は『妖術を扱う程度の能力』であるという。であれば、彼女が指導に参加していてもなんら不思議はない。

……尤も、彼女の教えは「ドーンとやってバーンと出す」等、抽象的すぎたが……

ちなみに、藍の能力は『式神を使う程度の能力』であるが、妖術や妖力を扱うことに関しては橙よりも遥かに実力が上だ。

これは橙の能力は式神を憑けたことによるものであり、本来の化け猫。猫又としての能力は『人を驚かす程度の能力』にすぎないからである。

何より『九尾の狐』固有の能力を持つ藍の実力が上なのは当然であろう。

その藍の指導は、実に論理的、かつ具体的に解り易いものであった。

教師に向いているなあと、宗次郎が思うほど教え方が上手かったのだ。

そのお蔭で、宗次郎はあっという間に妖力の使い方を覚えてしま

った。

そして霊力と妖力を効果的に使ったスペルカードを考案したのである。

さっそくそれを使った弾幕ごっこでもしようかと思ったのだが、既に日もとっぷりと暮れてしまい、皆も疲れたであろうということで、その日は八雲邸に泊めてもらうこととなった。

その日の晚餐は宗次郎の歓迎会も兼ねた宴会となり、皆大いに飲んで楽しんだ。

そして乾杯の際に皆口を合わせて宗次郎にこう言ったのである。

『ようこそ幻想郷へ！』

その言葉に宗次郎はこの幻想郷の一員として迎えられたことを理解したのである。

嬉しかった。本当に嬉しかった。

彼はその言葉を何度も反芻しながら噛み締める。

“嬉しい” という感情がこんなにも心温まるものであったのかと……

目頭が熱くなってくるのを誤魔化すように一気に杯をあおる宗次郎。

と、そこへ何者かの気配が急速に現れるのを感じて顔をそちらに

向けた。

一瞬、警戒の声を上げようかとしたのだが、皆まったく動じていなかった。

それどころか、皆気さくに声を掛けて挨拶し、宗次郎を紹介したのである。

そしてその時の不審者……いや、来客の自己紹介の言葉がこうであつた。

『あたいの名は伊吹 萃香（いぶき すいか）、鬼の萃香さ。よろしくう！』



「そして宴会の余興として僕と萃香さんによる弾幕ごっここと相成り、今に至る……と」

「だから何をぶつぶつ言ってるのさ？」

「いえ、単に現状の確認ですので気にしないで下さい」

（最初に会った時から嫌な予感はあるんだけどなあ）

正直なところ、宗次郎もこのいきなりな展開には戸惑っていた。

（嫌な予感がしても避けられなきゃ意味がないし……紫さんも余計なこと言うし）

『余興に腕試しでもしてみたらあ？ 彼は中々の実力者よ♪』

飲み比べをしていた紫が、萃香に放った言葉がこれであった。

それを思い返すと思わず頭痛がしてくるが、かまわずルールの再確認を行う。

「では、今回の弾幕ごっこのルールを確認します。

今回は余興ということで通常のルールに加え “一発でも被弾したら負け” でしたね？

それと手足などによる直接攻撃は厳禁ということですのでよろしいですか？」

「分かってるってえ。余興なんだから気楽にいこうよ、気楽に」

若干緊張しているのか、少々硬い声の宗次郎に手をヒラヒラさせて答える萃香。

（初の弾幕戦の相手がいきなり最強クラスか……）

だが、これはこれでいい機会ではないかとも思っている。

何しろ、鬼とさえはこの幻想郷でも最強の部類に入る妖怪だと聞いているからだ。

しかも、能力が使える今ならば、かなり “面白い” 勝負にな

るとも……

ならば自分の力がどれだけ通用するのかどうか試したくもなる。

やはり、彼自身がどう思おうとも 『弱肉強食』 の理念は半ば本能に近いようだ。

「……宗次郎さん。勝てるんでしょうか？」

「そうね。面白い勝負になるとは言ったけど、勝てるとは言っていないし」

「あら。幽々子ってばそんなこと言ってたの？ まあ、私も同意見だけ」

「確かに宗次郎殿の能力はかなりのモノですが……私も厳しいと思います」

「うゝゝ……お兄ちゃん、がんばってー！」

庭の縁側では、満天の夜空の中で対峙する二人の姿を見上げてそれぞれ思うところを口にしていたが、やはり宗次郎の旗色が悪いようである。

尚、この会話も上空で萃香と対峙していた彼の耳にも聞こえていたりする。

（感覚が鋭くなるっていうのも考えものだなあ……）

そして改めて萃香を見る。

初めて見たときは橙よりも少し年上の幼い少女にしか見えなかった。

だが、こうして対峙してみてその存在感、威圧感に圧倒されそうになる。

ノースリーブの白いシャツに、襟には赤いリボンと腰には大きな瓢箪。

紫色を基調とするフリルの付いた足首まであるフレアスカート。可愛らしいと言えるほどの幼い顔立ちに、意思の強そうな琥珀色の瞳。

両手首のリストバンドには右に三角、左に丸い分銅の付いた鎖が繋がれている。

そして膝裏まで届く山吹色の長い髪にも四角い分銅がついた鎖で纏められていた。

頭には赤い大きなリボンがあり、それがよりいっそう女の子らしさを醸し出している。

だが、何よりも彼の眼に留まるのが……

（鹿みたいな大きい角だけど……寝る時に邪魔にならないのかな？）

……若干、的外れなことを思いながら、彼女の側頭部から生える角を見ていた。

角。

それこそ鬼が鬼である由縁を示す大きな特徴である。



彼女の幼い身体には不釣り合いなほどの大きな二本の角。

右の角にはねじれたような螺旋模様があり、左には紫色のリボンが付いている。

（やっぱり女の子なんだなあ）

と、思いながら彼は使用するカードの枚数を提示した。

「使用するカードは三枚。

剣符 『花剣乱舞』

盾符 『イージスの盾』

弾符 『銃砲弾雨』

これでよろしいですか？」

ルール上、別にカードの名前まで言う必要はない。

だが、一応は確認のために言ったのであろう。

ここで選ばなかった残り二枚のカードについて簡単に説明しておく。

疾符 『韋駄天・轟』 は縮地を使った地上戦や室内戦用と言えるカードである。

彼も空中で縮地が使えるとは流石に思っていない。

識符 『孔明の罭』 は文字通りあらゆるトラップの仕掛けがあるカードだ。

正々堂々を旨（むね）とすると聞く鬼に対しては使用しないほうがいいと判断した。

必然的にこの三枚が今使用できるカードのようである。

これではかなり少ないだろうと彼も思うし、皆もそう思っているようだ。

この勝負が終わったらもっと考案してみないと、と考える。

刀があればもっと選択の幅が広がるのだが、無いものねだりをしてもしょうがない。

だが、もし使えるのならば是非使ってみたいと思う技があるにはある。

今更他の剣術を使うつもりはなかったが、“あの人”の剣術なら話は別だ。

なにせ、自分を変えるきっかけを作った人の剣術なのだから……

しかし、“あの人”の技の本質を理解しているとは言い難い。

それは“あの奥義”の特性を看破した彼だからこそ言える。

何しろ、できないとはつきり明言したのは彼自身なのだ。

今でもできると思ひ難い。刀が無い現状では尚更だろうと考えていた。

「いいよ。ならこっちも三枚にするねえ。

萃符 『戸隠山投げ』

鬼火 『超高密度燐禍術』

それと、後は……うん。これでいこう！

—— 鬼気 『濛々迷雾』

この三つだよ」

宗次郎があれこれと考えている内に萃香もスペルカードの使用枚数を提示する。

名前まで言ったのは別に対抗意識があったからではない。  
単純に向こうが言ったのだからだろう。流石、正々堂々を旨とする鬼である。

ゾクッ！

（な……なんだか分からないけど、ヤバイ……特に三つ目！）

カードの名前からどのような技なのか想像はし難いが、彼はそう判断する。

何より、背筋に悪寒が走り、全身の肌が総毛立つ。

彼の勘から警鐘がひっきりなしに鳴らされているのがその証拠であった。

「!? ゆ、幽々子様！ あの技は……」

「あらあら。萃香ったら割りと本気みたいねえ」

「まあ、『百万鬼夜行』を出されるよりはマシよ。でも、これではっきりするわね」

「紫様。はっきりするとは？」

「ま、見てれば分かるわよ」

「そんな！ 落ち着いて見ていいんですか！？」

「妖夢？ もうちょっと貴女の宗君を信じてあげたらどうなの？」

「ですから、別に私のって訳じゃ……って、そんなこと言ってる場合ですか！？」

「妖夢。落ち着つくのだ。紫様も幽々子様も別に見殺しにするとは言っていない」

「藍様……ですが」

「これはあくまでも余興なのだ。萃香様も分かっておられるはず。それと私からも言おう。宗次郎殿を信じろと」

「はい……」

「それと、橙。お前もな」

「！？……っ……はい。藍しやま」

「あら、上手く纏めたわねえ。藍」

「紫様。からかわないで下さい」

大声でカードを宣言した萃香の声が聞こえた彼女達がそれぞれの声を上げる。

その中で藍は主にかかわれた後、内心でこう呟いていた。

（まったく。何故私がこのような役回りなど……）

激昂する妖夢を治め、今にも飛び出しかけていた橙に釘を刺した藍はそう思った。

（妖夢は兎も角、この短い時間でここまで橙が懐くとはな……）

宴会の間ずっと宗次郎に纏わりつき、最後は膝の上に抱っこまでされていたのだ。

兄と呼べる存在ができたのがよほど嬉しかったのだろう。

その様子をずっと苦笑しながら眺めていた藍は、それを思い返して再び苦笑する。

不思議と可愛がっている妹を盗られたような感情は湧いてこなかった。

……むしろ、妖夢の妬ましげな視線の方がよっぽど気になっていた……

そこまで考えていたその時、上空からは眩い光と共に大音響が鳴り響いてきた。

遂に二人の対戦が始まったのである。

それはまるで、季節外れの花火が大輪の花を夜空に咲かせているかのようなのである。

空に視線を戻して勝負の行方を見極めんとする藍。

そして気配のみで自らの式神と、主の親友の従者の様子も同時に探る。

この場に居る上役二人が動こうとしない今。自分の役目はあの二人を抑えることだと自らに任じた。

（この私にここまでさせているのだ。無事に戻ってこいよ……）

二人を泣かせるようなことをしたら只ではおかないぞ、と内心で言葉を続ける。

（それにしても、信じろ……か。私もこの二人のことを言えんな）

先ほどの自分の言葉に又も苦笑する藍。

そんな彼女の様子を横目で見ながら静かに微笑する主の姿があったのだが、勝負の行方と二人を抑えることに集中していた藍は、それを知るよしもなかった。



「くっ！ “見えて” はいるけど、なんて威力だ！」

「ほらほらあ！ 次行くよー！ 鬼火 『超高密度燐禍術』 ！！」

（！？ こっちか！）

カードの宣言と同時に巨大な炎の塊が出現する。

その巨大な炎の弾幕を先読みでかわす宗次郎。

既に最初の技、『花剣乱舞』は、萃香の『戸隠山投げ』によって破られていた。

『花剣乱舞』とは、三日月形の霊気の刃と、円形の妖気の塊によって構成されるスペルカードである。

円形の妖気を中心に、霊気の刃をまるで花びらのように配置し、その花を回転させながら相手に飛ばす技なのだ。

それは夜空に咲く大輪の花のように美しく、見た目も競う弾幕ごっこに相応しい技と言えるが、これが見た目と裏腹にかなり凶悪な技でもあった。

相手に近づくと刃が離れて独立し、それらが更に回転して相手に襲い掛かる。

そして、刃を避けようとした瞬間に妖気の塊が四散して逃げ道をなくすのだ。

それが一つや二つならまだしも、これが七つ同時に放たれる。

しかも、逃げ場をなくすように幾重にも立体的に配置された形で

……

その弾幕一つ一つの威力は、人間ならば大怪我を負うレベルだが、妖怪。それも鬼の萃香からすればそれほど大したものではないだろう。

だが、やはり痛いモノは痛いし、今回は一発でも被弾したら即負けなのだ。

その弾幕に込められた威力を一瞬で見抜いた萃香はスペルカードを発動させた。

『戸隠山投げ』 とはどこからか召喚された大岩を回転させて投げつける技である。

それって技なのか？ ってか、弾幕じゃなくね？ と突っ込みたくなる技だ。

だが、その威力は半端な代物ではなかった。せっかく放った宗次郎の弾幕の花が、一撃で消滅。突破されてしまったのである。

花を二つまとめて突破した岩が彼に目掛けて飛来してくる。

慌てて一撃目を避けるが、二撃三撃と一抱えもある岩が飛んでくる光景は悪夢だ。

今度は落ち着いて先読みし、余裕で避けるが、通常の弾幕まで織り交ぜてきた。

しかも、その一つ一つの威力が宗次郎の弾幕よりも上だったのだ。

そのせいで、他の花も全て潰されてしまうのだった。

(まったく……流石に “最強” の呼び名は伊達じゃないってこ



とか)

勝負の最初を思い返しながら彼女の強さを実感する宗次郎。

巨大な炎が爆発し、火炎弾が飛来してくるがそれも余裕でかわしていく。

(しかも炎を投げっぱなしで動かないからいい的でしかないのに…  
…)

宗次郎の放つ通常の弾幕を次々と撃ち消していく萃香。

(全弾打ち落としてしまうなんて無茶苦茶だ…ま、分かっていたけどさ)

萃香が周囲に弾幕の弾を展開させている光景はまるで弾幕の結界である。

火炎弾も止み、今は通常弾による応酬に移行していた。

(出鱈目だよなあ。まあ、いつまでも出し続けられるわけじゃないだろうけど)

攻撃しても効果がないことは分かっていたが、それでも一応は弾幕を張り続ける。

避ける宗次郎に撃ち落とす萃香。勝負は一向に尽きそうになかった。

なんとか攻略手段を模索するが、彼の知識をもってしても何も思いつかない。

いや、一応あるにはある。それも確実に撃ち落されずに届くであろう技が。

だが、成功するかどうかは試してみないと分からないのだ。

しかも成功すればしたで、それは確実に萃香を傷つけかねなかった。

まかり間違えば本当に殺してしまうかもしれない。

これはあくまでも “ごっこ” であり、しかも宴会の余興なのだ。

更に言えば、宣言した技以外を使用するのはルール違反である。

真剣勝負でないことは彼も十分に理解していた。

それでも……

（それでも勝ちたい。勝ってみたいと思うのはいけないことなんだろうか……）

—— その時。彼の中で “ナニカ” がモゾリと蠢く気配を感じた ——

彼の心の奥底で、“ソレ” から声が聞こえてくる……

—— コロセ

—— カチタイノナラコロセ

(……っ！？……煩いなあ……)

—— ショセンコノヨハジャクニクキョウシヨク

—— ツヨケレバイキヨワケレバシヌ……

(煩いって言うてるのが聞こえないのかな？)

自分の奥底から聞こえてくる、おぞましいとすら言える声。

“ソレ” に心当たりがあった宗次郎は勤めて平静に自分の決意を示す。

(僕は決めたんだ……ココで、この幻想郷で “答え” を見つけるって)

だが、返ってきたのは否定の言葉であった。

—— ソンナモノハアリハシナイ……

——イキノコラナケレバナニヲイツテモムイミ

(……………)

立て続けに投げつけられる否定の言葉に、眼を閉じて沈黙する。

——シネバスベテガムニナルダケ

——ダカラムダナコトハヤメテコロセバイイ

(……………そうだね)

——ヤットワカタカ、サアハヤクコロ(何を勘違いしている  
さ?)

——ナン……………ダト?

(僕は生き残ってみせるし、死ぬつもりもない。だから……………)

そこで一旦言葉を切り、カッと眼を見開いて言葉を叩きつけた。

（だから殺す必要なんてない！）

新たな決意の言葉と同時に視線を眼下に落とす。

その視線の先にはこちらを心配そうに見つめる妖夢の姿があった。

（僕はココに着てみんなから、妖夢さんからたくさんのことを教えてもらった）

思い出すのはこの幻想郷に着てからの日々。

僅か一週間足らずではあったが、様々なことを彼は学んだ。

本当の楽しさ。

本当の嬉しさ。

そして本当の優しさを。

それらを教えてくれた彼女達の目の前でその友人を殺せなどと……

彼は今、そんなふざけたことを言う “ソレ” に 『本当の怒り』を感じていた。

そんな宗次郎の怒りを知ってか知らずか、“ソレ” は焦ったように言葉を続ける。

—— ソ、ソシナコトデハオマエガシ（死ぬつもりはないと言っ

たはずだよ?)

(勝つことと、相手を殺すこととは Ⅱ (イコール) じゃないんだ。だからお前は……)

―― バカ……ナ……

徐々に “ソレ” から声が消えていく。

そして最後の止めの言葉を放った。

( “オマエ” は黙って見ていろ!! )

宗次郎の中で “ナニカ” が弾けた……



「宗次郎さん……」

一瞬、宗次郎が自分を見たと感じた妖夢は、祈るように手を組む。  
彼の中で何かが変わったような気がしたのだ。

「お兄ちゃん……」

それを見た橙も妖夢を真似て手を組んだ。

「……どうやらはつきりしたようね。思ったより早かったけど」

「紫様。何がでしょうか？」

そして紫がボソリと呟いた。

耳聴くそれを聞いた藍が尋ねるが、彼女の主は妖しく笑うだけで  
答えなかった。

そして主は再び上空を見上げ、藍も釣られて一緒に見上げる。

そこには雰囲気が変わったようにも見える宗次郎の姿があった。

何やら楽しそうにそれを眺める主の姿を横目で見て、藍は小首を  
傾げる。

そしてふと二人の少女（一人は幼女と言うべきだが……）を見る。

二人とも固唾を吞んで見ており、今の会話を聞いた様子はなかった。

（ま、紫様のことだ。何かお考えがあるのだろう）

とりあえず先ほどのことは自分の胸にしまっておこうと思う藍。

再び空を見上げる。

いつの間にか彼女も固唾を呑んでいたのだが、そのことに気付いてはいなかった。

（あらあら……みんな宗君に夢中になっていくみたいね♪）

……約一名、のん気なことを考えてる者が居るが、気にしない方がよさそうである。

と言うか、さつきから無言で食い入るように見ていた人が言っても説得力皆無だ。



（ふ〜ん？　　なんだか知らないけど、ふっきれたのかな？）

様子の変わった宗次郎に萃香は弾幕を張るのを止め、彼の出方を窺っていた。



（面白い子が居るって紫が言うから誘われたんだけどね）

最初は軽い気持ちで紫の話に乗った萃香であつたが……

（こりゃまんまと乗せられたかな？）

考えてみれば “あの” 紫がそんな単純な話を持ってくるはずがなかったのだ。

（ま、いっか。思った以上に楽しめそうだし）

だが、深くは考えない。彼女にとって楽しめればそれでいいのである。

それに誘われずとも、宴会となれば勝手に参加していたであろう。

（それに他の連中にも酒の肴になる面白い話を持って帰れそうだしね）

みんなで飲んで騒いで楽しめればそれでいい。

流石、桜があまり観れなかったという理由で、三日おきの宴会をさせた彼女である。

（何より、あいつが……紫が意味のないことをさせるはずがないし）

そう。誰よりもこの地を愛する彼女が意味の無いことをするはずがない。

そう思うくらいには彼女のことを信頼している萃香である。

伊達に胡散臭いを絵に描いたような彼女の友人を長年やってはいないのだ。

（で～～も。だからと言って負けて上げるつもりなんてないけどねえ～～）

ニヤリと笑い、両手を腰にあてて胸を張る。

「さあ！ 考え事は済んだかなあ？」

そう言って威風堂々とする様は、まさしく古（いにしえ）の鬼の姿であるといえよう。

……だが、残念なのは、胸を張るには少々ボリュームが足りないところである……

「……今、な～～んか不愉快なことが聞こえた気がするなあ」

気のせいであろう。

それよりも今は目の前の相手に注視するべきである。

「すみません。お待たせしました……っと、何か言いましたか？ 萃香さん」

「あ？ ううん、なんでもないよ。それよか萃香でいいって言ったじゃん」

「それは……できそうにないです 「なんでさ？」 鬼のあなたが

それをいいますか？」

圧倒的威圧感を放ってくる相手に、それはできない相談であった。

しかも、鬼に対して嘘を言うわけにはいけないのである。

それを察した萃香は、酒で赤くなっている頬を指でポリポリかいて苦笑する。

「では、萃香さん……ちょっと聞いておきたいんですけど、いいですか？」

「できれば丁寧語も止めて欲しいんだけど……んで、何？」

「それもちょっと……それで、弾幕ごっこのルールですけど、宣言したカード以外の技を使うのはルール違反でしたよね？　ちょっと思いついた技があるんですけど……」

「ふーん？　いいよお。宗次郎は初心者なんだしね」

宗次郎の提案にあっさり了承する萃香。

その様子には彼はちよつと意外そうな顔をする。

「……結構あっさりしてるんですね。鬼は嘘が嫌いと聞いていたから、ルールも厳格なんだと思っていましたけど……」

「あはは。確かに嘘は嫌いだけどね、それと融通が利かないとは違うよ。そういう石頭なのは閻魔だけで十分さ。それにこういうのは当事者同士が納得すればいいんだし」

やっぱり閻魔様って石頭なのか、と“みよん”な納得をしながら彼は言葉を続けた。

「それを聞いて安心しました。では、お言葉に甘えて使わせて頂きます」

「いいよお。それにどうせ余興なんだし派手にいくのは大歓迎さ」

「その言葉、後で後悔しないで下さいよ？」

「そっちこそ、避けるのが上手いだけじゃあたいには勝てないよお？」

「上手いのは避けるだけだと思わないで下さいね！」

「冷静かと思ったけど結構熱いところあるじゃん。そんじゃあ……」

「改めて……」

「「いきます（いくよ）！！」」

夜空に再び煌めく閃光と轟く轟音。

果たして、勝敗の行方は……

『答え』　への道を、一步。踏み入れた……

## 第六話 ― 鬼は外 ― (後書き)

今回は以上です。

なんだか回を追うごとに文章が長くなっています。

次回はもう少し短くなる予定ですが、やっぱり予定は未定に（ry  
それと今回、宗次郎が変わる内面の描写を試みましたが、いかが  
でしょうか？

正直、『弱肉強食』の概念が一般的なものとはかなり違ってしまった  
と思っています。

それから本文中の藍様の描写がかなり増えました。ホントは妖夢の  
予定だったんですが（汗）。

おかしい……一応はメインヒロイン（？）のはずなんです……あ  
げくに橙まで（大汗）。

このようにコロコロと予定が変わってしまう駄文ではありますが、  
皆様最後までお付き合いをお願いいたします。

## 第七話 ― 福は内 ― (前書き)

な、なんとか週一投稿に間に合った……かな？

今回もgdgdです。厨二病全開です。宗次郎がもはや別キャラ（ry

それと萃香の一人称ですが、酔っ払ったりテンションが高い時は『あたい』。

酔いが少し醒めたり、テンションが下がった時は『私』 としました。

チルノと混同を避けるためではありますが、混乱されたようでしたら申し訳ありません。

それでは本文です。

（追記…投稿してから二度の修正と加筆……なんてgdgd……申し訳ないです……orz

それと、宗次郎のお酒の強さは完全にオリ設定です。表記し忘れていました（滝汗）

## 第七話　― 福は内 ―

チュ　チュチュン　チチチチチ……

「ん？　……う……ん」

スズメの鳴き声で濁っていた意識が覚醒していくのを感じる。

「……あ……そうか、昨夜は……ツツ！」

昨夜の事を思い出した瞬間、襲ってきたのは頭痛となんとも言えない倦怠感。

（あ………なんだか似たようなことがあった気が……）

なんとなく既視感（デジャブ）を感じながらうっすらと眼を開ける。

「知らない天じょ……って、このネタはもういいよ」

ズキズキと痛む頭に手を当てながら呟く。

今の彼は知識のお蔭（？）でその言葉の意味が解っていた。

そして、この頭痛と共に襲ってくる倦怠感の理由も。

（我ながら飲みすぎたよなあ……）

実のところ、彼——宗次郎は結構お酒に強い方だったりする。かつての同士らと飲み比べをして、その全てに全勝してしまったことさえあった。

『十本刀最強は、酒でも最強かいな！？』と、誰かがそう評していた覚えがある。

あれは確か……『刀狩り』の張だったか。

ちなみに一番弱かったのは、意外なことに『破軍（乙）』の不二であった。

あの体で？　と思うだろうが方治としては助かっただろう。資金難回避的な意味で。

酒の味を教えてくれたのは志々雄であったが、飲み比べをしたことはなかった。

志々雄自身は弱い方ではないが、彼の身体が酒の大量摂取を許さなかったのだ。

そんな身体になっても生き方を変えなかった彼には尊敬の念が今でもある。

だが、昨夜の件で自分なりの生き方を見つけた今なら分かる気がするのだ。

彼は彼。自分は自分だと……

それが“答え”なのかどうかは判らない。



判るまでは自分の “ 答え ” を探すことを続けようと決意を新たにする宗次郎。

(……にしても、なんだか体が重たいような……それに左腕も……ん?)

首を回して視線を向けると、その原因が分かった。

「……なんで橙と萃香さんが僕に乗ってるんだ？」

そう。体の上には橙が。左腕には萃香が腕枕をしていたのだ。

正直、角が体に刺さりそうで危なっかしかった。

だが、橙の方がある意味もっと危なっかしいと言える。

「橙……どこに顔を置いてるんだよ……」

橙は上下逆さまに宗次郎の腹の上に乗っていた。

二本の尻尾が目の前でピコピコと揺れている。

お蔭ですぐに橙と分かったが、彼女の下着まで丸見えであったのだ。

しかも、その顔を置いた位置が……まあ、あえて言わずともお分かりであろう。

幸い、朝のアレは起こっていなかったものの、もしそうなら……

(……兎に角、どいてもらわないとね)

こんなところを誰かに見られたらロリ認定確定である。

幸いと言うべきか、宗次郎自身にそのような嗜好はない。

下着丸出しの少女（幼女？）が危ない位置に顔を置いて体に乗っかっていても、それに男の本能が反応することはなかった。

とりあえず横にどいてもらおうかと腕を動かそうとするが、左腕が動かない。

（あゝ……完全に痺れちゃってるなあ。いつから乗ってたんだか）  
経験者ならお分かりだろうが、腕枕は長時間されるとかなり辛いのである。

正座のし過ぎで足に感覚がなくなるのを想像して頂ければ分かり易いであろう。

そんな宗次郎の苦境を知ってか知らずか、幸せそうな寝顔の萃香であった。

（……こうして見ると、普通の女の子にしか見えないんだけどなあ）  
可愛らしい寝顔を晒す萃香を見て思い返すのは昨夜のことである。

「……結局――」

あの“勝負”は

「――勝てなかったなあ……」

そう呟いて、唯一自由に動かせる右腕を見る。

その腕には白い布――つまりは包帯が巻かれていた。

ここで時間を数刻前まで遡ることにする。



「「いきます（いくよ）！！」」

「まずはこっちからです」

（この人に確実に届かせるには、並の技や通常の弾幕では不可能……でも）

届かないなら届くようにすればいい。内心でそう続ける。

（そのためにも、“仕込み” はさせてもらいますよ）

「いきます。盾符 『イージスの盾』！」

カード宣言をした宗次郎の両脇に、白い球体が二個現れる。

大きさはビーチボールより一回り大きい。

それが宗次郎を中心に、周回軌道をする人工衛星のように回り始めた。

更に前に突き出した両手からは大小様々な弾幕が放たれ――

「ほえ？」

――間の抜けた声を上げる萃香を他所に、宗次郎の前面へと展開され停止した。

「『イージスの盾』 第一弾。『ハープーン』 受け切れますか？」

そう言うと、大小の弾幕の内、大きい方が形を変えて萃香へと襲い掛かっていった。

その様子を見ていた地上では……

「『ハープーン対艦ミサイル』 ね。ホントにイージス艦みたいだわ」

「その“ハープーン”と言うのは解りませんが、あの太い矢の様な物がそれですか？」

紫の呟きに妖夢が質問する。

カードを作ったときは単にさっきの大小の弾幕が張られただけだったのだ。

今はその形をミサイルへと変えている。

とは言え、ミサイルの羽もなく噴射口もない、砲弾を延長したような形ではあるが。

……とりあえず言っておくが、座薬ではない。断じて……

「そうよ、ホラ見てみなさい。全ての弾が萃香を追尾してるでしょ？」

確かに見上げれば十数発のハープーンが萃香へと殺到している。着弾寸前にホップアップするのも忘れない。それも上下左右に。形は兎も角、性能はかなり似せているようであった。

「……確かに、あれなら並の相手では効しきれずに被弾してしまうでしょうが……」

「その通りね。あ、もう全部撃ち落したわ。流星は萃香ね」

藍が冷静に観察して見極めた上で己の意見を述べ、それを主が肯定していたが、その間に終わってしまったようだった。

「あ！ 藍しゃま。今度は小さい方がいきますよ！」

「む。確かに……しかし紫様。あのままでは……」

「今度は『スタンダード』みたいね。でも、藍の言う通りこのまま  
だと同じ結果でしょうね」

「それもありますけど。なんと言うか……もどかしそうな戦い方を  
しています。宗次郎さん」

「もどかしいって？」

「はい。幽々子様はご存知でしょうけど、あの人は本来剣士なんです。  
それが、言い方は悪いですけど、意に沿わない戦い方を強いら  
れてるって感じで……私も剣士ですから分かるんです」

「でも、妖夢さんは剣術も弾幕もとっても上手でしゅよ？」

「橙。それは魂魄流剣術が弾幕戦も想定に入れた剣術だからよ。そ  
れにやっぱり慣れの問題もあるんだと思うわ」

「まあ、そうかもね。でもね、妖夢。確かに宗君が使える刀はな  
かったし、弾幕にも慣れてはいないわ。でも、無いなら無いなりの  
やり方があるんじゃないかしら？ 宗君はそれを模索してるんだと  
思うの」

「では、今の行動もですか？」

「……ん。そうね、宗君は何か狙ってるんでしょうね」

「幽々子様。何かとはなんでしょうか？」

「藍も見えてたと思うけど、さっき萃香と何か話してたでしょ？」

「ええ。宗次郎殿は何か新しい技を思いついたらしく、それを萃香様が了承されたようです」

「藍様は聞こえてらしたんですね。それでその新しい技とは？」

「我々妖獣は他の妖怪よりも感覚が鋭いからな。だが、何の技かは分からぬ」

「私にも聞こえましたよ！　藍しゃま」

「ま、当事者同士が納得してるんなら横から口を挟むことはできないわね。……にしても宗君は……でも、あれなら……いえ、それだと……」

「「「紫様（しゃま）？」」」

「あつ……ああ、ほらほら。あの『スタンダード』もほとんど迎撃しちやったみたいよ？」

「あらホント。そして萃香も切り札を切るみたいね」

紫が後半の眩きを誤魔化すように空を指差しすと、その親友も言葉が続ける。

それに釣られるように、それぞれの従者達三人がハッと上空を見上げた。

（ありがとね♪　幽々子。それにしても撃ち漏らした『スタンダード』がそのまま萃香を“狙わずに”　飛び去ったのが気になるわね

……宗君の気の高まりも気になるし……フッフ。本当に楽しませてくれるわ)

(どういたしまして♪ 紫。さて、この子達は気付いているかしらね。さっきから宗君の霊気と妖気が高まり合っていることに……紫はとっくに気付いてるみたいだけど……紫じゃないけど本当に楽しみな子よね)

主たち二人が何やら妖しいアイコンタクトを取り合っていたが、その従者達が気付くことはなかった。

尚、『スタンダード』とは、主に艦艇などが装備する対空ミサイルのことである。

そして場面は再び上空へ戻る。

(妖夢さん。確かにもどかしくはありますが、強いられてるつもりありませんよ?)

地上での会話が聞こえていた宗次郎は内心で反論していた。

そう。確かに彼は剣士である。

刀を手に圧倒的スピードで相手を葬るのが本来の彼のスタイルなのだ。

(でも、『郷に入れば郷に従え』という言葉もあります)



ここは幻想郷であって、幕最後の明治の世ではないのである。

(さっきも“アレ”に言いましたけど、必ずしも相手を殺す必要はないんです)

そう。宗次郎は既に理解していた。

――弾幕ごっこは戦いを真剣に楽しむ“遊び”であることに――

それは萃香を見ていれば解ることだ。

弾幕ごっこが始まった当初から彼女は実に楽しそうにしている。

……まあ、始まる前から楽しそうではあったが……

(それなら……)

彼の口の両端が自然と吊り上る。

(それなら楽しまなきゃ損じゃないですか)

「ん？ 何笑ってんのさ？」

その時、『スタンダード』を撃ち落とし、カード宣言をしようとした萃香が尋ねてきた。

その口調に不機嫌な様子はない。純粹に疑問に思っただけのよう

だ。

「いえ。何でもありません。ただ……」

そこで一旦言葉を切る宗次郎。

「ただ？」

尋ね返す萃香に、彼はニツコリと笑って答えた。

「弾幕ごっこって楽しいなあと……そう思っただけです」

そのニコニコ顔はすっかりいつもの彼の顔である。

一方の萃香は、その答えにきょとんと眼を見張と、やがてにんまりと笑い、カードを手にしたまま楽しそうに声に出して笑い出した。

「あはは！ それが分かれば十分だよ。もうすっかり幻想郷（ココ）の住人じゃん？」

そう言って腰の瓢箪を手に取りグビリと一口。

「それは皆さんが色々教えてくれたお蔭ですよ。勿論、萃香さんも本当に感謝しています。ついでに言うと、この勝負の勝ちも譲って頂けるともっと感謝するんですけど？」

そう言って “ニヤリ” と笑う宗次郎。

「ふーん。そんなこと言っちゃうんだあ……」

こちらは “ ニイ ” っと笑い返す萃香。

どちらも、ものすごく物騒な笑みである。

「そのカードはまだ終わってないんでしょ？ 全弾が追尾式の弾幕……中々面白いけどね。それじゃこっちはこれでいくよお！」

—— 鬼気 『濛々迷雾』

言つとくけど、これはさっきまでのカードとは違うよお？」

カードを宣言した瞬間、萃香の周りに白い “ モヤ ” のような物が現れる。

「望むところです。『イージスの盾』 第三弾。『ファランクス』」

そう言った瞬間、それまで沈黙していた球体から凄まじい量の弾幕が発射された。

『ファランクス』 とは、主に艦艇に装備されているCIWS（近接防御火器システム）の一種であり、その姿から “ R2-D2 ” の愛称で（非公式に）呼ばれるバルカン砲のことである。

尚、よく間違えられているが、『バルカン砲』 とは、ガトリング砲（回転式多砲身機関銃。又は砲）の一種に付けられた “ 商品名 ” であって決して総称ではない事を明記しておく。

—— 《参考文献… Wikipedia『M61 バルカン』より、一部抜粋》——

さて、どうでもいいマメ知識は置いといて、放たれた弾幕の方を追って見る。

弾速、量、共に申し分ないほどの弾幕であるが、全て萃香の周りを覆っている“モヤ”によつてはじかれ——と言うより、対消滅していった。

（なるほど。モヤに見えるのは小さな弾幕の弾の集合体ですか。そして体ごと突進してきて、後にその弾幕が彗星の尾のようにたなびいて配置されていく……厄介ですね）

更に、配置された弾幕がバラバラの方向にゆっくりと飛んでいくのが“見えて”いた。

（下手な方向に逃げれば逃げ道を失くされて終わりか……しかも覆つてる弾幕は萃香さんの体から次々と泡のように湧いて出てくる。ならば“仕掛け”を変更するしかない）

そう考えている間にも、萃香は宗次郎目掛けて突進してきた。

更に、両脇で回転しながら弾幕を放っている球体が徐々に小さくなっていく。

この弾幕を放つ球体『フランクス』は、それ自体が弾幕の塊であり、放つ毎に弾を消費して縮んで行き、最後には消滅してしまうのだ。

しかも、一度放てば弾が尽きるまで止まることはなく、オリジナ

ルとは違って狙いも不正確で、文字通り弾をばら撒くことしかできない。

だが、相手の弾幕を消滅させて時間稼ぎをする程度のことはできる。

ちなみに、もう一つのカード。弾符 『銃砲弾雨』 は、この派生バージョンである。

大小様々な弾幕を放つ球体の “弾幕を” 発現させるスペルカードなのだ。

文字通り、大量の弾幕の雨を降り注がせる、正に弾幕ごっこの為の技と言える。

今の状況を考えれば、こちらを出した方がよかったのかもしれない。

（でも、それを言ったらって今更だよな）

仕掛けを作ることできないし、と内心でそう続ける。

突進してくる萃香を予測するまでもなく余裕でかわしていく宗次郎。

だが萃香も分かっているのか、ゆっくりと弧を描き、Uターンして再度突進してくる。

そして通った後には大量の米粒形の弾幕が残され、バラバラに漂っていく。

（……やっぱり僕を形成された弾幕の “結界” に閉じ込める気か。でも、その前に “コレ” を練り上げてしまえば――）

宗次郎は両腕に集められ、練り上げられていく “力” が高まっていくのを感じ……

（――僕の勝ちだ！）

両腕を前へと突き出した。

一方の萃香は宗次郎の力―― “気” の高まりを既に感じ取っていた。

（ムッ？ ……どうやら仕掛けてくるみたいだね。でも、右手に靈気。左手に妖気を集めてどうするつもりかな？）

そのまま放つのか、それとも……

（……あたいの予想通りなら……あはは！ ホントに楽しませてくれるねえ）

弾幕の光りに包まれながら萃香は実に楽しそうに微笑む。

萃香の言うとおり、彼の右腕に靈気。左腕に妖気が集められて練り上げられていく。

やがて高まった “気” が放電し始め、それが両腕の間で架け橋となり次々とその橋が増えていく。そしてそれ自体がバチバチと音を立て、電流が迸（ほとばし）る。

分かり易く、メタな表現をすれば、マ○ロス（強行型）の主砲発射時のアレである。

（萃香さんなら “ コレ ” にも耐えられると信じています！）

そう。戦いを楽しむということは、相手を “ 信じる ” ことと同義なのだ。

（さあ、きなさい！ 古の鬼の力。甘く見るんじゃないよ！）

そして、萃香はその宗次郎の信頼に全力で応えようとしていた。

二人が心で言葉を発したと同時に、『フランクス』の弾が尽きて消滅する。

そして宗次郎の両腕の間で融合されていく二つの “ 気 ” の高まりが最高潮に達した。

「いきます！ 混在 『人妖一体』！！」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

宗次郎の両腕から極太の巨大な光線が放たれた。

霊気の白と妖気の紫色が混ざり合い、まだら模様となって萃香へと突き進む。

と、同時に萃香も気合を発し、弾幕が完全に彼女を覆って姿が見えなくなる。

「ムッ!？」 「ええ!？」 「あっ!」 「へえ」 「ふうん?」

その光景を見ていた地上の面々がそれぞれの声を上げる。  
どれが誰の声かはあえて明記する必要はないだろう。

やがて響き渡る巨大な轟音……

それも収まり、辺りには静寂が訪れた。

そしてそこには……

「……中々の技だったけど、あたいの弾幕を削り切るには及ばなかったみたいね」

宗次郎の技、『人妖一体』の直撃を受けたはずの萃香であったが、彼女の言うとおり、まだ周囲には『濛々迷霧』の弾幕がいくつか残っていた。

「……確かに直撃は避けれたようですが、そこまで削れれば十分です——」

その言葉通り、周辺に張り巡らされていた彼女の弾幕はほとんどが消滅していた。

「——そして僕の攻撃はまだ終わっていませんよ?」

「んあ!？」



宗次郎の言葉に、後ろから接近してくる気配を感じた萃香が慌てて振り返る。

そこには彼女が撃ち漏らした『スタンダード』が数発迫ってくるのが見えた。

（これで詰みです。萃香さんならアレも全部撃ち落すでしょう。ですが、同時に放つ僕の通常弾まで捌くことができますか？）

内心で勝利宣言をし、通常弾を放とうと右手を差し向ける。

……だが。

「!?!? ……つう!」

その瞬間。右腕の数箇所から血が噴き出す。

どうやら毛細血管の何箇所かが破裂したようである。

（くっ……やっぱり付け焼刃じゃ無理があったか。でも、左腕なら……なっ!?!）

傷自体は大したことはないが、痛みで集中できず、無事な左腕で攻撃しようとした。

だが、萃香の動きを予測しようとした宗次郎には――

「消え……た?」

——彼女の姿が掻き消すように消えていく光景が見えていた。

そして、『スタンダード』が虚しく宙を彷徨い、あらぬ方向へ飛び去っていく光景も……

そう。宗次郎は疑問に思うべきであったのだ。

何故、萃香が弾幕を避けずに撃ち落してばかりいたのかを。

ゾクッ！

「！？ クッ！」

宗次郎の勘が告げる。

——ココに止まっていけない！！

そう考える間もなく、反射的に行動に移した。

「遅いよぉ」

（後ろ！？）

こうなると予測する能力も役には立たない。

もはや勘だけを頼りに体を捻り、下へと急降下する。

「ありゃ？ 外れちゃったかぁ。いい勘してるねぇ。まさか能力”まで使うことになるとは思わなかったけど”

“

頭の上を何かが通り過ぎた気配を感じたが、それに構うことなく体勢を立て直す。

宗次郎が振り向いたそこには、萃香が何食わぬ顔で右手を彼に差し向けていた。

ちなみに彼は後で知ることになるが、萃香の能力は『密と疎を操る程度の能力』である。

詳しい説明は省くが、かなりのチート能力であったりする。

(……チェックメイトかぁ。詰んでいたのは僕の方だったなんてね……)

もう彼に勝てる手立てはなかった。

そして降参を告げようとする。

「僕のま」 「あゝあ。 “私” の負けかあゝ」 ……はあ？」

しかし、彼の言葉を遮って萃香が負けを宣言していた。

なんとも間の抜けた顔で声を上げる宗次郎。

「だって、これで “私” のスペルカードは全部使い切ったんだよ？」

「あ……」

その通りである。

既に彼女の周りには 『濛々迷霧』 の弾幕が消え去っていた。

対して宗次郎には、まだ一枚スペルカードが残っているのだ。

ならばここはスペルカードのルールに則り、宗次郎の勝ちとなる。

「ま、待って下さい！ 元々さっきの技は枚数提示の内に入っていなかったんです。それにカードが残っていても僕にはもう勝機はなかったんです」

宗次郎としては納得し難いことであつた。

「それに、先ほどの行為は厳密に言えばルール違反ですから、僕の勝ちという訳には……」

確かに、一つの技が終わる前に次の技を出すのはルールの違反行為であろう。

だが、そんな宗次郎の言葉に萃香は手をパタパタと振ってこう答えた。

「いいっていいってえ。それにさっきも言ったじゃん？ 当事者が納得してればいいって。それにどうせ余興なんだからさ。 “私” も十分楽しめたし」

なにやら口調も酔っていたときとは違って平静なものになった上に、一人称も “あたい” から “私” になっていた。

どうやらテンションが低かったり、酔いが醒めてきたときは “私” になるようだ。

「ですが……」

やはり宗次郎としては納得していないようだ。

それ故か、萃香がこう提案してきた。

「ん〜。だったらさ、飲み比べで決めようじゃん？ どっちが勝ったか」

「……いいでしょう。望むところです」

「そうこなくっちゃ♪」

このときの宗次郎は失念していた。

なまじ飲み比べには自信があったからだろう。

鬼が無類の酒好きであり、とんでもないウワバミであることを……



（あの後が大変だったなあ。妖夢さんには泣き付かれるし、橙は中々離れてくれなかったし、藍さんにはお説教されるし……）

戻ってきた二人を迎えてくれたのは、紫と幽々子の拍手。  
それと宗次郎に対する三人の行動であった。

『怪我してるのに飲み比べなんて!』と、妖夢に治療されながらお小言を喰らい。

橙は怒っているのか、飛びついた宗次郎の背中に爪を立てて一向に離れず。

藍は懇々と諭すように、いかに二人が心配していたかを説教されたのだ。

それから後は、もはやどんちゃん騒ぎだった。

幽々子は楽しそうに笑いながら二人の健闘を称えて次々と料理を制覇していく。

萃香は治療の終わった宗次郎と一緒に妖夢のお小言を喰らいながらも飲み比べ。

藍は宗次郎を説教した後、諦めたように料理と酒を運び、妖夢もそれに倣った。

紫はそんな各自を見ながら楽しそうに眼を細め、時折り幽々子と杯を飲み交わす。

そして橙は最後まで宗次郎から離れようとはしなかった。

(結局、飲み比べにも負けて酔いつぶれちゃったんだよねあ)

杯を空ける毎に注がれる萃香の瓢箪のお酒は中々に度数が強かった。

その所為で途中から記憶が飛んでしまっている。

（試合には勝っても “勝負” には負けちゃったか……）

結局のところ、宗次郎はそれで納得するしかなかったようだ。

「……心配。掛けちゃったな」

包帯が巻かれた右腕を見ながらそう思う宗次郎。

涙目となりながら包帯を巻いていた妖夢の顔は、しばらく忘れられそうになかった。

その右腕であるが、もうほとんど痛みはなかった。治癒能力が上がってるのだろう。

（これも妖化の影響か……）

もはや人間の身体とは掛け離れた能力を持つ自分の身体に、もう幾度目になるのかも分からない溜め息を吐く。

「……と。こうしてる場合じゃないな。早く橙をどかさないと（ガラッ）」

「「……え？」」

橙を退かそうと右手を彼女の体に添えた瞬間、いきなりふすまが開かれた。

現れたのは妖夢であり、二人の声が重なった。

声も掛けずに開けたのは、起きているとは思わなかったのだろう。

それに、最初に宗次郎と出会った時のように気配を探りもしていなかった。

彼女らしくないミスであったが、その顔を見ると若干の疲れが見える。

おそらくは夜遅くまで後片付けをしてそのまま客室で眠り、朝食の準備を手伝おうと早起きをしたのだろう。やはり苦労性のようである。

一方の宗次郎も二日酔いで感覚が鈍っていたようである。  
橙に気を取られて気配を探っていなかったのも一因のようだ。

「……………」

二人の間になんとも言えない沈黙が漂う。

が。やがて妖夢がプルプルと震えだした。

「……宗次郎さん。ナニをしてらしたんですか？……（チャキ）」

最後のは刀の鯉口を切る音である。

妖夢の様子は俯き加減となっていて前髪が目隠し、異様な迫力を放っていた。

「妖夢さん。字が違います。それにこれは「んあゝゝ」っと、萃香さん？」

そこで宗次郎の左腕を枕にしていた萃香が眼を覚ました。



ゆっくりと起き上がり、寝惚け眼（まなこ）のまま挨拶をする。

「おはよう。宗次郎。あや？ 妖夢もおはよう……ってか、どうしたん？」

「え。ええーっとお……」

そう聴かれた宗次郎はどう説明したものかと言葉を搜す。

「ああ。そういや怪我は大丈夫？ 昨夜はかなり（飲み比べが）激しかったしねえ」

特大の爆弾投下である。と言うか、わざとだろうか？

「……宗次郎さん。言い遺すことがありましたら冥界で聴きます……」

もはや問答無用の雰囲気です今にも刀を抜き放たんとしていた。

ゴゴゴゴゴという擬音が聞こえてきそうである。

「……萃香さん」

「え？ え？ んあ？」

何も分かっていない様子の萃香に宗次郎が呼びかける。

「失礼します！」

「へあ!？」

そして自由になった左腕で萃香を抱え、右腕で橙を抱えた。

痺れていたことなど忘れたかのように、両脇に少女(幼女?)二人を抱え、そのまま縁側から庭へと飛び出した。

「?! お待ちなさい!」

ハッとして妖夢も追い掛ける。

こうなってはもはや話し合いは無理だろうと宗次郎は瞬時に判断したのだ。

妖夢の頭が冷えるまで逃げ続けるしかないと考え、夜明けの空へと飛び上がる。

だが、少女(?)二人を抱える必要はなかったような気がする。

その辺りは宗次郎も混乱していたのであろう。

「あらあら。朝っぱらから元気ねえ」

「ふぁゝゝ……もう騒々しいわねえ」

「お二方ともおはようございます。朝食の準備が……っと、あの子達は?」

「ああ。おはよう、藍。あの子達なら飛び出しちゃったわよ?」

「紫様。それだけではよく分かりませんが……」

「それよりもお腹空いたわ。今朝の献立はなあに？」

「幽々子。あんまり食べ過ぎないでね？ あんたが来ると食材が底を尽くんだから」

「だってお腹が……」 「だから貴女が……」 「ええと、今朝の献立は……」

もはやあの四人のことはほったらかしのようである。

「待ちなさー！ーい！！」

「とりあえず、落ち着いて下さーい！！」

「え？ え？ どういうこと？」

「ふあ？ あ、お兄ちゃんおはよう……って、なんでお空飛んでるんでしゅか？」

なんともはや、グダグダである。

四人の声をBGMに、幻想郷の空に朝日が顔を覗かせようとしていた。

『答え』

への道を、着実に歩いていく……

## 第七話 ― 福は内 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

前話よりかは少なくなったようですが……やっぱり多いでしょうか？  
それと結構慌てて投稿しましたので推敲が十分ではないかもしれませんが  
せん。

誤字脱字がありましたらご指摘下さい。

それと本文でも書きましたが、宗次郎の本来の土俵は剣による斬り  
合いです。

そこら辺をもう少し表現したかったのですが、上手く伝わったでし  
ょうか？

何かありましたらどしどしご指摘下さい。

では、次週にお会いしましょう。

……なんとか次回は余裕を持って投稿できればいいんですが……

※…若干の修正と加筆を行いました。やっぱり推敲が不十分でした  
ね……orz

## 第八話 ― 出会い ― (前書き)

今回もなんとか週一投稿に間に合いました。

このギリギリラストスパート癪をなんとかしなければ……

作中、風神録を匂わせる記述がありますが、それはまだ先の話です。そして今回、新たに登場するキャラが。(こーりんとお間違いない) それでは本文です。

＊追記…目が覚めて見直したら不自然な部分を発見……修正しました。orz

＊追記その2…さらに文章の追加修正と、これまでのタイトルに付いていた“―(ダッシュ)”を削りました。

## 第八話 ― 出会い ―

「勧誘？」

それは朝食の席での、橙の言葉から始まった。

「そうなんでしゅ。東風谷 早苗（こちや さなえ）っていう巫女しゃんが信仰を集めるためになってあっちこっち」

藍の質問に事の詳細を伝えと、川魚の塩焼きの身をほぐす作業を続行する。

見た目の幼さとは裏腹に、実に器用な箸使いである。藍の教える賜物だろう。

そして、ほぐした身を口に運ぶと美味しそうに笑顔で咀嚼していた。

その川魚が他の皿よりも若干大きく見えるのは気のせいであろう。

「そう言えば、妖怪の山の山頂付近に神社が現れたんだったな？」

橙の言葉を聞き、藍が確かめるように尋ねて味噌汁を一口。

ゆっくりと咀嚼して飲み下すと、ウンウンと満足そうに頷く。

今日も良い出汁が出ていると思っっているようだ。

お揚げが他のお椀より三倍ほど入っているのはご愛嬌だが。

「そうでしゅよ。確か……ええと、守矢って神社でしゅ」

そう言って、ほぐした身をもう一口。

モグモグと食べながら幸せそうな顔で頬に手を当てている。

いわゆる、ほっぺたが落ちそうという仕種だ。

その仕種の一つ一つが実に可愛らしい。

「しかし、まさか猫にまで信仰を求めるとは……よほど外では信仰がなかったのだな」

なんとも嘆（なげ）かわしいことだ、と続けて首を左右に振る藍。その声と言葉だけを聞けば式の主としての威厳が溢れる様にも見える。

だが、橙の仕種にだらしなく垂れ下がった目尻で帳消しどころかマイナスであった。

神の信仰云々よりも、その暴落しまくった威厳の方を嘆くべきである。

そこで宗次郎が口を挟んできた。

「確か、その神社は僕がこの時代にきた要因らしいって聞きましたけど」

そう言ってお新香を口に運ぶ。

ポリポリと音を立てている様子が実に美味しそうだ。

良い漬かり具合だと、こちらもウンウンと頷いていた。

別に彼が漬けたわけではないが。



それよりも、その若干ボロっちくなくなった服をどうにかして欲しいところである。

「そうね。多少時期の誤差はあるけど、無関係じゃないでしょうね」  
その言葉に答えたのは紫であつた。

こちらは玉子焼きをほおぼりながらであつたが、不思議と声がくぐもることはなく普通に話せている。どういう口の構造をしているのだろうか。

「そうね。でも、今更原因を探ったところで無意味だと思うわ。あ、妖夢。おかわり」

紫の言葉に自分の意見を述べると、空になった茶碗を妖夢に差し出す幽々子。

これで何杯目だろうか？　　というか、それは茶碗ではなくどんぶりと言うのでは？

「幽々子様。せめて他所様の家では自重して下さい」

主に苦言を呈しつつも、その茶碗（？）を受け取りご飯をよそう妖夢。

なんだかんだ言って特盛りにある。主の為とは言え、お前も自重しろと言いたい。

だが、その顔にはまだ疲れが残っていた。早朝の追いかけてこの影響であろう。

しかも、勘違いで宗次郎を追い掛け回してしまい、未だに彼の顔をまともに見れないでいるらしく、さっきから宗次郎をチラチラと窺っていた。

「あはは。確かに今更かもねえ。で、ちょっと小耳に挟んだんだけど、その神社に祭られてる神様って実はもう一人（一柱）居るらしいとか山の天狗達が噂してたねえ」

幽々子の言葉に同意して、件（くだん）の神社に関する噂話を披露する萃香。

どうでもいいが、煮豆は酒の肴にはならない気がする。

だが、彼女は気にもしていないようだ。酒が飲めればなんでもいいのだろう。

「もう一人の神様。ね。まあ、問題を起こさなきゃ別に何人いようがかまわないけど」

萃香の話聞いても、どうでもいいことだとお茶をすすする紫。

いつの間に食べ終わったのやら。

「でも、紫しゃま。うちの猫たちから苦情がきてるんでしゅよ？  
勧誘がしつこいって」

「相手にしなければ済む話でしょ？ 猫たちにはその巫女の姿が見えたら隠れるように言っておきなさい。それよりも萃香。山の妖怪達は他に何か言ってなかった？」

橙の訴えをそれだけで片付けると、萃香に山の様子を尋ねる。

やはり山の妖怪達がどう対応しているのかの方が気になるのだろう。

「んゝ……特にこれといってなかったね。勧誘がしつこい以外は」

「そ。一応は山の妖怪と折り合いが着いたから勧誘に乗り出したってところでしょね」

「紫様はその件に関わっていらっしやらないんですか？」

萃香の答えを聞き、一人納得したように言う紫に妖夢が質問した。

「私はその件にはノータッチよ。山のことは山の連中が対処するでしょうし、私が横から口を挟んだりしたらこじれる可能性もあるしね。それに……」

「それに？」

一旦言葉を切った紫に、今度は宗次郎がオウム返しに尋ねた。

「その連中がなんらかの異変を起こせば、対処するのは博麗の巫女の仕事だしね」

そう言ってこの件に関してはこれでお仕舞いとばかりに再びお茶をすすった。

なんととはなしに不機嫌そうである。

おそらく神に関してあまり良い思い出がないのだろう。

少々重くなった場の空気を変える為に、宗次郎は話題を変えることにした。

「そう言えば、橙が普段住んでいるところって迷い家（マヨヒガ）なんだってね？」

その質問のついでに、マヨヒガに関しての情報を検索してみる。

『山で迷ったら立派な門の中にお屋敷があった』『人の気配があるのに誰もいない』『鶏や牛などの家畜がたくさんいた』『お茶やご馳走などの配膳がある』『その家の物をどれか一つ持ち帰れば裕福になる』『もう一度行っても二度と見つからなかった』etc.

他にも似たような記述はあるが、概ね訪れた者は幸福になれるというのが多い。

逆に不幸に見舞われるというのもあったが、こちらは少数派であり、おそらくはこの手の話を面白おかしくしようとする者が流布したのだろう。

「そうでしゅよ。猫たちがいっぱい住んでいるところでしゅ」

マヨヒガに住む猫たちの中には、妖化して知能が発達しているのが居るとのことである。

更に年月を積み重ねれば人化して人間の姿になれるらしいのだが、まだ先の話であった。

その巫女がどこから聞きつけたのかは分からないが、その猫にも勧誘しているらしいのだ。

「へえ？　じゃあ橙がその猫たちのリーダーなんだね」

現在、人化しているのは橙だけだそうである。

必然的に彼女がそこに住む猫たちのまとめ役なのだろうと宗次郎は思った。

「そうなんではゆけど……あんまり私の言うことを聴いてくれないんではゆ」

そう言ってシュンと落ち込む橙。

どうやらそのことで少々自分に自信が持てなくなっているようだ。

「なに、気にすることは無い。橙が群れのリーダーとして泰然自若としていれば自然と言う事を聴いてくれるようになる。まずは自分に自信を持つことだ」

そんな橙の様子に、藍が頭を撫でながら優しく諭す。

これがかつて存在していたであろう陰陽師のような式と主の関係から見れば、藍の対応はかなりの大甘——と言うか、ありえないと言えるだろう。

本来なら『そんなことで私の式が勤まるか！？』と、一喝する場面であろうから。

この辺りが、藍が橙のことを只の式としてではなく、家族のように思っているのだということが窺える。実に微笑ましい光景であっ

た。

「はい！ 藍しゃま」

（藍しゃまのためにもがんばらないと！）

そしてパツと明るい顔になり元氣良く返事をする橙も、そんな主の心遣いを嬉しく感じ、つつい甘えてしまう自分を内心で叱咤する。

そんな親子とも姉妹とも言える仲の良い様子に、自然と皆の顔に笑みが零れる。

だが、紫だけが少々面白くなさそうな顔をしていた。

仲間外れにされたようで拗ねているのだろう。我が儘な主だ。

幽々子が気遣うような視線を送るが、それが更に面白くないのか誤魔化すようにお茶を含もうとするも既に湯呑みは空だ。ゆかりん、更に剥（むく）れる。

そんな紫にそっとお茶のお代りを差し出した者が居た。宗次郎である。

それを見た紫は一瞬キョトンと眼を見張ったが、やがて微笑んで「ありがと」と一言。

宗次郎も元々は少々（？）気難しいと言える志々雄の身の回りの世話をしていたのだ。これくらいの気配りはできるのである。

それを見た藍が宗次郎に目線だけで頷き、感謝の意を伝えていた。

本来なら自分がすべきことなのにと自省の意味も含んでいるようである。

一方の宗次郎も同じく目線だけで、どういたしましてと返す。そんな無言のやり取りで以心伝心できる辺り、彼も苦労性なのかもしれない。

尤も、彼は傍目的にもそうは見えなかったが。

そして幽々子からも感謝の笑みを、萃香からはニヤニヤとした笑みを向けられる。

これには流石の宗次郎もくすぐったそうにして笑って誤魔化し、首をすくめた。

ほんわかとした空気が流れ、場が穏やかな雰囲気となり、ホッと一息。

だが、一箇所だけどんよりと曇った所があった。

今度は今度で、そのやり取りを見ていた妖夢がふくれっ面になっていたのだ。

今も不機嫌そうに朝食の残りをモソモソと食べている。

そんな妖夢の様子に、幽々子が堪えきれなくなったのか、クスクスと笑い出す。

紫も釣られて笑い出し、仕舞いには萃香と宗次郎と藍まで笑い出してしまった。

ほがらかな笑いに包まれる朝食の席。

その中で笑っていなかったのは剥れ顔になった妖夢と、何も分らずキョトンとした顔で笑う一同を見回していた橙だけであった。

そんなこんなで山に現れたという神社の話は思い出されることなく、話題は宗次郎たちがこれからどこに向かうのかへと移っていったのである。

この時の彼等にとって、件の神社に対する認識はその程度であり、朝食の席の話題にほんの少し上ったに過ぎなかった。

だが、これが後に妖怪の山全体を揺るがす事件に発展するなどとは、紫も幽々子も、そして宗次郎も思っていなかったのだ。

そしてその事件が現れるまでは、まだ数ヶ月の時間を必要としていたのである。



「必要な物は持ったかしら？」

いよいよ本格的に出立しようとする宗次郎に、紫が忘れ物がないかを尋ねる。



「はい。全てココに」

宗次郎が背中に背負った荷物をポンと叩く。  
それは現代風のリュックサックであった。

流石に幕末期の荷物入れでは何かと不便だし、これなら両手が自由になるからだ。

藍が八雲家の倉庫から持ってきてくれたのである。外来人の忘れ物らしい。

ちなみに宗次郎が今着ている服は、妖夢が着替えのなかった彼の為に、祖父の古着を仕立て直してくれたものである。

妖夢の祖父はかなり大柄な体躯を持つ人物だったらしく、そのままではとても着られず、大幅に詰め直す必要があったようだ。

早朝の追いかけて少々ボロっちなった服の替わりであった。

「そ。それで最初に行く所は分かってるわね？」

「ええ。香霖堂ですね」

「そうよ。そこで宗君の服や靴を仕立てて貰いなさい。これから必要になるでしょうし」

聞けば、博麗の巫女の服もそこで仕立てたものだそうである。  
里の服屋ではできない呪術的付与を施すことができるとのこと。

これまで数々の異変を解決してきた際にも、その巫女服が強力な妖怪たちの弾幕から彼女の身を護っていたそうである。

他に御札もそこで購入しているそうで、もはや博麗の巫女ご用達のお店でもあった。

そこで、宗次郎もその店で服を仕立てて貰うことになったのだ。服の替えはいくらあっても困るものではないだろう。有り過ぎると困るが。

なぜ靴もかと言え、さすがにこの先も足袋に草鞋では時代的に不自然であるし、足元の保護にも不安が残るからである。

更に言えば、彼の得意技である“縮地”は頑丈な靴の方が効果を発揮しやすいだろうというのが紫の主張でもあった。

白玉楼も八雲家にも男性用の靴はなく、ついで見繕って貰おうとのこと。

半妖である彼にそれらが必要かと言え、疑問符が残るが、妖怪としてはまだ成り立てであり、人外との戦い（弾幕ごっこ）ではまだまだ初心者なのだ。

身を守る術（すべ）はいくらあっても足りないことは無いというのが紫の弁である。

彼女をよく知る者にとってはなんとも至れり尽くせりな言葉であり、逆に不気味だと言われかねないことであろう。

だが、逆を言えばそれだけ彼に期待しているとも言える。どんな期待かは本人にしか分からないだろうが。

「あ。それと金子だけど、ホントにいいの？　こっちで用立てくらはできるわよ？」

「さすがにそこまでお世話になるわけにはいきません。それに、僕の持っているお金でも十分通用するそうですから、ついでに両替して貰うつもりです」

現在、幻想郷で流通している貨幣は現代のお金だそうである。だが、彼の持っている小判や二朱金でも十分通用するらしい。何せそれ自体が金の塊である上に希少性も高いのだ。他のお店ならば兎も角、香霖堂ならそれで支払えるとのこと。

流石に99・99（フォーナイン）印の刻印がある金塊ほど純度が高いわけではないが、それでも十分であろう。

他にも四文銭も交換するつもりでいた。いくらになるかは分からないが。

問題は新銀貨であるが、これも銀塊としての価値があるし、希少性もある。

一応は取って置いたほうがいいだろうと思い、これは交換しないことにした。

「そう。まあ、詳しい交換レートはあの店主の方が知ってるでしょうしね……ああ、そうそう。一応これも渡しておくわ」

そう言っただけで懐から取り出したのは一枚の封書であった。

「これは？」

「紹介状よ。私と幽々子、ついでに萃香も署名してあるわ。これがあれば幻想郷の大抵の場所に入れるはずよ。必要になったら使いなさい」

幻想郷の管理者、妖怪の賢者とも呼ばれ、屈指の実力者でもある、八雲 紫。

冥界の管理者であり、死を司る亡霊姫としても知られる、西行寺 幽々子。

最強の鬼の一族にして、元 山の四天王の一人でもある、伊吹 萃香。

実力、知名度、影響力、そのいずれにおいても絶大と言える三人の連名である。

特に妖怪の山に入る時は、萃香の名は極めて効果的であろう。

「あ、ありがとうございます。なんとお礼を言っているのか……」

「お礼なら帰ってきたときに土産話を聴かせてくれればいいわ」

扇子で口元を隠しながら言葉を返す紫。どうやら照れているのを隠してるようだ。

だが、彼女の後ろで意味あり気な視線を送る親友に気付いて振り返る。

が、既に彼女は何食わぬ顔で宗次郎に話しかけていた。

「宗君。妖夢のことお願いね〜？ 分かっているとは思うけど、この子、思い込んだら一直線で融通が利かないから心配で心配で〜」

幽々子様！」　もう。今、宗君と話してるのよ？」

紫のジト眼を受け流しながら幽々子が妖夢のことを頼んでいると、その当人から口を挟まれた。既に顔中真っ赤である。

「ええ、分かってますからご心配なく。それよりも萃香さんの姿が見えませんが……」

「ああ。あの子ならとっくに帰ったわ。土産話ができたって喜んでたわよ？」

「そうですか……紹介状のお礼を言いたかったんですけど……」

お礼どころか別れの言葉も言えなかった事が残念なのか、少し肩を落とす宗次郎。

（それが照れ臭いからさっさと帰っちゃったんだろうけど……言えないわよねえ）

（ま、そこら辺があの子の可愛いとこと言えなくもないんだけどね。ホント、いつまで経っても見た目通りのお子様なんだから）

宗次郎の言葉を聞いて、この屋敷の主とその親友が帰ってしまった小さな友人を内心でそう評していた。紫の場合、こき下ろすとも言いが。

「まあ、また会ったときにでも言えばいいですね。それじゃ、妖夢さん……」

「はい。お供致します。それと幽々子様？　あまり藍様に無茶を言

わないで下さいね」

妖夢が居ない間は藍と、ついでに紫も白玉楼に滞在することになっていた。

正直、この二人の世話をするのは並大抵のことではないだろう。それを思っの言葉である。何気に酷いこと言ってる気がするが。

しかし、この屋敷にそのまま滞在するよりかはマシであるはずだ。何せ、白玉楼には家事などを担当する幽霊たちが居るのだから。特に料理番。

少なくとも藍の負担はかなり軽減するだろう。がんばれ料理番。

「もう。酷いわねえ、妖夢。でも、二人とも気をつけて行きなさいね」

「土産話、楽しみにしているわ」

「まあ、言ってみれば挨拶回りのようなものだ。気を抜かない程度に気楽にな」

「ううゝ……お兄ちゃん、いつてらっしゃい！」

幽々子は少々傷つきながらも、二人を気遣う言葉を。

紫は妖しく笑いながらも、手短に無事を願う意味も含めて。

藍からはアドバイスとも言えないアドバイスを。まあ、確かに挨拶回りだが。

最後の橙は一緒に付いて行きたがっている様子を見せていたが、やはり式としての勤めがある上に件の巫女のこともあり、マヨヒガ

の見回りが欠かせないのだ。

洩々とした様子であったが、やがて元気良く送り出す言葉を伝えた。尤も、そのせいで件の巫女を恨めしく思い、今度会ったら引っ掻いてやろうと密かに誓っててもいたが。

そんな橙の様子に顔をほころばせる宗次郎。頭を撫でると、橙が気持ちよさそうに眼を細める。やはり猫目だ。

今朝の追いかけてこの一件でも、最後は橙に助けられていた。

眼を覚ました彼女に手短に事情を説明すると、宗次郎の腕から飛び出して必死に妖夢を説得してくれたのだ。

その懇願ぶりに妖夢も頭が冷えたらしく、ペコペコと宗次郎に詫びたのだった。

ちなみに萃香は最後まで傍観していた。やっぱり鬼だ。

まあ、面白がるというより説得が面倒臭かったのだろう。

そしてその妖夢であるが、もう気にしないことにしたようである。

その証拠に――

「「はい。いってきます（まいます）」」

――宗次郎と声を揃えて出立の挨拶をしたのだから。

道案内を兼ねる妖夢を道連れとし、まず目指すのは香霖堂である。

そこで宗次郎は一つの出会いと、一つの運命的な再会を果たすことになる。



「香霖堂って人里から見て魔法の森の入り口にあるんでしたね？」

「ええ。あそこにあるのが人里で、向こうに見える大きな森が魔法の森です」

高度は百メートルくらいであろうか、下に見える風景が次々と移り変わっていく。

結構な速度で飛行しているはずだが、髪と服が多少はためく程度であった。

（風が眼に入らないのはありがたいな）

最初はグーグルとかが要るのでは？　と思っていた彼だが、必要なかったようだ。

だが、考えてみれば幻想郷で空を飛べる者たちはグーグルを持つ



てなどいない。

「どうやら空を飛ぶほどの力がある者たちは、飛行時に体から気（灵力、妖力、魔力等）を発して飛んでいるのがデフォルトのようである。」

「そしてその発している気——オーラと言い替えてもいいだろう——で、風や雨が眼に入るのを防いでいるようだ。」

それは弾幕ごつこのときでも同様であるらしい。

「体から発するオーラで被弾時のダメージを軽減しているそうである。（肉弾戦も同じ）」

「逆を言えば、オーラを張ることもできない一般人は、被弾するとシャレにならない大怪我を負う羽目になるだろうから注意が必要だろう。」

そんなことを考えながら、妖夢が指差す方向を見る。

「人里って思ったより大きいようですね」

「そうですね。この幻想郷に住む人間のほとんどが人里に居ますし」

人間よりも妖怪の方が圧倒的に多く住むと聞いていたので、人里は大きくても彼がよく知る明治の村——例えば新月村——くらいだろうと思っていたようだ。

だが、遠目で見ても結構な規模のようである。  
視力も強化されてるのか、往来で行き来する人の姿が見える。

幕末期で言えば、ちょっとした宿場街ぐらいはありそうだ。

妖夢の話では、幻想郷に住む者達の生活物資のほとんどを賄っているそうである。

そして、人里での争い事はご法度だそうで、妖怪達が人を襲うこともない。

妖怪相手の専門店もあるそうで、買いに来る姿がちよくちよく見られるとか。

「確か、人里にも挨拶しておいたほうがいい人が居るそうですね」

「ええ。ですが、それはまだ後でかまわないでしょう。先に回る所もありますし」

妖夢の言葉に、そうですね、と少し残念そうな声で返す。

宗次郎としては里に住む人達がどう生活してるのかが気になっていた。

何しろ、一步里を出れば魑魅魍魎が跋扈する地である。

そんな中で生活を営むのは並大抵のことではないだろうと思っていたからだ。

尤も、最近では人が襲われることも無くなっているそうだが。

「あ。見えてきましたよ。あれが香霖堂です」

「あれが……」

鬱蒼とした広大な森の入り口付近に、一軒の小屋のような店が見えてきた。

店の前の開けた場所に二人が降り立つ。

（……なんとまあ……節操がないというか、ごちゃまぜというか……）

香霖堂を見た宗次郎の感想がそれである。

平屋建ての屋根の下に大きく『香霖堂』の看板が掛けられている。だが、その店の周りがなんともカオスとでも言うべき有様だった。

（昭和初期の看板に公衆電話。道路標識に古タイヤ。そしてあれは……）

なんとも雑然としたそれらの品々の中で一際目立つ物があつた。

（なんで設楽焼きのタヌキまで置いてあるんだ……）

そう思った瞬間に設楽焼き関連の知識が出てくるが、頭を振ってそれを打ち消す。

頭痛がしてきたようだ。

「どうしたんですか？ 入りますよ？」

その声に前を見直すと、妖夢が店の扉に手を掛けているところであつた。

「あ、いえ。今行きます」

返事しながら宗次郎は思う。

（大丈夫なんだろうか、この店）

至極尤もな感想であつた。



「まかせておいてくえたまえ。来月までには仕上げてみせるよ」

青い古風な着物。短い銀髪に端正な顔立ち。そして理知的なメガネを掛けた青年。森近 霖之助が胸を叩いて宗次郎の頼んだ品を引き受ける。

「よろしくお願いします。でも、無理はしないで下さいね」

宗次郎も快く引き受けてくれた彼を氣遣う言葉を掛けた。

「なあに。君のお蔭で使い道の分からない道具が分かるようになったんだ。それくらいはさせてくれ」

「僕の知識が役に立ったようですねによりです」

「『知識は力なり』 だよ。知識は正しく使われてこそ意味があ

るんだからね」

「旧約聖書の一節ですね。宗教関連の書物まで読まれてるんですか？」

「まあ、毎日暇だからね。こちらに流れ着く書物にはそういうのも多いから、暇つぶしに読むには丁度よかったよ」

「忘れられ、流れされた先でもちゃんと読んでくれる人が居てくれたってわけですね」

「まさにこれは……」 「こう言うでしょうね」

「「捨てる紙（神）あれば拾う紙（神）あり」」

香霖堂の店内に二人の男性の笑い声が響く。

なんともすっきりと意気投合した二人である。

隣で手持ち無沙汰にしている妖夢がほとんど空気であった。

出合った当初はカウンターの向こうで椅子に座って本を読みながら入ってきた二人を見て 『珍しく客が来たかと思えば外来人か』と、なんとも無愛想な対応であった。

だが、それも宗次郎が紹介状を見せたことで興味を持たれ。彼が幻想郷が結界に閉ざされる前の人間だったと分かったと、身を乗り出して話を聴き始め。膨大な現代の知識を持つと分かったと、お茶を出してまで話し込んだのである。

そして、店内の数々の品物を見て貰い、その使い方を教えてくれた彼を大層気に入り、御礼に頼まれた服や靴を無料で仕立ててくれると約束してくれたのだ。

「いやあ、久しぶりに楽しい時間を過ごせたよ。機会があったらまた来てくれるかい？」

笑顔でそう告げる霖之助。相当に彼を気に入ったようである。

「勿論です。僕も霖之助さんの含蓄は大変になりますし、ココなら僕の知識を色々と活かせそうですね」

こちらも笑顔で返す宗次郎。これはいつもであるが。

「ああ。その時はよろしくお願いするよ。っと、両替の方はこれでいいかね？ 生憎、今月は色々と入用だったんでこれだけしかないんだ」

そう言いつつも、出した金額はかなりのものだ。あまり価値があるとは言えない四文銭まで交換してくれたのである。

「いえ、十分ですよ。では、出来上がる頃にお邪魔させて頂きます」

宗次郎を気に入った霖之助であったが、宗次郎の方も彼を気に入っていた。

久しぶりに男同士の会話ができて嬉しかったのもある。

予め聞いてはいたが、彼も自分と同じく半人半妖であるのも大きかったであろう。

意気投合した男二人を他所に、妖夢はすっかり不機嫌になって店內をぶらつく。

（別に無視されてるってわけじゃないですけど……）

剥れた顔のまま、棚にある商品をなんとはなしに眺めていた。

（男同士の友情ってこういうモノなんだろうか……あら？）

そして棚の一つに一振りの刀が展示されているのを見つけたのだ。

（へえ？ 刀まであるんですね。……なんだか神気を帯びてるようにも見えますけど（チャキ）え！？ これってまさか……）

手に取った刀をしげしげと眺め、神気を帯びているのを感じて宗次郎に使えるものではないかと思い、鯉口を切った。

しかし、その刀の刃を見ると驚愕の表情となる。

「宗次郎さ（チリンチリン）あ……」

彼を呼びかけた妖夢であったが、来客を告げるドアベルが鳴ってそちらを見る。

「おや。今日は千客万来だね。いらっしやい、紅魔館のメイド長さん」

「あら。今日は珍しくご機嫌ね。こんにちは、香霖堂の店主さん」

お互い、皮肉にも似た言葉で挨拶を交わす来客と店主。

その新たな来客であるが、メイド長さんと呼ばれた通り、メイド服姿の女性であった。

霖之助とよく似た銀髪のショートヘアに、こめかみからのみ伸ばした三つ編み。その先には緑色のリボンを着けている。

青いメイド服に純白のエプロンと、同じく純白の半袖シャツ。スカートは何故か膝上まであるミニスカートであった。

白いソックスに、黒の靴。エナメルパンプスだろうか？

だが、何よりも目を引くのは人形を思わせるような完璧な美貌と紫色の瞳であった。

振り向いた宗次郎が彼女を見たとき、何故か『瀟洒な』という単語が浮かんだ。

「あら。冥界の半霊に……見ない顔だけど外来人かしら？ でも、妖気も感じるわね」

それが宗次郎と、紅魔館と呼ばれる館に勤めるメイド長。十六夜咲夜（いざよい さくや）との最初の出会いであった。

彼女がどうして香霖堂に来たのか。

そして、妖夢が見つけた刀とは。



一つの出会いが、一つの  
“ 再会 ” を呼ぶ。

## 第八話 ― 出会い ― (後書き)

今回はここまでです。

はい。刀のことですね。分かっておりますのでネタバレはご勘弁の  
ほどをw

さてPa(ry いやいや、メイド長さんも登場。どうなることや  
ら。(おい…

## 第九話　― 刀 ―（前書き）

今回もなんとか週一投稿に間に合った……かな？

ですが、今回は今までよりも短いです。プロローグくらいかも……  
どうにも考察するのに時間を取られがちです。

今後は週一で投稿するのが難しくなると思いますので、皆様気長に  
お待ち下さい。

それと今回は九話ですので、まあ、お約束のキャラも出ます。（ほ  
んの顔出し程度ですがw）

他にも新顔のキャラが出てきますが、名前は出しません。

ネタバレはご自重願います。（とは言っても、ほとんどバレバレで  
すがw）

では、本文をどうぞ。

## 第九話　― 刀 ―

宗次郎が香霖堂にて咲夜と邂逅していた同時刻。

場所は、通称『霧の湖』の湖畔にて。

「あたいったら最強ね！」

「もう。チルノちゃんてば、またカエルさんを凍らせて……」

「いいのいいの！　ほら、大ちゃん。今度はあのカエルにするよ！」

「いい加減にしないと神様のバチが当たるかもよ？」

「そんなのへっちゃらだもん！　「本当に？」　……へ？　フギヤ  
！？　（ピチューン！）」

「ああっ！！　チルノちゃん！？」

「カエルたちを凍らせて遊ぶなんて、バチが当たって当然よ。……  
さて（ジロツ）」

「ヒッ！？」

「あの妖精が復活したら伝えておきなさい。またカエルを苛めたりしたら許さないって」

「はっ、はいいい!! (コクコク)」

「まったく…… (ブツブツ) ちょっと散歩がてらこの幻想郷を観て回るだけのつもりだったのに、余計な力を使わせてくれちゃって。折角あの子が頑張って信仰集めてるっていうのに (グチグチ)」

「(わっ。凍ったカエルさんが元に戻っていく) あ、あのお……」

「ん? ああ、安心して。貴女はいい子みたいだし、危害を加えるつもりはないわ」

「いえ。そうじゃなくて……その力。もしかして神様なんですか?」

「(?! あ、ヤバッ!) ……あんだって?」

「え? ですから、あなたは神様なんですか?」

「はあ? あ ん だ っ て! ?」

「(耳が遠いのかな?) ですから。神様 なんです か! ?」

「とんでもない。わたしや神様だよ」

「「……………」」

ヒュ~~~~~……

「あーうー……今のは忘れて」

「は、はあ……」

（以前、TVでやってたコントの真似したんだけど、すべっちゃったなあ。でも、まあ上手く誤魔化せたかな？）

（なんだろう。今、思いっきり寒い風が吹いたような気が……チルノちゃんはまだだし）

「そ、それじゃ。さっきのことちゃんと伝えてね」

「え？ えっと……あ、行っちゃった。結局、あの人（？）なんだっただろう……」

（あー、ヤバイヤバイ。幻想郷（ココ）なら大丈夫だと思うけど、一応は……ね）

この日。霧の湖と呼ばれる場所で起きた出来事であった。

尚、本編とは（今のところ）一切の関係がないことを明記しておく。

『え？ あたいの出番これだけ！？ ねえ！ さいきょうのあたいがこれだけえ！？』

湖は今日も平和であつた。

『ちよつとーーーーー!?!?』



「そう。それで半妖になったの……大変な目にあつたのね」

一方の香霖堂では、湖での日常(?) など関係なく話が進んでいた。

既に霖之助によって互いを紹介されており、簡単に事情を説明した宗次郎に対し、僅かではあるが同情の目線を向ける咲夜。

「まあ、成っちゃったものは仕方ありませんし、それを悔やむよりも、これからのことの方が大事だと思います。それに……」

そこで一旦言葉を切る。

彼自身としては、別段、同情されるほどのことではないと思っていた。

たまたま運の無かった旅人が巻き込まれたに過ぎないし、実際の通りだからだ。

そして彼女にはそうとしか説明していないし、過去の行いや能力

なども同様である。

ついでに言えば、霖之助にも知識に関する能力しか説明していない。初対面の相手に自分のことを一から十までべらべら喋るのは、よほどのお人好しか？くらいである。

「それに？」

尋ね返し、小首を傾げる咲夜。その動作一つ取っても実に瀟洒である。

「これでも結構楽しんです。色んな人と出会えますしね。勿論、咲夜さんとも」

そう言ってニッコリと微笑む宗次郎。笑顔が似合う半妖である。

運の無い旅人……とは言ったものの、本人としては運がよかったと思っていた。

そのお蔭で妖夢や幽々子に出会うことができたのだ。無論、八雲家の皆も。

そして霖之助や、目の前の彼女に対してもである。

更にこれからどんな出会いが自分を待っていてくれるのであるろうか……

宗次郎の笑顔には、そんな彼の想いが籠っていた。

「（っ！？）……あら。おだてても何も出ないわよ？」

その笑顔に一瞬だけ動揺を見せるメイド長。



感じた動揺を瞬時に収め、努めて平静に受け答える。  
心なしか、若干顔が赤くなったようにも見えた。

（なんて笑顔……元が良いから尚更やバイわね。かなりキタわ……）  
何がヤバイのかは分からないが、表面上は完璧なポーカーフエイ  
スである。

そんな彼女に何か気の利いた言葉でも返そうかとした宗次郎であ  
ったが……

——……やっぱり……に……わね。後は……とコレを……——

（……え？ なっ！？）

——……で、あなたも………立派な………んね……——

一瞬フラッシュバックのような閃光が走り、脳裏に浮かんだ光景  
に呆然とする。

途切れ途切れに聞こえてくる声は間違いなく目の前の女性だ。

その光景は、彼を硬直させるには十分な威力を持っていたようであ  
る。

（な、なんだこれ……）

「……？　どうしたのかしら？」

何かを言いかけたまま硬直し、体を強張らせた宗次郎を不信に思  
って尋ねる咲夜。

「え！？　あ、いや。なんでもありません……ところで、咲夜さん  
って紅魔館のメイド長さんでしたね。挨拶回りする所にはそちらも  
含まれてますから、いづれお伺いすると思いますのでその時はよろ  
しくお願いします」

宗次郎は頭に浮かんだ光景を打ち消し、やや早口で挨拶に来るこ  
とを告げる。

「え？　ええ。分かったわ、家のご主人様にはそう伝えておくわね」

何かを誤魔化すように告げた彼の様子に、多少の違和感を覚えた  
彼女であったが、深く突っ込むつもりはなかった。彼女自身も先ほ  
どの動揺がまだ収まっていなかったからだ。

普段の彼女はそのような動揺を感じたりしたりはしないのだが、  
その理由に心当たりがあり過ぎるほどあったのである。

（……我ながら似合わないとは思ってるけど……ね）

今はその心当たりも、彼女が内心で呟いた言葉の意味も語ること  
はできないが、いづれ明かされる時がくるであろう。

「ええ。いつになるかは分かりませんけど」

そう答えた宗次郎も、いつものニコニコ顔を保つことで精一杯で

ある。

(……アレはいつたいたんだっただろう？ この女性(ひと)が  
あんな……)

だが、彼が先ほど浮かんだ光景に考えを巡らせるのもそこまでであつた。

「あー、そろそろいいかな？」

カウンターで二人のやり取りを見ていた霖之助が声を掛けたからである。

「ああ、すいません。どうぞ」

「アラ、ごめんなさいね。ええと、以前から頼んでた品のことなんだけど……」

お互い、霖之助の言葉に内心でホッとする、宗次郎は咲夜に場所を譲り、彼女も香霖堂に來た理由を思い出して店主に用件を告げる。

そんな彼等の様子を商品の陳列棚から刀を抱えたままの妖夢が見ていた。

(なんなんでしょうか？ 二人ともなんだかみよんな感じでしたけど……)

その“みよん”な感じがどのようなモノなのかは兎も角、彼女には一つだけ確信できたものがあつた。それは……

（宗次郎さんをこの人と二人っきりにしてはいけない……）

何故そう思ったのかは分からない。だが、彼女の『女の勘』がそう告げていた。

妖夢が手にした刀を握り締めて、理由のよく分からない決意を心に誓う。

そんな彼女の決意を他所に、香霖堂の店主はカウンターに桐の木箱を置く。

フタを開け、中から取り出したのは、和紙に包まれた茶器らしき品物だった。

「注文は東洋のティーセットだったね。ついこの間、伊万里焼（有田焼）の良い品が手に入ったよ。僕の見立てだと18世紀以降の物のようだけど、デザイン的に紅魔館ともマッチしてるだろうし、お奨めだと思うよ。まあ、おそらくは戦争か何かで保護目的に隠された物がそのまま忘れられてしまったんだろうね」

いつもの彼ならもっと淡々とした言い方であろうが、宗次郎との会話で気を良くしているのか、柔らかい口調で饒舌に商品の説明をしていた。

香霖堂の店主。霖之助は、無縁塚や冥界、博麗神社の周辺などを定期的に見て周り、幻想郷に入り込んだ外界からの品々を収集してはそれを売買することを生業にしている。

そんな彼の能力は 『道具の名前と用途が分かる程度の能力』。

まさしくこのような商売に適した能力ではあった。使い方は分からないが。

だが、気に入った品は非売品にしてしまっているらしい。商売する気あるのか。

さて、商売っ気があるのかないのかは兎も角、霖之助がガサガサと包み紙を開くと、白磁に色鮮やかな草花の模様が描かれた茶器が姿を現す。

ティーポットが一つにカップとソーサーが四つ。典型的なティーポットセットである。

白地に赤と緑、そして藍色のコントラストが実に美しい。

「……柿右衛門様式ですね」

「流石だね。その通りだよ。さて、これでどうかな？　今なら安くしておくよ」

宗次郎がその茶器を見て瞬時にその様式を言い当てた。

どうやら見た物を画像検索することまでできるようだ。本気で便利である。

分かる人が居るのがよほど嬉しいのか、いつもならしないようなサービスまでし始める霖之助。メイド長、ドン引き。普段どれだけ商売っ気がないのかが窺える。

「そ、そうね。確かに絵柄も綺麗でいかにも東洋風だし、これならお嬢様も気に入られると思うわ。これにするわね……御代はこれく

らいでどうかしら？」

咲夜も絵柄が気に入ったのか、即決である。まだ若干引き気味であったが。

御代を払いながらその表情が少しだけうつとりとしたものになっていた。

多分、大きさも小振りでデザインも可愛いそのティーカップで紅茶を飲む光景を想像したのだろう。誰が飲んでいる光景なのかは言うまでもないが。

「ああ。こんなものでいいよ。で、どうする？ 包むかい？」

そう言いながら茶器を再び包み紙で包み、木箱に戻す。  
こんなものと言っているが、見たところかなりの金額だ。

それと、この場合の包むは普通の梱包ではなくラッピングのことを指してるようだ。

「ええ。お願いするわね」

その言葉に頷くと、包装紙を取り出しテキパキとラッピングし始める。

白地に薔薇の絵柄が描かれた包装紙と、真紅のリボン。  
実に『紅魔館』の名に相応しいラッピングであった。

「ほい、出来たよ。それとこれはサービスだ。お安くすると言った手前だしね」

咲夜にラッピングされた茶器の木箱を渡し、更に長方形の小箱を取り出す。

大きさは筆箱くらいで、彼がフタを開けると中には数本のスプーンが入っていた。

「磁器製のスプーンだよ。紅茶を飲むには金属製よりこっちの方がいいと思ってね」

「確かに。金属製だと化学反応を起こすそうですし」

そのスプーンを見た宗次郎も知識から引き出した蒔蓄（うんちく）を述べる。

中々得た知識を披露する機会がなかったからだろう。少し嬉しうだ。

だが、そろそろ自重したほうがいいかもしれないと思い始めてもいた。

元々自分の努力で得た知識でもないし、あまり口を挟みすぎるのも考え物だろう。

「あら。ホントに今日は機嫌がいいのね。ありがたく頂戴するわ。それじゃ、まだ他のお使いもあるからこれでお暇（いとま）させてもらうわね。それから、宗次郎……さんでいいかしら？ 当館に来られたときは門番に言ってちょうだい。話を通しておくから」

宗次郎がそんなことを考えていたら、サービス品も受け取った咲夜が挨拶もそこそこに用件だけを伝え、そそくさと店から出て行っ

た。

このまま止まっていたら二人分の蒔蓄に曝されそうだと判断したらしい。

パタンとドアが閉まる音が店内に響き、挨拶を返す暇もなく去っていった彼女を見送る姿勢のままの男二人。やがてお互いの顔を向け合って視線を交わす。

どちらからともなく苦笑を零し合う。その内心はやれやれであるう。

（それにしても、さっきの “アレ” は一体……）

彼女の後姿を見送り、先ほど脳裏に見た光景を思い出す。

（予測じゃないよな……あれは数秒先までしか見えないし）

場所はこの店ではなく、どこかの洋館らしき室内であった。

その室内もロウソクで灯されて薄暗かったから予測ではありえない。

（だとしたら、これが紫さんの言ってた “予知に進化するかも” ってヤツかな）

そうだとしても、最初に予知した光景としてはあまりにもアレであった。

（咲夜さんが僕を見ながら 『鼻血を流していた』 なんて……）



どうにも釈然としない思いに駆られ、うなだれる宗次郎。

そんな彼を見た霖之助は『彼女に嫌われたのでは？』と誤解したようで、ことさらに明るい口調でフォローを入れる。

「はは。彼女はいつもあんなものさ。所で妖夢。さっき何か言いかけなかったかい？」

見当違いのフォローをして、接客中、一言も喋らなかった妖夢に視線を向ける。

「あ、いえ。ええっと……さっき、この刀を見つけたのでお聞きしようかと」

「へえ？ 刀とかも置いてあるんですか……？ （なんだ？ この感じ……）」

店内の奥からカウンターに歩み寄る妖夢を見て、宗次郎も刀に注目する。

だが、その刀を見て彼は奇妙な既視感（デジャブ）を覚えた宗次郎。

柄や鞘などの拵（こしら）えは、どこにでもある普通の日本刀である。

しかし、彼にはその刀に “見覚え” があった。

よく見ると、不思議な “力” も感じる。

「ああ、それかい？ 先週の初めだったかな。冥界の近くで拾ったんだけどね。まあ、拾ったはいいけど “普通には使えない刀” だったしねえ。それでも物好きが買うかと思って置いてあるのさ」

「でも、この刀。神気を帯びてますよ？」

「たぶん、どこかの神社にでも奉納されていたんだろうさ。手入れは十分にされていたようだけど、長いこと使われた形跡もなかったし、そのまま忘れ去られたんだろうね」

「……その割には実戦に使われた形跡がありますね。細かな傷が見えます。それに、この刀は相当な業物です。おそらくはかなりの名工の作かと……まあ、確かに普通には使えないようですけど」

「そうだね。作られた歴史は浅いようだけど、神気もかなりのものだし、代々の使い手も相当な腕前だったんじゃないかな？ もっと古くからあれば歴史に名が残ってたかもしれないし、九十九神が憑いていたかもしれないね」

「ですね。それだけにこのような作りでなかったら……あ！ そうでした。宗次郎さんが話してくれた刀って……？ 宗次郎さん？」

霖之助と妖夢。二人がその刀についてあれこれと考察していたのだが、宗次郎の耳にはまったく入っていなかった。呆然とその刀を見つめていたからである。

鞘から少しだけ抜かれた刀の刃。その作りは通常の刀とは大きく異なっていた。

「どうしたんだい？ 宗次郎君が話してたってことは心当たりでも

あるのかい？」

心当たりどころではなかった。

それどころか、宗次郎の運命を決した刀と言っても過言ではないほどに。

「……妖夢さん。その刀をよく見せてください」

「え？ あ、はい。どうぞ」

霖之助の問いに直ぐには答えず、宗次郎は妖夢から刀を受け取る。抜かれたままの刃を見つめ、やがて静かに目を閉ざす。

「……霖之助さん。この刀の名称を教えてくださいませんか？」

「あ、ああ。その刀の名称は――」

――『逆刃刀・真打』――

――用途は、『相手を殺さずに倒すための刀』だよ」

目を閉ざしたまま問い掛けた宗次郎に、霖之助はやや戸惑いながらも答える。

その答えに宗次郎は小さく 「緋村さん……」 と呟くと、ゆつくりと目を開けた。

そしてチンと音を起てて刀を鞘に収めると、首だけを店主に向けて口を開いた。

「霖之助さん。この刀を買います。おいくらでしょうか？」

どこか感情を押し殺したように言う宗次郎の様子に、霖之助も少々気圧されるが、その尋常ではない様子に興味が沸いたのか、このように切り返した。

「……買ってくれるのはありがたいけど、その前に僕の質問に答えてくれるかい？ それなら只で譲ってあげるよ」

霖之助の言葉に、妖夢が息を呑む音が聞こえる。

そんな彼女に視線を向けると、宗次郎は表情を綻ばせて優しく話しかけた。

「……そう言えば妖夢さんは紫さんから詳しい話は聞いていなかったんですね。この逆刃刀とその使い手に関しては稽古の後に少しだけお話ししましたが……丁度良い機会です。一緒に聞いてくれますか？」

「あ、はい。聞かせてください。是非」

「……どうやら長い話になりそうだね。椅子を出すから少し待っててくれるかな。お茶のお代りも持ってこよう。ついでに茶菓子もね」

そう言つて一旦奥へと引込んでいく霖之助。

おそらくは自分の居ない間にフォローを入れておけという意味もあるのだろう。

『香霖堂』 店主、森近 霖之助。何気に気の利く男である。

「……大丈夫ですよ、妖夢さん。僕にとっては 『僕を打ち負かした刀』 ではなくて、『僕の運命を変えた刀』 なんですから。そんなに身構えて聴く話でもないです」

「宗次郎さん……はい、分かりました。お話を聞かせて頂きます」

宗次郎に真正面から向き直り、凜とした様子でしっかりと言葉を返す妖夢。

その様子に相変わらず硬いなあと思いながらも手にした刀を見つめ、不殺（ころさず）を貫いた使い手の男に思いを馳せる宗次郎。

懐かしさと同時に、この刀までが忘れ去られたという時代の流れに哀しみを覚える。

「やあ。お待ちせしたかな。さて、じっくりと聞かせて貰うよ」

と、そこに折りたたみ式の椅子を二つ抱え、盆に乗ったお茶と茶菓子を持った霖之助が戻ってくる。

「そうですね。まずはこの刀の持ち主だったある剣客のことから話しましょうか」

カウンターを挟み、三人で囲んで座ると、宗次郎はそう切り出した。

それは、ある剣客の物語。

不殺を貫き、流浪人（るろうに）となった男の物語を……

『答え』 は既にみえていたのかもしれない……

おまけ。 — 話が終わった後の店内にて —

「ああ、そう言えばこんなもあるんだけど、どうかな？ 防御に使えると思うよ」

「手甲……にしては随分とごついですね。鋼鉄製ですか？」

「うん。結構前に拾ったけど買い手が付かなくてね。用途も弾幕戦向きなんだけど」

「へえ？ 弾幕ごっこが主流なのに買い手が付かないのはおかしいですね」

「だろう？ 是非この機会に購入を奨めるよ。まあ、完成品の試作版だったらしいけど」

「試作品ですか……用途と名称はなんですか？」

「用途は『あらゆる攻撃を弾き返せる道具』だね。名称は……」

「……どうしたんですか？」

「いや、これを聞くとみんな要らないって言い出すんだけどね。君はどうかnao思って」

「名前を聞いただけで買う気をなくすようなことはありませんよ」

「そうかい？ そうだよね……んじゃ名称だけど——」

——『試作・無敵鉄甲』 と言って 「ごめんなさい」 ……はあ。やっぱり」

「いえ、なんと言うか……付けたら馬鹿になってしまうような気がする」

「みんなそう言うんだけど、どっかの妖精みたいにかい？」

「下手したらそれ以上……いや、この場合は逆かな。それ以下かと」

「それは欲しくないよねえ」

「ですよねえ」

……妖精以下のバカっていたい……



## 第九話 ― 刀 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

うゝゝむ、短い。テキストで16kbですからまあまあですかね；；  
しかも、まだ香霖堂から出ていないし(汗)。

次回は別の場所に行くと思いますが、紅魔館ではありません。

この幻想郷入りなら、必ず一度は眼にする場所です。(ネタバレは

(ry

それと、私の中の咲夜さん像ですが、基本は『東方儚月抄(漫画版)』です。

なんともどこやかな感じが筆者の心にグツとききましたw

なのに、ココの咲夜さんは……orz

なるべく似せるつもりですが、二次設定に侵食されまくった私の厨二脳がどこまで耐え切れるか……w

では、前書きにも書きましたが、次回以降は更新が遅くなりそうです。

皆様、なにとぞお見捨てなきように(涙)。

## 第十話 ― 予期せぬ出会い ― (前書き)

ま、間に合ったかなあ？

あ、失礼しました。第十話を投稿します。

今回は色々と伏線をちりばめておりますが……回収できるのかな、コレ。

まあ、兎に角、前回よりは「ちょびっと」長いです。

では、本文へとどうぞ。

＊追記…誤字修正しました。ホント何度推敲しても（ry

## 第十話 ― 予期せぬ出会い ―

「本当に代金はよろしいのですか？」

「勿論だよ、いい話を聞かせてもらったしね。むしろお釣りが出るくらいさ……そうだ、あの手甲をおまけにつけよう。この先役に立つことは間違いないからね。名前が気になるなら僕がなんとかしておくよ。服と一緒に色々と呪術処理も施せば格段に性能も上がるだろうしね」

「ありがたいお話ですが、そこまでして頂くと……」

「いいから受け取ってくれたまえ。僕にとって君の話はそれくらいの価値はあったってことさ。それとも “友人” の施しは受けたくないのかな？」

「……そこまで言われたら受け取らざるを得ないですね。分かりました、ありがたく頂戴します。それでは、来月にお伺いすることを楽しみにしています」

「ああ。この『香霖堂』の看板の名に賭けて完璧に仕上げてみせるよ。それじゃ、道中気をつけて……って言葉は不要かな？」

「ですね。“これ” もありますし」

「はは、確かに。それにしても、その『逆刃刀・真打』を腰に差し

た姿。しつくりくるねえ」

「そうですか？」

「ああ。何て言うか、“収まるべき物が収まる所に納まった”。そんな感じがするよ」

「……そう言って頂けるのは嬉しいですけど、なんともくすぐったいですね」

「ははは。まあ、実際その通りじゃないかな。ああ、そうだ。妖夢、ちよっといいかな？」

「？　なんですか？」

「ちよっと耳を……（ごによごによ）」

「……え？　……ええ！？　……確かにそうですけど……わ、私は別に！　……」

「（？　よく聞こえなかったけど、女性がどうとかって……）　ど  
うしたんですか？」

「い、いえ。別になんでもありません！」

「？　そ、そうですか……」

「はは。君の話に感動しちゃってね。それで、このことは君の口から語られるまでは他の者には秘密にしておこうと話していたんだよ。そうだよな？　妖夢」

「そ、そうです！ 無闇やたらと話していいことはありませんでしたから、霖之助さんとそのように話していたんです！」

「そ、そうなんだ （そんな話じゃなかったような気がするけど…  
…）」

「まあ、そういう訳だから気にしないでいいよ。それじゃ、妖夢。  
“道案内” しっかりね」

「え？ ……あ、はい！ それでは失礼致します。では、宗次郎さん」

「？ え、ええ。それでは霖之助さん、失礼します（なんだろう？  
気になる言い方だな）」

「ああ。また会うときを楽しみにしているよ」

宗次郎の話も終わり、彼が逆刃刀を腰に差して店から出たときには既に昼を回る時間となっていた。

霖之助が昼食も取っていないかと誘ったのだが、流石にそこま  
でお世話になるのも気が引けた二人は丁重に断り、予定を変更して  
里に向かうことにしたのだ。

当初の予定では昼前までに香霖堂を後にし、博麗神社に到着する  
はずだったのだが、宗次郎の話が思いのほか長引き、昼時になって  
しまっていた。

そこで一旦、人里の飯屋で昼食を取り、改めて神社に向かうことにしたのである。

その出発間際に、霖之助が妖夢を手招きして何やら内緒話をしていたのだが、妖夢の発する素っ頓狂な声に宗次郎は首を傾げるばかりであった。

彼の聴力を以ってしてもかなりの小声であった為、よく聞き取れなかったようだ。

……彼らが飛び立った後、霖之助が一人ニヤリと笑っていたようだが……

それは兎も角、人里への道中での話題は博麗の巫女に関する事になった。

妖夢曰く、『あの貧乏巫女の所へ昼時に押し掛けてもいい顔はされない』とのこと。

ついでにお茶と茶菓子でも持って行きましょうと提案する彼女に、宗次郎は引きつった笑いを返すしか反応のしようがなかった。

なんだか彼の中で博麗の巫女に対するイメージが、ガラガラと音を立てて崩れていくような気がしたりしているが、妖夢にとってはどうでもいいことであろう。

宗次郎の中では『博麗の巫女Ⅱ緋村 剣心』のイメージがあったのだが……

異変を解決し、幻想郷の平穏を護る守護者であると同時に博麗大結界の要（かなめ）であり、スペルカードという人と妖怪との力の差をなくし、比較的安全に決着が付けられる決闘方式を定めた博麗の巫女。

片や、人斬り抜刀齋として最強の名を欲しいままにしながらも、遊撃剣士として勇名を馳せた後、地位も名誉も捨てて流浪人となり、力なき人々の為に逆刃刀を振るい、様々な事件を解決してきた緋村剣心。

経過や過程、振るう力や役割、置かれた立場や世界観の背景すら全く違う二人であるが、力なき人々を護るという共通点からどころなく同一視していたようである。

だが、話を聞けば聞くほどそのイメージが懸け離れてしまっているようだ。

それはそうであろう。

剣心が飛天御剣流の定めの下、世の人々の為に剣を振るってきたのとは違い、博麗の巫女に求められるのは弱者救済などではない。

『存在』      として求められるのは、大結界の “ 要 ”

『立場』      として求められるのは、人妖との “ 中立 ”

『役割』      として求められるのは、異変解決の “ 担い手 ”

すなわち、幻想郷という 『世界』 が彼女に求めるのは “ 博麗の巫女の役目を負うこと ” そのものなのである。

イメージが剥離してしまうのも当然であった。

何しろ、博麗の巫女が剣心のように個人的使命感からなどではなく、巫女の役目として行っているにすぎないのである。そこに個人的感情を挟む余地などない。

まあ、イメージが剥離するのは、彼女の性格が大きく影響しているからであろうが。

出発当初は巫女の人柄について妖夢からあれこれと聴いていた宗次郎だったが、聞けば聞くほど自分がイメージしていた人柄とは違うことが分かり、自分の考えに没頭するようになっていった。

妖夢は貧乏巫女と評していたが、別に生活に困窮しているわけでもないようである。

おそらくは人里から定期的に奉納品でも納められているのだろう。賽銭がないのを嘆いてるのは、単に信仰心＝賽銭と見てるだけなのかもしれない。

だとすれば、何故彼女は巫女の役目を背負っているのだろうか？  
どうしてスペルカードルールなどという、人にも妖怪にも配慮した決闘方法を考えたのだろうか？ 巫女としての自分に疑問を感じてはいないのだろうか？ e t c. ……

人里へと向かいながら飛行中に博麗の巫女についてあれこれと考える宗次郎。

空を飛ぶことに慣れてきたのか、考え事をしながらもその姿勢は揺るぎがない。



隣で飛ぶ妖夢はそんな彼の様子をチラチラと窺っていたのだが、とても話し掛ける雰囲気ではなく、人里に近づく頃には二人の間に会話はなくなってしまっていた。

（うう……気まずい……）

沈黙に耐え切れず何度か話し掛けようとしたのだが、口を開くたびに言葉が咽に痞（つか）えてしまうのだ。

だが、話し掛けられないのは彼の雰囲気だけのせいではなかった。

（もう……霖之助さんがあんなこと言うから……）

どうやら巫女のことと頭がいっぱいの彼に、心中穏やかではいられなかったようだ。

一体なにを言われたのやら……



一方。二人が飛び去っていった方向を、姿が見えなくなるまで見送った霖之助は。

「ふう……さて、さっそく取り掛かるとするか」

と、誰に言うわけでもなく呟いた。どうやら気合を入れる意味で口に出したようだ。

それを証明するかのように店内の奥の部屋へと入ると、さっそく道具を揃え始めた。

「さてさて。あの二人、上手いくといいんだが……はは、それにしても“友人”ねえ。まさか僕があんな言葉を使うことになるとは思いもしなかったな……」

テキパキと作業をこなしながら、又も独り言を呟く。

店によく顔を出す白黒の魔法使いや紅白の巫女ならば兎も角、彼が初対面の相手をここまで気に掛けるのは極めて珍しいと言える。

確かに半人半妖という同じ存在であり、同性でもある知り合いができたのは素直に嬉しかったし、使い道の分からない道具について色々と教えてくれたのも嬉しかった。

だが、それ以上に何が彼をして宗次郎をそこまで気に入らせたのであろうか。

それは彼自身にもよく分からないことであつた。

確かに知識は豊富……というより膨大であり、意外と話し上手である。

彼が語った話の内容も非常に興味深かった。

特に、妖化に至った経緯は何度も質問してしまうほどであつただ。

……それ故に、話が長引いたとも言えるが……

最初は逆刃刀にまつわる話であったが、いつの間にか彼の人生談になっていた。

妾の子としての生まれ、虐待、志々雄との出会い、家族の惨殺、  
楽以外の感情の喪失、潜伏の日々、仲間との出会い、政府転覆への  
暗躍、政府高官の暗殺、抜刀齋との出会い、闘い、敗北、そして放  
浪の旅の果てに幻想郷へ……

話の合い間合い間は結構端折った部分もあったようだが、かなり  
波乱万丈の人生を歩んできたようだ。優しげな外見からはとても想  
像できない。

宗次郎自身はそこまで話すつもりはなかったようであるが、いつ  
の間にか全てを語ってしまったようだ。霖之助が聴き上手であ  
ったのも大きかったであろう。

語り終わった後に浮かべた、彼のなんとも言えない表情はしばらく  
忘れられそうになかった。

そして、隣でそんな彼を気遣うように浮かべた半霊の少女の憂い  
た表情も……

それらの事を思い返しながらも、作業を進める手が全く止まらな  
いのは流石である。

傍目から見ても、あの少女が彼を好いているのは丸分かりであっ  
た。

それ故にこそ、ちよつとしたアドバイスを聞かせたつもりであつたのだが……

「……余計なことを言つたかなあ」

またも零れる独り言。

「あら。そんなことはないわよ？」

突如として背後から聞こえた女性の声に、作業の手がピタリと止まる。

彼は声がした方向へは振り向かず、視線だけを横に向けた。

「……ここへは入らないで欲しいと言つたはずなんだがね」

針を多分に含んだ声で突然の来訪者——間違つても来客ではない——に言う。

「まあ、ご挨拶ね。折角お手伝いをしようかと思ひましたのに」

彼女の言葉の意味を測りかねたのか、ようやく振り返る霖之助。

そこには相変わらず胡散臭い笑みを扇子で隠して彼を見据える姿があつた。

「……今度は何を企んでるんだい？」

彼はメガネを右手の中指でクイツと押し上げて問い掛ける。

メガネの内側にある彼の眼は鋭く細められていた。

「企む？ 企むですって？ 企むとは悪しき行いをする事、悪事を働くことを指す言葉ですわ。私（わたくし）、そのようなことをした覚えはございませんことよ？」

なんとも的外れな返答をしながら心底心外だと言わんばかりにヨヨと泣き崩れる。

いっそ見事だと言いたくなるほどのわざとらしさであった。

そんなんだから胡散臭いと言われるんだ、と彼は言い掛けたがグツと堪える。

言っても無駄だからだろう。

やがて彼女の言葉の真意を確かめようと、真っ直ぐ向き直った霖之助。

そして泣いた烏が……ではないが、泣き真似を止めた女性――八雲 紫。

彼は細めて鋭くなった目線のまま。

彼女は妖しい笑みを浮かべた目で。

しばし二人の間に無言の空気が流れる。

が、先に根負けしたのは霖之助であった。

「ふう……で、君に何をさせればいいんだい？」

「ふふ。だいぶ物分かりが良くなってきたわね。私がすることはちよつとした仕掛けよ」

「仕掛け？」

その言葉に霖之助の片方の眉がピクリと跳ね上がる。

「そうよ。ほんのちよつとした……ね」

ね、の部分で妖しい笑みのまま眼を細める紫。

「ちよつとした……ねえ。どんな仕掛けか明かしてくれないと手伝わせようがないんだが……まさか話せないとは言わないよね？」

「言わないわよ。これは“あの子”にも関係してくることだから、今から説明するわね」

そして語られる彼女の言葉……

「……確かにそれなら“あの子”にとっても有用な話だ。だけど、どうして彼にもなんだい？ いや、確かに彼にとっても助けになるだろうが……（ありがたがるかどうかは別だけど）」

「……なんか余計なことも聞こえたような気がするけど。まあ、いいわ。私としてはね、彼にはそう簡単に死んでほしくはないのよ。理由としてはこれが一番大きいわね」

「ふむ……らしくもなく随分と肩入れをしてるようだね。まあ、僕も人のことは言えないし、死んで欲しくないという言葉には全面的に賛同するよ」

そう言った後、霖之助は部屋の奥にある台所へと足を運ぶ。

「とりあえず座りたまえ。招かれざる客ではあるが、お茶ぐらいは出すよ」

振り返りもせず、背中越しに語る彼の言葉に紫は意外そうな顔を向ける。

「あら、珍しいこともあるのね。明日は雨かしら？」

なんとも失礼な言葉と同時に、わざとらしく窓に目を向ける紫。

「……お茶漬けの方がいいのかね？」

台所の入り口に掛かる暖簾（のれん）越しに不機嫌な声が返ってきた。

「はいはい、分かってますわ。では、遠慮なく待たせてもらうわね。勿論、お茶の方を」

そう言って部屋の隅に置かれた座布団を自分で運び、その上に座る。

そして扇子を閉じると、もう一度窓に眼を向けてポツリと呟いた。

「今頃は里に着いているかしらね。あの子達」

窓に向けられた彼女の顔にはいつもの妖しい笑みが消え、代わりに浮かべるのは慈愛に満ちた優しい笑みであった。

まるで初めてのお使いを子供に出した母親のように……

尤も、霖之助が戻ったところには、いつもの妖しい笑みになっていたが。

果たして “あの子” とは誰のことであろうか。

そして彼女の言う仕掛けとは……



「ここが人里ですか……来る時にも遠目で見ましたけど結構大きいですねえ」

「そうですね。人里以外で住んでいる人間はほとんど居ませんから」



里に近づき、入り口が見えてきたところで二人は地に足を着けると、そこからは徒歩で里の中へと入っていく。人里では緊急時以外、飛行禁止だそうである。

上空からざっと見た限りでは、里の周囲数キロほどを高い柵で囲っており、街道からの入り口には里の自警団と思わしき門兵が歩哨に立っていた。

妖夢が軽く会釈して挨拶する。どうやら顔見知りのようである。宗次郎のことも簡単に紹介しただけで通してもらえた。

宗次郎も挨拶したが、気さくな感じで挨拶を返してくれる。妖夢によると、人里の人間はおおらかな人が多いとのこと。

彼としては、もっと殺伐とした気風に溢れているのではと思っていたから、なんとも拍子抜けな気分で門をくぐったのであった。

某世紀末覇者が支配する村かなにかを想像していたようである。

はっきり言おう。作品が違うと……

それは兎も角、通り抜けた門の方からは門兵の他にも、巡回しき自警団員が集まって何やら話し込んでいた。

その会話の“一部”を抜粋してみよう。

『なんてことだ！ 妖夢タンが彼氏連れだなんて……』 『我らはけーねせんせーが居るではないか！』 『バカモノ！ 咲夜タンこそが我がジャスティス！』 『ゆゆ様に喰われない……（性的な意味で）』 『何を言っとるか！ 藍さまの尻尾をモフりたいとは思わん

のかね!？」『腋巫女こそが至高ではなかったのか?』『ゆかゆか  
ゆかりくん♪』『（。▽。）。多。えーりんえーりん!』『橙タ  
ソ、ハアハア（;´Д、）』

……………ダメだこの自警団。早くなんとか（ry 特に最後のヤ  
ツ。表出ろ。

しっかりとその会話が聞こえていた宗次郎は、頭痛どころか目眩  
がしてきたようだ。

「? どうかしめましたか？」

「い、いえ……ああ、そうだ。ついでと言っはなんですが、この  
人里で挨拶しておきたい人が居るんですけど……」

「あ。もしかして、稗田（ひえだの）阿求（あきゆう）様に  
お会いになるんですか？」

「ええ。この幻想郷を古くから知っているそうで、なんでも『幻想  
郷縁起』という書物を書かれているとか。幽々子さんから聞いて一  
度会ってみようと思ひまして」

彼の言う稗田 阿求とは、九代目の阿礼（あれい）乙女のこと  
であり、初代の阿礼が千年以上も前から輪廻転生を繰り返している  
そうである。

転生の度に閻魔の下で次の肉体を用意してもらう間、仕事を手伝  
っているとのことであり、その関係上、冥界とも縁が深く、幽々子

とも顔見知りであるらしい。

その縁で妖夢も彼女のことをよく知っており、閻魔との関係上、敬意を払っているそうである。

又、八雲家とも縁が深く、完成前の幻想郷縁起の原稿をチェックしていたとか。

更に、紫のことを『妖怪の賢者』と称した当人であり、深く尊敬しているとのこと。

そんな彼女の能力は『一度見た物を忘れない程度の能力』だそうである。

それらのことを幽々子から茶飲み話に聞いていた宗次郎は、人間でありながら閻魔や幻想郷の管理者と言える紫。更には冥界の管理者たる幽々子といった、この幻想郷でも最重要とも言える方々と縁の深い彼女に対してかなりの興味を持っていた。

確かに今は博麗神社に向かう最中ではあるが、折角の機会であることだし、軽い挨拶程度くらいはしておきたかったのだ。

とは言え。別にあれこれと話すつもりなどはない。

何故、輪廻転生を繰り返してまで幻想郷縁起の執筆に拘ったのか。転生する度に百年以上も時が経ち、知り合いが全て居なくなるのをどう思うのか。

寿命が極端に短く、現世に居られるのは三十年そこそこだというが、それは生きていると言えるのであろうか等々……

それらは結局、当人が納得していればいい問題であろう。

宗次郎が確かめたいのは、その人となりなのだ。

実際に会って会話し、性格、嗜好、考え方などを知りたいのである。

知ってどうするのか、ではなく。知っておきたい、只それだけであつた。

ある意味、自分以上に波乱万丈とも言える人生(?)を歩んでいく人物だ。

さぞかし変わった人物ではないか……そう思うと、心の中がワクワクしてくる。

自分はこうも好奇心旺盛なのかと、自分でも呆れている。

どうにも今まで感情が抑圧されてきた分、解放されて反作用されているのであろう。

ならば、今のうちに精々楽しんだ方が得である。

ある種、身勝手とも言える言い分であるが、それが今の彼の正直な気持ちなのだ。

だからこそ、今の機会を逃したくないという思いが出てきてしまっている。

(我ながら歪んでるなあ。ホント……)

自分の内面をそのように自己分析した彼は、少々困惑した表情で自分を見る半霊の少女に時間が取れないかどうかを尋ねる。

「ほんの軽い挨拶をしておきたいだけですから、少し時間は取れないでしょうか」

「それは……まあ、少しならいいですけど、まずは腹ごしらえが先でしょう。神社もそうですが、昼時に押し掛けるのは礼儀に反しますので」

その言葉に顔を綻ばせて大きく頷いた。

「ええ。勿論です。ところで妖夢さんがお奨めの茶屋がありますか？」

「あ。それならこの通りの先にある店がいいですよ。元々そこにするつもりでしたし」

「それじゃ、そこにしましょう」

あっさりと店も決まり、そこに向かって歩き出す二人。

歩きながら妖夢が語る所によると、その店の隣にはお団子屋があり、彼女が里へ使いに来た際にはそこでお団子を食べるのをひそかに楽しみにしているそうである。

幽々子様には内緒ですよと、少し舌を出して言う彼女は歳相応に可愛らしかった。

僕も一緒に食べれば共犯ですねと、にこやかに笑顔で返す宗次郎。

笑いながら肩を並べて歩く姿は完全にデート中の恋人同士である。

が、そんな二人の後ろから声を掛ける者が居た。

「その半霊は……妖夢さんじゃありませんか？」

「はい？」

声を掛けられた妖夢が立ち止まり、振り向くと宗次郎も同じ動作をする。

そこに居たのは十歳そこそこであろうか、明るい色彩の着物を着た少女が居た。

「ああ、やっぱり妖夢さんですね。お久しぶりです」

「あ、阿求様！」

（え！？ この人が……）

妖夢の声に宗次郎も驚く。

何しろ会ってみようと思った人物が目の前に居るのだから。

「あ。ひょっとしてお邪魔でしたでしょうか？ ごめんなさい。恋人が居るとは存じませんでしたから……」

「え？ ええ！？ いえ、あの、この人は……」

アタフタと慌てる妖夢。バタバタと両手を振って忙しいことこの上ない。

とりあえず場を落ち着かせるために一步前に出る宗次郎。

「初めまして。僕は瀬田 宗次郎と申します。ご高名はかねがねお伺いしております」

「これはご丁寧に。私は稗田 阿求と申します。以後お見知りおきを」

未だに慌てふためく妖夢を他所に、頭を深く下げて挨拶し合う二人。

「ここで立ち話もなんですし、この店に入りましょう。お昼はお済みでしょうか？」

「まあ、すみません。私もたまには外でと思いまして、この店に来たところなんです」

「それは丁度良かったですね。では」

「ええ。ご相席お邪魔させて頂きます」

「え？ え？ あ、あのお？」

さっさと店内に入っていく二人を追って妖夢も慌てて入っていく。

こうして予期せぬ出会いを果たし、どのような話をするのか。

『答え』への道をゆっくりと歩んでいく……



## 第十話 ― 予期せぬ出会い ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

しかし、この里の自警団。終わってるだろう・jk……  
どうしてこうなった!?

それはともかく、AQN……ではなく阿求の登場です。

……予定ではまだ登場は先だったんですがねえ……

どうしてこうなった!?

大事なことから二回(r y

それにしても宗次郎。お前ちょっと気が多すぎるだろう……

道中では腋巫女のことばかり考えてたのに、里に着いたとたんA

QNとは……

どうしてこう(r y

はい。すいません。以後自重します……orz

## 第十一話 ― 想いと決意と博麗の巫女 ― (前書き)

はうあうあゝゝ…… (謎)

とうとう時間オーバーで投稿しちゃいました……orz

いやもう、推敲してたら思った以上に誤字脱字がわんさか…… (滝汗)

もうホント、これってどうにかなないかなあと思う今日この頃です。

さて、本文です。今回はいよいよあの方が登場！ (って、サブタイでバレとるがなw)

＊追記…射命丸のあだ名を修正しました。『マスゴミ』は酷いですよね……

## 第十一話 ― 想いと決意と博麗の巫女 ―

三人が入った店は、一軒のソバ茶屋であった。

いらっしやいませー！ と、威勢のいい声が彼らを出迎えてくれる。

昼時だからか、店内には大勢の客で賑わっていた。

店員はもとより、その客達からも頭を下げて丁寧にあい拶される阿求。

やはり稗田家は里の中でもかなりの有力者のようだ。

後から入ってきた妖夢にも、何人かの客が気軽に挨拶している。

だが、なんといっても注目を集めているのは宗次郎であろう。

稗田家の長である阿求はもとより、白玉楼の庭師にして凄腕の剣術家としても名が知られている妖夢と一緒に入ってきたのだ。衆目を浴びるのも当然であった。

白を基調とした着物に薄い紺色の袴。その腰には刀を差している。そして、背中には藍色の見たことの無い荷物入れ（リュック）が。どう見ても普通とは言い難い姿である。主にリュック。

だが、当の本人は周囲の目を気にした風もなく悠然と店内を歩いていた。

ちなみに、特に表記していなかったが、妖夢もスポーツバッグ風の白い大きな荷物入れを肩から下げていた。宗次郎ほど目立ってはいないが、adidasというピンク色のロゴマークが一際異彩を放っている。おそらくこれも外来人の忘れ物であろう。

もしも彼女が刀を差していなかったら、現代の制服風の格好と相まってどう見ても部活帰りの女子中学生か高校生である。

最初に彼女の荷物姿を見た宗次郎は、もし妖夢が現代の外の世界に生まれていたら剣道部にでも入っていたのかもしれないあと、そんな他愛もない考えに思いを巡らせたものであった。

席のあちこちで客同士のヒソヒソとした話し声が上がる。推論を交しているようだ。

そして特に熱心な視線を送っている客——店員も——なのが若い女性であった。

それはそうであろう。

里の中ではちょっと見かけないほどの美青年である。

店内を見回す宗次郎の視線と偶然眼が合ってしまったある女性客は、ハッとした後にうっとり頬を染め、同じ席に居た友人であろう他の女性客に羨ましがられ、直後にキヤーキヤーと騒ぎ出す。

他の女性客や女性の店員からも熱の籠った目を。男性客や男の店員からは嫉妬と羨望の入り混じった目をそれぞれ向けられる宗次郎。

しかし、それらを受け流していた彼にとって一番気になるのは、背後から突き刺さる針……どころか槍のような太く鋭い視線であったであろうことは間違いなかった。

そんな視線を冷や汗一つだけで済ませることができた彼はある意味勇者である。

阿求も周囲や背後のやり取りに気が付いてはいたが、苦笑するだけに止めていた。

案内の店員（女性）を先頭に、店内の一番奥にある座敷へと通された三人は、奥の席に阿求が。手前の席に宗次郎と妖夢が並んで腰を下ろす。

案内の店員も下がり（去り際にやっぱり宗次郎に熱心な視線を向けていたが）、腰を落ち着けた三人の中で口火を切ったのは阿求であった。

「さて、色々と語る言葉はありますが。まずはこの言葉を――

――幻想郷へようこそ」



「まあ。紫様がそのようなことを？」

「ええ。そしたら今度は幽々子さんが――」

会話が弾む二人を横目でみながら黙々と箸を進める妖夢。

改めて自己紹介を行い、宗次郎がこの幻想郷へと来た経緯を説明（無論。自分のことは只の旅人だと説明したが）した後、新たな幻想郷の住人として主立った方々への地理把握も兼ねた挨拶回りをしていることを告げていた。

そして話はお互いの趣味、嗜好から日常の話題へと移っていったのである。

主な会話は阿求と宗次郎の間で行われ、妖夢はそれに補足説明を入れたり別の視点からの話もしていたりしたのだが、宗次郎が話中に夢中になっていくと妖夢が口を挟む余地がなくなってしまい、食事に集中するしかすることがなくなってしまっていた。

楽しげに会話をしている二人。

妖夢の内心は穏やかなものではなくなっていき、低気圧の嵐が吹

き荒れていた。

天気予報で言えば、大雨強風波浪注意報が発令中といったところであろう。

尤も、幻想郷に海はないが。

(……私は幽々子様、西行寺家に仕える身。でも……)

注文した月見ソバ(いなり寿司3個付き)をすすりながらチラリと宗次郎を見る。

屈託の無い笑顔で阿求との会話を楽しんでおり、妖夢の方へは気にもしていない。ちなみに彼が注文したのは、天ぷらソバ(おにぎり2個付き)だ。天剣だけに。

(……宗次郎さんにとって、私はなんなのでしょ……)

ただの知り合い？ 友人？ 稽古相手？ それとも……

彼女の中でそれらの言葉がグルグルと回って答えが出てきそうになかった。

霖之助に言われた言葉が脳裏をよぎる。

『彼って結構女性にモテそうだからね。しっかり捕まえておかないといけないよ？ とりあえずは素直な気持ちで接することをお奨めするよ』

(素直な気持ち……)

そう言われても妖夢にはどうしたらいいのか分からなかった。

何せ、彼女はこれまで剣一筋に生きてきたのだ。恋愛など初恋すらしたことがない。剣以外に何も知らないし、庭師の腕などそれが必要だから修めたに過ぎないのだ。恋愛にはなんの役にも立ちそうに無い。

その意味では宗次郎と似たり寄ったりの彼女である。

（私には……何も無い……）

阿求のように彼の気を引きそうな知識や経験など持ち合わせてはいない。

話が合うのは剣術の事くらいだ。それもここ数日の稽古でほぼ出尽くしてしまった。

ここで読者諸兄に明記しておきたいが、彼女はまだ宗次郎に好意を持っていることに気付いていない。ここまで思い詰めておいて今更なにをと思われるかもしれないが、意外と“なんの為に思い詰めているのか”に対して気が付かないものなのである。

幽々子に散々からかわれている妖夢だが、それでも自分の気持ちに気付いていない辺り、彼女もさうとう天然である。むしろ、宗次郎の方が彼女の気持ちを把握していると言っていいたろう。

そんな宗次郎も自分の気持ちの整理がついていない状態である。



故に彼女に対してその気持ちを汲み取るような事はしていないし、なんのアプローチもしていない。

ある意味、不義理ともいえる態度であったが、彼としては自分の気持ちをはっきりしない内に妖夢の気持ちに応えることのほうがよっぽど不義理であろうと考えていた。

それが吉と出るか、凶と出るかはまだ分からない。だが、急いては事を仕損じるという言葉もある。彼はその言葉に従った方がいいという己の勘を信じることにしたのだ。

さて、宗次郎がそんな想いを抱いているとは知らない妖夢は、鬱々とした心境であるためか、その箸の運びはあまりにも遅く、食は進んでいない。

会話しながら食事をしている二人の方が速いくらいである。

そんな彼女の様子に気付いていた阿求は、先ほどから妖夢をずっと気に掛けていた。ちなみに彼女が頼んだのは、かけそば（山菜御飯付き）だったりする。

（冗談で言っただつもりだったのですが……これは不味いですねえ）

自分の行動がかなり迂闊であったと後悔している阿求。

冗談とは恋人云々と言ったことに対してである。

彼女は見た目こそ十歳そこその少女ではあるが、長年、輪廻転生を繰り返してきた影響か、その精神的成熟度は極めて高い。

その為、今現在の妖夢の心境がどのようなものなのか概ね理解していた。

そこで助け舟をと思い、何度か妖夢にも話題を振ろうかと思ったのだが、それは下手をすれば憐れみを伴った侮辱と受け取られかねない。何より、邪魔をしているのは自分なのだ。そんな自分から話題を振るのは論外である。

であれば、さっさと食事を済ませ、会話を切り上げてこの場を立ち去るしかない。

だが、思った以上に宗次郎の話に興味が沸き、その上、普段はほとんど知ることができない紫や幽々子の日常の話も聞くことができた為、中々話を切り上げることができずにいた。

更に、食事を早く済ませようにも決して頑丈とは言えない自分の体ではこのペースが限界である。無理をすれば体を壊し、家の者に迷惑をかけてしまうであろう。

それに宗次郎が自分のことを色々と尋ねてくれるのも嬉しくないわけではなかった。

彼女とて女性である。美形といって差し支えない若者との会話が楽しいのだ。

そんなことを感じてしまう自分に嫌気が差す。輪廻転生を繰り返すために普通の女性としての幸せなど、とうの昔に放棄したはずではなかったのか？と。

三十路まですら生きられない寿命。転生前に何年も前から準備をしていなければならぬ環境。閻魔に許しを請わなければならない身。稗田家の長としての立場。

いずれにおいても人並みの幸せなど彼岸よりも遠い彼方の話である。

そんな自分が他者の想い人から興味を引かれていいはずがない。

その想いが表に出てしまったのか、宗次郎の話にも曖昧な返事しか返さなくなり、いつしか食事の手もほとんど止まってしまった。

なんとも暗い雰囲気となってしまった食事の席。

女性二人が黙り込んでしまったのを見た宗次郎は……

（あちゃー……これっていわゆる “ やっちゃった ” ってヤツなのかなあ？）

かなあも何もその通りである。

（ううむ。こういう場合はどうすれば……）

とりあえず、頭を落ち着かせるためにお茶を含む。

“ 空気嫁 ” “ KY だろ j k ” “ リア充氏ね ”

「ぶふっ!？」

自分の知識を総動員しようかと思った瞬間に浮かんだ単語がそれであった。

思わず含んだお茶を噴出しかける宗次郎。ちよつと鼻から出た。

色々と偏った単語ばかりのような気がするが、気にしたら負けだろう。たぶん。

ゲホゲホとむせ返る彼に隣で座っていた妖夢が慌ててハンカチを取り出す。

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、いえ。ゲホッ……すみません。ちよつとお茶が肺の方に……ケホッ」

未だ咳き込む彼に妖夢は背中をトントンと叩いたり擦ったりしてあげている。

そのなんとも仲睦まじいと言える様子に、阿求はホッと胸をなでおろしていた。

「まあまあ。慌てなくてもお茶は逃げませんのに……」

対面に座る彼女は宗次郎の世話を妖夢に任せ、コロコロと慈しむように微笑む。

「ケホッ……あはは。そうですね、失礼しました。お茶はかかりま

せんでしたか？」

その言葉に大丈夫ですよと答えた阿求は、店員を呼んで替わりのお茶を頼んだ。

幸か不幸か、彼によって暗い雰囲気は払拭され、穏やかな空気が流れていく。

（……どうやら気を遣っていたようです。妖夢さんも良い殿方を見つけられたようです）

（すみません、宗次郎さん。私が至らないせいで阿求様ばかりか貴方にまで……）

もしも宗次郎に覚り妖怪の能力があれば、盛大な勘違いをしている二人の考えを読み取って冷や汗が止まらなくなっていただろう。

だが、勘違いにせよなんにせよ、場の空気が元に戻ったのは喜ばしいことである。

やがて食事が終わり、まったりとお茶を飲みながら妖夢も交えて雑談に興じていると、阿求から宗次郎に頼みたいことがあると告げられていた。

「僕を『幻想郷縁起』に？」

「ええ。ご存知かもしれませんが、私の能力は『一度見た物を忘れない程度の能力』です。その能力を使って『幻想郷縁起』を執筆しているのですが……宗次郎さんのことも是非掲載させていたいただきたいのです」

そう告げられ、さてどうしようかと宗次郎は考える。

『弱肉強食』の理念からすれば、見知らぬ相手にも自分のことを知られかねない頼みごとなど断らなければならないことであつた。

かの孫子曰く 『敵を知り己を知らば、百戦して危うからず』  
の名言もある。

――だが。

「ええ。構いませんよ」

意外にもあつさりと了承する宗次郎。

多少、考えるそぶりを見せただけに阿求も妖夢も少々あつけにとられる。断るのではないかと思っていたようだ。

しかし、宗次郎は思い返していたのだ。先ほどの阿求の言葉を。

『幻想郷にようこそ――』

そう。ほんの昨夜のことであつたが、八雲家の宴会において皆からその言葉を送られ、迎え入れてくれたのだ。その喜びは言葉には代えがたいものであつた。

『幻想郷は全てを受け入れる。それはとてもとても残酷なことなのよ』

宴会の席でその言葉を零していた紫の姿を思い出す。

哀しんでいるような。誇るような。後悔しているような。慈しむような……そんな様々な想いが込められた彼女の顔を、宗次郎は生涯忘れることはないであろう。

（幻想郷は僕を受け入れてくれた……）

だからこそ彼はこう思う。

（だからこそ、僕も幻想郷を受け入れようと思う……）

受け入れるということは、その全てに責任を負うということでもある。

紫が “残酷なこと” と言ったのは、その辺りの意味も含んでのことであろう。

「本当によろしいのですか？」

「ええ。僕でよろしければ是非掲載してください」

「よろしいものにも、私からお願いしていることですから。本当にありがとうございます。では、さっそくですけど貴方の能力について――」

「はい。僕の能力は三つありまして、まずは――」

その会話を聞きながら妖夢は思う。

（宗次郎さんは本格的に幻想郷を受け入れることを決意してくれた……）

なぜそう思ったのかは彼女にもよく分からない。強いて言えば、女の勘であろうか。

阿求と話す宗次郎の、いつそ清々しいとも言える顔は、その勘が信じるに足るだけの根拠があるということを持たせてくれている。

（……ならば、私も……）

無意識の内に傍らに置いた刀、楼観剣に手を伸ばす。

彼女の中でとある決意が生まれようとしていた。

鞘を握る手に力が籠る……



「もうすぐ着きますよ。あれが博麗神社です」

「……思ったほど大きくはないんですね。この大結界の要となる場所だそうですから、もっと大きいのかと思っていたんですが……」



「確かにそうですけど、重要なのは神社の大きさではなくて “ 神社がそこに在ること ” そのものですから、小さくても問題はないんです」

って、紫様がそう仰ってました。と、最後に小さく付け加える妖夢。

その様子はすっかりいつもの彼女である。

彼女の中でなにかがあったようではあるが、自分から聴くのは無粋であろうと宗次郎は思っていた。そうしたほうがいいと、勘ではなくそう判断したようだ。

「それにしても……こんなにたくさんの手土産を頂いてしまって本当によかったんでしょうか。なんだか阿求さんには悪いことしたような気がしますね」

そう言った彼の両手には持ちきれないほどの包みが下げられている。

その中身は饅頭や大福といった和菓子に玉露などの高級茶が入っていた。

阿求との別れ際、彼女が隣の団子屋からはもとより、彼女が最上になっている和菓子屋や御茶屋からも大量の手土産を持たせてくれたのだ。

そのために稗田家の家人が奔走するはめになったのだが、これは別の話であろう。

「まあ、いいではありませんか？　阿求様もお邪魔したお詫びに  
て言ってみましたし」

妖夢にしては気軽な言い方である。心なしか、言葉も弾んでるよ  
うに聞こえた。

「でも、手土産どころかお昼の御代までお世話になってしまいまし  
たし……今度伺う機会があったら何かお礼をしなければ……」

妖夢の言葉に少々違和感を覚えたが、聞いたところで答えてはく  
れないであろう。

それは手土産を渡された際、阿求が妖夢と二人きりで何やら話し  
込んでいた時もそうであった。

何しろ二人で話すことがあるからと、わざわざ宗次郎から離れた  
ところで会話をし、人里から出て飛び立った後もそれについては教  
えてくれなかったのだ。

『女同士の秘密です♪』

そう答えてくれた彼女の笑顔は眩しいほどであった。

（霖之助さんのときもそうだったし。なんだか人に会うたびに秘密  
が増えていく気がするなあ……）

と、内心でばやく宗次郎であったが、その笑顔の前には何も言え  
なかったりする。

「その時のことはその時になってから考えましょう。ホラ、もう着きましたよ?」

妖夢の言葉通りに神社の鳥居が目の前に見える。

「はは。それもそうですね……っと、どうやら境内には先客が居るようです」

「……そうみたいです。複数の気配を感じます。ですが、気にする必要はないでしょう。最近の博麗神社は妖怪達の寄り合い所みたいになってますから」

それって妖怪退治を専門とする巫女の住処としてどうなのか。

色々とそう突っ込みみたい衝動に駆られる宗次郎であったが、気にしたら負けであろう。常識が通用しないのが幻想郷という所なのだから。

「……そうですか。では、とりあえず行きましょう」

「? 宗次郎さん? そっちは社務所ではありませんよ」

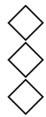
社務所とは神社の事務所のような所である。この神社の場合は自宅も兼ねていた。

博麗の巫女、霊夢はいつもこの社務所の縁側でお茶をすすってるか境内の掃き掃除をしているかのどちらかだそうである。

その社務所には向かわず、本殿の方に進む宗次郎。

「妖夢さん。神社にきてすることと言えば一つではありませんか？」

そう告げた宗次郎の顔は、実にいい笑顔であった。



博麗神社の巫女。博麗 霊夢は暇を持て余していた。

「はあゝ。最近は異変も起こらないし暇ねえゝ。ま、平和なのが一番だけど」

しかし、そんな彼女にも悩みがあったりする。

「私らが来てるのにそりゃないぜ。茶菓子もないなんて泣けてくるんだぜ？」

「私としてもこうも何も起こらないということは記事になる事件もないってことですよ？」

「……なんであんたらがココで駄弁ってるのよ。そっちの方が泣けてくるわ」

霊夢の言葉に反論するかのような言葉が二人の人物から放たれる。

縁側に腰掛けながらお茶をすすめる彼女にとって、最近はお茶の異変で関わってきた妖怪達がこの博麗神社にたむろするようになったのが悩みの種であった。

今日は二人とまだ少ない方である。

尤も、一人は妖怪ではなく知り合いの――あくまで知り合いである――人間である。

その人間の名は霧雨 魔理沙（きりさめ まりさ）。

『魔法を使う程度の能力』を持ち、様々な攻撃魔法を駆使する少女である。

「弾幕はパワーだぜ」が口癖であり、実際のスペルカードにもその言葉が如実に現れており、箒に乗って空を飛ぶことが魔女のポリシーだと固く信じている。

服装は白のブラウスに黒のサロペットスカート（吊りスカート）。スカート部分にはエプロンドレスのようなエプロンを付けている。頭には黒のトンガリ帽子を被り、箒を持った姿はお伽噺の魔女そのものである。

通称 『白黒の魔女』 と言われるだけに白と黒のコントラストが目立つ格好だ。

「まあ、そう言うなよ。知らない仲ってわけでもないんだし。なあ、文」

「そうですよ。それにココにいくると何か記事になりそうなのが起

きる気がするんですから、そう邪険にしないで下さいな」

「だったらたまには賽銭箱に入れるものを入れてからにしないよ。はあ……」

そしてもう一人。霊夢に溜め息を吐かれた相手は妖怪である。

名を射命丸 文（しゃめいまる あや）と言い、鴉天狗の一人であった。

『風を操る程度の能力』を持ち、その能力で様々な噂話を集めているという。

普段は妖怪の山に住んでいるが、彼女が執筆している新聞『文々。新聞』に掲載する記事を求めて幻想郷を西へ東へと飛び回っているのだ。

服装は白地に袖と胴に黒のラインが入ったYシャツに黒のリボン。フリルのついた黒いミニスカートに一本歯の天狗下駄。

だが、鼻緒がついた下駄ではなく何故か今風の靴になっていた。頭には山伏のような六角形の頭巾（ときん）を被り、左右に白いボンボンのような綿毛が連なっている。

そして手に持つのはカメラ。

なんとも現代的であり、本当にココが文明と隔絶した秘境の地なのか疑わしくなる。

最近では外来人の影響なのか『幻想郷のパパラッチ』などというありがたくもないあだ名で呼ばれることもある彼女であった。

溜め息を吐かれた文は何か言おうとしたが、そのまま口を閉ざす。

「? どうかしたのか?」

魔理沙が不思議そうに尋ねると、若干訝しげな表情でそれに答えた。

「誰かが境内に入ってきたようですが……変ですね。こちらには向かっていません」

「なんだあ? まさかとは思うけど、参拝客とかか?」

「……ホントにそうならいいんだけどね。どうせ妖精辺りがいたずらしに来たんでしょ」

文の言葉に白黒と紅白がそれぞれ適当な答えを返す。

そして揃って鳥居の方を見るが、既に神社の本殿に隠れて姿が見えなかった。

「どうやら二人のようですが……あやや。一人は妖夢さんですね。この気配は覚えがあります」

「なんだ、妖夢かよ。それでもう一人は誰なんだぜ?」

「……それが覚えがないですねえ。初めて感じる気配です……って、あ!?!」

「? どうしたのよ」

「あつ。いえ、そう言えば。最近白玉楼に滞在している客人が居るという噂が……」

「へえ？ 冥界に滞在だなんて物好きだな。で、誰なのか知ってるのか？」

「いえ。ここに来る前にその噂を確認しに白玉楼に行っただんですが、何故かスキマ妖怪の式が居て追い返されてしまいました。妖夢さんが居ないなんておかしいとは思っただんですが……」

「ってことは、そのもう一人って……」

彼女達がそれぞれ憶測を述べ合っていたが、おもむろに霊夢が立ち上がった。

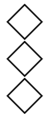
「……この音は！？ （シュパッ！）」

「お、おい。霊夢……って、もう居ねえ！？」

「速いですね……私とタメはれそうなくらいでしたよ」

疾風のごとき速度で縁側から居なくなった霊夢。

何が起こったのやら……





パンパンと手を打ち鳴らす音が境内に響く。

二礼二拍一礼。

まさしく正しい神社への参拝の仕方であった。

と、そこに……

（ドビュン！）「い、今、賽銭を入れたのは貴方！？」

「あ、はい。初めまして。博麗 霊夢さんですね？ 僕は瀬田 宗次郎。この度はご挨拶に伺いまし……たあ！？」

そこに居たのはご周知の通り宗次郎と妖夢である。

だが、霊夢の目には妖夢など入っておらず、又、宗次郎の挨拶の言葉すら耳に入った様子もなくまっしぐらに賽銭箱へと突貫してきたのだ。

思わず仰け反って避ける宗次郎。

賽銭箱の中を食い入るように見つめる霊夢。

ひのふのみの……と、賽銭の金額を数えているようだ。一体いくら入れたのやら。

「……ようこそ博麗神社へ！ お茶でもどうぞ！ 上がっていった下さい。あ、茶菓子も用意しますね！」

「え？ え？ ええと？？」

「はあ……宗次郎さん。おとなしく着いて行きましょう（やっばりこうなったか……）」

霊夢に引きずられるように社務所へと向かう。

そんな彼を見て、思いつ切り溜め息を吐きながら妖夢も後を着いて行くのだった。

瀬田 宗次郎と博麗 霊夢。

これが二人の初めての邂逅であった。

『答え』 は、引きずられても見つけるべき……ものなのか？

## 第十一話 ― 想いと決意と博麗の巫女 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

どうにも霊夢のキャラが掴みきれいていません。

神だろが大妖怪だろが閻魔だろが平等に扱うのが彼女のデフォだそうですが……上手く表現できればいいんですけどね。(汗)

そしてAQNファンの皆様、ごめんなさいです；；

彼女を空気の読めないキャラにしちゃった感じです。

一応のフォローはしましたが……はてさて。

やっぱり予定にないキャラを出してはいけないということなんでしようね。

ちよつとネタバレしますと、本当はけーねせんせーの定番だったんですが、どうしてこうなっ(r y

いやもう、ホント。両方のファンにごめんなさいです。

こんな作者ですが、お見捨てなきよう願います。

## 第十二話 ― お茶とカラスと博麗と ― (前書き)

なんとかギリギリ……かなあ？

文の羽に関しては独自の設定にさせてもらいました。

それにしても、私の作品は安定してないなあと思う今日このごろw

では、本編です。

追記…ちよこちよこつと修正……やっぱり不安定だ(ノ、＼、)

更に追記…アクセス解析なんてあったんですね……(↑アホ)

見てみたらびっくり、PV10万突破！ ユニーク1万2千突破してました！！

皆様、本当にありがとうございます。

更に更に(r y

申し訳ありませんが、次話の更新が日曜日辺りになりそうです。

お待ち頂いている方はもう少しだけ待っていてください。

理由はまあ……急遽旅行に行くことになりました(^^;;

では、行ってまいります^^ノシ

## 第十二話 ― お茶とカラスと博麗と ―

「ふむふむ、なるほどなるほど。それで半妖になってしまったと」

「ええ。まあ、詳しい原因は紫さんにも分からなかったそうですけど……」

ポカポカとした陽気に包まれる、昼下がりの午後。

場所は博麗神社にて、宗次郎は新聞記者を名乗る鴉天狗から取材を受けていた。

鴉天狗――射命丸 文は、手に持ったメモ帳に羽ペンでスラスラと書き込んでいく。

彼女の足元には一羽のカラスがちよこまかと纏わりついていた。

「宗次郎さん。その天狗は事実を面白おかしく捻じ曲げた記事しか書きませんから、まともに受け答えする必要はありませんよ」

妖夢が出されたお茶をすすりつつ宗次郎に忠告する。

若干疲れたように言い放つその様子は、言うだけ無駄かなと思っ  
ているようだ。

実際、縁側に腰を下ろしてまったりとお茶をすする宗次郎は、一

人立ったまま彼の正面からあれこれと尋ねる天狗の質問に、律儀に答えている。

彼の隣に座る妖夢は含んだお茶を咽に流し込むと、チラリと横目でその様子を窺い、ハァ〜と諦めの溜め息を吐く。もはや処置なしと判断したようだ。

そんな彼女に天狗がペンを走らせる手を止め、首を向けて反論する。

「あやや。これは異なことを仰る。この射命丸 文。常に清く正しくがモットーですよ？」

「どの口がそれを言いますか……」

「あ、あはは……」

文の言葉に呆れた目を向ける妖夢と、苦笑いするしかない宗次郎。どうやら処置なしと判断されたのは、天狗の方であったようだ。

ところで、いつもならここで口を挟んできそうな白黒の魔法使いと、この神社の巫女であるが、彼女達の姿は縁側にも庭にも見当たらない。

では、どこに居るのか。

実のところ、さっきから彼女達の声は聞こえていたのだが、特に表記していなかっただけである。

それでは、その会話……と、いうよりは、言い合いの様子を以下に表記する。

「ちょっと魔理沙！　なに勝手に箱開けてんの！？　それは私が貰ったものよ！」

「こんなにいっぱいあるんだからちょっとくらい譲ってもバチは当たらないんだぜ？」

「いっつも人ん家（ち）の物を勝手に持っていくクセに何言ってるの！？」

「いいじゃねーか。ケチケチしてると早く老けちまうんだぜ？」

「16で老けたらたまらないわよ！　……はあ、まったく。開けた物はしょうがないけど、その代わり食べていいのはそれだけよ？」

「はいはい。分かってるって……お！　大福かあ。これ大好物なんだぜ」

「ちゃんとみんなにも配りなさいよ？　……あら、それってあの有名店のお勧め品じゃない。さすが稗田家ね、最良にしてる店も一味違うわ」

「それを言うならこれもじゃないか？　これなんて滅多に口にできない代物だぜ」

「そ、それは！？　あの和菓子屋の最高級品！　和三盆を贅沢に使った一品じゃない！　ダメよ魔理沙！　それを開けたら夢想天生よ！！　あっ。これって高級茶葉、玉露の一番茶じゃない！　ああ。夢みたいだわ。あ！　こっちも……」

「開けただけで極悪スperlとか酷いんだぜ……へえ。こっちはあの団子屋のお勧め品詰め合わせじゃないか。おっ。これも……」

以上。宗次郎が持ってきた手土産を漁る白黒の魔法使いと、それを咎めつつも結局は許してしまう紅白の巫女が一緒になって土産品

を物色している光景であった。

社務所の居間。開きっぱなしの障子から室内の様子が丸分かりなのだが、彼女らは人目を気にすることなく包みを広げ、普段、お眼にかかる機会のない品々に眼を輝かせていた。

「……後で阿求さんには重ねて御礼を言わなきゃいけませんね。こうも喜んで頂けたのなら運んだ甲斐があつたというものです」

背後から聞こえる彼女たちの会話に、宗次郎は笑みを零す。

「それはそうかもしれませんが、別に阿求様の名を出さなくてもよかったのではありませんか？ 元々手土産は持つていくつもりでしたし……」

これでは阿求の……というより、稗田家の使い走りではないか。

言外にその言葉を含ませる妖夢。

口には出さなかったその言葉を正確に読み取った宗次郎は彼女の方へ振り向く。

——阿求様もそのつもりで持たせたわけではないんですよ？——

彼女の目が、その言葉を雄弁に語っていた。

宗次郎もそれに同意して一つ小さく頷くと、苦笑を消して自分の意見を述べる。



「確かにその通りですけど、御代を出してくれたのは阿求さんです。それに、あの人も博麗の巫女になんらかのお礼がしたかったんだと思いますから」

異変解決のお礼をね……と、言葉を続ける。

それは間違いではないであろう。

これまで数々の異変を解決してきたのだ。なんらかの形でお礼をしておきたいという思いが彼女にあったのは事実である。

しかし、病弱な身体で忙しい日々を送る身。中々その機会がなかったのだろう。

そんな時に宗次郎たちと出会ったのだ。良い機会だと思ったようである。

彼らが手土産を買っていくと聞いて、事のついでという訳ではないであろうが、自分からの感謝の気持ちも持って行って貰いたかったようだ。

それを、彼が決して長いとは言えない会話の中で読み取れたのは偶然ではない。

彼自身は他者の心の機微に聡い方だと思ってはいなかった。

だが、幼少期に受けた虐待の日々が、彼に他人の顔色を窺うことに慣れさせてしまったのだ。彼としてはなんとも不本意なことであったが。

本人としては認めたくないところであろうが、結果として阿求の思いに気付くことができたのである。運命の皮肉としか言いようがなかった。

妖夢の想いに気付けたのもそれ故であろう。

『楽』以外の感情を封じていた間は他者の考えに気付くことはあっても、その感情——想いなどに気付くことはなかった……否。気付けなかったのだ。

しかし、今の彼は違う。幼少期のように他者の感情に敏感になってきていた。

阿求の場合ならばそれに応えることは容易だ。それを叶えることはできるし、こうやって届けることもできるのだが……

妖夢の想いにはどう応えればいいのだろうか？

自分の気持ちすら定まっていない現在。未だに応える術すら解らないでいた。

以前にも記述したが、初恋すらまともにできなかった彼である。誰かに相談すればいいのだが、その発想すら出てこないのだ。

宗次郎が自分の思考の海に沈みかけようとしていたその時、それを撃ち破る能天気な声が彼の思考を現実の世界へと呼び戻す。

「あやや？ それは変ですねえ。私も巫女が異変解決に関わっていたというのは聞いていますけど、あまりにも内容が内容ですので裏が取れるまでとは思って記事にはしていないんですが……」

故に阿求がそれを知っているのはおかしいのでは？ と、天狗が言葉を続ける。

情報伝達手段が限られるこの幻想郷では、彼女たち鴉天狗のバラ撒く――決して配達などではない――新聞も重要な入手方法ではある。某月の頭脳からは『学級新聞ね』などと評されてはいるが。

だが、別にそれだけが唯一という訳でもないのだ。

その辺り、自分達の書く新聞に対して過信している節が窺える言葉であった。

しかし、この天狗。目の前の二人が無言のやり取りをして独自のフィールドを形成していたというのに口を挟んでくる辺り、空気が読めているのかいないのか……

「ええと。文さんでしたね？ 稗田家は八雲家や西行寺家の他に閻魔様や死神とも縁が深いということをご存知ないんでしょうか？ おそらくはその筋から聞いていたんだと思いますけど……」

「あやや。これは一本取られましたねえ。確かにその可能性を考えていませんでした。それにしても文 “さん” だなんて呼ばれるのは初めてですねえ。文でいいですよ？」

「いえ。年上の女性を呼び捨てにするのは慣れていないんです。なので、文さんと呼ばせて頂きたいのですが……ご迷惑でしたか？」

と、宗次郎が小首を傾げ、若干遠慮がちの笑顔で尋ね返す。

「あやややや!？　べ、別に迷惑ではないんですけど……」

その笑顔を真正面から受けた文は両手を左右に振って早口で答えていた。

その顔はほんの少しではあるが、赤くなっているようだ。

これは惚れた腫れたというよりも、照れ臭かったのが大半を占めているようである。

何しろ、これまで彼女が取材してきた対象からは邪険にされるか、鬱陶し気な顔でさっさと済ませてくれと言わんばかりに受け答えしていたのがほとんどであった。

その為、このように丁寧な態度で取材を受けてくれた上に、さん付けで呼ばれることに慣れてはいなかったのだ。

そんな彼女の様子を微笑ましく見ている宗次郎と、ムツとした様子でジト眼を彼に向ける妖夢。三者三様の様子の違いが実に微笑ましい。

「ほくらね。やっぱり私の武勇伝を記事にしておけばよかったのよ……って、何慌ててんの？　あんた」

そこに手土産の整理が終わったのか、紅白の巫女が話しかけてくる。

その後ろから白黒の魔法使いが頭を痛そうに押さえながら歩いてくるのが見えた。よく見ると見事な金髪の間からコブが覗いているようだ。何をしでかしたのやら。

「あやや!？ いえ、なんでもありませんよ。なんでも……」

「？ ま、いいわ。ええと、宗次郎だっけ？ お賽銭入れてくれた上にいっぱい手土産まで持ってきてくれてホント感謝するわね。ほら、魔理沙。ちゃっちゃとくばりなさい」

「ててて……ちょっとしたおちゃ目なのに本気で殴ることはないんだぜ……」

手にお盆を持った魔理沙が頭を押さえながらぼやくが、当然、そんな抗議は無視される。盆の上には饅頭や大福、三色団子が盛り付けられた皿が乗っていた。

おそらく彼女が霊夢の言葉も聞かずにあれこれ開けて取り出したのだろう。高級品が乗っていない辺りは彼女なりに自重したのか、それとも開けようとして殴られたのか。様子を見るにどうやら後者のようである。

「いえ。喜んで頂けてなによりです」

振り返って答える宗次郎。

改めて霊夢の格好を見ってみるが……

(……どうして腋が空いているんだろう)

何度見ても思い浮かぶ疑問はそれであった。

確かに紅白なところは巫女服と言えなくも無い。

しかし、よく見れば現代風の衣装を巫女服に見えるように改造しているとした言いようがなかった。

ノースリーブの赤いベストに、襟元は白いセーラー服風になっている。

その襟には山形の赤いラインの刺繍にフリル付き。

胸元を飾る黄色いスカートのタイが紅白の中で目立つアクセントになっていた。

下は一見すると袴のようだが、実際は膝下まである赤いロングスカートである。

そのスカートの裾には白いフリルが付いていた。

髪はクセのない黒く艶やかなストレートヘアで、長さセミロングほど。

それをポニーテールにし、これまた赤いフリル付きの大きなリボンで留めている。

更に、左右のこめかみから流れる髪を赤い髪留めで一房ずつまとめられていた。

足元は白いレース付きの靴下……かと思いきや、親指だけが独立していて、足袋なのか靴下なのかよく分からない作りとなっている。軒下に置かれているのは赤いパンプス風の靴と、頭の前から足元に至るまで、胸元のタイ以外は全て紅白でまとめられていた。

しかし、やはり一番目立つのが両腕にある和服風の袖であろう。

上着から独立した純白の袖を二の腕部分にある赤い帯で留めており、手首の方に向かうに従って裾が広がっていく作りとなっていた。袖口にも二の腕と同じく赤い帯のラインがアクセントになっていた。その広い袖口だけを見れば和服の袖に見えないこともない。

宗次郎にしてみれば、見れば見るほど奇妙としか言いようのない服装であった。

尤も、腋から覗くサラシらしき白い布には極力眼を向けないようにしていたが。

しかしどうしてか、その服装について聞く気になれないのだ。

おそらく聞いてはいけないことなのだろうと結論付ける。

「あやや。私まで頂けるんですか？ それじゃ遠慮なく」

宗次郎が一人、訳の分からない納得をしていると、白黒の魔法使いが天狗にも土産品を勧めているところであった。

「おお。ありがたく味わって食うといいんだぜ」

なんとも人を食ったような言葉である。

それまでの一連の言動から見て、宗次郎は彼女を裏表のない、いたずら小僧のような困った性格をしているのではないかと推察した。

実際その通りであるし、悪い意味でも裏表がないのだが。

「あんた。まるっきり自分が買ってきたみたいに……あ。気を悪くしないでね？ こいつらはいつもこんな感じだから」

霊夢がフォローとすら言えないフォローを入れる。

「いえ。お気遣いなく」

「酷い言い草なんだぜ？」

「まったくです。それにこいつ “ら” ってなんですか？ 魔理沙さんならともかく……」

「あつ。ひつでえカラスだぜ。私のどこをどう見ればともかくなんだ？」

「……あんたはもっと自分を振り返るってことを覚えるべきね」

「過去は振り返るもんじゃないんだぜ。つと、宗次郎だっけ？ お前もそう思うだろ？」

「あはは……ノーコメントで」

「あんたねえ。客人にまでなに同意求めてんのよ？」

「それを言うなら私だって客なんだぜ？ まったく。ちよつと良い男が来たからってなあ」

「私としてはその辺りのことをどう思っているのか是非ともお聞きしたいですねえ」

「あーもー！ ああ言えばこう言う！ 大体ねえ——」

そのまま紅白と白黒による、天狗も交えた口論会に突入していく。彼女達のあまりに濃いキャラクターに、宗次郎も終始圧倒されっ



ばなしであった。

「あはは。みなさん、元気な方ばかりですねえ。ここはいつもこうなんですか？」

隣に腰掛けたまま、会話には加わらず傍観に徹していた妖夢に尋ねる。

「ええ……と。まあ、私が来たときは大抵こんな感じですね」

彼女としてはそれ以外に答えようがなかったようだ。

宗次郎としても、当初描いていた巫女のイメージが完全に吹っ飛んでいた。

だが、考えてみれば当たり前のことである。ココに居る巫女は、抜刀斎でも流浪人でもないこの幻想郷の護り手なのだ。勝手なイメージを押し付けては失礼だろう。

そう考えてから改めて言い争う三人を見つめる宗次郎。

巫女に魔法使いに鴉天狗と、なんともバリエーション豊富な取り合わせであった。

そんな彼女達が一つ所に集まっているなど非常識な光景である。

それはそうであろう。

常識が通用しないのが幻想郷なのだから……

「とりあえず食べませんか？ アレはしばらく放っておけば収まりますから」

妖夢にとってはもはや慣れた光景なのだろう。

その言葉と共に彼の前へと差し出されたのは饅頭であつた。

宗次郎がふと見ると、いつの間にか妖夢の側にお盆が置かれていたのだ。

饅頭を受け取った彼は、ありがとうと礼を言って一口かぶりつく。

妖夢もそれを見て美味しそうにほおばった。

「美味しいですねえ」

そう言ってふと足元を見ると、漆黒のカラスが彼を見上げていた。

お腹が空いているのか、物欲しそうな様子である。

それを見た宗次郎はクスツと微笑を零し、饅頭の皮をちぎって分け与え始めた。

待ってましたとばかりについばむカラス。

「本当に。このお茶とよく合います」

宗次郎の言葉に同意した彼女も、カラスに餌を与える彼の様子を見ると、苦笑して同じように饅頭を分けて上げていた。

ギャーギャーと女三人寄ればなんとやらを実践している彼女達の声をBGMに、まったりとお茶と茶菓子を楽しむ二人と一羽の光景は、傍から見ればなんともシュールなものであった。



「へえ？ それじゃそのうち予知能力みたいなものも使えるのか？」

「そうですね。紫さんもそう言ってました。まあ、今はほんの数秒先を予測できる程度なんですけど……」

「何言ってるんだぜ。弾幕ごっこじゃ無敵の能力じゃないか」

「そうよねえ。弾幕ごっこだけじゃなくて、どんな勝負事にも発揮できる能力よね。例えば数秒先でも相手の手の内を読めるってことはどんな手も通用しないってことなんだし」

「霊夢の言う通りなんだぜ？ 一分一秒を争う勝負事じゃなおさただぜ」

「その上、知識を操るだなんてある意味それ以上のとんでもない能力よ。反則もいいところだわ。謙遜も過ぎると嫌味にしかならないわよ？」

「まったくだぜ。魔法使いの私からすりゃ羨まし過ぎて分けて欲しいくらいなんだぜ？」

能力について説明した後、たいした能力でもないように言う宗次郎に、二人は息の合った反論を畳み掛ける。流石の彼もそれには諸手を上げて降参するしかなかった。

（これがほんのついさっきまで言い争いをしてた二人とは思えないなあ）

冷や汗を一つ流しつつ、心底そう思う宗次郎である。

彼としては紫の境界を操る能力や、萃香の密度を操る能力の方がよっぽどんでもないだろうと思っているのだが、ここは黙っていたほうが懸命のようだ。

尚。香霖堂で見た、咲夜に関する予知らしきものについては教えてはいない。

それがはっきりと予知であると証明できたわけではないし、内容が内容である。

とても人に言えることではなかった。

「それにしても、三つもの能力を持つのは珍しいですねえ。普通は一つ。多くても二つの能力を持つのがほとんどなんですけど」

そう言いつつ、手土産の一つである大福をパクつく鴉天狗。

モゴモゴと口を動かしながらもスラスラと手帳に記入する。

ちなみに現在の彼らは、全員が社務所の居間に上がってちゃぶ台を囲んでいた。

縁側の宗次郎を基点にして時計回りに、霊夢、魔理沙、文、妖夢の順である。

文の言葉に、宗次郎の右手に座る妖夢が発言した。

「それに関しては紫様も幽々子様もはっきりとした原因は分からなかったんですけど、おそらくは、半人半妖になったしまったこと  
“そのものが” 原因ではないかと推察されていました」

「……つまり、人間としての能力と、妖怪としての能力が同時に発現してしまったってこと？ そんなことありうるのかしら……」

「それについてはなんとも言えないと仰ってました。何しろ前例がないことなので」

妖夢の発言に霊夢が疑問を呈するが、そこまでは分からなかったようである。

「でもさあ。それなら慧音とかはどうなるんだ？ あれも人から半人……半獣だったか？ ……に、なったんだろ？」

「でも、あの人の場合もかなり特殊よ？ 通常は『歴史を食べる程度の能力』。で、満月するときだけハクタクになって『歴史を創る程度の能力』になるんだし」

「そうですねえ。複数の能力を持つ方に対しての検証なんて誰もま

ともにしてはいないでしょうし。唯一それに近いことをしている稗田家の御阿礼の子も詳しいことは分かっているようですから」

魔理沙、霊夢、文の順でそれぞれの意見を述べるが、結局は誰にも分からないということが分かったとしか結論の出しようがないようである。

宗次郎としては、歴史を創るだなんて一番とんでもない能力なんじゃないかなあと団子をほおぼりつつ考えていたが、空気を読んで沈黙していた。

「うゝー……あーもう、やめやめ！ 分からないことをあれこれ言い合ったってどうしようもないんだぜ」

なにやら考え込んで煮詰まったのか、唸っていた魔理沙がこれ以上の議論は無意味だと結論付けた。元々考えることが得意ではないようだ。魔法使いのクセに。

「そうね。魔理沙の言うとおりだわ。それで宗次郎はこの後どうするの？ 挨拶回りっていつでも幻想郷は結構広いんだし、よかったら泊まっていてもいいのよ？」

あ。ついでにその半霊もね。と、言葉を続けた巫女の言葉に、魔理沙と文は目を剥いて驚きを露（あらわ）にし、妖夢は意外そうにしつつも最後の言葉に眉を寄せ、宗次郎は苦笑して肩をすくめていた。

「……なによあんたらその反応は……」

各々の反応に霊夢は憮然としながらお茶をすすする。

「いや。意外なんだぜ……霊夢がそこまで親切にするっていうのが……」

「……これはスクープですねえ。見出しは『博麗の巫女。若い男性と一夜限りの同棲!?!』に決まりですね。これで発行部数も……アダッ!?!」

魔理沙がとんでもないものを見たと言わんばかりの表情で（霊夢にとっては）失礼極まることを言い放ち。それに釣られた文が、どこのスポーツ新聞の見出しだと言いたくなるようなことを言った瞬間、霊夢のお札が彼女の額に命中していた。

——見事な突っ込みだと感心はするが、どこもおかしい所はないな——

（何を考えているんだ、僕は……）

今の一連のやり取りで宗次郎の頭に浮かんだ言葉であった。

「まったく。そろいもそろって失礼しちゃうわ。それにねえ、妖夢も一緒なんだからそんなことになるわけないでしょうが。だいたい“年下”の男の子に興味なんてないわよ。いくら半妖と言ったってまだ成り立ての「ちょっと待って下さい」……なによ、妖夢?」

霊夢が二人に文句を言い、反論を述べていると妖夢に言葉を遮られた。

ギロリと睨まれて一瞬ビクツとする彼女であったが、妖夢として

は聞き逃せない単語があったのだ。

「今、宗次郎さんのことを年下と言ったようですけど……」

「ん？ 年下か精々同じ年なんじゃないの？ それくらいにしか見えないわよ」

「違うのか？ 私もてっきり同じ歳ぐらいじゃなかったって思ったんだぜ？」

妖夢の言葉に紅白と白黒がそろって同じようなことを述べる。

ちなみに文はちゃぶ台に突っ伏して沈黙していた。

プスプスと額から煙が上がっているようだが、誰も気に掛けてはいなかったりする。

一応、宗次郎がチラリと見ていたが、ピクピクと動いているのを見て死んでるわけではないようだとは判断し、二人の勘違いを訂正するために自分の年齢を述べた。

「こう見えても一応は18になります。まあ、藍さんが言うには飛び越えた時間も加えればもっと年上になるんじゃないかってことですけど。とりあえず年齢はそれで認識しておいて下さい」

そう言ってお茶を一口する。

一瞬、何を言われたのか判断できずポカンとしていた二人であったが、やがて彼女ら口をあぐりと開くのと、突っ伏していた文がガバッと起き上がるのは、ほぼ同時であった。



「ええー！？」

さして広いとはいえない社務所の居間に、驚愕の三重奏が響く。

うるさそうに顔をしかめる妖夢と、もう慣れた反応なのか、そ知らぬ顔のままお茶をすする宗次郎の様子がやけに印象的な一コマであつた。



どこまでも澄んだ青空の下。

場所は妖怪の山と呼ばれる幻想郷でも髄一の高山を誇るその一角。

山腹に生える木々の中でも一際高い見事な松の木があつた。

その松の木の高い枝に舞い降りる影が一つ。

幻想郷最速を誇る鴉天狗。射命丸文であつた。

枝に降り立った彼女は広げていた見事な漆黒の翼を折り畳むと、どのような仕掛けになっているのか、背中の肩甲骨あたりに収納されていった。

「さて、と……」

そう一言呟き、杖に腰掛ける。

そして、左足を右足の膝に乗せるというなんとも女性らしからぬ足の組み方をする、お供のカラスを右肩の乗せた。

「今日は本当にいいネタを仕入れることができたわ」

そう言って手にしている手帳をパラパラと開く。

「しかし、まさか本当に百年以上も過去の人間が現れるなんてね……」

しかも半妖になってだなんて……と、言葉を続ける。

その口調は神社で取材をしていたときとは違ってぎくばらんなものであった。

「さて。これで次の見出しは決まりね」

と、開いた手帳にスラスラと文字を書き加える。

『幻想郷に新たな妖怪出現！？ その正体は元人間の美形剣士……！』

見出しの内容とは裏腹に、その字は少々丸文字で可愛らしかったりする。

更に副題なのか、『今語られる過去からの来訪者の真実とは!?!』と書き足した。

「うーん……この際だし、もうちょっとインパクトある方がいいかな」

そう言って書き直そうとした瞬間、彼女の背後から声が聞こえてきた。

「別にいいんじゃないのお？ 変に凝ると読者が敬遠しちゃうよ？」

ビクツとペン先を動かす手が止まる文。

「……こういう時こそ奇を衒（てら）わずに正道で……ということでしょうか？」

内心動揺しつつも表面上は平静を装った声で答える。

口調も敬語へと変わっていた。

「そういうこと。なにせ久方ぶりに楽しめるヤツが来たんだしね」

「それは誰にとって……でしょうか？ ——」

背中に汗を感じつつも声の方へと振り向いて言葉を続ける文。

「——鬼の貴女にとって……という訳ではないようですね」

彼女の視線の先に見えるのは、空中で寝そべった姿勢のまま瓢箪の酒をかつくろう小さな百鬼夜行——萃香の姿があった。

「さあてねえ。それを決めるのが私じゃないってことだけは確かだね」

瓢箪から口を離してニヤリと笑うその様は、まさしく往年の鬼の姿である。

「……情報の提供感謝致します。最近とみにネタが入らず難儀していたところでして」

萃香の言葉には答えず感謝の意のみを伝える文。

そう。この天狗の新聞記者に宗次郎のことを教えたのは彼女であった。

礼を言われた萃香はというと、文の感謝の言葉に手をヒラヒラと振って応えるのみ。

その態度からなんの感銘も受けていないことだけははっきりしていた。

「ですが、どのような腹積もりで教えていただけたのでしょうか？」

萃香の対応など気にもしていない様子で質問する文。いつの間にか手にした手帳は閉じられおり、空いた手は腰の後ろに回されていた。

「まあたまた。鬼の考えることなんて百も承知のクセにい。相変わ

らず天狗っていうのはコレだから……」

天狗の様子に目を細める萃香。

あっけらかんとした口調ではあるが、どこか感心している風でもあった。

「……さて。私どもでは鬼の方々の考えなど計り知ることとはとてもとても……」

「……まったく。ホントに口が達者だねえ。頭が切れるクセに惚けているのも相変わらずだ。それも、その後ろ手にある天狗の団扇を持ってたままね」

ピクリと動く文の右肩。

やがて諦めたように後ろ手に回していた右腕を前へと差し出す。

萃香の言うとおり、その手にあるのはカラスの羽で作られた天狗の団扇であった。

それは彼女の武器となる道具。

ひとたび扇げば突風を巻き起こすことで有名だが、彼女の場合は多少異なる。

彼女の持つ『風を操る程度の能力』をよりイメージしやすくするための補助の役割を果たしており、それ自体に大した力は宿っていない。

つまり、彼女が手にしてこそ意味を持つ道具なのだ。

文としては、たとえ相手にどんな思惑があろうとも自分のライフワークである取材活動を妨害されるわけにはいかなかった。それがたとえ鬼であろうともである。

萃香としてはそんなつもりなど欠片もなかったのだが、文にとってはどんなに小さな可能性であろうともそれに備えないなどということはありえなかった。

その団扇と彼女の覚悟のほどを見て、萃香は満足そうにウンウンと頷く。

自分の言葉に唯々諾々と従うだけの者などに興味はない。

それだけの気概と能力を持つ者が居るからこそ彼女は天狗を認めているのだ。

だからこそ、その昔、鬼達は後顧の憂いなく妖怪の山を去ることができたのである。

「安心しなよ。別に記事を書くことを止めにきたわけじゃないから。そのつもりなら最初っから宗次郎のことを教えたりなんてしないって」

「それはそうですが、備えあれば憂いなしと昔から申しまして……」

バツが悪そうに言う彼女に、萃香はほがらかな笑い声を上げる。

その笑い声に、文は居心地悪そうにしていた。

「あはははは。確かにね。私から色々聞いていたクセに白玉楼に裏を取りに行ったり、博麗の社（やしろ）で偶然を装って宗次郎を待ち構えてたりするぐらいはね」

その言葉に文は更に首をすくめてしまう。

そう。最初から彼が博麗の神社に立ち寄ることは萃香から聞いて知っていたのだ。

にもかかわらず、あの対応ぶりは中々の役者である。

「それでどうだった？ 新聞記者から見ての感想は」

「……そうですね。物腰は穏やかで礼儀正しいですし、好感の持てる方だとは思いましたが、少々不安定なところを感じました。ですが、仰っていたような『ちょっと危ういところ』 などは感じませんでしたけど……」

それを聞いた鬼の少女は「へえ」とだけ口にし、後はなにやら思案顔になっていた。

（なるほどねえ……人里でなにかあったのかな？）

萃香も他の妖怪の例に漏れず、人里への干渉はほとんど行っていない。

故に、能力を使えばどこに居ようとも彼らの様子を探ることはできるのだが、人里で何があったのかは把握していなかったのだ。

それは鬼の本分からすれば不本意極まりないことではあるのだが、彼女なりに幻想郷のルールには従っているのだ。博麗の巫女と、彼女の長年の友人にある程度の敬意を表しているからこそであろう。

「あの。ちよっとお聞きしたいんですが……」

遠慮がちに文が尋ねてくる。

「ん？ なに？」

「私に彼についての情報を教え、記事にして広めることを勧める貴女の意図が知りたいのですが、よろしいですか？」

その質問に、萃香はとびっきりの笑顔で答えた。

「そりゃもちろん。あいつのことをもっと皆に知って欲しいからさ」

「……それだと多くの妖怪達が彼に興味を持って干渉してくると思いますけど……」

「だからこそさ」

「……過度の干渉は彼にとって害になりかねませんが……」

「分かってないねえ。余興とはいえ、この私に勝った男だよ？ その程度でどうにかなるほどやわじゃないさ。あんたが感じたとおりのらば尚更ね」

そう。皆が興味を持てば皆が彼に干渉してくるだろう。



そして必ず彼を認めてくれるだろう。

確かに少々危ういところはあったが、それでも彼女は彼を信じてみたかった。

なにより、今の天狗の話が確かならば、不安要素はほとんどないと言える。

（まあ、妖夢のヤツがどう出るかで結構左右されるけどね）

それでも大丈夫だと思える確信がある。

何故かは彼女にも分からない。

だが、確信を持てるほどの何かが彼にあるのは確かだ。

だからこそ――

「信じよう。あいつを信じる自分を信じられるならね」

「記者にとって過信は忌むべきものではありませんが……そうですね。信じましょう」

二人はそう言って、揃って博麗神社のある方向を見る。

妖怪の山からは神社の鳥居が霞んで見えていた。

『答え』を得るものは、己を信じていることができる者のみ……かも  
しれない。

## 第十二話 ― お茶とカラスと博麗と ― (後書き)

今回はここまでです。

若干長めになりましたが、皆様いかがでしたでしょうか？  
誤字脱字報告、突っ込み、指摘なども含めて感想をお待ちしております。

こっちにも追記…文の団扇に関してもこちらの独自設定です。  
持っている理由は本文にある通りですが、小町の鎌のような意味合いもあるかとW（つまり天狗らしくて見栄えがいいからW）

## 幕間 その二 ― 疑念と死合 ― (前書き)

お待たせして申し訳ありません。

旅行前に慌てて書いてたもんだからあっちこちに不備が……

書き直し、書き加えをしていたらこんな容量に。o r z

更に今日中に上げるつもりが時間オーバー…… ― ― o r z

今回も『その一』と同じく一人称形式ですが、宗次郎だけでなく他の視点からも試験的に書いてみました。

そのせいで少々読みにくいかもしれませんが、ご容赦のほどを。  
では、本編です。

## 幕間 その二 ― 疑念と死合 ―

― 宗次郎 Side ―

「どうしてスペルカードルールを創ったのか……ですか？」

僕の質問に目をキョトンとさせる霊夢さん。

「暇つぶしに創ったんじゃない……ゴメン。冗談だから睨まないで欲しいんだぜ」

そして横から茶々を入れた魔理沙さんをキッと一睨み。

……すみません。僕もちよつとだけ怖いです。その眼……

さっそく記事にしますね。と言って帰っていった文さんを見送った後。四人で色々と雑談に興じていたんだけど……思い切って尋ねてみた。

紫さん達からも聞いていたけど、本当に上手い方法だと思う。

幻想郷が大結界に包まれてから、妖怪たちは中々人を襲うことができなくなってしまう、段々と気力が落ちていったとか。

人間とは違い、精神面に重きをおく妖怪にとっては死活問題なんだろうね。

他人事みたいに言ってるけど、今の僕って半分はそれなんだよね。実感ないけど。

身体能力が上がったり、感覚が鋭くなったり、治癒能力が上がったりしてるけど、精神的には僕はまだ人間だしね……………だよな？まだ。

まあ、それは置いておくとして。それで氣力が落ちた妖怪達が、当時、幻想郷に現れたばかりの吸血鬼——たぶん、咲夜さんの主のことだろう——につけこまれて次々と配下にされてしまったとか。

それがスペルカードルールが創られた切っ掛けだったんだそう。

まあ、つけこむって言い方はちょっと悪いけど、そうとしか思えないしね。

—— 吸血鬼異変 ——

幽々子さんや妖夢さんから聞いた話だと、幻想郷全体でかなりの数の妖怪が配下にされてしまったとか。まあ、そのころの冥界は幽明結界もちゃんとあって影響もほとんどなかったらしいけど…………でも、空を飛べれば越えられる結界ってこの幻想郷で意味があるんだろうか？ まあ、幽霊たちを外に出さないようにしていた意味はあったただけだね。

でも、実際のところは吸血鬼が冥界に興味がなかったからじゃないかな？ 死んでから逝く場所だし、幽霊だらけだし。

で、その時の異変を解決したのは博麗の巫女ではなく、最も力のある妖怪が力業で叩きのめして、色々と禁止事項を決めて和解したそうなんだけど……二人とも誰がやったのかは知らないそうだけど、これって紫さんがやったんだろなあ。

他に考えられるのは、妖怪の山を統治しているという天狗の総大将——天魔というらしい——くらいだろうか？ でも、山に住む妖怪たちは基本的に排他的で山に干渉さえしなければ関わろうとはしないらしいし、その時は山の妖怪たちも配下になれという勧誘を無視していたそうだから違うんじゃないかな。たぶん。

ま。過度に干渉されて強制勧誘でもされてたら、紅魔館勢力vs妖怪の山という大戦争にまで発展しかねなかっただろうし、そんな幻想郷のパワーバランスを大幅に崩しかねないことなど、あの紫さんが放置するはずがないだろうからね。

それで、解決したのはいいけどこのまま妖怪の気力が減退していくのは不味いと感じた妖怪たちが巫女に相談を持ちかけ、そこで創られたのが弾幕ごっこを基本としたスペルカードルールなんだとか。

まあ、それで最初にそのルールを用いて解決されたのがルールを創る切っ掛けを作った吸血鬼による紅霧異変だっていうのはなんとも皮肉な気がするな。

でも、どうして妖怪退治を生業……にしているのかどうかは分からないけど、基本的な立場は中立とはいえ、比較的人間側よりの博麗の巫女が妖怪たちの相談を受けたんだらうか？

それに、確かに異変を解決しやすくなっただろうけど、逆を言えば異変を起こしやすくしてしまったんじゃないかと思う。まあ、妖怪たちの相談の趣旨がそれだからだろうけど。

なによりも、本来なら巫女と一緒に中心となってそのルールを定め、広く流布することを推し進めても可笑しくないはずの紫さんの名前が出てこなかったのも気になる。

もしかして、ルールを定めたのが『博麗の巫女だから』ということにしたかった？

確かに紅霧異変以降は爆発的にスペルカードルールが広まったらしいけど、逆をいえばその異変がなかったらこれほど広まらなかったとも言える。

何よりも、人間をただの餌としか見ていないはずの吸血鬼が“人間である”はずの博麗の巫女が定めたルールに従って異変を起こしたというのがそもそも可笑しい。

まさかとは思うけど、ルールを広めるために異変を“起こさせた”のだとしたら……

その為に吸血鬼異変の際は巫女を介入させず、力業で解決したんだとしたら……

「——だから悪かったってば。ほら、呆れた顔して見てるぜ？」

「まったくもう……あ。ごめんなさい。ええと、どうしてかってこ



とですけど……」

おっと。考え込んでしまっただけの二人の会話をまったく聞いていなかった。

まあ、さっきのことで言い争ってただけみたいだし、問題ないか。

「いえ。答えにくいことでしたら無理にお聞きするつもりはありません」

僕の方が年上って知ったらとたんに敬語になったみたいだけど……

ま、いいか。僕の方から口調を改めさせる必要はないし、魔理沙さんの方は特に変わりはないけど、元からそういう人の方だよね。

「別に言いにくいってことでもないです。幻想郷では人と妖のバランスがとれた上で成り立っていますから、両者が後腐れなく勝負が尽く方法がないかと思ひまして。それに、妖怪たちの不満が溜まり過ぎれば暴発する恐れもありますし、それを防ぐって意味もあります」

……訂正。違和感ありまくりです。元に戻して欲しい……

言ってることは正論だし、納得もできるんだけどなあ。

「え……？ 毎日暇でしようがないからって引き受けて香霖のところに良い方法がないか聞きに行ったんじゃないかなかったっけか？ 私も香霖からスペカのこと聞いたんだぜ？」

こーりん……香霖？ ああ、霖之助さんのことか。

でも、あの人もスペルカードルールに関わっていた？ ……まさか。

「ちょっと魔理沙、余計なこと言わないの！ ……ええと。まあ実のところを言いますと、霖之助さんのお店に行ったらスペルカードを作っていたんですよ。で、これだって思っただけルール創りを手伝ってもらったんです」

なるほど……でも、なんで霖之助さんがスペルカードを？

僕の予想が正しければこれは……

そう思っただけで尋ねようとしたら、妖夢さんも同じ疑問を持ったらしく、僕が聞く前に彼女が口に出して尋ねていた。

「でも、どうしてあの店主がスペルカードを？」

「んー……なんでも、とある妖怪に簡易式に術を発動させられるアイテムは作れないかって依頼されたそうんだけど、結局誰が依頼したのか教えてくれなかったのよね」

……繋がった……

確証はない。でも、間違いなく紫さんが裏で動いていたんだ。

これはもう一度会って確かめて……いや、無駄か。

聞いたところで上手くはぐらかされるのがオチだろうなあ。

……ひょっとして、紫さんが僕に幻想郷を見て回ってきて欲しいって言ったのは、こんなふう to 色々と “考えさせる” ためになんだろうか……

うーむ。正直、あの人の考えて僕にはよく解らないな。

そりゃ、ある程度の推察はできるけど。

……………ダメだ。

いくら知識があつたって、それを活かせる知恵が伴わなきゃ意味がないや。

「宗次郎さん。どうしたんですか？ 急に頭を振って……」

あ、いけない。無意識に首を振っていたみたいだ。

「いえ。なんでもありませんよ。ちょっと考え事してただけですから」

「そうですか……」

妖夢さん、納得してないみたいだな。でも、こんなこと早々人には話せないし。

「ひょっとして、霊夢の口調が似合わないって思ったとか？ だよなあ。香霖以外でその口調は違和感どころか不気味だと思うぜ」

魔理沙さん。そう思ったのは確かだけど口に出して言うことはではないですよ？

「ちょっと、不気味とはなによ！？ ……あーその。やっぱり似合いませんか？」

突っ込みを入れた後、やや顔をうつむかせて上目がちに尋ねてくる霊夢さん。

……不覚にも彼女を可愛いと思ってしまったのは僕だけの秘密だ。

こういうところを見ると、やっぱり彼女も普通の女の子なんだなあって思うよ。

……妖夢さん？ そう思っただけですから、睨まないで欲しいんですけど。

なんだか今にも殺意の波動が溢れ出そうです。いつの間に体得したんですか。

「いいえ。良く似合ってますけど、別に先ほどまでの口調でかまいませんよ？ 年上といったってほんの二、三歳の差ですし、僕は元からこの口調ですので気にすることはありませんよ」

リップサービスって大事だね？ 特に女性相手には。

鎌足さんからその辺りのことを散々聞かされてたからなあ。女性には気を遣えって。

……ま。この際、あの人の性別は気にしない方向でいこう。うん。

「そうですか？ ……いえ。そうね、そうした方がいいわね。正直言って肩凝るのよねえ、この喋り方って。霖之助さん相手だと自然にできるんだけど……あ。でも、宗次郎さんとは呼ばせてもらうわね。貴方だってそうだし、いいでしょ？」

「ええ。構いませんよ。魔理沙さんもそれでよろしいですか？」

「よろしいもなにもないんだけどさ。でも、やっぱり私は呼び捨てにして欲しいんだぜ？ 魔理沙 “さん” なんて呼び難いだろう？ あのカラスの場合は取材の時だけの営業用だから気にしてないけど、常にそう呼ばれるんじゃないじゃこっちも肩が凝っちゃうんだぜ」

僕の言葉にくすぐったそうにしている魔理沙さん……いや、魔理沙。

男性のような口調だから分かり難いけど、やっぱりこの人も女の子なんだなあ。

微笑ましいな……って、妖夢さん？ ですから他意はないんですってば。

とりあえず背後に見え隠れしている、某拳を極めし者の姿を消して下さい。

今の妖夢さんなら、僕の『瞬天殺』が使えるような気がするなあ。

“天” 繋がりで……

そんな彼女に気付いてるのかいないのか、二人とも普通に会話しているし。

スルーする程度の能力？　だとしたらパネエです。

……なんだか段々みよんな言葉を覚えていくよなあ。僕……

「わかりました。魔理沙。それと、霊夢さん。不躰（ぶしつけ）な質問に答えて頂いてありがとうございます」

とりあえず、僕のどうでもいい思考は心のスキマにでもしまっておくとして、礼は言っておかなきゃね。

「いいえ。かまわないわ」

「でも、結局は香霖のお蔭だったりするんだよな」

「うっさいわね。そのスペカを使ってさえも、あのメイドにコテンパンにボコられたのは誰だったかしら？」

「う……あの時は初めて使ったんだから調子が出なかったただけだぜ。今ならあの吸血鬼姉妹にだって負けないさ。お前だってあの妹の方にはてこずってたじゃないか」

「……確かにね。結局は二人がかりで押さえ込んだのよねえ。とんでもない子だったわ。でも、それでなぜ魔理沙の方に懐いたのかしらね。あの子」

「そんなこと分からねえって。今度、妹様に聞いてみるんだな。霊夢こそ、あのお嬢様にご執心されちまつてるじゃねえか。それこそなんでなんだ？」

「私に聞かないですよ。大体魔理沙こそ――」

「それを言ったら霊夢だって――」

はい。本日二度目……なのかな？ 二人の口論会が始まっちゃいました。

なんだか、紅魔館の人たちについて色々知っていそうだけど……

まあ、いいか。いくつか疑問は残ったけど、聞きたいことは聞けたし。

どうして巫女になったのかとか、今の暮らしに疑問はないのかとか。そんなことは聞いたって無意味だし、聞くだけ野暮だよ。

これからも彼女は異変が起こるたびに溜め息を吐きながらその勤めを果たそうとするんだろうなあ。はっきり確かめたわけじゃないけど、なぜか確信を持ってそう言える。

会ってからほんの数刻も経ってないのに、ホント不思議な人だよなあ。

魔理沙も困った性格をしてる人のようだけど、なぜだか憎めない感じだし。その辺りが霊夢さんも必要以上に邪険にしていけない理由なのかもしれない。

こういうのを腐れ縁っていうんだろうね。その言葉が一番しつくりくるし。

あ。それよりも僕の隣で暗黒面（ダークサイド）に堕ちそうな人

をどうにかしなきゃ。

このままシ〇の暗〇卿でも召喚されたらたまんないし。

おそらくは、僕が二人にばかり話しかけていたからだろうね。

無視してたわけじゃないんだけどなあ。

たぶん、こういう思い込んだら一直線で融通が利かないところが幽々子さんをして、半人前だって言わせている要因なんだろうね。

幽々子さんもそういったところを見直すように僕に付いて行かせたんだろうけど……

完璧に忘れちゃってるみたいだなあ。

……僕のせいだね……

でも、ゴメンね。妖夢さん。

まだ、僕自身の気持ちがどうなのか分からないんだ。

紫さんの家でも思ったけど好きか嫌いかって聞かれたら好きなんだと思う。たぶん。

でも、たぶんじゃいけないんだと思うんだ。

だからはっきりするまでは待っていて欲しい……って思うのは我が儘かな？



だから今は――

「……妖夢さん」

「……え？ あ。はい？」

ほんの少しだけ――

「刀も手に入ったことですし、今度は真剣で手合わせをしてみませんか？」

「あ……はい！ 喜んで」

僕の我が儘を許して欲しい――

「霊夢さん。すみませんがちょっとお庭をお借りしたいんですけど、よろしいですか？」

「――あんただってあの人形使いと……えっ？ あ。ええ、かまわないわよ。でも、荒らさない程度にしてくれると助かるわ。掃き掃除が大変になるから」

「ええ。軽く汗を流す程度ですから。妖夢さんもそれでいいですよね？」

「そうですね。白玉楼（うち）ならともかく、他所様の庭ですし」

「あ。こら、霊夢！？ アリスは関係ないだろ、アリスは！ ってどこいくのさ？」

「お風呂を沸かしによ。あんたも来なさい。あんたの八卦炉があれば直ぐに沸くから」

「私の八卦炉をなんだと思ってるんだぜ!？」

「あんたもなんだかんだで泊まる気なんでしょ？　なら、そのくらいは役に立ちなさい」

「すみません。気を遣って頂いて……」

「お客様なんだから気にしないでいいわよ。でも、先に妖夢を入れてあげてね」

「勿論です。さ、行きましょうか」

「はい、宗次郎さん……すみません」

その言葉を言うのは僕の方です。

なにせ、今の僕は――

「だから私だって客なんだぜ？」

「だったら手土産の一つでも持ってきてきなさいよ」

「……相変わらずですね。あの二人は。さ、宗次郎さん。お手合わせ願います」

貴女の気持ちにこんな形でしか応えることができないんですから  
……

「ええ。行きましょう」



— 妖夢 Side —

こうして対峙しているだけでも宗次郎さんの実力がよく分かる。

私は楼観剣を正眼に構えた姿勢のまま。

宗次郎さんは抜刀術の構えで。

ピンと張り詰めた空気が私達の周囲を漂っているのが分かる。

やはりこの人が得意としているのは抜刀術。

それも達人級の……

木刀で稽古をしていたときは杢が違う緊張感。

互いに礼をして構えたときからずっとこの姿勢のままだ。

今回の手合わせは宗次郎さんが手に入れたあの逆刃刀の具合を確かめる意味もあるから打ち合わなければ意味がない。

でも、ここはいつもの白玉楼の稽古場ではないから、そう何合も打ち合うことはできないし、長引かせるわけにもいかない。

それに構えたままでは私の方が不利。

いくらこの楼観剣が普通の刀より軽いといっても、ずっと持ち続けていたら疲れてくるのは自明の理。当然、ずっと抜刀の構えのままの宗次郎さんの方が疲れは軽い。

……本当は昼間の茶屋で決意したことを実行するチャンスなんですけどね。

でも、いつの間にか巫女と魔法使いが縁側に座って観戦しているのが視界に映る。

この場で行うわけにはいきませんね。

「おーい。いつになったら始まるんだあ？」

「黙って見てなさい。こういうときは話し掛けるもんじゃないのよ？」

いつまで経っても動かない私達に焦れたのか、魔理沙が野次をいれてくる。

でも、たしなめられて黙ってくれたのはありがたい。巫女には感謝しなきゃね。

この場合、私の方から動くのは愚策。

抜刀術の真価は抜刀時の速さにこそある。

鞘走りによって加速された剣先の速度は常人には理解できないほど速い。

抜いたと思った瞬間にはもう振り終わっているのだから。

しかも使い手はあの宗次郎さんだ、それこそ超神速と言えるほどの速さだろう。

実のところ、私も抜刀術は使える。でも、間違いなく宗次郎さんには遠く及ばない。

でも、魂魄流剣術の真髄は半人半霊である私や祖父が使用してこそ意味がある。

……と、いうか。半人半霊にしか扱えないんですけどね。この流派は。

宗次郎さん。魂魄流剣術が貴方の抜刀術に劣るなどとは思わないで下さいね？

私の考えを読み取ったのだろうか、宗次郎さんが薄く笑ってくれたように見えた。

それに応えるように、私の唇も自然と笑みの形になっていくのが分かる。

……ああ。やっぱり私達は剣によってしか分かり合えないんですね……

そう思った瞬間、胸にズキリと痛みが走る。

思わず眉をしかめてしまう私。

——これは、何？——

そんな疑問が頭に浮かぶ。

今、絶好の隙を見せてしまった私に彼は仕掛けようとはしなかった。

……フフ。やっぱり私は半人前ですね。相手に気遣わせてしまうなんて……

これがもし試合ではなく 『死合』 だったら今頃私は無様に斬られていましたね。

たぶん、宗次郎さんが香霖堂で話してくれていた時のような、弱肉強食の理念を持っていた当時の貴方でしたら迷いなく斬って捨てていたことでしょう。

でも、私は 『当時』 の貴方なんて知りません。

知っているのは幻想郷（ココ）に来てからの貴方です。

戸惑い一つもちよつとしたことで感動したり、不器用ながらも人に気を遣ってくれたり。すごく強いのに、いつも子供っぽい笑顔でちつともそうとは見えなくて。

だから、香霖堂で私やあの店主に話してくれた後に見せた、あの気まずそうな、どこか許しを請うような……それでいて、それを諦めているような顔が忘れられません。

貴方にあんな顔は似合いませんよ？

『楽』以外の感情を封じていたそうですけど、今の貴方はそんなことを感じさせないくらい……いいえ。むしろ普通に感情がある人以上に感情豊かな人だと思えるんです。

そして、毎日が新しいことの発見であるように、楽しそうにニコニコと笑っていて……

—— 私はそんな貴方の笑顔が大好きなんです ——

……え？ 今、私はなんて……

……ああ。私は……貴方のことが……

フフフ……本当に私は半人前ですね。幽々子様から散々からかわれていたというのに、今頃気付くなんて……

それに、今まで貴方が女性と親しそうに話しているところを見るたびに、私の中で何かモヤモヤとしたものが湧き上がっていました。

今ならそれがなんなのか良く分かります。

……嫌な女だなんて思わないで下さいね？

私はもう大丈夫です。

心にポツカリと空いた穴に、何かがストーンと収まったような……

そんなスッキリとした気分なんですから。

……でも。

収まったら収まったで、今度は何が何でもこの想いを届かせたくなりました。

私って自分で思ってるよりも贅沢な女かもしれません。

……貴方のせいですよ？ 私をこんな気持ちにさせて……

——私のほうが不利？

——私から仕掛けるのは愚作？



—— 私以外に観ている人が居る？

もはやそんなことは関係ありません！

今こそ、昼の茶屋で決意したことを実行する時。

それは、宗次郎さんに “ 本気で ” 真剣勝負を挑むこと。

『真実は斬って確かめる』

私が祖父から剣術以外で教わった、只一つの教え。

それは同時に今の私にできる、唯一の確かめる術でもあるんです。

決意したときは、胸のモヤモヤがなんなのか確かめるつもりでした……

宗次郎さん……私の想い。届かせてみせます！！

「……参ります——」

——魂魄流剣術 『幽明求聞持聡明の法』！！」

妖夢さんの雰囲気が変わった……

どこがどうとは言えないけど、何か吹っ切れたような感じだ。

さっき笑みを返したかと思ったら、急に隙を見せてしまっていた。

『死合』　じゃないからつけこむつもりはなかったけど、妖夢さんらしくないミスだ。

そして、その後なにかを考えてたようだったけど……

彼女が眼をカッと見開いた瞬間。突風のような何かを通り過ぎていった。

……これは……剣気？　それとも闘気？

以前の僕ならそよ風程度にしか感じなかったけど、これがそうなのか……

……いや、違う。

これは……“想い”だ！

それも心の奥から震えがきそうなほどの。

でも、恐怖なんかじゃない。

—— 歡喜 ——

そう。今の僕は喜びに打ち震えている。

妖夢さん。貴女はそれほどまでに……

でも、今の僕にその想いを “受け入れる” 資格はありません。

自分の気持ちすらはつきりと分らない “今” は……

ですから……

「……参ります——」

今は、その想いを全力で——

「——魂魄流剣術 『幽明求聞持聡明の法』!!」

—— “受け止めて” みせます!

「お、おい！ あの技って！」

うるさいわね！ 黙って見てなさいって言ったでしょ！

……でも、魔理沙が驚くのも良く分かる。

アレはスペルカードではなく、純粹に妖夢が持つ剣術の技……

つまりこれは、手合わせとか稽古とかじゃなく、まさしく真剣勝負！

それに、さっきから妖夢の想いが痛いほど伝わってくるのが分かる。

これは純粹に乙女の勘だけだね。

魔理沙もそれが解ったのか、黙って成り行きを見守っている。

妖夢……あなたは……

いいわ。やってやりなさい。

同じ“女”として後始末くらいはやってあげる。

……ホント。罪な人ね。宗次郎さんって。

最初はお賽銭を入れてくれた親切な優男としか思ってたけどねえ。

『過去から来た外来人』

その過程で半人半妖になってしまった人。

もし、人のままでいてくれたら……

もし、最初に出合ったのが妖夢じゃなくて私だったなら……

フフ……無意味ね。こんな仮定は。

まさか、この私がこんなことを想うなんてね。

妖夢。がんばりなさいよ。

こんなこと想ったのって、絶対私だけじゃないはずだから。

今の私にできることは、どんな結果になろうとも見届けてあげる  
ことだけ。

私がそんなことを考えている間に、魔理沙が「あっ！」っと声を  
上げる。

その瞬間。

二人は交差して立ち位置を換え、互いに剣を振り切った姿勢で止まっていた。

――魔理沙 Side――

私が声を上げた時には、二人は既に交差していた。

そして、遅れて鳴り響く甲高い金属音と、二人の周りに巻き起こる突風。

速い。

私も速さには結構自信がある。

でも、それは飛ぶ速さであって、あの二人とは意味が違う。

私が得意とするのは魔法であって、こういう体を使う術とかはからっきしだ。

はっきり言って、交差した瞬間に何があったのかまったく見えなかった。

……まったくとんでもないヤツらだぜ。

正直、人間の私がこの幻想郷の人外たち相手に勝負できるのは弾幕ごっこだからだ。こういう純粹なガチ勝負（バトル）なんて夢のまた夢。

私が最初に宗次郎を見て思ったことは、なんとも『ひよろつちい優男』だった。

でも、話している内に興味が沸いて、それで……

あー。やめやめ！ 私にや似合わないって。

ってか、なんでそこで香霖の顔が頭に浮かぶんだよ！？

ハハ、ばっかみてえ。なに乙女チックに……

……って、確かこの技は！？

そう思った瞬間、隣の霊夢が視線を上に向けているのが視界に映る。

私も釣られて首を上に向けていた。

既に暗くなり始めていた空へと……

……軽い。

僕が妖夢さんの剣撃を迎え撃ち、交差した瞬間に思ったことだった。

彼女の剣先をずらし、そのまま横滑りさせ、通り過ぎた瞬間に浅く斬りつける。

この逆刃刀なら軽い打ち身で済むはずだし普通の刀でも皮一枚を切り裂くだけだ。

それで勝負を尽けるつもりだったのに、あまりにも手応えが軽すぎた。

逆刃刀に慣れてないからではない。僕の腕前がそこまで未熟ではないことぐらい自覚している。

それなのに、この手応えのなさ……まるで実体の無い“空気”の塊”みたいだ。

……僕に斬りかかってくる前に、彼女はなんらかの技を使ってきた。だけど、この勝負に限り僕は予測する能力を使ってはいない。

彼女を莫迦にしたわけではない。ただ純粋に剣術のみの勝負をしたかったからだ。

なにより、それが彼女の想いを受け止めることへの礼儀だと思っ



たからでもある。

妖夢さんの想いが籠ったこの技……ただの剣撃なわけがない！

その瞬間、僕の勘が告げる。

——これは囿だと。

後ろに居るはずの妖夢さんの気配が霧のように消えていく。

彼女は半人半霊……

斬りかかってきたときには、いつも体に纏わり付いている半霊の姿がなかった。

霊とは、言ってみれば霊力の塊。後ろで拡散していくのが半霊の方か！

つまり、彼女の本体……いや、半人の方は……上だ！！

「宗次郎さん！！」

僕が上を向いた瞬間、彼女の呼びかける声が聞こえる。

その体勢は空中で刀を大きく振りかぶり、僕を上段から切り下ろすところだった。

つまり、彼女は半霊を“人化”させて目くらまし代わりに突進させ、僕が迎撃に集中していたその隙に、半人の方は大きく跳躍していたわけか。

そして今の僕は抜刀して刀を振り切った体勢。

迎撃は間に合わない！　ならば縮地で……え？

そう思った時、僕の頭に　“あの剣術”　の情報が流れ込んできた。

これは……

いや。考えてる暇はない！

ほとんど無意識の内に僕の　“左腕”　は動いていた……



「ホント、惜しかったなあ妖夢」

「そんなこと言わないの。あのまま斬られていたらと思うとゾッとしないわよ」

あの手合わせ……いや、真剣勝負が尽いてから、妖夢さん、僕の順番でお風呂を頂き、魔理沙と霊夢さんも風呂から上がって社務所の居間でまったりとお茶を飲んでいた。

「それにしても……“そうりゅうせん”　だっけか？　あの技」

僕は魔理沙の問いにうなずいて答える。

―― 双龍閃 ――

緋村さんが使う 『飛天御剣流』 の技の一つ。剣と鞘の二段抜  
刀術。

たとえ剣を避けられても、二段目の鞘が確実に相手を捉える技だ。

あの時。とっさに縮地でかわそうとした瞬間に僕の頭に流れ込ん  
できた。

まさか、僕の 『知識を操る程度の能力』 が自動的に発動する  
なんて……

ましてや、剣術の知識までも検索できるなんて思わなかった。

たぶん、これが紫さんの言う 『他の能力との連携役』 のこと  
だろう。（＊…幕間その一参照）

まさしくイージス艦のCICだと言える。

でも、だったらなぜ萃香さんとの弾幕ごっこでは発動しなかつた  
んだろう。

……余興だったから？ 真剣勝負じゃなく、命のやり取りでもなかったから？

だとしたら、これが発動する条件とは僕が真剣勝負だと “ 自覚する ” こと？

……確かに思い当たるフシはある。

あの時、（勘を含む）予測する能力で相手の攻撃を察知して、知識の能力でその時の最善の迎撃方法を自動的に模索し、剣術の能力で実行した……

そう。確かに僕は、妖夢さんの剣気……想いを受けて、これが手合わせではなく真剣勝負だと自覚し、そのつもりで彼女を迎え撃った。

まったく……なんのために僕が予測の能力を使わないでいたのやら。

妖夢さんは彼女自身の能力である 『剣術を使う程度の能力』で挑んできた。

だからこそ僕も剣術のみの能力で迎え撃とうと思ったんだ。

確かに、相手が能力を使ったんだからこっちも能力全てを使ったって文句を言われる筋合いはないだろうし、妖夢さんだって言わないだろう。

でも、それじゃ僕が納得いかないし、彼女の想いに対して失礼だとも思っている。

以前の僕なら 「全力で迎え撃って何が悪いの？」 と思っただろう。

今なら分かる。それがあまりにも人間味に欠けた思考だと。

……志々雄さんが今の僕を見たらきつとこう言うだろうね。 「宗。弱くなったな」 と。

でも、僕はそうは思わない。

だって、今の僕だからこそ妖夢さんの想いを受け止められたんだから。

……ちょっと恥ずかしい結果になったけどね。

そう思ってチラリと妖夢さんを見る。

あ。同じタイミングで僕を見た彼女と眼が合ってしまった……

うわあ。妖夢さん、真っ赤になってうつむいちゃってるよ。

「——郎……おい、宗次郎ってば！」

「おろ？」

いつけない。魔理沙が呼びかけているのに気付かなかった。

ってか、これって緋村さんの口癖だったような気が……思わず口に出ちゃった。

でも、僕がこれを聞いたことってあったかな？ ……まあ、いいか。

それに、ますます緋村さんに似てきた気がするしね。

嬉しいけど……でも、なんだか照れ臭いや。

「え。ええと、なんですか？」

とりあえず、魔理沙の問いかけに答えておかないとね……照れ隠しじゃないよ？

「なんですかじゃねえぜ。さっきから呼んでるってのに……ははあん。さては、さっきのこと思い出したのかなあ？ 妖夢もそうみたいだし」

うゝ……思い出させないで欲しいなあ。

さっき言った 『ちよつと恥ずかしい結果』 のことを蒸し返されたよ。

まあ、原因は僕のが不完全にしか発揮できなかったからだね。

確かに、知識によって飛天御剣流の剣技を “真似る” ことはできた。

でも、それはあくまで真似であってオリジナルには程遠い。

何しろ剣術を操る程度の能力は、操ろうとする剣術の“本質”を理解できていなければならぬからだ。僕にはまだそれができていない。

それ故に、剣術を操る能力が不完全にしか発揮できず、橙が言った『器用貧乏』な一流とは言い難い技になってしまった。

ま。結果としては妖夢さんが怪我をせずに済んだんだけどねえ……

僕は“アレ”を結果オーライとは思いたくないよ……

「言わないでよ魔理沙。アレは事故だったんだから蒸し返さないで」

妖夢さんの言うとおりだよ。まったく。

……あれ？ 妖夢さんの口調、魔理沙に対してだけは普通だな。

妖夢さんって基本的に誰に対しても敬語だったはず。

まあ、橙には年下の女の子に話しかけるような喋り方だったけどね。

あ。文さんに対しても普通だったな、そう言えば。忘れてた。

たぶん、僕と同じように魔理沙が言ったんだろうな。普通に話してくれて。

……僕もいつかは……

「そんなこと言っちゃってえ。ホントは嬉しかったんだろ？ 彼氏

の胸にダイブだなんて結構大胆だなんて思ったくらいなんだぜ？」

魔理沙……

いやまあ、僕がさっき言った恥ずかしい結果がコレで、原因が不完全に発動した能力のせいで中途半端に妖夢さんの刀を横に弾いたもんだから、それで体勢を崩した彼女がそのまま僕にダイブをかましちゃったんだよね。

で。結果的に怪我をせずに済んだっていうのが、本来なら相手の腕をへし折るか、胴を払って肋骨にヒビでも入れてしまったかもしれないかったってこと。

でもねえ。刀を放して慌てて彼女を抱きとめてしまったもんだから、僕も体勢を崩してそのまま一緒に倒れこんじやったんだ。

しかも、妖夢さんも刀を手放したまま僕に抱きついちゃったから、傍から見れば熱烈な抱擁をしたまま地面に倒れてしまったようにしか見えなかっただろうし。

……押し倒す方とされる方が逆な気がするけどね……

お蔭で魔理沙には口笛まで吹かれてさんざんからかわれるし、霊夢さんには「お熱いのはいいけど、他所でやってちょうだい」なんて言われるし。

はあ……そのせいでお風呂に入るときもやたらと妖夢さんを意識しちやったしなあ。

まあ、さすがに「彼女の残り湯はどうだった？」なんて下品



なことは聞かれなかったけどね。もうホントに勘弁して欲しい。

「まったく。それくらいにしてあげなさいよ。そんなに羨ましければ今度霖之助さんの所にでも行ったら？ 魔理沙」

「な！？ こ、香霖は関係ないだろ！ 香霖は」

「はいはい。それじゃ夕飯の支度でもしてくるわね」

「あ。お、お手伝いします！」

「あら。妖夢はいいのよ？ 今日はお客様なんだし」

「いいえ、します！ させて下さい！！」

「……ま。いいけどね。それじゃちょっと待っててね」

「あ、はい。ご馳走になります」

霊夢さん。ナイスフォローです。

「こら！ 待てってばよ。霊夢！」

「あんたも来なさい。お皿の用意くらいできるでしょ？」

「だから私も客だって……じゃなくて！ おいしい！？」

「はいはい。分かったからさっさと——」

「だーかーらー！ 私と香霖は——」

真っ赤になったままの妖夢さんも一緒に、女性三人が台所へと消えて行った。

「はぁ~~~~……」

それを見送った僕はといえば、思いつき溜め息を吐いて一言。

「緋村さん。あなたならこういう時どうしますか？」

思わず今は居ないはずの人を思い浮かべて聞いてみたけど……

答えが返ってくるはずもないしね。ホント。

開けっ放しの障子から外を見れば、いつの間にか昇っていたお月様が神社の庭を銀色に染めて輝いていた。

「今夜は満月か……」

満月といえば、人も妖も狂わせるっていうけど……

今回のこれは違うよね？

僕の心の問い掛けに、丸い満月の中で緋村さんが困ったような顔で苦笑いを浮かべているのうな気がした。

とりあえず、その緋村さんから一言。

「拙者に聞かれても困るでござる」

## 幕間 その二 ― 疑念と死合 ― (後書き)

今回のお話はここまでです。

宗次郎が思った疑念は私の疑念でもあります。

紅魔郷の異変ってどうしても「？」って思うんですよね。

ですので、今回はその辺りを宗次郎に検証してもらいました。

それと、妖夢の剣術ですが、かなり私の自己解釈が含まれております。

スペルカードではなく、正式に技をかければこんな感じかなあと……  
どうにも戦闘描写は苦手です……無駄に1シーンが長過ぎるし……

さてさて。みよんが自分の気持ちに気が付きました。

本当ならもっと先の予定でしたが、みよん視点で書いていたらいつの間にかこうなっていましたw

どうやら私にさっさと書けとみよんな電波を送っていたようですw  
次回の更新ですが、どうにも日曜日更新になりそうです。

週間マ○ジンみたいに木曜更新してたんですが……申し訳ないッス。

orz

では、次回日曜にお会いしましょう。

### 第十三話 ― 伝わる想い、伝わった痛み ― (前書き)

お待たせしました。第十三話です。

今回は前回に比べてかなり短いです。

なんとか長くなりがちなの私の文章をもう少し短く表現できないかと努力した結果なんですが……

その所為で描写不足になっていなければいいのですが、不明な箇所、違和感を覚える部分、誤字脱字などをみかけましたら遠慮なく感想に書いて下さい。

それと、今回もかなり独自の設定が混じっています。

読まれる方はその点を留意して下さい。

では本編です。

第十三話　― 伝わる想い、伝わった痛み ―

時刻は朝日が山々から顔を出し、朝靄が晴れ渡る頃。

日中は初夏の陽気がさんさんと降り注ぐ時節ではあるが、山間部の多い幻想郷ではまだまだ朝方は冷え込む。

場所はそんな幻想郷の東の端に在る博麗神社の社務所。

ようやく庭に朝の日差しが注ぎ始め、縁側を仕切る障子がその光りの反射を受け、室内に淡い明かりを灯し始める。足りない光源は各所に置かれたロウソクで補っていた。

その薄暗い社務所内の居間に、普段はこの神社唯一の住人である博麗の巫女だけが居るはずなのだが、この日の朝は巫女以外に三人の人影があった。

「紅魔館に行きたいって？」

アジの開きをほぐしていた魔理沙が宗次郎の発言に尋ね返す。

なんだか昨日の朝も似たような光景だったなあと、宗次郎が奇妙なデジャブを感じながら頷きを返していた。尤も、昨日は八雲家であつたが。

部屋の隅に置かれた火鉢からは時折りバチツと焼けた炭のはじける音が響き、十分とはいえないものの室内に暖を提供している。

ちゃぶ台を囲み、食事を取る四人。

その朝食の席でいただきますの挨拶の後、宗次郎が放った言葉がそれであつた。

海が無いはずの幻想郷にどうしてアジの開きがあるんだろうと思ひながら、彼も同じようにほぐした身をご飯の上に乗せて口の中へ。

焼き加減、塩加減、共に絶妙な塩梅（あんばい）である。ご飯が何杯でもいいけそうなほど美味であつた。

ちなみに献立はアジの開きの他に、海苔の佃煮と冷やっこ、霊夢自家製のたくあんにキュウリの浅漬け、そして豆腐の味噌汁と炊き立ての白米。

まさしく日本の典型的な朝食のメニューである。

「でも、宗次郎さん。予定では永遠亭に行くはずではなかったですか？」

本当ならそこで一泊するはずでしたし、と続ける妖夢。

どうやら昨日のことはあまり気にしていない様子である。と言う

よりは、憑き物が落ちたようなすっきりとした感じであった。その態度からは余裕すら窺える。

何があつたのだろうか……

その妖夢の言うように本来ならば神社で宿泊はせず、そのまま永遠亭に向かい、そこで妖化後の身体に異常がないかを調べるための検査入院を行うはずであつた。

宗次郎が白玉楼に運び込まれたとき、彼の身体を調べたのは八意永琳である。

その彼女が、しばらくしたら永遠亭に顔を出して検査を受けるようにと言付けしていったのだ。永琳自身も半妖化という滅多に無い現象にかなりの興味を持っているのだ。

さすがに人体実験などはしないであろう……たぶん。

「ええ。ですが、別に期日を指定されているわけではありませんから。それに、どのみち紅魔館にも顔を出す予定でしたし、なにより咲夜さんに窺う旨（むね）を伝えてしまいましたが」

尤も、それだって期日を指定しているわけではないですけど……

内心でその言葉を続ける宗次郎。

口に出してはそう言ったものの、少々言い訳めいた言葉になってしまった感は否めないし、彼自身もそれを自覚している。

宗次郎としては紅魔館の主に聴きたい事があるのだが、それがス



ペルカードルールの制定に関わることである為、この場で理由を言うわけにはいかなかったのだ。

なにしろ、目の前にそのルールを創った本人が居るのだから。

彼が幽々子や妖夢から聞き及んだ紅魔館の主――レミリア・スカ―レットの人物像は、とにかくプライドの高い……と言うより、プライドの塊のような人物であるらしい。

それがどうして人間が創ったルールに従ったのか……

確かに吸血鬼異変が終結した後、様々な制約で縛られることになった彼女がその制約のいくつかを緩和することを条件に紅霧異変を起こした可能性は高い。

だが、彼の勘がそれだけではない “何か” を感じ取っていたのだ。

（おそらく鍵になるのは、魔理沙の言う 『妹様』 のことだろうね）

宗次郎はそう考える。

彼女らの話によると、レミリアの妹であるフランドール・スカ―レットは、永い間地下に幽閉されていたらしいのだ。

それがどうして紅霧異変後は自由に外を出歩いているのか。

そう度々出歩いているわけではないようだが、幽閉されていたことを考えると異様としか言いようがない。

（幽閉された原因。そして、それが解放された理由……前者はともかく、後者は紫さんがなんらかの関わりを持っているのは確実だろうね）

彼としては、やはりその辺りが気になるのだ。

どうして彼がそれを気にするのか。

理由はやはり彼自身の幼少期に起因する。

妾の子であったが故の彼が受けた数々の虐待……

（確かに、彼女の能力は危険すぎるものかもしれないけどね）

『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』

確かに危険な能力である。

幽閉されてしまうのも仕方が無いといえましょう。

だが、だからこそ家族が支えてやらなければならないはずである。

聞いた話では、その辺りの事情は当地人たちしか知らないようだ。

（まあ、魔理沙の言うとおりなら僕がどうこう言う筋合いはないだろうしね）

僕にはそんな資格もないし……

と、内心で言葉を続ける。

別段、件の『妹様』を救おうとかそういうつもりはない。

魔理沙に聞いたところ、彼女は明るく人懐っこい性格であるらしい。

時折り情緒不安定なところがあるらしいが、それ以外では幼い子供そのものであるらしく、たまにせがまれる弾幕ごっここの相手をしてあげているそうなのだ。

『あれはちょっと勘弁して欲しいけどな』 とは、魔理沙の弁である。

であれば、今更自分がしゃしゃり出る必要はないであろう。

彼が知りたいのはあくまでも解放された理由だけなのだ。

以前も述べたが感情が戻ってきている彼はその反動なのか、かなり好奇心が強い。

だが、そのせいで昨日の茶屋では気まずい雰囲気にしてしまったのだ。

それ故、無理に聞き出そうとは思っていないし、そのつもりもないようである。

ならば、最初っから聞かなければいいだろうと思われるだろうが、その辺りが彼をして『歪んでいる』と自己分析した所以（ゆえん）であろう。

『反省はしている。だが、後悔はしていない』　とは、彼のためにある言葉のようだ。

彼は一度、痛い目にあったほうがいいのかもしれない。

「ですが、吸血鬼である彼女が起き出すのは夜ですよ？　今から行くのはどうかと思うんですけど……」

妖夢の言うとおりである。

朝は言ってみれば就寝する時間帯なのだ。訪問する側からすれば礼儀に反する行為であると言わざるを得ない。

第一、妖夢にしてみれば紅魔館は訪問先としてその候補から外しておきたかった場所なのだ。なるべく後回しにしたいと思うのは当然であろう。

「ええ。ですから、昼間はどこか別の所に行こうかと思っています。人里で挨拶しそこねた人も居ますし、妖怪の山にも行かなければいけませんから」

宗次郎もその辺りは分かっていたようである。別に急ぐ旅でもないからだろう。

「んじゃ、他のところでもいいんだよね？」

そこに口を挟んできたのは魔理沙であった。

「そうですね。別に今日中に回らなければならぬってわけでもな

いですから」

「だったらさ、私の友達に会ってくれないか？　アリス・マーガトロイドっていう魔法使いなんだけど、きつと宗次郎の知識に興味を持ってくれると思うんだぜ」

― アリス・マーガトロイド ―

別名…『七色の人形遣い』

能力は 『魔法を扱う程度の能力』 であるが、主に人形を操ることを得意としており、その為に 『人形を扱う程度の能力』 とも言われている魔法使いである。

魔理沙と違う点は、彼女が 『職業…魔法使い』 であるならば、アリスは 『種族…魔法使い』 であり、捨食（しゃしょく）の魔法を習得しているところであろう。

捨食の魔法とは、食事を魔力で補うことができる魔法である。つまりは、一切食べ物を口にしなくても飢えることがないのだ。

更には睡眠の必要もなくなるそうなのだが、アリス自身は普通に食事と睡眠も取っているらしい。人間だったころの名残であろうか。

そして、自身の成長を止めて不老の身体となる捨虫（しゃちゅう）の魔法があるそうなのだが、アリス自身がこれを習得しているかどうかは定かではない。

ここで明記しておくが、捨虫の魔法を習得した者が種族…魔法使

いになるわけではなく、捨食の魔法を習得した時点になれるのだ。  
（ついでに言えば、捨虫の魔法は不老不死ではなく不老になるだけである。つまりは殺されれば普通に死ぬのだ）

習得する順番は必ず捨食から捨虫へとならなければならない為、  
アリスが捨虫を習得している可能性はある。

そして、今現在の彼女は魔理沙と同じく魔法の森に居を構えている  
そうであり、魔理沙とは付かず離れずの関係であるらしいのだ。

そんな彼女に会って欲しいと言われた宗次郎は、少し虚を突かれた  
ようであった。

「アリス……さん、ですか？ お名前だけは窺ってますけど、特に  
会う予定は……」

そこで妖夢の方を見る宗次郎。

彼女は頷いて、手にしていた茶碗を置くと魔理沙に向き直った。

「アリスの所に行く予定はなかったけど、確かに会っておくべきか  
もしれないですね。宗次郎さんもそれでよろしいですか？」

と、最後は彼の方を向いて確認を取る。

彼女にとっては渡りに船であるから異存はないようだ。

「ええ。僕としても反対する理由はありませんから構いませんよ。  
で、それまでどうしますか？ さすがにこんな早朝から押し掛ける

のも迷惑でしょうし」

「あ。ならさ、それまで外の世界の話を聞かせてくれないかな？  
昨夜は結局聞けなかったしな」

そう言っって妖夢を見ながらニヤニヤとする魔理沙。

そ知らぬ顔で食事を再開する妖夢との対比が宗次郎の苦笑を誘う。

昨日はなんだかんだと夕食を取った後はさっさと就寝してしまったのだ。

夕食の最中も会話らしい会話もなかった。

妖夢は宗次郎の顔をまともに見ることができず終始うつむいてばかりであり、魔理沙は色々と尋ねたそうな雰囲気ではあったが、彼女にしては珍しく空気を読んで黙っていたからだ。

宗次郎は妖夢の想いを受け止めたものの、今の彼女の気持ちを察して沈黙を保ち、霊夢に至っては我関せずといった態度であった。

夕食の準備をしていた台所でどんな会話があったのやら……

今も黙々と食事を続ける妖夢であったが、その顔はほんのりと赤みがさしていた。

肌の色が白いだけにかなり目立つのだが、魔理沙も同じ “女”  
だからなのか、突っ込んだりはせず、ニヤニヤとした笑いを苦笑

に変えて自らも朝食の残りを片付け始める。

そして終始沈黙を守っていた霊夢は、そんな二人をチラリと片目で見た後も一貫して関わろうとはしない。

だが、唇の端が少しだけ微笑の形になっていたのを宗次郎だけが見逃さなかった。

「勿論、構いませんよ。ですが、直接見たわけではありませんし、知識のみの話しになりますが、それでもよろしければ」

無論、魔理沙に否はなかった。



「しかし、魔法の森って思った以上に広いですねえ」

「ええ。しかも、森の中は魔の瘴気と化け物茸の胞子が充満していて、並の人間では数時間程度しか耐えられません。妖怪もそれを嫌ってあまり近寄りませんから逆を言えば瘴気などに耐えられれば比較的安全な場所とも言えます。更に、この化け物茸の胞子は人間の魔力を向上させる作用のある幻覚をもたらしますから、魔理沙やこれから会いに行くアリスといった魔法使いたちが修行も兼ねて住居を構えているんです」



魔法の森の上空を飛びながらポツリとこぼした宗次郎の言葉に、妖夢が森についての詳細な解説を述べる。

朝食の後、宗次郎が外の世界の様々な出来事（主に歴史や文化など）を解説付きで話して聞かせ、魔理沙は興味津々に聞き入り、霊夢は気のない素振りであったが話を邪魔することはなく最後まで傍観者に徹していた。

妖夢にとっても既に何度か聞かされているので今更聞き入ることではなく、霊夢と同様に傍観者となっていた為、必然的に魔理沙が聞き役となり、気になった点に次から次へと質問を浴びせては的確な答えを返してもらい、好奇心を満たしていた。

そして話題がここ最近の幻想郷のことに移ると、今度は宗次郎が聞き役になり、霊夢や魔理沙から異変解決時の出来事や、紅魔館と永遠亭の住人たちについてできるだけ詳しい人物像などを聞いたのである。

無論、幽々子や妖夢からも既に何度か聞かされていたが、やはり多くの視点からの情報を仕入れることの大切さを、志々雄一派に与していた当時から教え込まれていた為、それを思い返した宗次郎はこの機会にできるだけの情報を仕入れることにしたのだ。

やがて時刻も巳の刻（午前十時前後）を過ぎた辺り。

話しは途中からほとんど雑談になっていて、何度かお茶やお茶菓子を入れ替えながらこの時刻となっていた。

そして霊夢の「また来てちょうだいね」という再度の来訪（と、お賽銭）を期待する言葉で送り出されたのである。

今は案内役を兼ねる魔理沙を先頭に魔法の森に住むというアリス・マーガトロイド邸へと向かっている最中であつた。

そんな事務的な会話を続ける二人の前を、箒にまたがった魔理沙が飛んでいる。

（なんつーかなあ……てんで普通の話ばかりでちつとも面白くないぜ。もうちょつとこう……恋人同士みたいな色気のある会話はできないのかな）

昨日のアレはなんだったんだぜ。そう内心で呟く魔理沙であつたが、実際のところ、この二人にそんな甘ったるい雰囲気などはまだ必要とはしていなかったのだ。

そんな雰囲気は恋人同士になればいくらでもできる……

二人の胸中にはそんな共通する想いがあつた。

妖夢は自分の想いを伝えることができたのだ。後は宗次郎の気持ち而定まるのを待つだけであつたからである。

あんな剣のやり取りだけで？　と、多くの者がそう思うであろう。

確かに言葉にしなければ伝わらない想いもあるだろうが、この二人にはそれが必要……

……ないわけではなかった。

実のところを言えば、二人が抱き合って倒れた後にこんな会話が  
あったのだ。

それをダイジェストで表記しよう。

『妖夢さん。大丈夫ですか？』

『……え？ え、ええ！？ あ、す、すみません！ 直ぐにどき  
ますから』

『いえ……妖夢さん。貴女の想い、しっかりと “受け止め”  
しました』

『……宗次郎さん』

『ですが、まだ “受け入れる” には僕の気持ちちははっきりし  
ていません』

『！？ ……そうですか』

『ですから、それまで待っていてくれますか？』

『！！ ……はい！ 勿論です』

この後、魔理沙からヒューヒューとからかいの口笛を吹かれるま  
で抱き合っていたのだ。

妖夢は嬉しさと恥ずかしさで宗次郎の顔をまともに見れなかった  
だけなのである。

そして、今朝になってようやく自分の高揚とした気分を収めるこ  
とができたのだ。

その為、気持ちに余裕ができ、宗次郎とも普通に会話ができたのだった。

気持ちの余裕。心の余裕と言い変えてもいいが、それが生まれた彼女は少しだけ……ほんの少しだけ以前の彼女とは雰囲気違って見えていた。

だからこそ魔理沙も、そして霊夢もそれを察したのであろう。彼女らが必要以上に妖夢をからかうことはなかった。

尤も、そんなことをするのは魔理沙だけであつたが。

当然のことながら、妖夢に対する二人の乙女の対応はそれぞれ違う。

霊夢は一見すると我関せずといった態度であるが、その実、妖夢を温かく見守っており、ややもすると、からかいが行き過ぎがちな魔理沙をたしなめるのは彼女であつた。

一方の魔理沙は、妖夢の気持ちを察しつつも、そこは元来好奇心が強く年頃の乙女であるためか、ことあるごとに妖夢からどんな経緯で好意を持つに至ったのか聞き出そうとしたり、宗次郎にもちよっかいを出したりしている。

尤も、それに成功することはなく、妖夢からは黙殺、宗次郎からは苦笑を返されるだけであつたが。

その為、二人がどんな会話をするのか聞き耳を立てていたのだが、彼女が期待するような言葉は一向に出てくることは無かつた。

（ちえ。これじゃあ全然参考にはならな……って、なんの参考にするんだよ、私！？）

「？ どうしたんですか？ 魔理沙。ちょっと失速したようですけど」

「ななな、なんでもないんだぜ！！ あっ。ほら、あそこがアリスの家だぜ」

魔理沙が内心で一人突っ込みをしてしまい、少しばかり失速して高度が落ちてしまったのを宗次郎が怪訝に思って尋ね、魔理沙は目的地が見えてきたのを幸いに誤魔化すように一軒の邸宅を指差したのだった。

「あれがそうですか……なんと言うか、普通の洋風のお宅ですね」

森の中に少しだけひらけた場所が見え、そこにポツンと一軒の洋館が建っていた。

洋館とはいっても、ごくシンプルな二階建ての邸宅で、壁にツタが多少張り付いている以外は普通の家である。

宗次郎がイメージした魔法使いが住むというおどろおどろしい雰囲気はまったくなく、言われなければそうであるとは思わないであろう。

「あはは。私の家だってあんな感じだぜ？ 魔法使いらしい家に住んでるっていえば、パチュリーの方だろうさ」

ま、尤もあれは魔法使いらしいと言うより吸血鬼らしいって言うがな。

そう言葉を続ける魔理沙。

― パチュリー・ノーレッジ ―

別名…『動かない大図書館』

能力は 『魔法（主に精霊魔法）を扱う程度の能力』 であり、既に百年以上も生きている魔法使いである。

魔理沙が言うように紅魔館に（正確にはその中の図書館に）住んでいるそうだが、彼女に関しての詳しい記述は後に語ることにする。

「さ。とりあえずは上がって紅茶でも飲もうぜ。紅魔館の咲夜ほどじゃないけど、アリスの紅茶も中々いけるんだぜ？」

まるで自分の家のように語る白黒の魔法使いに妖夢は呆れたような視線を送り、宗次郎はやれやれと肩をすくめる。

「紅茶もいいですけど、まずは会って挨拶してからですよ？」

やや窘めるように言う宗次郎の言葉にも、「そっかそっか」とまるつきり気にもしていない風に言ってカラカラと笑う魔理沙。

やはり彼女の辞書に 『自重』 という言葉はないようだ。

既に幾度となく痛い目を見ているはずなのだが、昨日「過去は振り返るもんじゃない」と自らが語ったように自分の行動に反省も後悔もしていないらしく、思わず諦めの溜め息を吐く宗次郎。

本当に痛い目に合わなければいいのだが……

そんな考えが頭に浮かんでしまう。

「宗次郎さん。気にしたら負けです」

肩にポンと手を置かれる感触と同時に、そんな言葉が妖夢の口から紡がれる。

そんな彼女の様子に、宗次郎も苦笑を漏らす。

「さ、早く行きましょう。魔理沙はもう降りてますよ？」

下を見下ろせば、彼女の言うように既に魔理沙が地上に降り立ってこちらに手を振っていた。

早く降りて来いという意味であろう。

「そうですね。一緒に行かないとアリスさんの家のドアを壊しかねませんし」

笑いながら冗談めかしたことを言う宗次郎に妖夢も零れるような笑顔を返す。

微笑み合いながら地上へと降り立つ二人。

前を見れば、魔理沙がマーガトロイド邸の玄関の前に立ち、ドアノブに手を掛けようとしていたところのようだった。

ノックをするなり、声をかけるなりしなければならいだろうに、思いながら足を前へと踏み出したその瞬間。

「フギヤッ!!??」

ドーンという大きな爆発音が聞こえたと同時に、まるで猫が尻尾を踏みつけられたかのような声を発する魔理沙。

「魔理沙!?!」

彼女の名前を叫びながら走り出そうとする二人。

だが、その二人の前にベシヤッとその名前を呼ばれた当人が落ちてきた。

その様は煙の尾を引いて弧を描きながらであり、まるで漫画のような落ち方である。

これで手の指の中指と薬指だけを曲げた形にしていれば完璧であったろう。

何が? とは聞かないで欲しい。分かる人には分かるネタである。

「魔理沙!」

「だ、大丈夫!?! 魔理沙」



二人が駆け寄り彼女の安否を確かめる。

「プアア~~~~……」

ポフツと黒い煙を吐き出す魔理沙。

ますます漫画チックである。

髪の毛がアフロになっていないだけマシであろう。

「……とりあえず命に別状はないですね」

「……そうみたいです。ですがいったい何が……」

揃ってアリスの家を見る二人。

その玄関のドアは無残にも破壊され、蝶番（ちょうつがい）の部分にわずかにその名残があるだけであった。

そして開放された玄関からは未だ黒い煙が出ていたが、やがてそれも薄れてくると中から人影らしきものが現れる。

「あ~~~~ひょっとして誰か居たの？　ゴメンなさいね、ちょっと火薬の仕込みに失敗しちゃって……」

ケホツケホツと咳き込みながら現れたのは……

「アリス！」

「え？ 妖夢だったの？」

この家に住むアリス・マーガトロイド、その本人であった。

（……痛い目に合っちゃったね。魔理沙）

未だに手足をピクピクと痙攣させて、眼をナルトの渦巻きみたい  
にさせたまま仰向けに倒れている魔理沙を見下ろし、内心でそう呟  
く宗次郎。

これが宗次郎とアリスとの、なんともショッキングな出会いであ  
った。

『答え』 を求める道は、意外と痛いのかもしれない……

### 第十三話 ― 伝わる想い、伝わった痛み ― (後書き)

はい、今回はここまでです。

少々短かったかもしれませんが、ご容赦のほどを。

それと最後の方のネタは完全に遊びが過ぎたかもしれませんが。

ご不快に思われたのならば申し訳ないと言いたいようがありませんです。

さて、冒頭のセリフでこのまま紅魔館か！？と思われた方がいらつしゃいましたら、これも申し訳なかったです。

正直、書いている途中で「あれ？ このままだとアリスの出番なくね？」と思ったものですから（^^；

おぜう様やP A（ry もとい！ メイド長の出番はもう少し先です。今しばらくお待ち下さい。

では、また次回にお会いしましょう。

## 第十四話 ― 人形遣い 前編 ― (前書き)

お待たせしました。十四話です。

今回はかなり長くなったので前後編に分けました。

アリスの人形に関しては二次設定と独自設定を織り交ぜた内容になっています。

読まれる方はその点をご注意下さい。

それでは本編です。

第十四話　― 人形遣い 前編 ―

「ホント、ごめんなさいね」

「いえ。お氣遣いなく」

差し出された紅茶の香りを楽しみつつ、そう答える宗次郎。

ここはマーガトロイド邸の二階にある居間と思わしき一室。

室内には西洋風の上辺がアーチ型になっている大きな窓。

窓際には丸いテーブルと四脚の椅子。

その椅子に腰掛けている彼は妖夢と共にこの邸宅の主から歓待を受けていた。

（しかし、本当に人形だらけなんだなあ。この家）

室内を見回してみるまでもなく、壁一面の棚にズラリと並ぶ人形が目映る。

どれも似たような姿かたちをしているが、よく見るとそれぞれ衣装が異なっているのが分かる。この辺り、製作者の人形に対するこだわりが感じられた。

その製作者はといえば、人形が運んできたティーカップを手にして宗次郎と同じように紅茶の香りを楽しんでいた。

名をアリス・マーガトロイド。

魔理沙が会って欲しいと言ったその本人である。

北欧系を思わせる非常に整った可憐で幼さを残した顔立ち。

薄いハチミツ色の金髪をショートカットにし、ピンク色のカチューシャを付けている。

眼は藍色だが、見る角度によって色彩が微妙に異なる不思議な瞳をしていた。

顔や半袖のシャツから伸びるしなやかな腕には、白磁器のような白い肌。

妖夢の肌も白いが、半霊であるためか、やや病的な青白さのある肌とは異なる。

服装は膝下まである青いドレス風のワンピース。

半袖の白いシャツが見えることから下にはブラウスを着ているようだ。

肩には白く大きなケープを纏っており、胸元まで覆っている。

ケープとブラウスの袖には黒のラインがあり、白地との対照が際立っていた。

首に巻いているリボン風のタイは、腰に巻くベルトと同じピンク色である。

そして足には白い靴下と、黒いエナメルのパンプスを履いていた。

服装の各所にはフリルがふんだんに使われており、変化に乏しい表情と相まって、居並ぶ人形たち以上に良く出来たフランス人形のような印象であった。

「アリスこそ怪我がなくてよかった。でも、火薬の扱いには気を付けてね」

「ええ、その作業中は人形たちに防御結界を張らせているから危険はないわ。ちょっと煤を被っちゃったけどね。でも、心配してくれてありがとう」

気遣う妖夢の言葉に、アリスも礼を返す。

どうやらこの二人、宗次郎が思っている以上に仲が良いようだ。

生真面目さが過ぎて友人を作るのが上手くなさそうな印象の妖夢だが、そんな彼女もアリスのことを認めているらしく、その実力、人形作りの手腕、なにより自分の研究に真摯に取り組んでいる姿勢に好感を持ったらしいのだ。

それに万全の態勢で火薬を扱っている辺り、常に完璧を目指そうとしている職人気質（しょくにんかたぎ）な面も持っているようである。

（まさか、くしゃみで手元が狂ったなんて言えないわよね……）

……訂正。

どうやら少しおっちょこちょいの一面もあるようだ。

誰かが噂していたのかもしれない。

「ええと、宗次郎でいいかしら？ 魔理沙が私に会わせようとした理由はなんとなく分かるけど……不思議な人ね。香霖堂の店主と同じような気配が “ 視える ” けれど、それとは少し違う感じがするわね」

「幻視の能力が更に上がったみたいね。もう霊の見分け方も私以上になってない？」

宗次郎が後に妖夢から教えられたことだが、アリスには元々高い幻視の能力があり、通常は見えないものが見えたり、その生き物を見てどのような状態であるかを見抜いたりすることができるそうである。

春雪異変の後、萃香による三日おきの宴会が行われていた際に妖夢から幽霊の見分け方を教わったそうで、それ以来、幾度か白玉楼に訪れて幽々子に人形劇を披露してあげたこともあるのだとか。

その見返りにというわけでもないらしいが、人形に宿る魂も幽霊の範疇に入るのかどうか議論を交わしたり、任意に人形に霊を憑依させる方法がないかどうかを考察したりと、アリスが研究している『完全に自立稼動する人形』の完成を目指している過程で冥界との交流が深くなったそうである。

妖夢とは見た目の年齢が近いからなのか、それとも実際に歳が同じぐらいなのかは分からないが、同年代の友達感覚に近い付き合い



であるらしい。

妖夢もこの口調が素のようである。

親友というほどではないが、現代風にいう気の合うクラスメイトといった関係であろう。

その妖夢から少々揶揄を含んだ賞賛の言葉を受け、彼女は微笑してこう答えた。

「さすがに冥界の住人ほどには霊を視ているわけじゃないからなんとも言えないわね。さ、そろそろ彼のことを紹介してくれないかしら？」

その言葉に妖夢は宗次郎と顔を見合わせると、揃って苦笑してこの人形遣いに事情を説明することにしたのだった。



「……過去からの時間の跳躍、半妖化、そしてその能力……不思議なこともあるものね。でも、この幻想郷ではありえないとは言えないわ。何が起こっても不思議でないのが幻想郷ですもの」

両肘を純白のテーブルクロスに置き、組んだ両手の上に顎を乗せ

て眩くアリス。

その瞳はどこか遠くを見ているかのようにであった。

宗次郎もその言葉に頷くと、再びティーカップを手にして言葉を返す。

「正直、僕自身も自分が体験したこととはいえ、最初は戸惑いました。ですが、ありえないという事こそありえないという言葉もありますし、今はもう慣れましたね」

尤も、幻想郷全部を観たわけではないですけど。

そう言葉を続けてカップに口をつける。

だが、その中身がほとんどなくなっていたようだ。

思わず苦笑する宗次郎。

それを見ていたアリスの後ろに控えている人形——上海（しゃんはい）という名らしい——が、フワフワと浮かびながらティーポットを抱え、宗次郎のカップに紅茶を注いでくれた。

宗次郎が 「ありがとう」 と微笑みながら礼を言うと、上海はなんとなく照れたようなしぐさで首を横に振った。どういたしましてという意味なのだろう。

人形だから当たり前なのだが表情に変化はない。

だが、その感情があるかのようなしぐさは 「本当は生きている

のでは？」と錯覚させるほどである。

「見事なものですねえ。アリスさんは本当にこの子達を一人で操っているんですか？」

今も妖夢のカップにおかわりの紅茶を注いでくれている上海を見ながら尋ねる宗次郎。

この上海だけではなく、お茶請けのクッキーを運んだり、追加のおティーポットを台所から運んだりとせわしなく働く人形たち。

更に一階では、この場を上回る数の人形が爆発の後片付けに奔走しているのだ。

その一階は人形を製作するための作業場と、製作した人形やその材料の保管庫に魔法関連の書庫などがスペースの大半を占めている。

二階は生活スペースとなっており、宗次郎たちが居る応接間を兼ねた居間と厨房、寝室に来客用の客室が数部屋、バス、トイレといった間取りとなっていた。

調理、洗濯、掃除と、この邸宅の家事の一切を人形たちが行っているという。

今もどれだけの数の人形たちが働いているのか見当もつかない。

それらを全て一人で操っているというアリス。

正直、信じられないと思うのは宗次郎だけではないであろう。

事実、この家へと連れて来た当人の魔理沙も『物凄く嘘くさいぜ』  
と言っていたのだ。

宗次郎の少々ぶしつけと言えなくもない質問にアリスは小首を傾  
げてこう答える。

「さあ、どうかしらね？」

そう言っただけで人形のような容貌を少しだけ崩して微笑む。

なんとも男心をくすぐられる笑みであった。

その笑みの仕種といい、ティーカップをソーサーに戻す動作とい  
い、そのいずれもが非常に優雅で洗練されており、アーチ型の窓か  
ら射す日の光に照らし出された幻想的とも言える容姿と相まって、  
深窓の令嬢であるかのような雰囲気醸し出している。

（さすがに魔法使いだけあってそうそう簡単に手の内は見せないか  
……）

答えをはぐらかされた宗次郎ではあるが、むしろ彼はその対応に  
感心していた。

決して広いとはいえない幻想郷では、住人同士で能力や手の内を  
隠し通すことは難しい。

特に、阿求のように能力やその対処法を執筆している者や、射命  
丸のように新聞という形で広く認知させる手段を持つ者達も居るか  
ら尚更隠し通すのは不可能に近い。

故に賢い者は、ある程度手の内を明かしつつも、肝心な部分は知られないようにしているようである。

宗次郎も阿求や射命丸の取材を受けていたが、自身の切り札といえる“縮地”や“能力の連携”に関しては話したりしていない。

話したのはあくまでも能力の名前とその効果だけである。

彼に関して全てを知っているのは、白玉楼と八雲家の者たちだけなのだ。

重要な情報を知るものは最小限に止める。

これは情報管理の基礎中の基礎である。

妖夢も、そして橙ですらその辺りは心得ていた。

だからこそ宗次郎は彼女達を信用しているのだ。

だが、だからと言って他の者たちを信用していないわけではない。

あくまでも情報管理の観点からそうしているだけである。

尤も、妖夢は幽々子から、橙は紫と藍からそれぞれ言い含められてはいたが。

萃香も肝心なことは教えられてはいない。ただ、面白そうな子が居るから会って欲しいと言われただけであった。

彼女も宗次郎の複雑な事情などには興味がないであろう。彼女にとって面白ければなんでもいいのだろうとは以前にも述べたとおりである。

その結果、彼女がどう行動するかさえも紫は計算に織り込み済みなのであろう。

更に彼の生い立ちを聞いた霖之助も、能力に関しては一部しか聞いていないのだ。

尤も、彼の場合は客の事情をそうそう人に話したりはしないだろうが。

話しが逸れた。

アリスにとっては初めて会う人物にあれこれ自分の秘密を明かしたりする道理がないのは当然である。それに、基本的に魔法使いは秘密主義なのだ。

その辺りは宗次郎も自身の知識と相違がないのを確かめることができたと言える。

しかし、アリスの容姿や男心をくすぐる仕種を見てもなんの反応も示さないのは男としてどうかと思うのだが。

それはともかく、彼女の返答のあとに訪れたのは沈黙であった。

だが、決して居心地が悪くなるような沈黙ではない。

窓からの日差しがだいぶ高くなってきたお昼前の時刻。

朝食と昼食の間にとる軽い食事のことを小昼（こひる）と言うが、まさに今の彼らがその時間を楽しんでいるのだ。

なんとも贅沢な、まったりとした雰囲気時間が時間と共に流れていく。

窓の外に風がサアッと吹き抜ける音が聞こえ、三人が窓の外へと目を向けると、鬱蒼とした森林が広がる魔法の森の木々が、風に揺られている光景が目映った。

昼なお暗い魔法の森も、こうして二階の窓から眺めるとなかなか風情がある。

「ところで……」

視線を室内に戻した妖夢が、カチャツとカップをソーサーに置いて口を開く。

「魔理沙の様子は怎么样了の？ 怪我も大したことはなかったし、爆発で目を回していただけだったからベッドに寝かしつけたんだけど」

そろそろ読者諸兄から『魔理沙はどうしたあ！？』の声が聞こえてきそうだからではないが、妖夢が魔理沙のことを尋ねると、アリスはそう言えばそうねと頷き、彼女を寝かせている客室に待機させていた人形を呼び出そうとする。

「あら？ どうしたの？ 蓬莱（ほうらい）」

だが、その呼ぼうとした人形が室内に入ってきたのだ。

その蓬萊と呼ばれた人形は真紅のドレスを身に纏っており、菱形の翼のようなものが二対背中から生えていた。

先ほどから宗次郎たちの世話を焼いている上海が青を基調としたエプロンドレスであるのとは好対照な衣装である。

怪訝そうな顔のアリスの傍へと飛んできた蓬萊は、主の耳元へと顔を寄せると、何やら耳打ちするかののような仕種をする。

ふんふんと頷くアリス。

その様子は本当に人形が生きていて意思疎通ができているかのようである。

それがアリスの一人芝居なのかどうなのかは宗次郎に判別がつかなかった。

「どうしたの？ アリス」

と、妖夢が尋ねると、アリスはこちらに向き直って何があったのかを伝える。

「どうやら魔理沙はとくに起きていたみたいね。今はお風呂に入っているそうよ。彼女が起きたら入れて上げようと思ってお風呂を沸かしておくように指示しておいたから、勝手に入ったんだと思うわ」



まったく、相変わらずね。

最後にそう言って溜め息を吐く。

その様子にクスッと笑みを零す宗次郎。

実のところ、彼は先ほどから魔理沙が起きていることに気が付いていた。

廊下を行き交う人形たちの小さな気配に混じって、魔理沙のものと思わしき大きな気配がうろついていたのを察知していたのだ。

『人形に気配があるのか？』 と、お思いの方もいるだろう。

宗次郎が感じた気配によると、人形の動力源はアリスの魔力そのもののようだ。

故に、家の中には細分化されたアリスの気配があちこちに遍在しているのである。

そんな中に別の気配がうろついていたれば彼が気付くのも当然であった。

妖夢も感覚を研ぎ澄ましていれば同じように気付いていたであろうが、さすがに友人宅で神経を尖らせる必要はないと判断したのだろう。

何かがあればアリスの人形が知らせてくれるであろうし、何より友人との会話を楽しむときぐらいは気を緩めておきたいと思うのも無理はなかった。

この辺り、弱肉強食の理論が根底にある宗次郎とは大きな違いのようだ。

だが、別に妖夢が油断し過ぎているわけではない。生き方の問題なのである。

魔理沙が起きているのを教えなかったのは別に他意があったからではない。

彼女が起きれば当然人形たちが気付くだろうし、そうなれば主であるアリスの知るところになるからだ。

何より、仮にも女性の行動を逐一探るのはマナー違反であるし、そのような趣味は宗次郎にはなかった。

その魔理沙であるが、どうやらこちらに近づいているようである。

もう上がったのかと少し呆れる宗次郎。カラスの行水もいいところであろう。

彼女は文をカラスと呼んでいたが、人のことは言えないようだ。

先ほどの爆煙で白黒が真っ黒になったところなど特に。

「そうなの。まったく、魔理沙にも困ったものね。あれくらいじゃ薬にもならなかったみたいだし、月の民あたりにでもなんとかに効く薬を作ってもらおうかしら？」

妖夢も中々に酷いこき下ろしようである。

そのなんとかの菓を盛る相手が近づいているのを教えようかどうかどうしようかと宗次郎が迷っていると、ドアの外からクチュンというくしゃみの音が聞こえてきた。

がさつなようでいて、意外にも可愛らしいくしゃみをする魔理沙である。

「あら？　もう上がったみたいね」

「そうみたいね。ついさっき魔理沙の気配を感じたし、そろそろ来る頃だと思ったわ」

どうやら教えるまでもなく、妖夢も気付いていたようだ。

さすがにこの距離まで近づけば警戒していなくても察知できるようである。

この辺りが、彼女も腑抜けているわけではない証拠であろう。

「それにしても噂でくしゃみをするって本当なのね。アリス」

「そ、そうね。案外、昔の格言って正しいのかもね」

妖夢の言葉に視線を逸らして答える七色の人形遣い。

心当たりがありまくりなのだろう。こめかみに一筋の冷や汗が流れているようだ。

どうでもいいが、湯冷めでもしているのではという発想が出てこ

ない辺り、彼女の人望が窺えるようである。

そしてようやくその当人がドアを開き、部屋に入ってきたのだが……

「ふえ〜い、ちきしょう。誰か噂してんのかあ？ あ、風呂借りてたぜえ……え？」

「え？ ちょ、魔理沙あ！？」

「貴女なんて格好で！！」

「……………」（↑無言で視線を逸らしている）

なんと、入室してきた魔理沙はバスローブ一枚（しかも、若干着崩して）の格好であった。

ローブの合わせから覗く意外に大きい胸元の谷間と、ふとももまで見える白い足がなんとも艶かしい。

「どわー！ー！！ 宗次郎が居るの忘れてたー！ー！ー！！！！」

「早く何か着なさいよ！ 私の部屋に服があるから！ って、ああもう早く！！！」

「宗次郎さんはあっちを向いて下さい！！ それとアリス！ 私も手伝うから早く貴女の部屋に……って、なんで人形が集まってくるのよ！？ 邪魔だから早くどこかせてー！！！」

「……………」（↑視線を逸らしたまま無言で

目を閉ざしている)

なんともはや、大パニックである。

それぞれが誰のセリフかなど言う必要はないであろう。

居間から出ようとする三人だが、何かと集まってきた人形たちに入り口を塞がれて立ち往生し、アリスが必死に命令を下そうとするも慌てていて手間取り、妖夢は埒が明かないとばかりに刀を抜こうとして上海に止められ、魔理沙は魔法で強行突破しようとするが蓬萊に顔面を塞がれてアタフタと引き剥がそうとしている。

(……慌てない慌てない。一休み一休み……)

そんなカオスな状況の騒音を耳で聞き流し、もはやデフォースキルと化しつつある現実逃避を試みる宗次郎。

どうやら幻想郷において、彼にはこういうオチが付くのはデフォになっていくようだ。

それを考えると少々不憫な気がしないでもない。

(こういうのを役得っているのかなあ……)

……………訂正。

もげればいいのに。

ナニがとは言うまい。



「いや〜まいったぜ。つい、いつものクセでさ。ホラ、香霖を除けば私らの知り合いつて女ばっかだろ？ だから宗次郎のことが頭からすっかり抜けててさあ」

「抜けているのは貴女の頭の方でしょ？ まったく……」

「酷い言い草だぜ？ アリス。元はと言えば私の服をお前の人形が勝手に洗濯しちまったからじゃないか。バスローブが無かったら裸でうろついていたところだぜ」

「勝手なのは貴女でしょ。この間なんて私の下着を勝手に持って行ったくせに。それに、貴女の服は煤で汚れているから洗濯しておくように指示しておいたのよ。感謝して欲しいくらいだわ」

「二人ともそれくらいにしないよ。宗次郎さんの前なのに、もう少しつつしみてものを持ったらどうなの？」

「よく言うぜ。ちょっと怪しいと思ったくらいで斬りかかってくる

のはつつしみ深いなんて言えるのか？」

「スカートが捲れてもかまわずに箆に跨って飛んでいる魔理沙と一緒にしないでちょうだい。妖夢こそこの間の宴会のときに酔っ払って自分から服を脱ぎだしたんじゃないかった？」

「そんなことしてないわよ！ 根も葉もないこと言わないで！ それにアリスだってあの時酔ったまま人形劇やろうとして失敗して自分のスカートを捲り上げていたじゃない」

「私はしっかり覚えてるけどな。ってか、アリス。気付いてたんなら教えてくれたっていいだろ？ あれ、後から気付いてすっげえ恥ずかしかったんだからな」

「それこそ根も葉もないことでしょ！？ 魔理沙も気付いたなら——」

「私は脱いだりなんて——」

「だからアリスこそ——」

（……だれか、助けてください……）

一騒動が終わった後、アリスの予備の服に着替えた魔理沙を交えてここに来た目的である宗次郎の知識を用いた話しをしようとしていたのだが、それが完全にお互いの暴露大会と化していた。

三人とも、見た目は可憐な美少女なのだが、その口から語られる暴露話に彼は思わず目眩を覚えていたのだ。

彼も世の男性の多くが抱く、女性に対する夢というものを持っていたのだが、それがガラガラと音を立てて崩れていくのを感じ取ることしかできなかった。

思わずどこの誰かに助けを求めてしまう宗次郎。

だが、当然のことながら救いの手が現れることはなかった。

(……仕方ありませんねえ。緋村さん。こんなことに使うのは気が引けますが、貴方の技を今一度お借りします)

彼が内心でそう呟いた直後――

ギイイイイイイイン！！

「くっ!?!」「つつ!?!」「なっ!?!」

室内に響く極めて甲高い金属音。

「……みなさん。落ち着いてくれましたか?」

宗次郎の手には、傍らに置かれていた逆刃刀が握られていた。

―― 龍鳴閃 ――



抜刀術とは反対の、超神速の納刀術。

本来は相手の耳元で先ほどの金属音を鳴らし、相手の聴覚や平衡感覚を狂わせる技なのだが、今の場合は刀を半ばまで抜いた後に納刀したのだ。

言ってみれば宗次郎による手加減バージョンである。

彼女たちの注意を引くだけなら別の音でもよかったのだが、暴露話がヒートアップした結果かなり頭に血が昇っていたようであった為、通常の手段では落ち着かせることができないだろうと判断したようだ。

それにしては少々乱暴な手段である。

別に知識の能力を使ってまで飛天御剣流の技を使う必要はないだろうと思うのだが、彼女らによってかなり居心地の悪い思いをした彼の意趣返しの意味も含んでいるようだ。

ニッコリと笑って彼女ら三人に告げる宗次郎。

本来、笑顔とは攻撃の表情であるという。

めったに怒らない人は怒らせないほうがいいという見本であろう。

尤も、彼の場合は怒りの感情を取り戻している最中であるのだが。

「さて、みなさん。落ち着いてゆっくりと “ お話し ”    しましょ

うか？」

「「は、はひ……」」

その笑顔と共に語る彼の言葉に、さすがの彼女たちも頷くしかなかった。

ドン引きの彼女らを見て、ちょっとやり過ぎたかなあと思う宗次郎であったが、あのまま暴露大会を続けられるよりはマシだろうと思ひ直し、同じくびっくりした様子の上海に紅茶のおかわりを注ぐように頼むのだった。

この辺り、彼も相当いい性格をしているようである。

そんな彼を客人として向かえたアリスは災難であるとしか言いようがないであろう。

尤も、このあとに語られる彼の話に興味を引かれることになるのだが。

窓の外を見れば日の光が高くなっており、そろそろ昼を回ろうとする時刻のようであった。

## 第十四話 ― 人形遣い 前編 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

前書きの通り、前後編の前編でした。

最後の宗次郎は少々やりすぎたかなと思いましたが、彼の内心を考えると無理もないかなと思いましたのであの通りにしました。

それと暴露話の内容ですが完全にオリジナルですw

実際にあんなことがあったのかは分かりませんが、ありそうだなとは思いましたのでw

今回はちょっと前半の情景描写をしつつこいくらいに描写して、後半の魔理沙登場で一気にgd gdな展開にして落ちをつけてみました。が、いかがでしたでしょうか？

もう少し上手なやり方もあるはずなのですが、現在試行錯誤で執筆しておりますので生暖かい目で見守ってやって下さい。

では、次回の投稿をお待ちくださいませ。

## 第十五話 ― 人形遣い 後編 ― (前書き)

お待たせしました。後編であります。

なんだかどんどん更新時間が守れなくなってきたようです。

私のようなズボラな人間は×切りとか決めておかないと中々……(汗)

今回も結局時間オーバーになってしまいました。orz

なんとか今のところはオーバーするくらいですが、今後もそれくらいで済むかどうか……(大汗)

今回の本文中には自分なりに各原作の設定されてはいない部分を考察した上で書いております。

ですので、『こんなの原作にはなかったぞ?』という突っ込みはご勘弁を。(^^;)

それと、またも魔理沙が少々酷い目に会うことになっていますが、別に彼女が嫌いなわけではありませんので。

というか、るる剣にしろ東方にしろ、嫌いなキャラはおりません。

(あ、でも天子だけはちょっと……)

ですので、魔理沙ファンの方には申し訳ありませんが生暖かい目で見えてやって下さい。

それでは本編です。

## 第十五話 ― 人形遣い 後編 ―

時は昼下がりの午後。

一日で最も気温が上がる時間帯である。

だが、真夏の太陽ほどにギラギラとした日差しではない。

一年の中で最も過ごしやすいこの時期は、この時間帯でも汗ばむほどではなくカラッとした陽気に包まれていて、木陰に入ればそのまま昼寝をしたくなるほどである。

それが屋内であれば尚更であろう。

窓を開ければ、時折入ってくる風が更なる過ごしやすさを運んでくれる。

だが、それも今の“彼”にとってはなんの慰めにもならなかった。

ともすれば吹き出そうになる冷や汗を、懸命に堪えなければなら

なかったからだ。

いつもほがらかな笑顔でいる彼の顔も、今は引きつった作り笑いを張り付け、少女のような澄んだ声を紡ぎ出す咽は、カラカラに渴いた声しか出せなくなっていた。

場所は魔法の森の一画、魔法使いのアリス・マーガトロイドが住む邸宅。

その家の居間にて、彼は今起こっている現実には呆然とした声を絞り出す。

「どうしてこうなった……」

もう幾度目なのかも分からない言葉を呟く彼――宗次郎。

前を見れば、その原因となった三人の少女たちの声が聞こえてくる。

「だ、だから私は嫌だって……離せてば！　って、宗次郎は見るんじゃねー！！」

白黒の魔法使いが叫び。

「あ、あの。これ、どうでしょうか？　宗次郎さん」

半人半霊の庭師がおずおずと尋ね。

「うーん。ここのディテールはもうちょっと細目がいいかしら。

宗次郎はどう思う？」

七色の人形遣いが冷静に分析して意見を聞いてくる。

今、この部屋では着飾った年頃（？）の少女たちという色とりどりの華が咲き誇っていた。

花びらという名の衣装を身に纏い、その身をより美しく見せようとする華たち。

元来、衣服とは寒さをしのいだり、外敵や雨などの天候から身を守ったり、見て欲しくない部分を隠したりするために身に纏うものなのだ。

それが美しさや機能性を求めるようになれば衣服は衣装となる。

「宗次郎！」

——そう。

「宗次郎さん？」

——今、三人の乙女たちがしているのは。

「宗次郎？」

——いわゆるファッションショーと呼ばれるものであった。

「……どうしてこうなった」

再び紡ぎ出される同じ言葉。

彼としては、この現状の原因に思いを馳せずにはいられなかった。

それは宗次郎が場を落ち着かせ、昼食を食べ終わった後に魔理沙が放った一言から始まったことである。



時は少し溯って四半刻（約30分）ほど前のこと。

「ご馳走さまでした」

「いいえ。こんな物しか出せなかったけど……」

「とんでもない、とても美味しかったです」

「そう言ってくれると助かるわ」

一騒動が終わった後、しばらくは雑談に興じていた彼らであった



が、お昼も回ったことで昼食を取ることにしたのだ。

今はその食事も終わり、宗次郎が料理の出来を誉めているところである。

昼食はボンゴレ風の Pasta とコーンスープに季節野菜のサラダ、デザートにホイップクリームがたっぷり乗ったパンケーキ。

紅茶やお茶菓子で多少腹も膨れていた彼らのメニューはごく軽いものであったが、人形が作ったとは思えないほど飾りつけも凝っていて味も上々であった。

尤も、和食派の魔理沙は『洋食かよ……』とぶちぶち言っていたが。

それもアリスの一睨みで沈黙。

文句を言っていた割には、きれいにたいらげていたりする辺りが魔理沙らしい。

ちなみに妖夢も和食派だが、アリスのお蔭で洋食にもだいぶ慣れたそうである。

フォークの使い方などまだおぼつかないようだが、近いうちに料理番に洋食を覚えてもらって幽々子に食べてもらおうかと考えているらしい。

まあ、あの健啖家の亡霊姫なら洋食だろうが中華だろうが文句も言わずに全てたいらげてしまうだろうが。

そして宗次郎であるが、知識の能力を使うまでもなくフォークやナイフを完璧に使いこなしていた。

これは彼が志々雄一派に属していたころの話であるが、志々雄の組織が大きくなるにつれ、専属の料理人も配属されていくに従い洋食も多く出されるようになったのだ。

これは方治が『いずれ天下を取れば、欧米列強との会食もありうるから洋食に慣れておくべきだ』と主張したためであるらしい。

なんとも気の早い方針だと思われるだろうが、方治は日本人と欧米人の体格の差は食事の差にあると理解していたのだ。さすがは“百識”の二つ名は伊達ではないといったところであろう。

それ故に、宗次郎も席の座り方から食事中の作法、食後のナプキンの置き方に至るまでテーブルマナーをみっちり教え込まれていたのだ。

当時は面倒くさいなあと思っていた彼だが、今はその方針に感謝していた。

（まあ、あの熱血指導はちょっと勘弁してほしかったけどね）

ナプキンで口元を拭いつつ、今はもう居ない志々雄の第一の忠臣を思い返しては何ごとにも手を抜かないその熱の入れように内心で愚痴を零す。

何しろ『志々雄様の側近であるならば、テーブルマナーなど出来て当たり前』と言って自ら十本刀の指導にあたっていたのだから

ら。

尤も、不二は規格外の大きさ故に除外、宇水は最初から対象外、夷腕坊に至っては問題外であったが。

だが、それ以外の者は、そのあまりの熱血ぶりにほとんどの者が辟易して任務や修行を口実に逃げ出してしまい、まともに見に付けられたのは宗次郎の他に鎌足だけであった。

まあ、その二人以外はビジュアル的にも素行的にも問題がありすぎるだろうから、志々雄と同席させるのは自分と由美以外はこの二人で十分だと思っていたようだが。

だったら最初っからそうしろよと突っ込まれそうだが、彼にそんな理屈は通用しないのだろう。たぶん。

ちなみに方治自身は官僚時代に、由美は指導するまでもなく身に付けていたようだが、彼女がいつそれを習ったのかは本人も語らなかったらしい。

しかし、なによりも彼らの中で一番問題があるのは志々雄本人のような気がするのだが、その辺りを方治はどう思っていたのだろうか……

最後まで志々雄に忠義を尽くした彼があの後どうなったのかを宗次郎は知らない。

だが、なんとなく志々雄の後を追ったのではないかと彼は思う。

確証はない。なんとなくである。

宗次郎がかつての仲間たちを思い出して少しだけ懐かしい思いに耽っていると、白黒の魔法使いと七色の人形遣いの会話が聞こえてきた。

「アリスってさあ、服はこれしか持っていないのか？　どれも似たようなのばっかだし」

ケープの裾をつまみながら言う魔理沙。

いつもは顔の左側に流れる髪の一房だけを三つ編みにしている彼女だが、今はそれも解かれており、アリスの服を着ている彼女は別人のようであった。

まだ乾ききっていない髪が窓からの日差しの反射を受けてキラキラと輝いている。

名前も顔立ちも明らかに日本人なのだが、濃いハチミツ色の金髪に黄色に近い金色の瞳と、白人種と思われるアリスよりもその色合いが日本人離れしていた。

その魔理沙が着るアリスの服装は、本人には失礼であるが、宗次郎にはその持ち主よりも似合っているように見えていたのだ。

「貴女に言われたくはないわね。魔理沙だっていつもあの白黒の服じゃないの」

「知らないのか？　あれが魔女の正しい服装なんだぜ？　だからいつもあの格好で問題ないのさ」

「私はこの服が気に入っているからそうしているだけよ。他の服が無い訳ではないわ。それよりもその服はちゃんと返さないよ？ あげたわけじゃないんだから」

「分かってるって、ちゃんと返すさ。こういう服は私の趣味じゃないしな。それに……」

そこで一旦言葉を切る魔理沙。

だが、それに続く言葉がこの後に起こる出来事の始まりであったことなど誰が予想できただろうか。

宗次郎の予測する能力も、使おうと思わなければ発動はしない。

まあ、使ったところでほんの数秒先ではあるが。

しかし、それを補うかたちで勘が鋭くなっているはずなのだが、なぜかこの時の彼の勘はまったく働いていなかったようなのだ。

命の危険に晒されるようなことではなかったからなのか、それとも、彼がこの後に起こる出来事のようなものに巻き込まれるのは避けられない運命にあるのか……

発動したと思われる予知能力の方も、まだ一度しか発現していないし、何よりそれが予知なのかどうかはまだ確認も取れていない。

いずれにしても、宗次郎がこの後に起こる事を予知でもしていれば、魔理沙の続く言葉を止めようとしたであろう。

だが、誰にも止められることなく彼女は決定的な一言を言い放つのだった。

「……この服ちよつと窮屈でさあ。特に胸の辺りとかがな♪」

——ピシッ！

場の空気が凍りついた。

（あ、ヤバイかも……）

宗次郎がそう思ったときは既に遅かったようだ。

魔理沙としては爆発に巻き込んでくれた意趣返しのもりであったのだろうが、選んだ言葉が悪すぎたと言いが無い。

もしアリスが捨虫の魔法を会得しているのならば、今後、彼女が成長することはないはずなのだ。当然、スタイルの方も……

（っっていうか、妖夢さん？　なんであなたも睨んでるんですか？）

彼女はまだ成長途中であるはずなのだが、そんな事実など彼女にとってはなんの慰めにもならないのであろう。

今もアリスと一緒に親の仇を見るような目で魔理沙を睨みつけていた。

「ふ〜ん……そうなんだあ。それは悪いことをしたわねえ……」

「いいえ、アリス。貴女は悪くないと思うわ」

そう言っつてゆつくりと椅子から立ち上がった二人の顔は実にイイ笑顔であった。

昼食前の、あの騒動を止めたときの宗次郎の笑顔もかなりのものであったが、それとは比較にならないほどの凄みのある満面の笑みであったのだ。

（うわあ……）

思わず腰が引けてしまう宗次郎。

一方の魔理沙もさすがに不味いと思ったのだろう。

ゲツと言った後に立ち上がったのだが、両腕を上海と蓬莱によって抑えられてしまい、身動きが取れなくなってしまっていた。

何気にこの人形たち、人並みの力くらいはあるようだ。

「お、おい！ 離せって……いや、悪かったってば！ 今のは言葉のアヤだからさ、そんなマジに取るもんじゃないんだぜ？」

身動きが取れず必死に言い訳をする魔理沙だったが、時既に遅しという言葉どおり彼女たちには通用しなかった。

「……そう言えば、こんど新しい人形の服にしようかと思って作っておいた服が何着かあるんだけど、良い機会だから魔理沙に着ても

らおうかしら」

「あら、新しいデザインなの？ アリス」

「ええ。前に香霖堂に行ったとき、外の世界の服装に関する本が何冊か入荷していたから購入したの。でも、参考になるかと思って作ったはいんだけど、デザインが奇抜すぎて結局着なかったのよ。今の外界ってあんな服を着てるのかしらね」

そう言ってアリスが人形に命じて持ってこさせた本は、いわゆるファッション雑誌と呼ばれるものであった。

a○anやv○vi、no○noといった有名雑誌がずらりとあったのだが、いずれも一昔以上の古いものばかりであった。

だが、幻想郷に入ってくるものとしては新しい方だと言えるだろう。

どうやらこういった流行ものは忘れ去られるのも早いらしく、かなりの頻度で香霖堂に入荷されているらしいのだ。

これも宗次郎が後で知ったことだが、妖怪たちの服装が比較的モダンで新しいデザインが多いのはこの辺りが原因であるらしい。

妖怪たちの間では、こういった服装やスポーツなどが流行ることがあるらしく、今までも何度か流行のスパンが起こっていたそうである。

しかし、スポーツなどはともかく、服装などは裁縫技術や生地



製法技術の観点から再現するのは難しく、一部の技術力に優れた妖怪たちや、アリス、霖之助といったそれらを得意とする者たち以外では作れないそうなのだ。

特に妖怪の山に住む河童たちの技術力は凄まじく、一部の技術においては外の世界の技術を上回っているのではないかと思われるほどであるらしい。

その結果、そういった流行の服装などの恩恵を受けられるのは妖怪などの人外の者たちがほとんどだそうで、魔理沙や霊夢といった人外の側に付き合いのある者以外では、人間がその恩恵を受けられることはほとんどないとのことであった。

事実、人里で宗次郎が見かけた人たちの服装は明治期のものがほとんどで、どんなに新しくても昭和初期の庶民レベルのものばかりであったのだ。

阿求も人外の者たちと付き合いは深いのだが、人里の文化レベルに合わせたのか、普通の着物を着ていたようだ。尤も、その色合いは少々派手ではあったが。

霊夢の服装が巫女服としては少々奇抜なデザインであったのは、そういった服装の流行の変化を真っ先に知る霖之助が手掛けたからであろう。

幽々子などは今風の服装ではないが、これは単に亡霊になったときの服装がそれであったからであらうし、紫や藍などの服装も好みや役割の観点からであるようだ。

事実、橙は少々アレンジされているものの、現代の子供が着るよ

うな服装である。

話を戻す。

アリスからファッション雑誌の一冊を受け取った妖夢は興味津々に見入っていた。

やはり妖夢も年頃の少女なのだろう。

「うわ、これすごい。こんな体のラインがはつきり出るような服を…… “ぼでいこん” とか書いてるけど、こんな服をよく着れるわね」

「そうね。試しに作ってみたけど、さすがに恥ずかしいから着なかったわ。あ、そうだ。魔理沙にはこれを着てもらおうかしら」

「え!?!? ちょ! 待て!?!」

「それいいですねえ。あ、これ可愛い……」

「それはセーラー服ね。妖夢に似合うと思うし、気に入ったのなら着てみない? あ、このゴスロリというのもいいかもね。人形に一番似合いそうだから何着か作ってあるのよ」

「え? でも、私は……」

「おいこら!?! 無視すんな!」

「いいのよ。最近、香霖堂ではそういった服……学生服っていうそうんだけど、流れてくるのが多いらしいの。だから参考に何着か買ったんだけどね。他にも“ぶるまあ”とか“すくみず”とかいうのもあるらしいんだけど、なんでかさっさと山の妖怪たちに格安で売ってしまったって言ってたわ」

「へえ？ どうしてかしら。いつもは店に来る客にしか売らないのに」

「香霖のヤツ、余計なもん売りやがって……って、コラ！ 私はそんなもん着ないぜ！」

「さあ？ あの店主は『学生服とかならともかく、アレを店の棚に置いておくのはちよつとね』とか言ってたわ。よっぽど恥ずかしいものだったのかもしれないわね」

（霖之助さん。それってどこのブルセラショップですか……学生服も不味いでしょうに。ってか、結局売ったりしたら同じことでしょう）

宗次郎は彼女らの会話を聞いて目眩にも似た思いを抱いていた。

昨日香霖堂に行ったときにはその手の服は置いてなかったようだが、完売したのか、それともさすがに人目に触れさせるのは憚られたのか……

どちらにしても、彼に対する認識を少し改めたほうがいいかもしれないと宗次郎が考えていると、その思考を遮る声が室内に響いた。

「いいかげんにしろよ！ だいたいそんな服を作ったり着ようとし

たりするほうが恥ずかしいだろ！？ どっちにしたって似合うほど出るところ出てないクセに！！」

——バリリッ！！

「あらやだ。この本、ちょっと脆くなってたみたいね」

「そうみたいね。でも、大丈夫よアリス。見本になってくれる人が居るんですもの」

（魔理沙……更に地雷を踏み抜いてどうすんのさ……）

どうやら無視され続けられたせいで頭に血が昇り、思わず禁句を言ってしまったようなのだが、それは墓穴の底に更なる墓穴を掘る結果にしかならなかったようだ。

彼女らの額から目の部分に影が射しているようにも見える。室内は明るいのに。

アリスは真っ二つに裂けてしまった本をテーブルに置くと、妖夢も同じように裂けた本をテーブルに戻す。

表情が笑顔のまま固定されているのがなんとも恐ろしい。

魔理沙も今更しまったと思っているのか、顔からサーッと血の気が引いている。

「そうね、もうこの本も見ってしまったから必要ないわね。さ、行き

ましようか。服は私の部屋の奥のクローゼットにあるわ。妖夢もセーラー服というのを着てみようよ、きっと似合うから」

「え？ でも、私は……」

アリスは言いよどむ妖夢の腕を掴み、部屋の隅に連れて行くとそこで内緒話を始めた。

「（ヒソヒソ）なに言ってるのよ。彼にアピールするチャンスじゃないの」

「（ボソボソ）え？ ちょっとアリス！？ 私はもう別に……」

「（ヒソヒソ）私の目を誤魔化せると思ったの？ あいにくそこまです鈍っていないわ」

「（ボソボソ）うゝ……で、でも。もし、似合わなかったりしたら……」

「（ヒソヒソ）大丈夫よ！ 私の目に狂いはないわ。それとも私が信じられない？」

「（ボソボソ）そんなことないわ！ ……分かったわよ。でも、アリスも付き合ってたね？」

「（ヒソヒソ）分かってるわ。私もあのゴスロリとかいうのが気に入っているしね」

この後も何やら内緒話を続けていたが、やおら二人が振り向くと揃って満面の笑みを浮かべながら居間を後にしようとする。

（二人とも、聞こえてるんですけどお……って言ったらダメだね。  
うん……）

声が響きやすい室内であるためか、しっかりばっちり聞こえていた宗次郎。

（妖夢さん。それって返事の催促って意味なのかなあ……）

だが、空気を読んで黙っていることにした彼のこめかみには冷や汗が一筋流れていた。

「宗次郎さん」

「おろ？」

（あ。また言っちゃった）

唐突に妖夢から話しかけられて思わずうろたえな返事をしてしま  
う宗次郎。

「私達はこれからアリスの部屋で着替えてきますので」

「ちょっと待っててね。品評を聞かせて欲しいから、後で感想を頂  
戴ね」

「……………あ？」

「直ぐに来ますからお茶でも飲んで待っていて下さいね」

「おいしい!? 悪かったってばよ! もう言わないから離してくれえ!!!」

「上海、蓬萊、絶対離しちゃダメよ。よかったわねえ魔理沙。出る場所が出てるんだからきつと似合うわよお?」

「魔理沙。刀で斬られるのと服を着せられるのとどっちがいい?」

「どっちも嫌だああああああ!!!!」

バタンと、魔理沙の叫び声を残して閉じられるドア。

一人残された宗次郎は呆然としながらポツリと呟いた。

「僕が……品評? 感想?」

言われた言葉が彼の頭の中で踊っていた。

そしてこの後幾度となく口にする言葉を零す。

「……どうしてこうなった……」

とりあえず役得とでも思っておけばいいのではないかと思う。



結果から言えばこのファッションショーは成功であったと言える。

妖夢のセーラー服姿は元が元だけに良く似合っていた。

宗次郎が思わず『可愛い……』と呟いたくらいである。

そのまま外の世界に出て、留学生かなにかで通用しそうなほどののだ。

半霊がなければだが。

その妖夢はアリスとやったねとばかりにハイタッチしていたりする。

しかし、小物としてモデルガンの機関銃を持っていたのはなんの冗談だろうか。

アリスによれば、以前買った雑誌に機関銃を持ったセーラー服姿の少女が掲載されていたとのこと。モデルガンも香霖堂に置かれていたのでついでに購入したそうだ。

そのことに宗次郎は口元をひくつかせながら苦笑するしかなかった。

そのアリスのゴスロリ服も実に良く似合っていた。



元が西洋人形のような顔立ちだからか、上海たちと並ぶと等身大の人形がそこに立っているかのようなのである。

しかし、漆黒のドレスに黒い翼を付けているのはいかなものだろうか。

妖夢や咲夜のような銀髪ならばもっと似合っていただろう。乳酸菌的な意味で。

その咲夜が着ていたメイド服もゴスロリ服と似ていたが、見ればやはり作りが違う。

誤解されがちだが、ゴスロリ服とメイド服は似て非なるものである。

メイド服が奉仕作業を目的とし、機能性を重視した『作業服』であるのに対し、ゴスロリ服は装飾性を重視した『ファッション』であり、あくまでも着飾ることを目的とした服装なのだ。

上海人形たちが着るエプロンドレスがメイド服の代表的な服装と言えるであろう。

ヴィクトリアン朝時代には子供服としても親しまれていたらしく、妖夢が着たセーラー服も同様にこの時代の子供服の一つであったらしい。

蓬莱人形たちが着るドレスが一番ゴスロリ服に近いようだが、西洋人形を元にする蓬莱の服と、現代の過度な装飾を施したゴスロリ服とはやはり違う。

前記したヴィクトリアン朝時代に執筆されたという『不思議の国のアリス』が、現在流行しているクラシカル系ロリィタ・ファッション（ゴスロリはそのカテゴリーの一つ）の全てのモチーフになっているのだから、似ているのは当然であった。

なにせ、不思議の国のアリスの服装はメイド服のエプロンドレスなのだから。

その超有名作品の主役と同じ名前を持つ彼女がゴスロリ服を着ているというのは運命のいたずらであろうか、それとも必然なのであろうか……

いずれにしても、宗次郎が無駄に多い知識からそれらの事実を引っ張り出しては参考にして、適切とまではいかないまでも妥当とは言える論評をすることができたので、アリスとしても満足であったようだ。

二人とも多少形が違うバージョンや色違いのものを何度か着替えてきたが、いずれも同系統のものであったため、変化という点では乏しいものであった。どれも似合っていたが。

変化という観点から見れば、激しかったのは魔理沙であっただろう。

その魔理沙はというと……

『ぎゃーーーーー！！ 恥ずかしいから止めてくれ！ このスカート、丈が短すぎるだろ！？ “みにすか”？ そんなん知るか！』

『こんなん着れるかぁー!! “わんれん” ってなんだよ!?’  
『ちょ! これ下着が見えちゃうじゃないか!? “きやみそーる”?  
” だから宗次郎は見るなってば!!”』

……と、まあ。着替えるたびに上海たちに連行されて宗次郎の前に引っ張り出されては絶叫を繰り返していた。

そして最後には涙目になって 『勘弁して下さいもう言いません許してください調子に乗ってた私が悪いんです』 と謝罪の言葉を並べたことでようやく許してもらえたのだった。

教訓。

“口は災いの元” である。

女性の身体的特徴を揶揄するような言葉を言うてはいけない。

特に、それに対してコンプレックスを持っている女性には……

宗次郎が彼女たちのイイ笑顔を見るたびに背中に冷たいものが流れるのを感じたのは決して気のせいではないだろう。

ちなみに、魔理沙の服装に対するコメントであるが……

「……ノーコメントで」

掠れた声でそう言う以外、彼にはどうしようもなかったようだ。

せめて視線を外してあげることぐらいが魔理沙への情けであろう。

（これで魔理沙も少しは反省してくれればいいんだけどね……）

だが、咽元過ぎれば熱さも忘れるとばかりに同じことを繰り返すような気がした。

ともあれ、これで終われると安堵した宗次郎はホッと胸を撫で下ろす。

しかし、まだこの日の一日はやつと半分を過ぎただけである。

まだまだ彼の受難は続きそうであった。

そして事態は彼の周囲ではなく、彼を取り巻く幻想郷全体で起こっていたのだ。



「うう……酷い目に会ったんだぜ……」

「貴女が余計なこと言うからでしょ？ まったく、私よりちょっと大きいからって……（ぶつぶつ）」

魔理沙のぼやきにアリスが突っ込みを入れるが、後半は小さく呟

いていたので彼女の耳には届かなかったようだ。

そこに妖夢が話しかけてきた。

腕には綺麗にたたまれた何着かの服が抱えられている。

「ねえ、アリス。本当にこんなに貰っていいの？」

「いいのよ。私も楽しかったし、色々と参考にもなったしね。だから遠慮なく持っていてちょうだい……（ひそひそ）頑張んなさいよ？ 一応効果はあったんだから」

「（ぼそぼそ）え？ ……そ、そうね。ありがと、アリス」

「（ひそひそ）どういたしまして」

記念にということで妖夢はセーラー服を何着かアリスから譲られたようだ。その後は何やら内緒話をしていた二人であったが、宗次郎はあえて聞こえないフリをしていた。

（……妖夢さん。すみません、もう少しだけ待っていて下さい。アリスさんの心遣いを見無駄にするようなことだけはするつもりはありませんから）

博麗神社でのあの一戦の後、妖夢にも落ち着きが見えており、宗次郎がアリスと親しそうに話していても特に嫉妬などを見せることはなくなっていた彼女であったが、やはり返事待ちというのは何かと不安になることもあるのだろう。

今日のファクションショーも何らかのリアクションが欲しいとい

う乙女心からアリスに賛同したもののようであった。

アリスも詳しい話を聞いていたわけではないのだが、やはり女は女同士と言うべきか、なんとはなしに察していたようだ。尤も、魔理沙の場合は察していても面白ければなんでもいいやとばかりに引っ掻き回すところがあるようだが。

今回はそれで痛い目を見た彼女だが、どこまで反省しているのやら……

一方の妖夢であるが、別に彼女も焦って返事を催促するつもりはないようなのだが、いつもとは違った自分を見せたいという女心は、人間であれ人外であれ共通しているのであろう。

宗次郎も焦って返事を急ぐつもりはない。

半人半霊の彼女も、半妖化した彼も、寿命という観点からすれば人間を大きく超えているのだ。

そう。焦ることはない。

時間はたっぷりあるのだから……

だが、彼らの周りを取り巻く状況は、ゆっくりとした時間を与えるつもりはないようであった。

「あら？ 上海、それって……ああ、またあの天狗ね。まったく懲りずにばらまくんだから」

家の外へと見回りに出ていた上海が、新聞と思われる紙の束を抱えて部屋へと入ってきた。

現在の彼らは休憩を兼ねた午後のティータイムへとしゃれ込んでいたのだが、家を取り巻く魔法の森には危険な動植物も存在するため、定期的に人形たちが見回りをしているそうなのだ。

無論、家の周囲には魔除けの効果も兼ねた侵入者探知の結界が張られているのだが、それは下級妖怪や低級な精霊、力を持たない妖精ぐらいなどにしか効果はないらしい。

尤も、ある程度力のある妖怪などは、知性を持たない下級妖怪などとは違って意思疎通が可能なのであり、そういった者ほど力のある上級クラスの住処へは用も無い限り近づいたりしないものなのだ。

しかし、中途半端に力のある者や幻想郷入りしたての新参者などは自分を過信していたり、この地のルールを心得ていない場合が多く、そういった者ほど何も知らずに上級者の住処へと侵入してくる場合が極稀にあるらしい。

故にアリスは結界の探知外にも人形たちを見回りへと向かわせているのだ。

その日の当番であった上海は、家の前にあった新聞を見つけ、紅茶を飲んだりお茶請けのスコーンをかじっていた主たちの下へと運んできたようであった。

その新聞を受け取るアリス。

「あら、これ『文々。新聞』の号外じゃない……ちょっと、これっ

て宗次郎のことじゃないの？」

「え？ 取材を受けたのは昨日なんです、もう出来たんですか？」

「ちょっと見せてくれる？ ……！？ 宗次郎さん。これは……」

「どれどれ。あのカラスがどんな風に……って、おい。これマジか？」

宗次郎以外の三人がこぞってその号外の見出しを見て驚きの目を見張る。

その見出しはこう書かれていた。

『幻想郷に新たな強者現る！！ 鬼をも降したその強者の実力とは！？』

この号外は幻想郷の各地へとばらまかれていた。

つまりは宗次郎のことを幻想郷に住む多くの者たちが知ったということである。

――霧の湖――

「ねえ、チルノちゃん。その新聞どうしたの？」



「……大ちゃん。ちよつとここ読んで、この最強って書いてるところ」  
「ええと……『幻想郷で最強種と言われる鬼をも降した者の名前は』  
って、チルノちゃん。それを聞いてどうするの？」

「だからこのあたいを差し置いて最強って呼ばれるヤツの名前を知りたいの！」

「はあ……（どうして最強って漢字は読めて他が読めないのかなあ）」

―《紅魔館》―

「お嬢様。今日は随分と早起きされたようですが、いかがなされたのですか？」

「……咲夜。人間の諺（ことわざ）には『早起きは三文の得』って言葉があるそうね」

「はい。仰るとおりですが……（！？） お嬢様が手にしているのは新聞……まさか）」

「人間たちもたまには良いことを言うのね。早起きしてみたならこんな面白そうなものが読めたんですもの」

「……あのブン屋の新聞ですか。どこでそれを？」

「なに。妖精メイドが集まってのを見かけてね、聞いたただしてみ

たらこの新聞を見てたのよ」

「（あいつらはまったく……）それで何か面白いことでも書かれていましたか？」

「フフ……咲夜が昨日言ってた男ってこれのことでしょ？」

「（！？） やっぱり）……はい。その通りでございます」

「咲夜。歓迎の準備をなさい」

「……こちらに向かっているということですか？」

「……フフッ」

「（やはり運命を操られて……）承知致しました。それでは失礼します」

「……………さて、もうこの部屋には私しかないわよ？」

「ええ。ごめんなさいね、人払いさせちゃって」

「（白々しい）まあ、いいわ。ところで約束通りこの男には手を出さない代わりに……」

「ええ、分かってるわ。貴女の大切な “家族” の最終調整、任せてちょうだい」

「（フン。今まで散々引き伸ばしておいて……）そう。お願いするわ」

「それじゃ、失礼するわね」

「（……行っただか）家族……か。不甲斐ない姉よね。こんな皮肉な言われ方をされても言い返すことすらできないなんて。それにしても、この私が “ 視えない ” 男か……フフ、あいつに感謝する気はないけど、これに限っては感謝してもいいかもね……」

— 《 妖怪の山 守矢神社 》 —

「早苗？ ……早苗ってば！」

「……え！？ ああ、すみません」

「まったく、そんなに珍しい記事でも書いてあるのかい？ その天狗の新聞」

「え、ええと、まあ、その……」

「どれどれ……ふうん？ 早苗はこういう男がタイプなのかい？」

「ち、違います！ ただ、この記事によると、この人がこの時代の幻想郷に来たのはこの神社が原因かもしれないって……」

「だとしても、これはもう仕方の無いことではないのか？ 神の力といえど万能ではないのだからな。それにウチが原因とはっきり分かったわけでもないし」

「それはそうですけど……」

「そんなに気になるのなら会って話してみればいいではないか？  
この記事には今は幻想郷の各地を回っていると書いてあるからな、  
その内ここにも来るだろうし」

「そ、そうですね！　そうします。それじゃ、そろそろ行ってきました」

「気を付けるんだよ？　昨日みたいに猫に引っ掻かれなくな」

「あれは向こうが……いえ、それでは失礼します」

「……やれやれ、あの子にはココに来てから苦労ばかり掛けてしま  
ってるねえ。それにしても……中々良い男じゃないか。こりや早苗  
にも春が来たのかもしれないねえ」

このように幻想郷の各地では宗次郎の噂で持ちきりになっていた。

そしてこの場所でも……

――《太陽の畑》――

「……フフ。中々面白そうなのが来たじゃない……ああ、楽しみだ

わ。簡単には壊れないでちょうだいね……フフフ」

果たして宗次郎の運命は……

彼は幻想郷の者たちに認められるのであろうか。

『答え』    への道は、その険しさを増していくようである……

第十五話 ― 人形遣い 後編 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

今回のファッションショーは以前からやりたかったネタですのでやれて満足ですw

各人がどんな格好なのかは脳内補完でお願い致します。

まあ、少々やりすぎたかなと思うネタも入ってますがw

それと今回は試験的に最後のほうで会話のみの文に挑戦してみましたがいかがでしたでしょうか？

文の新聞の見出しですが、萃香の入れ知恵も入ってるようです。

よりインパクトがあるようにということなんですしょうが……

それで目を付けられてはいけないお方にも注目されてしまったようです。

今後の宗次郎の活躍をお待ち下さい。

## 第十六話 ― 里の守護者と氷の妖精 ― (前書き)

はい。またもお待たせしてしまい申し訳ありません。  
こんな時間の投稿となってしまうました……orz

今回、サブタイにある通り、あの二人が登場します。

特に片方のお方には私の独自設定がかなり入っております。

その為、地の文が相当に増えてしまいました。

他にアリスの人形に対しても独自設定が強く出ています。

読まれる方はその点を留意して下さい。どちらも原作の設定ではありませんので。

更に今回は前回に比べてかなり文章が短くなりました。

あげく、展開としてはあまり進んでもいません。orz

それでは本編です。

## 第十六話 ― 里の守護者と水の妖精 ―

今、この幻想郷に一陣の風が吹き抜けている。

瀬田 宗次郎という名の風が。

それは新聞という形で現れ、今やこの幻想郷で彼の名を知らぬ者は居ないだろう。

だが、そんな中で人里だけは静寂を保ち、そのような風が吹くことは無かった。

まるで台風の目のように。

そう、幻想郷のほぼ中央に位置しながら、技術面でも情報面でも取り残された場所であり、あらゆる面から中心になることは決していない場所。

しかし、只一つ、物資の供給源としてだけは中心であり続けている。

本来、物資の流通量と、技術や情報の伝達量は比例しているはずなのだが、幻想郷という地ではそれが当てはまらない。



いかにこの地が歪な構造で成り立っているのかが窺える事実であろう。

人という種が中心になることはないという事実の表れでもあるのだから……

さて、そんな人里の中に居ても、それらの情報から取り残されることはない人たちも当然のことながら存在する。

この九代目御阿礼の子にして、稗田家の当主でもある阿求の目の前に座る女性、上白沢 慧音もその一人であった。

「では、やはり阿求殿は既にこの者と会っておられたですね？」

そう尋ねる彼女の前の座卓には一束の新聞が置かれている。

問われた阿求は花の蕾のような微笑を浮かべると 「ええ」 と頷いた。

ここ、稗田家の邸宅は人里の住宅街といえる場所の中でも一際目立つ大きな屋敷である。

ごく一般的な里の住民が住む住宅地の一区画を丸々占有しているのだ。

いかに稗田家が里において絶大な発言力を有しているのかが窺える。

この広大な稗田家の屋敷の客間にて、主である阿求は突然の訪問であるにも関わらず、嫌な顔一つせずにこの寺子屋の教師を迎え入

れていた。

発言力、という点においてはこの教師も負けてはいない。

なぜならば、この里に住む者たちの大半がこの教師の教え子であつたからだ。

更にこの里の周囲を跳梁跋扈する強力な妖怪たちから文字通り身を挺して護ってきた里の守護者でもある。

「それにしても “先生” ともあろう方が血相を変えて尋ねてこられたと聞いたときには驚きましたけど、まさかこのお方の件で伺われたとは思いませんでしたわ」

口元を袖口で隠しながらコロコロと微笑む阿求。

いささか硬い表情でいる先生と呼ばれた慧音との対比が実に印象的であつた。

尚、この里において 『先生』 とは慧音本人のことを差す言葉である。

これは教師としての意味だけではなく、住民を守り、里を護り、知識を教え、教養を学ばせ、更には人としての道徳すら身をもって示し、人同士が生きる上での常識をも教え導いてきた彼女に対する里の者たちの敬意を込めた言葉なのだ。

阿求本人は身の上の理由もあって寺子屋で学んだことはなく、慧音の教え子とは言えない。

しかし、千年以上に及ぶ稗田家の幻想郷縁起の膨大な資料は慧音の授業にも活用されており、彼女と稗田家の関係は深い。

阿求自身も慧音に対しては尊敬の念を抱いており、畏敬と感謝の念を込めて『先生』と呼んでいるのだ。

無論、彼女以外に教師役となる者が居ないわけではない。

寺子屋の卒業生の中にはそのまま慧音の助手として残る者も居る。時には数十人にもなる子供たちを纏めるのは、彼女一人では無理があるのだ。

だが、大抵の場合は女子が結婚までの間に子守の勉強も兼ねた保母さんの役割であることがほとんどである。

故に、先生と言えば慧音一人のことを意味するのだ。

半人半獣の彼女がここまで里の者たちの尊敬を集めるまでには相当な苦勞があっただろう。

人間は基本的に人間以外の者を排除する傾向にあるからだ。

ましてや、この幻想郷で常に人外の者たちの脅威を受け続けている里においてはその傾向が顕著であった。

そう、『あった』だ。

博麗大結界によって外の世界と遮断される前までは妖怪排斥の動きがあった人里だが、それ以降は徐々に妖怪たちとの交流が増えて

いったのだ。

もはや外部からの助けが期待できない状況では、排斥して人外たちの敵意を煽るよりは交流を深め適度に付き合っていくことを選んだのだろう。

だが、そんな中でも元人間とはいえ慧音を教師として迎え入れ、教えを請う立場となるにはかなりの抵抗があったことは想像に難くない。

それでも彼女がここまで里の者から尊敬を集めることができたのは、彼女自身の人柄と実績の積み重ねに他ならないだ。

だからこそ 『先生』 なのだろう。

その先生であるが、今も座卓を挟んで対面に座る阿求を見据え、やや硬い表情を少しだけ崩すと訪問した理由を話し出した。

「実は昨日、団子屋で数年前に卒業した教え子たちに会いまして、そこで彼女たちの口から阿求殿が見知らぬ男性とソバ茶屋で昼食を共にしていたと聞き及びました。それがこの新聞に載っている男性と特徴が一致しておりましたのでその確認にと思ひまして」

ちなみにその卒業した元教え子とは、ソバ茶屋で偶然宗次郎と目が合った娘であり、同級生だった友人たち三人で彼らと居合わせていたのだ。

尚、彼女たち三人娘が 『ちやうちやうガールズ』 と呼ばれていたかどうかは定かではない。

「そうですか。ですが、それだけの用件ではないようですね」

その言葉に慧音はしっかりとした頷きを返す。

そして視線を座卓の新聞へと向けた。

阿求も同じく新聞に目を向け、記事に掲載された宗次郎の顔を見る。

いつも浮かべている微笑に、少しだけ困ったような苦笑を混ぜた彼の顔。

背景からして撮影されたのは博麗の神社であることに間違いはなかった。

おそらく阿求が手土産を持たせた後、彼らが神社へと訪問したときに取材を受けたのだろう。

「……この写真は昨日の昼すぎに撮られたもののようです」

「そうですか……」

慧音は阿求の言葉に眉を顰（ひそ）めてそれだけを返す。

つまりはたった一日で記事をまとめ、印刷し、幻想郷中へとばらまかれたのだ。

いかに妖怪と里の人間との間に技術格差があるのかが窺える。

里で印刷といえば、未だに彫刻刀で板を削った版画なのだから。

(元は外の人間たちの技術であろうに……)

内心でそう独白する慧音。

時たま訪れる外来人からそれらのことを聞き及んでいた彼女としては、この現実にはやるせなさを覚えてしまう。

その彼女も何度か射命丸から取材を受けたことがあり、それ以来彼女の所にも新聞が配達されるようになっていた。

無論、阿求の所にも配達されてはいるが、基本的に人外への配達が主であるためか号外のみであり、里の人間で彼女の新聞を知るものは限られているようだ。

慧音としては人間と妖怪とのパワーバランスを崩さない程度に技術格差を埋めることはできないものかと考えている。

しかし、言うは易しである。

いつの時代であれ、科学技術の最先端は軍事技術なのだ。

安易な技術導入はパワーバランスの崩壊に繋がりがねない。

それ以前に外来人たちのほとんどが道具の使い方を知ってはいいても、その構造や作り方までは知らないのだ。

導入できるかできないか以前の問題である。

どうやら、あの『神隠しの主犯』はそういった技術者などは

意図的に除外している節があるようだ。

慧音としても人と妖怪とのバランスが崩れるのを望んではない。

だが、今の幻想郷は妖怪の側にウェイトが大きく傾いていると彼女はある程度思っている。

確かに博麗の巫女など、異変が起きたときはそれを解決してくれる存在は居るが、彼女としてはもっとその巫女に自分をアピールして欲しいと考えていたのだ。

しかし、出不精なのかそれとも他に理由があるのか、巫女が里に顔を出すことはほとんどない上に、最近の神社は妖怪たちがたむろしているらしく、里では博麗神社は妖怪に乗っ取られているのではとまで噂されている始末である。

一時期は博麗の巫女に期待していた慧音であるが、そのような理由から自身が巫女の代わりを努めているようなものであった。

このなんとも危ういバランスの上で成り立っている構造をなんとか改善できないものかと日々頭を悩ませる慧音。

ある程度の技術導入ができないものかと考えているのもその一環であるようだ。

そこに飛び込んできたのが件の記事であった。

「それで用件ですが……私にこの男性の人となりを教えて頂きたいのです」

「宗次郎さんの人となりを……ですか……」

そう言った後は口を閉ざし沈黙する阿求。

カコーンと中庭にある鹿威しの音が響く。

客間の開かれた障子からは中庭の見事な日本庭園が広がっていた。

白玉楼のあの見事な枯山水がある中庭ほどではないが、隅々まで手入れが行き届いているその庭は熟練の職人が手がけたものであるということ雄弁に語っている。

——静寂。

ただ、鹿威しに注がれる水の音だけが流れていく。

目も閉ざし、瞑想しているかのような阿求の様子は、何ごとかを思い出しているのか、それとも、宗次郎に関してどう語ろうかと思案しているのか……

慧音も返事を促すようなことはしなかった。

きちんと正座をし、正面に座る阿求の言葉をひたすら待ち続ける。

たっぷりと時間を掛けて再び鳴り響く鹿威しの音。

それが合図であるかのように目を開く阿求。

「……よろしければ、理由をお聞かせ願えませんか？」



ようやく口を開き、紡ぎ出された言葉に慧音はしっかりと頷いた。  
その言葉は彼女も予想していたのだろう。

何を、などと尋ね返す言葉を口にするほど彼女は愚かではない。

故に、ただ真っ直ぐに自分が考えていることを語ったのだ。

「私は、この者に里の守護者になってもらいたいと考えております」

宗次郎を取り巻く状況は、本人の意思とは無関係に激しさを増しているようであった。



さて、そんなことが話し合われているとはつゆ知らずにいる宗次郎はというと……

「ハッ……クシュッ！」

くしゃみをしていた。

「風邪ですか？ 宗次郎さん」

半霊の庭師が気遣わしげに尋ねてくる。

基本的に半人半妖はどちらの病気にも掛かり難いものなのだが。

「どっかで噂でもされてるんじゃない？」

身に覚えがありまくりな人形遣いが適当な言葉を零す。

だが、それが正鵠を射たものであるとは知る由もなかった。

「かなり冷えたからじゃね？ アイツのせいだ」

ようやく乾いたいつもの服を着た白黒の魔法使いが地面を “ 見下ろして ” 言う。

確かに彼らの周囲の気温はかなり下がっているようだ。

彼女の視線の先にはその原因である “ アイツ ” が倒れていた。

「????????……」

「チルノちゃん、しっかりして！」

まあ、読者諸兄には何が起こっていたのかこれでお分かりであろう。

「しかし、相変わらず誰彼構わずケンカ吹っ掛けてくるヤツだぜ」

「……思わず反撃しちゃいましたけど、あの子、大丈夫なんですよか？」

「宗次郎さん。アレは妖精ですから例え死んでも直ぐ復活しますから大丈夫ですよ」

「そうね。それに新しいカードの実戦テストにもなったんだから良かったんじゃない？」

それぞれ誰の言葉かは説明するまでもないだろう。

ココは霧の湖と呼ばれる場所である。

あの新聞記事を読んだ後、萃香と戦った経緯を説明した宗次郎は『この記事を読んだヤツは腕試しによってケンカ売ってくるかもしれないぜ』という、彼女にしてはしごく真っ当なことを言った魔理沙の言葉により、何枚かのスペルカードを新しく考案することにしたのだ。

宗次郎も刀が手に入ったことでもあるし、機会があれば作っておこうかと考えていたから、正しい言葉の使い方ではないが渡りに船であったようだ。

新しく考案されたカードの枚数は四枚。

劍符…『疾風刃』

劍符…『天空殺』

更に――

——劍術…『飛天御劍流』

最初の二枚はともかく、三枚目のカードは未完成のままである。

これは未だに宗次郎が飛天御劍流の奥義である 『天翔龍閃（あまかけるりゅうのひらめき）』 が使えていないからだ。

正直、彼としては飛天御劍流の本質を理解しきれていない内にカードとしてしまうことに気は進まなかったのだが、妖夢の放った言葉に同意することにしたのだ。

妖夢曰く——『その逆刃刀が宗次郎さんと出会ったのは緋村さん……でしたか？ その方が貴方に飛天御劍流を使って欲しいというメッセージである気がするのです』

故に、たとえ知識からの見よう見真似であろうが付け焼刃であろうが、使わないでいるのはその人の意に反することでは？ と、彼女は言葉が続けたのだ。

確かにその通りなのかもしれないと宗次郎は思う。

香霖堂で逆刃刀と出会ったときの衝撃は体の奥に刻み付けられるほどののだ。

ならば一刻も早く本質を理解するためにもカードにしたほうがいいのだろう。

実際、見よう見真似であっても十分強力なカードになったのだから。

そして、最後の一枚。

切り札…『瞬天殺』

これは彼自身が唯一持つ技をカードにしたものだ。

通常の刀とは違い、逆刃刀であれば相手を殺してしまう心配はあまりない。

更に言えば、相手をするのは大抵人外の者であろうから耐久力、回復力は尋常ではないであろう。

故に、最初の頃はカードにするつもりがなかった技をカードにしたのだ。

『天翔龍閃』が使えない現在、彼にとってまさしく“切り札”となるカードである。

カードを考案し、テストを行った際に相手となったのは意外にもアリスであった。

本来なら妖夢の方が適任なのだが、アリスたつの希望でそうだったのである。

妖夢によれば、おとなしそうに見えて結構好戦的な所があるらしい。

アリスとしても、宗次郎がどれだけの強さなのか興味を持ったようなのだ。

やはりあの記事の真相を確かめてみたかったのであろう。

そのテストの内容であるが……

とりあえず、アリスは無傷で済んだとだけ明記しておく。

これは宗次郎がかなり手加減した上に、あくまでもテストであるから当てるつもりがなかったからでもあるようだ。

魔理沙も興味があるようだったが、宗次郎の技に翻弄されるアリスの姿と、周囲の森に流れ弾が被弾したその有り様を見てその気が無くなったようであった。

ちなみに最後の技である 『瞬天殺』 だけはアリスに使用していない。

対象となったのは、アリスの家の前にある一際大きい森の木であった。

これは、この技が宗次郎の得意技である 『縮地』 を使用する技でもあるからだ。

この地に来て以来、一度も縮地を使っではいなかった宗次郎であるが、テストのついでとばかりにどれだけの速さになるのか試してみることにした。

その結果であるが、観戦していた彼女ら三人のコメントを表記しておく。

『変態だぜ……』

『変態ね……』

『宗次郎さん。凄いです……』

約一名以外の評価があまりにもアレなものであったが、とりあえずテストの結果は上々のようであった。

『……これでも一応は “五歩手前” なんですけどね……』

これは彼女たちの評価に対する宗次郎のコメントである。

その言葉に彼女たちは更なる驚愕の目で彼を見たのであった。

もはや言葉も無いとはこのことであろう。

宗次郎も思った以上の結果に内心驚いていた。

（これは五歩手前でも滅多なことでは使わないようにした方がいいね……）

そう内心で呟く彼の視線の先には、無残な傷跡を晒す大木で  
“あった” 木の姿があった。

さて、そんな経緯もあって時は既に夕刻になっていた為、紅魔館へと向かうことにしたのだが、案内するつもりだった魔理沙はともかく、アリスまで付いて来たのには理由がある。

これは宗次郎との雑談中に彼から外の世界の人形の話を聞いたからであった。

彼によると、現在の外界ではロボットといわれる自分で動く人形があるらしいのだ。

これは自分の意思で動いているわけではなく、プログラミングされた結果であるのだが、その話にアリスは強い興味を持ったようである。

特にASOMOの開発の逸話は何度も質問を繰り返すほどであった。

藍や橙といった式神も、言ってみればプログラミングされた方程式である。

だが、アリスは式神については専門外であるため魔法で代用できないかと考えたようだ。

それで、それらのことについて調べるためにパチュリーの所蔵する魔法書をいくつか借りようと思ったようである。

今も一緒に連れて来ている上海も、いわば魔法でプログラミングされたものに近いもののようなのであるが、アリスはこれを更に一歩進めたものになりたいと考えているようであった。

これまでの研究でも魔法によって “自由意志” を持たせられないかと散々研究してきた彼女だが、宗次郎の言うプログラミングの一つである『ファジィ推論』に大きなヒントを得たようだ。

宗次郎から見れば、上海たちの動きは既に十分に『ファジィ』なものであるようなのだが、アリスによればプログラムとしてき



ちんと系統立てた理論ではなかったらしい。

そこできちんとした系統を立てた上で、更に自由度を増したものにしたいと思ったようだ。

他にも魔理沙が魔法書を盗んでいかないように見張るという理由もある。

せっかく自分が借りようと思っているのに魔理沙に勝手をさせてしまつてはパチュリーの機嫌を損ねる恐れがあるからだ。

『私は盗んでなんかいないぜ？ 死ぬまで借りるだけだ！』  
『それがいけないと言つてるでしょう！！』

以上、その時の二人の会話である。

ついでに上海に頭をどつかせるという突っ込み付きであった。

やはりこの魔理沙、まったく懲りていないようである。

そして場面は紅魔館へと向かう途上で霧の湖にていきなり氷の妖精であるチルノにケンカを売られ、撃退した所へと戻る。

「それにしてもあの妖精、随分と最強という言葉にこだわっているようですね」

「気にすることはありませんよ。所詮は妖精の言っていることですから」

宗次郎の言葉に妖夢が答える。

少々冷たく突き放した言葉であるが、この幻想郷において妖精の立場は低く、知能も低い者が多いため、一々相手にしてもしょうがないというのがごく一般的な妖精に対する認識であるようだ。

宗次郎としても、ココがそのような認識であるのなら仕方がないと思っっているのだが、チルノと呼ばれる妖精の “最強” という言葉に彼はある人物を思い出していた。

―― 四乃森 蒼紫（しのもり あおし） ―

元御庭番衆の御頭であり、散っていった部下たちのために最強の二文字を添えようとして剣心に挑んでいった男である。

宗次郎は志々雄の命で彼の力量を試したり、アジトに付いてきて欲しいとお願いしたりした経緯もあって、彼との交流は意外に多かった。

当時は彼の信念を知りつつも、それを試すかのように彼の元部下たちの拠点である小料理屋 『葵屋』 を襲撃させればいいと言いつ放ったことがある。

今思えばとんでもないことを言ったものだと思う宗次郎。

正直、叶うことなら当時の自分を殴り飛ばしたい気持ちであった。

感情を失くすということがいかに人間味を失くすことであるのかがよく分かる。

だからこそ最強の二文字にこだわった彼の気持ちも理解できるのだ。

まあ、だからと言って仲間を裏切ってまでとは思わないが。

今もその妖精の仲間なのか友達なのか、緑色の髪に同じく緑のワンピースを着て二対の羽を生やした妖精の少女に介抱されているチルノを見て、彼女がどんな思いでその言葉にこだわったのか興味を持ったようだ。

彼女とは出会い頭にこのようなやり取りがあった。

『お前が “ 掃除しろ ” ね！？ あたいと最強の名を賭けて勝負よ！！』

『は？』

『チルノちゃん。宗次郎だってば……』

『う……と、とにかく！ このあたいを差し置いて最強を名乗らせはしないわ！』

『えっと、君は？』

『なんでもいいから勝負よ！ スペルカード！ 凍符…パーフェクトフリーズ！！』

『え！？ ちょっと！ ……くっ！ スペルカード！ 剣符…疾風刃（easy）！』

『ええ！？ 氷が……わきゃっ！？ （ピチューン）』

と、まあ。こんな感じであっという間に勝負が尽いてしまったのだ。

戦闘描写？　なにそれ、美味しいの？　と言わんばかりの早期決着である。

とっさのことであつたが、相手が幼い少女の姿であつたために easy（手加減）モードで反撃した宗次郎は、そのあまりの脆さに思わず呆然としてしまったのだ。

ちなみに剣符…『疾風刃』　とは、逆刃刀に靈気を帯びさせてそれを刃の形で放ち、疾風のごとき速さで相手へと殺到する弾幕である。

メタな表現をすれば、某ゲームの『烈○拳』や『魔○剣』といった技を連想すればいいであろう。

通常は間断なく放たれる刃が四方八方から殺到していく技であり、一応はルール通りに逃げ道も用意されている。

Easyモードでは更に隙間が開いているのだが、その弾幕の刃がチルノの氷の弾幕を次々と破壊しながら殺到したために、驚いた彼女は避ける暇もなく被弾してしまったのだ。

一応は弾幕ごつこのルールとして、被弾しても大した怪我にならないように威力を抑えていたのだが、どうやら宗次郎の思った以上に威力があつたようだ。

「……皆さん、ちょっと待ってて下さいね」

「宗次郎さん？　ですが、もう時間が……」

「どうするの？ もうすぐ日も暮れるから早く紅魔館に行った方がいいんじゃない？」

「同感だぜ。一々相手にしてたら本当に日が暮れちまうんだぜ？」

「ごめんなさい。少し話しをしてくるだけですから」

反対する彼女らの言葉に謝罪を返すと、チルノが倒れている所へと降りていった。

「まったく。物好きなヤツだぜ」

「まあ、初めて妖精に会ったようだし。ここは彼の気が済むまで待つてましょう」

「……宗次郎さん。少し思いつめてたみたい……」

「何か思うところがあるのかしら？」

「最強がどうかってことか？ どっちにしたって早く休みたいぜ」

彼女たちの会話を背にチルノの下へと向かう宗次郎。

彼はあの妖精をどうするつもりなのであろうか。

赤味を増していく夕刻の日差しが、湖の突き出た半島のような湖畔に建つ紅い概観の紅魔館を更に紅く染めていく。

『答え』  
れない。

への道のりには、  
ときとして寄り道も必要なのかもしれない。

## 第十六話 ― 里の守護者と氷の妖精 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

かなり短かったですね……

本当なら美鈴のところまで行くはずだったんですが……

ごめんよ美鈴。次回はちゃんと出番も見せ場もあるからね…… (涙)

さて、るろ剣で最強と言えばあのお方の印象が強いですよ。

当初の予定ではチルノの出番は撃退された所でフェードアウトするはずでした。

ですが、やはり宗次郎とも関わっていましたが外すわけにはいかないなと思い直すことにしたのです。

それで紅魔館メンバーの出番が遅れてしまうのですが、皆様、この行き当たりばったりな作者の我が儘にもう少しだけお付き合い下さい。

では、次回の投稿をお待ち下さい。

## 第十七話 ― 最強への思いと紅魔館の実力 ― (前書き)

やっと……やっと仕上がりました……

今回は本当に超難産でありました。

予定日を二日も過ぎての投稿。読者の皆様から見放されないかどうか心配です(汗)。

今回、チルノが最強にこだわった理由を自分なりに解釈してみました。

ひょっとしたら他でも既に出されている解釈かもしれませんが……しかし、それが思った以上に長引いてしまいました。orz

それと後半に紅魔館勢が出てきますが、これにはとある有名格闘漫画のネタが使われております。

他にも宗次郎や妖夢に独自の設定が施されておりますので、読まれる方はその点を留意して下さい。(毎回書いている気がするなあ……コレ)

では、本編です。



第十七話 ― 最強への思いと紅魔館の実力 ―

泣き声が聞こえる。

―― どうしてみんなあたいから離れるの？

シクシクと鼻水混じりの子供の泣き声。

―― あたいが冷たいから？ 温かくないから？

小さかった泣き声は、やがてエーンエーンと大きなものになっていく。

―― 寂しいよ……悲しいよ……

最後はウワンと大声で泣き喚く声となっていた。

—— 誰か、傍に居てよ……一緒に居てよ……

大きな泣き声は鳴り止もうとはしない。

—— 誰か……友達になってよ。

だが、そんな泣き声の主にどこからともなく差し出された手。

その手を見た瞬間、泣き声は止み、おずおずとその手に触れようとして……

「チルノちゃん!!」

「……ふえ? 大……ちゃん?」

急速に意識がはつきりとしてくる。

「よかった。気が付いてくれて……」

その言葉と共に伸ばされた手は、先ほど差し出された手と似ているような気がした。

「えっと……アレ？ あたいは……」

親友の手の感触を額に感じながら、チルノと呼ばれた氷の妖精は現状に戸惑っていた。

確か、新聞に載っていた男と出会い、そして戦いを挑んだはずであつたが……

随分と懐かしい夢を見てしまった気がする。

「大丈夫？ どこか痛いところはない？」

そう優しく尋ねてくる声は親友のものではなかった。

「え？ え？ えっと……」

草むらの上に仰向けに寝かせられている彼女。

頭の下には少し硬いような、それでいて暖かくて柔らかく感じる枕のような感触があつた。

目に映る空には、夕日に紅く染まる雲がゆっくりと流れていく。

そして、先ほどの声は彼女の頭上から聞こえてきたのである。

「どこか痛むの？」

その声と同時に覆い被さるように現れる男性の顔。

チルノから見ると、上下逆さまで優しく微笑んでいるその顔は……

「へ？ あんた……掃除しろ……じゃなくて……」

「宗次郎だよ。僕の名前、ちゃんと覚えてくれると嬉しいんだけどな」

「ええ！？」 「おっと」 「キャッ！」

思い出したのか、彼女はいきなりガバッと起き上がった。

宗次郎と名前を訂正した彼がとっさに避けてくれなければ頭を衝突させていただろう。

ついでに額に手を乗せていた、彼女が大ちゃんと呼ぶ妖精もとっさに手をどける。

ようやく現状を理解する氷精。

どうやら勝負を挑んだ彼——宗次郎に膝枕をされていたようだ。

カアツと羞恥で赤みが差すチルノの顔。

こういうところは妖精も人間と変わらないんだあと、宗次郎が妙な感心をしていると、その妖精が慌てて言葉を紡ぎ出した。

「なんで！？ あたいが！？ あんたの！？」

もはやまともな文章にならず、単語だけをまくし立てている。

「落ち着いて！ チルノちゃん。この人はもうチルノちゃんをいじ

めたりしないから」

親友のその言葉に少し落ち着きを取り戻す。

見れば宗次郎は湖畔の草むらに正座をしてこちらを見ながら微笑んでいた。

「さて。チルノ……ちゃんでもいいかな？　ちょっとだけ僕の話聞いて欲しいんだけど、かまわないかな？」

「な、なんであたいが……」

「チルノちゃん。お願いだからこの人の話を聴いてあげて」

唐突とも言える宗次郎の申し出に戸惑う氷精。

思わず反発しかけた彼女だったが、親友の言葉に口を閉ざした。

いつも一緒に居てくれる親友である大妖精。

そんな彼女が自分に害が及ぶようなマネを絶対にするはずがなかったからだ。

最近是不機嫌になることが重なっていたために、いつも以上に短気になっていたようである。

この間はなんだか偉そうな物言いをする者から説教を受けていたチルノ。

なにやら力を持ちすぎたことを自覚しろだの、自然は永遠のもの

ではないから死んだら自分が裁くことになるのだ……

一応はその言葉に思うところがあったのか、大蝦蟇の池で物思いに耽ることもあったようだ。

だが、結局はよく分からなくて考えることを放棄してしまった。

先日など、いつものようにカエルを凍らせていたらいきなり攻撃を喰らって消滅してしまったのだ。

お蔭で復活するのに丸一日かかってしまっていた。

親友が言うには、またカエルを凍らせていたらただじゃおかないことを言っていたらしい。

憤懣遣る方無い思いにとらわれていたら、今度はあの新聞を他の妖精が読んでいるところを見かけたのだ。

興味を持って見せてもらおうかと思ったたら断られてしまった。

ほとんど腹いせであったが、無理矢理弾幕ごっこで片をつけて奪い取ってしまった。

三対一ではあったが、向こうはルナとかサニーとか呼び合っている二人だけが攻撃してきて、スターとか呼ばれていた妖精は傍観に徹していたようである。

実質二対一でも最強の自分が負けるはずがないと考え、あっさりと勝利してしまう。

やっぱりあたいは最強ねと、嬉々として新聞を見てみたらあの記事である。

どうやって探し出そうかと思っていたら、ネギがカモを背負って……いや、逆だっただろうか？ とにかくこの霧の湖に現れたのだ。すっかり頭に血が昇ってしまうのも無理はなかった。

だが今はその記事の男に敗北したのを自覚せざるを得ず、更には親友がこの男を擁護するようなことを言ったのだ。頭を冷やすしかなかったのである。

一方の宗次郎は、大ちゃんと呼ばれる妖精の言葉に大人しく従う様子を見せた彼女を見て、この二人は本当に信頼し合っているんだなあと思いを抱いていた。

そして、この氷精に話を聴いてくれるよう頼んだ大妖精に感謝の眼差しを向ける。

大方の事情はチルノが気を失っている間にこの大妖精から聞いていた宗次郎。

霧の湖に住む氷の妖精    |    チルノ    |

能力…『冷気を操る程度の能力』

二つ名…『湖上の氷精』

白のブラウスに青のワンピース、水色のショートヘアの髪にコバルトブルーの瞳、背中には蓬萊と同じ三角錐のクリスタルのような三対の羽、頭には瞳と同じ色のリボンを結び、まさしく氷の妖精と言える配色である。

ただ一つ、胸元のリボンだけが赤く、青系統の配色の中で一際目立っていた。

幼い容姿は橙と同年代であるように見える。

「あたいったら最強ね！」が口癖であり、最強であることを証明するためと言っては、始めて見る相手に必ず勝負を挑んでいるという。

ならば聴いて貰わなければならない。自分の話を。

かつて“最強”の二文字を追い求めて修羅道へと堕ちかけた男の話を……



「「「……………」」」



沈黙。

宗次郎の話が終わった後にはただ静寂が流れていく。

既に日は山の山頂へと沈みかけており、半分だけ覗かせた夕日が周囲を更に赤く染め上げ、幻想郷に夜の帳（とぼり）の訪れを告げようとしていた。

ペタンと草むらに女の子座りをしていたチルノが顔を上げる。

「……それで、その人はどうなったの？」

ようやく口を開いた氷精に、宗次郎は首を左右に振って答えた。

「僕もどうなったのかは詳しいことは知らないんだ。でも、間違いなく元の仲間達のところに戻ったと思うよ」

「……どうしてそう思えるの？」

その疑問に彼は断言する。

「あの緋村さんと闘って違う結果になるはずがないからね」

そう、かつての自分のように……

「……あたいが、その……蒼紫だっけ？ そいつと同じだって言いたいの？」

宗次郎の言外の言葉を感じ取ったのか、それに関してはそれ以上尋ねず、気になった疑問を尋ねるチルノ。

「完全に同じとは言わないよ。でもね、最強という言葉を追いかけても待っているのは――」

そこで一旦言葉を切り、チルノを見据える。

その真剣さを感じ取った彼女は思わず身構えて次の言葉を待つ。

傍らにキチンと正座をして座っていた親友も、そんなチルノの様子を気遣わしげな目で見守っていた。

「――孤独。ただそれだけだよ」

その言葉に眉を寄せ、顔を俯かせてしまうチルノ。

ギュッと膝の上にある服の裾を握り締めていた。

大妖精がそんな彼女の肩にそっと手を置く。

ハッとして顔を上げると、親友は慈しむように優しく微笑んでくれている。

（……そっか、あたいが最強になりたかったのは……）

――大ちゃん！？　どうしたの？　その傷！

――ううん、なんでもないの。大丈夫だから……

妖精は自然の具現であり、それ故に死という概念が存在しない。

それだけに幻想郷に住む他の者たちからはぞんざいに扱われ、戯れに撃ち落す者さえ居る。

—— 大ちゃん。あたい……最強になる！

—— チルノちゃん？

だからこそ、彼女は願ったのだ。

—— あたいが最強になれば大ちゃんをいじめるヤツなんて居なくなるから！

“最強” の二文字を。

—— そうしたら、他のみんなもあたいを頼ってくれるよ！

本来、妖精は暖気と陽気を好む。

故に、常に冷気を纏わせている彼女は敬遠されていたのだ。

それだけに、寂しくて泣いているときに手を差し伸べてくれた大妖精は、彼女にとって大切な友達なのである。

―― どうして泣いているの？ ホラ、元氣出して。

―― ……あんたは逃げないの？ あたい、冷たいのに……

―― 私ならこれぐらい平気だから大丈夫だよ。

―― ……あたいはチルノ。名前、なんていうの？

―― え？ ……私に名前はないの。大妖精って呼ばれてるんだけど。

―― ……それじゃ、あたい大ちゃんって呼ぶね！ 大妖精だから大ちゃん！

そして、それは大ちゃんと呼ばれた大妖精にとっても同じことであつた。

―― チルノちゃん……ありがとね。私に名前をくれて……

―― 大ちゃん……

―― ね？ チルノちゃん。友達になろうよ。

―― 友達？

—— うん！ 友達。

こうして友達となった二人。

その大切な親友ともいえる彼女を守るために、最強の二文字を追い求めたチルノ。

確かに宗次郎が話した四乃森 蒼紫と彼女とはその理由が違う。

だが、そればかりを追い続けていれば、いずれは孤独が待っているのだ。

大妖精の話によれば、彼女には自分の他に何人か友達といえる者が居るらしい。

闇の妖怪や蛍の妖怪、夜雀の妖怪などいつも一緒に遊んでくれているそうである。

他にも冬の間だけチルノを気に掛けてくれる妖怪が居るそうだが、春になるとどこかに身を隠してしまうそうで、今は居ないとのこと。

尤も、最初は妖精であることから相手にもされていなかったそうだが。

それらのことをチルノが気を失っている間に大妖精から聞いていた宗次郎は、まだ彼女は十分にやり直せると判断し、自分の知る男の話をお聴かせることにしたのだ。

この心優しい緑の髪を持つ妖精が居るのならと……

これでチルノが完全に最強を追い求めるのを止めるとは思っていない。

ただ、頭の片隅にでも覚えてもらえればと考えてのことである。

この子には彼と同じ道を進んで欲しくないという気持ちがあったのだ。

別にそれが自分への免罪符になるとは欠片も思っていない。

しかし、多くの友人と、今も片時も側を離れようとしない親友に囲まれた氷精の姿に、かつて関わった元御庭番衆御頭の姿が重なって見えたのだ。

彼も葵屋を調べた報告書を読んでいたため、彼を慕う先代御頭の孫娘のことや、翁を始めとした元部下たちのことを知っていたから尚更であった。

まあ、当時はそれを知っていた上で襲撃云々と発言したわけだが……

かつての自分が犯した過ちを償えるなどとは思っていなかったが、知ってしまったからには放っておくことなど “ 今の ” 彼にはできなかった。

「……君は大切な友達を護りたかったんだね」

だから知って欲しかった。

「……チルノちゃん」

“護る” ことの大切さと、その難しさを。

「あたいは……」

最強という名の “幻想” を追い求めるだけでは護ることはできないということ。

身をもって護ることを実践してきた “るろうに” の生き様。

逆刃刀を手にしたときから、そして、彼の剣術をスペルカードにしたときから、その生き様を真似てみようかとの考えが彼の中で沸々と湧き始めていたのだ。

その彼にとっては初の試みと言えるであろう氷の妖精との邂逅。

勿論、かのるろうにと全く同じ生き方をするつもりなどなかったが、その道を進むということは、先達を真似るということであるからだ。

芸術は師の作品を模倣することから始まる。

剣術は師の技を受けることから始まる。

職人は師の手元を盗み見することから始まる。

いずれも先達を見習うことが基本なのである。

その意味では、るろうにであった剣心が宗次郎の心の師と言えるだろう。

生き方は既に最初の師である志々雄から教えられていた。

弱肉強食の理論、それ自体は決して間違っているわけではない。

彼はその生き方に、剣心の生き様を取り入れてみようかと思い始めていた。

生き方と生き様。

意味はまったく同じと言っていい言葉ではあるが、彼は意味合いとして違うものではないかと考えている。

生き方とは、生きる道そのもの。

生き様とは、その生きる道をどのように進むのか、その有様を示したもの。

このように捉えているのだ。

弱肉強食の理論は彼の心の根底に根付いている。紫も指摘したことである。

以前にも述べたが、今の彼はそれほどこだわっているつもりはない。

だが、時折その考えが浮かび上がるときがある。

萃香との戦いがいい例であろう。



だからこそ剣心の生き様を取り入れ、この幻想郷ならではの考え方も取り入れて、自分なりの生き様を模索していくつもりなのである。

昨日のソバ茶屋でこの幻想郷を受け入れようと決意した思いもあるからだ。

それが 『答え』 への近道なのかは分からない。

しかし、答えに辿り着く道は、なにも一本だけである必要はないのだ。

これまでは臆気ながらにしか見えなかった道が、はっきりとした、様々な形で見え始めている気がする。

こう考えることも、紫がこの幻想郷を見て回るように言ったことの思惑の一つであろう。

（それに……）

そこで宗次郎はチラリと後ろを見上げる。

その視線の先には、彼を待つ三人の中に居る妖夢の姿を捉えていた。

（なにも道は一人で歩くものではないだろうしね）

視線を戻し、そう内心で呟く。

今はまだ、はっきりとした態度を示すことはできないが、いずれ

はどの道を歩もうとも彼女に伝えるときが来るであろう。

そのときは一緒に歩んでくれるだろうか……

だが、一緒に歩んでくれなくとも、辿り着くところが同じならば別々の道を進んでもかまわないはずである。

幻想郷という、この決して広いとは言えない地で生きて行くことを決めたのだ。

ならば道を違（たが）えども、もう会えなくなるということはない。  
りえない。

幸いというべきか、考える時間はたっぷりとあるのだ。

更にいつ辿り着くのかも分からない道である。

焦る必要はないのだ。

宗次郎がそこまで考えて、ふと視線をチルノに戻すと、なにやら彼女も考え込んでいるようだ。傍らの大妖精が心配そうな目で彼女を見守っていた。

うんうんと考え込んでいる氷精。

考えがまとまらずにいるのか、段々と顔が赤くなっているようだ。

このままでは知恵熱を出してしまいかねない。

どうやら見た目どおり精神的にお子様であるようだ。

ならば、ここは（精神的な）年長者が考えを導いてやらなければならない。

無論、この氷の妖精にその考えを押し付けるつもりはない。

そして、その結果がどう出るのかも分からない。

だが、無責任に突き放すつもりもない。

この幼き心を持つ妖精には周囲の助けが必要なのだ。

宗次郎は、自分がこの妖精にとって周りの友人たちと同じような存在になればいいと思っていた。

（……傲慢だね、我ながら。ま、分かってはいるんだけどね……）

だが、そうせずにはいられなかったのも正直な気持ちなのだ。

だからこそ彼女に対して他に考えるべきことがあると教えてあげなければならぬ。

「君はもつと周りのことに目を向けなきゃいけないと思うんだ。そこに居る友達のこととかね」

その思いを言葉という形にしてチルノに伝える宗次郎。

「……あたい。良く分かんないよ……」

彼の言葉に氷精が今の正直な思いをポツリとこぼす。

だが、それでもはつきり分かったことがある。

「でも、大ちゃんを護りたいって思ったから……だから……」

彼女自身も忘れかけていたのだろう、最強を目指す考えに至った動機を口にする。

「チルノちゃん。その気持ちはとても嬉しいよ……でもね、それでチルノちゃんが無茶して傷ついたりしたら……」

そこに親友である大妖精が自分の気持ちを伝える。

いくら死の概念がなかりうとも、親友が傷つき、倒れる様を見るのはとてもつらいことなのだから。

「大ちゃん……」

「だからね、一緒にがんばろうよ。みんなと一緒にね」

そう言って氷精の手を両手で包み込むように手に取る大妖精。

「……うん」

親友の笑顔と共に送られた言葉に、彼女は素直に頷いていた。

仲睦まじい様子の二人を見て、これなら大丈夫と判断した宗次郎は立ち上がる。

「あ！ あの……」

それを見た大妖精が慌てて立ち上がった。

「ありがとうございました！」

彼女の御礼の言葉を背中に受け、宗次郎は少しだけ振り向くと笑顔で手を振る。

「そ、宗次郎!!」

そこに今度はちゃんと名前で呼ぶチルノの声。

「また……会いにきてくれる？」

その言葉に今度はきちんと振り向くと、少し不安そうな顔をしている氷精にニツコリと微笑んで返事を返した。

「勿論だよ」

彼の返答にホッとした様子を見せるチルノ。

そして飛び上がり、彼を待つ三人の乙女のところへと帰っていく後姿に向かって、親友と手を繋ぎながら一緒に手を振るのであった。



「やれやれ。日もとっくに暮れちゃったぜ」

「すみません。お待たせしてしまつて」

「いいんですよ。良いお話も聞かせてもらいましたし」

「あ。聞こえていましたか？」

「まあね。ちょっと聞き取れなかったところもあったけど、大筋は理解できたわ」

「又聞きの部分がほとんどでしたけど、あの子が分かってくれたように良かったです」

夜の帳が下りようとしている空で、宗次郎は女性たちの言葉をそれぞれ返していく。

「……あれで本当に良かったのかどうかは僕にも分かりませんが……」

「いいんじゃないのか？　それであの氷精も少しは大人しくなってくれれば御の字だぜ」

「魔理沙ったら……」

「妖夢さん。いいんですよ、その意味も含んでいるんですから」

「ま。どっちにしても決めるのはあの妖精自身でしょうね。あれ以

上の干渉はあの子にとっても良い結果にはならないと思うの。自然の具現である妖精は、基本的に “ 在るがまま ” でいることが存在理由でもあるんだから」

「在るがまま……ですか」

アリスの言葉に宗次郎は沈黙する。

何ごとか考え込んでいるようだ。

「あんまり深く考えることもないんじゃないのか？ この幻想郷じやそれが当たり前のことなんだぜ？」

「……そうですね。そうかもしれません」

「魔理沙はもう少し考えるってことを覚える必要があるんじゃないの？」

「私はいつだて考えてるんだぜ？ アリスみたく人形遊びばかりしてるわけじゃないさ」

「へえ……言ってくれるじゃない。試しに何を考えているか言ってごらんなさいよ」

「ちょっと、二人ともよしなさいよ」

少々ケンカ腰になってしまった二人を諫める妖夢に、宗次郎が声をかける。

「ああ、ホラ。見えてきましたよ、あれが紅魔館ですね？」

「あ、ええ。あれがそうですよ」

宗次郎が指差す方向に、未だ空に残る夕日の名残を受けて、紅く、そして怪しく浮かび上がる紅魔館の姿があった。

昼と夜の境界を 『逢魔が時』 と呼ぶ。

これから、最も有名な魔を具現化した存在である吸血鬼の住処へと訪れるには相応しい時間帯であろう。

「……なんと言うか、そのまんまな名前ですねえ。紅魔館って」

「あー……確かにな。昼間に見るともつと紅いんだぜ」

紅魔館の敷地内にはあちこちに明かりが灯されており、すっかり暗くなり始めている地表からライトアップされているようである。

その敷地内の庭には見事な西洋庭園が広がっており、昼間に訪れれば色鮮やかに咲き誇る花々の花壇を見ることができたであろう。

上空から見る紅魔館は、正面から見ると凹の字を上下逆さまにした形になっていて、左側の棟には時計台が屋根の上にあるのが見える。

中央には正面玄関が見え、その上にはバルコニー風のテラスがあるようだ。

大きさは三階建ての古風な洋館であり、その真紅に塗られた外壁を除けば、まさに西洋の貴族が住む館そのものであった。



館の周囲は高い壁で囲まれており、正面には正門と思わしき格子型の門が見える。

その門の前にも明りがあるようだが、よく見ると動いているようであり、設置されたものではなく、人が手に持っている明りであると分かる。

その証拠に、近づくにつれて明りを手にした人の姿がはっきりと見えてきた。

「……どうやら出迎えのようですね」

「まあ、ここの主の能力が能力だからな。ひよっとしたらお前の運命を操ってここに来るようにされちゃったのかもしれないぜ？」

「……否定はできませんね」

紅魔館の主　―　レミリア・スカーレット　―

能力…『運命を操る程度の能力』

二つ名…『永遠に紅い幼き月』

他にも『スカーレットデビル』という二つ名があるが、これは彼女が少食であるために多量の血液を吸うことができず、吸いきれなかった血をこぼして服を真っ赤に染めてしまうことからきているそうである。

ちなみに、好みの血液型はB型であるとか。

（まあ、元人間とはいっても半妖なんだし、吸われる心配はないか……）

尚、永琳の調査によると宗次郎はAB型だそうである。

半妖なのに血液型が分かるのかとか、人間の部分がそうなのかとか、どちらにしてもこれから吸血鬼と会うのにあまり関係のない話ではあるが。

それよりも、彼が気になるのはやはりその能力である。

運命を操ると一口に言っても、どれだけの範囲に及ぶのか、どれだけの相手に影響を及ぼすのか、詳しいことは魔理沙たちもまったく分からないという。

彼が予定を変更してまで紅魔館に行こうと思ったのはこれが原因かもしれない。

だが、紅魔館の主に聞きたいことがあると思ったのは彼の意味であるし、何より、操られたという感触がまったく感じられなかったのだ。

（ま、どっちにしても来てしまったんだしね）

そう思いながら地面へと着地する宗次郎。

続いて後ろから三人が降り立つ音が聞こえてくる。

門に近づくと、その前にカンテラを持ったチャイナ服姿の女性の姿が見えた。

どうやらあれが紅魔館の門番である紅 美鈴（ホン メイリン）であるようだ。

紅魔館の門番 | 紅 美鈴 |

能力…『気を扱う程度 of 能力』

二つ名…『華人小娘（ホアレんシャオニャン）』

名前といい、服装といい、そしてその二つ名といい、まさに中国出身であることを明確に語っている。

（……確か、華人って中国人なのに移住先の国や文化に染まってしまい、中国出身としての意識が薄れた人のことだね）

具体的には移住先の国籍を取得した二世以降を華人と呼ぶそうである。

知識の能力で検索した情報をなんとはなしに頭に流していた宗次郎だが、彼女を見る限り、そこまで染まっているとはいえないようだ。

薄い小豆色の髪を腰まで伸ばし、こめかみから伸びる両脇の一房

を咲夜と同じように三つ編みにしており、その先を青いリボンで結んでいる。

かなりの長身で、宗次郎が出会った女性の中でも一番高いようだ。出迎えるためか、こちらに歩み寄ってくるその歩調は正確でしっかりとしており、彼が聞いていたように相当な武術の達人であるようだ。

そしてはつきりと見えてきた顔は可愛いというよりも美人と言わべきであり、キリッと引き締まった表情と合わせて『年上のお姉さん』的な雰囲気醸し出していた。

だが、なんととはなしに残念そうなオーラを纏わせているようにも見えるのは彼の気のせいであろうか。

どう残念なのかは口で説明のしようがないのだが。

白の半袖ブラウスに、薄いカーキ色のノースリーブの中国服。

腰の部分までである大胆なスリットが入った同じカーキ色のチャイナ風スカート。

歩くたびにすらりと伸びた健康的な長い足がチラチラと覗いて見える。

足には黒のコンフーシューズ。光りの反射具合から見て頑丈な皮製であるようだ。

門番といえはその家の顔とも言わべき部署であり、侵入者を撃退できる実力を持っていないければならない。

ならばこの女性は相当な実力者であることは間違いないだろう。

そしてその実力は、この館の主の実力を測るバロメーターにもな

るはずである。

先日会った咲夜はそれ以上の実力者であるようだが、武術の達人であるという門番のほうが、実力を測るには丁度いい相手であろう。

ならば……

(……試してみるか)

ここで宗次郎はちよつとした茶目っ気を出すことにした。

その考えの根底は、やはり決めようとしている生き方にある。

これまでも、実力を試す相手には枚挙にいとまがなかったはずであつたが、やはり元人間である自分が吸血鬼の住処へと赴くからには、ある程度の実力を示す必要があつた。

下手を打てば、最悪、話も聞いてくれなくなるかもしれないのだ。

新聞の記事には鬼に勝った云々が書かれていたが、どうも彼女の新聞は今一つ信憑性が低いらしい。

新聞の内容を信用していなかったり、読んでいなかったりする場合も考慮しておく必要がある。

幸いと言ふべきか、館の方から複数の視線を感じる。

やはり自分達が来ているのを知っているようだ。

ならば、目の前まできた門番の女性は格好の相手と言えるだろう。

だからと言ってこの女性をなめている訳ではない。

その歩き方だけでも相当な実力者であることは分かっている。

だが、宗次郎は自分の実力を “ 知っている ” のだ。

そこに過信も慢心もない。

その意味では記事にされたことは良い切っ掛けになったと言える。

「ようこそ紅魔館へ。私は門番の紅 美鈴と申します。宗次郎様です  
ね？ お話しは伺っておりますのでどうぞお通り下さい」

その丁寧な挨拶の言葉に、宗次郎は背後に居る女性たちからな  
やら意外そうな気配を感じていた。

「なんだよ美鈴。今日はやけにご丁寧じゃないか」

「それはあなたがいつもいつも……ゴホン！ 失礼しました」

魔理沙の言葉に思わず言い返しそうになった美鈴であったが、  
気を取り直して宗次郎に詫げる。

その様子にいつも魔理沙で苦労しているんだなあと思った宗次郎  
は少しだけ苦笑をこぼすと、気苦労が絶えないであろう門番に話  
しかける。

「いえ、お気遣いなく。ご丁寧にありがとうございます。とりあえ

ずいつまで居るかは分かりませんが、今日お伺いしたのは新参者である僕がこの主にご挨拶をと思っただけです」

そう言って手を差し出す宗次郎。

正直、苦労性でありそうな彼女に仕掛けるのは気が咎めたが、それでも今後のためにと思い直して試してみることにしたようだ。

だが、どう仕掛けるつもりなのであろうか……

「とにかく、今後とも顔を会わせることになるでしょうからよろしく願います」

その言葉と共に差し出された手をみた美鈴は、一瞬キョトンとした顔になったが、笑顔で握手を求める様子の彼を見て表情を崩した。彼の後ろに居る三人がなにやら意外そうな顔をしているのが気にはなったが、それでも差し出されたからには応えなければ失礼にあたる。

彼女は右手に持ったカンテラを左手に持ち替えると、右手を差し出した。

「これはご丁寧に。こちらこそよろしく願います」

しっかりと交わされる握手。

こうして並ぶと、美鈴の方が頭半分ほど宗次郎より背が高いようだ。

にこやかに手を握り合う二人の間には穏やかな空気が流れ――

「美鈴さん……」

「はい？」

――るはずであった！

「御免！」

「！？」

ガシャツと金属音を響かせ宙に舞うカンテラ。

宗次郎が蹴り上げていたのだ。

「――！？ 何を……！？」

おそらく 『何をするんです！？』 と言いたかったのであろう。

だが、その言葉が続ける前に宗次郎は次のアクションを起こしていた。

（武術検索――《柔術》！）

彼は知識の能力を使い、柔術の技を行使したのだ。

そして繋いだ右手一本だけで美鈴の体は彼女から見て右方向に横転していたのだった。



（――“柔”（やわら）！？）

一瞬でその技の正体を見抜いた美鈴は、素早く左手で宗次郎の右手首を掴むと、自らの回転を宗次郎へと返す。

彼女の足が宙を舞い、見事な足がふとももまであらわになる。

（――！ さすが！！）

この切り替えしを読んでいた彼は、その回転の力に逆らわず、自身をその回転に合わせて左へと体を横転させる。

あらわになった足など気にも留めていない。

ちなみに予測する能力の方は未だ使ってはいない。勘のみである。

ほとんど同時に着地する二人。

その結果は、宗次郎から見て左側に若干立ち位置がずれただけであつた。

「……お見事です」

「……試された……という訳ですか？」

ほとんど最初に握手をしたままの体勢であつた二人だが、宗次郎が賞賛の言葉を述べると、美鈴も警戒しながら言葉を返す。

そして同時に放される二人の手。

未だ警戒したままの美鈴は、左足を半歩引いた半身の構えをとっていたが、宗次郎の方はそのまま自然体で微笑みかけているだけであつた。

「申し訳ありません。噂に聞く紅魔館がどれほどのものなのかと思つてしまつたもので……」

そう言つて右手を動かし、何かを受け取るような形にする。

美鈴が少し訝しげな表情になると同時に、カシャツと蹴り上げていたカンテラが落ちて来て、宗次郎の右手に収る音が響いていた。

それを見た美鈴は、ふうつと溜め息をこぼして警戒を解く。

「まったく……ずいぶんと命知らずなマネをされるんですね？」

だが、やはりその言葉には先ほどまでにはなかった棘が含まれていた。

「ごめんなさい。こっちとしても事情がありますので……」

そう言つてチラリと紅魔館を見る。

その視線の意図を察した彼女はやれやれとばかりに再度溜め息を吐いた。

尚、文章にすると長いが、宗次郎がカンテラを蹴り上げてから受け取るまで二十秒も掛かっていなかったことを明記しておく。

その間、アリスと魔理沙はとっさの事に啞然とするしかなかった

ようだ。

だが、妖夢だけはいつでも抜刀できるように構えていたのは流石であると言える。

この辺り、武道に関わっている者とそうでない者の違いが如実に現れていた。

「では、あなたの目から見ていかがでしたか？ お眼鏡に適いましたでしょうか？」

言外に紅魔館（ウチ）の実力はこんなものではありませんよと、若干の皮肉も込めた言葉で尋ねる美鈴。

通常 『お眼鏡に適う』 とは目上の者に対して使う言葉だからだ。

「勿論です。いえ、思った以上と言っていていいでしょう。握手するまではそうは思いませんでした」

その意味を正確に読み取った宗次郎もお返しとばかりに少しだけ皮肉を込めた言葉で返す。

『安易に握手に応じるようでは門番としてまだまだですよ』 という意味である。

その返答に少しばかり目を見開いた美鈴の表情は、やがて苦笑へと変わっていった。

宗次郎も同じように苦笑をこぼす。

最初に挨拶し合ったとき以上に、二人の間には穏やかな空気が流れていた。

これが悪意を込めていたり、過度なものであったりする皮肉であれば衝突しか生まないが、少々茶目っ気のある適度なものであれば信頼関係を生む土壌にもなるのだ。

今のこの二人が良い例であろう。

尤も、それはお互いがそうであると理解し合った上でなければ成り立たないが。

剣術であれ武術であれ、やはりその道に進む者同士はなんらかのシンパシーがあるようだ。

苦笑からいつもの笑顔に戻した宗次郎は、右手にあるカンテラを返すべく美鈴に差し出した。

さすがに中の灯りは消えているようだ。

「咲夜さんから聞いてはいましたが、失礼ながら喰えないお方のようですね」

そう言いながら差し出されたカンテラを受け取ろうとして――

――！？――

(……さすがですね……)

(……お返し……ということですか)

傍目から見れば普通に返されたカンテラを受け取った光景にしか見えないが、なにやら二人の間に一瞬だけ緊張感が流れたようであった。

「……そう言うあなたも中々喰えない方そうですね」

「……失礼しました。やられっぱなしでは紅魔館の沽券に関わりま  
すので。ですが、お見事です」

「とんでもない。ですが、ここはお互い様ということにしましょう」

「そうですね。私としてもこの国の伝統武術である “柔” を体  
験できましたし、いい勉強になりました。それに丁度迎えの者が来  
たようですし」

そう言って美鈴が振り返った先には、いつの間にか門のところに  
現れた咲夜の姿があった。

どうぞこちらに、と言って先に門へと歩き出した美鈴。

「はい。では、お邪魔させていただきました」

宗次郎も気付いていたらしく、驚きもせずに先に歩き出した美鈴  
の後について行く。

その間、未だに驚きから立ち直っていない魔理沙は、何ごともな

かったかのように後に続いて歩き出した妖夢に声をかけた。

「お、おい。今のどういう意味なんだ？」

だが、その疑問に答えたのはアリスだった。

ちなみにアリスは既に立ち直っており、感心した眼差しを宗次郎に向けると同じように歩き出している。

「宗次郎はあの門番に認められたってことよ。ま、何が起きていたのかは分からないけど」

片目を瞑ってそう告げるアリス。

普段が人形のようなのであるだけに、その表情は中々に愛嬌があった。

「いや、何かがあったってことは私だって分かるさ。でも、何がお見事なのかさっぱりなんだぜ？」

その疑問には、先に歩き出していた妖夢が答えを返す。

「魔理沙。あの時、門番がカンテラを受け取ろうとした瞬間、宗次郎さんの手首の関節を極めようとしたのよ。でも、宗次郎さんはそうはさせなかった。だからお見事って言ったのよ」

「わ、分かるのかよ？」

「伊達に魂魄流剣術を修めていないわ。元来、剣術は戦場における戦闘術でもあるの。当然、刀を失ったときの無刀格闘術だってあるわよ」

故に先ほどのやり取りを見抜くことができたのである。

無論、宗次郎にもその下地があるからこそ知識からの見よう見真似であっても十分通用すると判断したのだ。

「ふえゝゝ……私にやついていけない世界だぜ」

そうこぼしながら魔理沙も彼女らのあとに続いて歩き出した。

「魔理沙はもつと何が起こったのかではなくて、起こった結果から何があったのか推察することを覚えるべきね。魔法使いは過程よりも結果を重視しなければならぬこともあるのよ」

たとえばそれが専門外のことであってもねと、言葉を続けたアリス。

少々お説教じみた先達としてのアドバイスに、魔理沙は「へいへい」と不真面目な返事を返しながら聞き流していた。

だが、その顔は何かを思案しているようでもあった。

彼女らの視線の先には、先に門へと到着した宗次郎と咲夜が美鈴も交えてなにやら話しているようである。

こうして彼らの紅魔館への訪問は、門をくぐる前から波乱的一幕を迎えたのであった。

『答え』　への道は、例え何本とあったとしても、一本に絞る必要はないだろう。

その全てを通ったとしても辿り着けばいいのだから……



## 第十七話 ― 最強への思いと紅魔館の実力 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

チルノの話が思った以上に長引いたために今回の文章量はこれまでで最大のものになってしまいました。(textで30KBって…)

他の作者様の作品を見れば、チルノの話と門番登場の話で分けたくらいが丁度いい長さなのかもしれません。

ですが、私は中身の薄さを文章量で誤魔化す傾向にあるのか(勿論、そんなつもりはありませんが)どうしても長くなってしまいうксеがあるようです。

今後も文章を纏めるように精進しなければいけませんね。はい……

それと今回は色々とネタを入れてみましたが、いかがでしたでしょうか？

少々やりすぎだった気もしますので、その点が気になりましたら遠慮なく感想にてご指摘下さい。

では、また次回の投稿をお待ち下さい。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

## 第十八話 ― 紅魔館 その1 ― (前書き)

はい。今回もしっかり間に合いませんでしたw（マテコラ）。  
それと今回のお話ですが……

＊警告！！

今回の本編にはこれまでにないほどのキャラブレイクが描写されております！

原作の雰囲気やキャラクターの崩壊を見たくないとお思いの方には  
お勧めできません！

お読みになる方はこの点を十二分に留意してお読み下さい！！

はい。これまでも注意文、警告文はありましたが、今回のキャラ  
ブレイクは半端ありません。

しかも一人だけとは限りません。

更に初っ端からいきなりとんでもないインパクトが襲うことになり  
ます。

もし、本編をお読みになって不快になられたとしても東方……いえ、  
当方は一切責任を負えません。

警告文をよくお読みになった上で本編へとお進み下さい。

第十八話 ― 紅魔館 その1 ―

「うん♪ やっぱりコレが似合うわね。後は髪にコレと……あ、コレもよさそうねえ」

「……………」

この日、紅魔館のとある一室にて。

宗次郎は、地獄すら生温い精神的苦痛を味わうという危機的状况にあった。

「……………どうして……こんな……………」

アリス邸で催されたファッションショーの時にも似たような言葉をこぼしていた宗次郎であったが、その時とは比べ物にならないほどの絶望感漂う声音である。

「あらあら、往生際が悪いわねえ。武士に二言はないんじゃないかっただの？」

心底楽しそうに尋ねる目の前の女性に、宗次郎は力ない返事を返す。

「……………僕は武士じゃありません……………商家の出です……………」

「まあ、どっちでもいいわ……さ。後はコレを付ければ完成ね♪」  
彼としては精一杯の抗議の声であったのだが、軽く一蹴されてしまふ。

そして、手にした物を彼の頭に乗せようとしていた。

（……確かにこの状況は霖之助さんの店で見た光景と同じだけど……）

そう。確かにあれは予知であったようだし、今の状況を鑑みるに間違いなくその予知は当たっていたのだった。

（でも、回避できなきゃ意味ないじゃないか……）

がつくりとかなだれる宗次郎。

——人、それを運命という——

ちなみに、こういう場合は運命と書いて “さだめ” と読む。  
どうでもいいことだが。

女性の手によって頭に乗せられた “ソレ” は大した重さのあるものではなかったが、今の彼にとっては大岩を乗せられたも同然であっただろう。

なにしろ “ソレ” は、目の前に居る女性——紅魔館のメイド

長、十六夜 咲夜の頭にあるものと同じものであったからだ。

その咲夜が満面の笑みを浮かべ、宗次郎にとっては無情な言葉を宣言したのだ。

「これで貴方も、紅魔館の——」

そして、宗次郎が今着ている服は——

「————立派なメイドさんね♪」

——《ザ・メイド服》——であった……

「……どうして……こんな……」

うなだれたまま、再度同じ言葉を口にする。

傍から聞けば、まるつきり呪詛の声に思えるほどの陰鬱とした声音であった。

まるでこの世の終わりを全て背負ったかのような宗次郎。

その宗次郎を、ほほに手を当ててうっとり眺める咲夜。

その彼女の鼻からは赤い液体が流れ出ていたりする。

なかなかカオスな光景であった。

さて、このあまりと言えばあまりな、いきなりの『男の娘』  
ネタをぶちかますカオスっぷりに、いい加減、読者諸兄から説明を  
求める声が上がってきていることであろう。

彼らが門をくぐった後、どうなったのか。

まずはそこまで時間を巻き戻すことにしよう。



「……それにしても、外観だけじゃなくて内装まで紅いんですねえ」

コツコツと “二人分の” 足音が廊下に響く。

「なにしろ 『紅魔館』 ですから、その名に相応しい装いをとの  
ことなんです」

（だとしても、何も天井まで紅くする必要はないんじゃないかなあ  
……）

ポツリとこぼした宗次郎の言葉に、彼の前を歩くこの館のメイド長がチラリと振り返りつつ答えを返す。

宗次郎はどこもかしこも紅で統一された配色に、眼がチラチラしないかと思ひながら内心でそう呟いていた。

(それにしても……)

と、目の前を歩く咲夜の後姿を眺めつつ思案顔になる宗次郎。

ピンと背筋を伸ばし、規則正しい歩調で歩く姿は一分の隙もないほど完璧である。

頭の上にリンゴを乗せて歩くという、昔から伝わる歩行の練習法を今の彼女に試してみれば、落とすどころか揺らぎ一つなく目的地まで歩き続けられることだろう。

(……まったく隙がないな。香霖堂で会ったときとは大違いだ)

客として来ているのだから敬語で話されるのは分かるとしても、一応は顔見知りであることの態度を欠片も見せることのない対応ぶり、完璧な館の従者としての態度……というよりも、いつでもこちらを抹殺対象にできることの現われではないかと深読みしてしまうほどであった。

だが、あながち読み違いではないであろう。

こちらの實力を見せるためとはいえ、彼らの見ている前で門番に仕掛けたのだ。

それなりに警戒されることは既に織り込み済みである。

だが、案内として先頭を歩くメイド長の背中を見ながら、宗次郎は香霖堂で出会ったときとまるで違う態度に、少しばかり早まったかなとも思い始めていた。

隣を歩く妖夢もいつになく硬い表情のようだ。

しかし、結局は後の祭りである。

宗次郎は甘く見られるよりはマシだろうと思い直すことにしたようだ。

今の彼ら “三人” は、この館の主であるレミリアの下へと赴くため、館内の廊下を歩いている最中である。

尚、なぜ足音が二人分しかないのは、宗次郎が履いている草鞋のせいであった。

多少はギュッギュツという独特の音はするが、革靴ほど音が響かないのだ。

いずれは香霖堂で注文した特製の靴に履き替えることになるだろうが、草鞋は草鞋でこういった利点もあるのである。

だが、耐久性としてははつきり言って落第点であろう。

なにせ、アリス邸で『瞬天殺』のスペルカードテストを行った時は、一回で草鞋がオシヤカになってしまったのだ。今、履いているのは替えの草鞋である。



やはり利便性、耐久性を考えれば靴の方にするべきだろう。

宗次郎が今の状況とはあまり関係のないことを考えていると、隣で彼の様子を窺っていた妖夢から声をかけられた。

「宗次郎さん。魔理沙のことが気になりますか？」

「え？ ……ええ、まあ。でも、アリスさんが一緒に居ますから大丈夫でしょう。それに、僕からも言い含めてありますし」

その言葉に妖夢も 「それもそうですね」 と返す。

まったく見当違いのことを考えていましたなどとは言えず、無難な意見でなんとか誤魔化すことに成功する。

今、彼らが言ったように魔理沙とアリスの二人はここには居ない。

彼女たちが用があるのは、この館にあるという図書館の方なのだ。

正確に言えばアリスだけなのだが、魔理沙もなにやら思いついたようである。

まあ、アリスが監視しているのだからそう心配することはないであろうが。

（それにしても、魔理沙って紅魔館でどれだけ警戒されているんだか……）

少しばかり思い出し笑いをしてしまう宗次郎。

門をくぐる前、彼女たちはこんなやり取りをしていたのだ。

『それでは宗次郎様。当館の主がお待ちかねですのご案内いたします……ああ、魔理沙。貴女はもう帰っていいわよ』

『な！？ そりゃないんだぜ？ 今日とは別に本を借りに来たんじゃないんだし』

『盗みに、でしょう？ まったく。あなたが来るたびにパチュリ様の機嫌を直すのにどれだけ苦労していると思っっているの？ 少しは自覚なさいな』

『だからって帰れはないだろう！？ ……って、そこの門番！なに頷いてやがる！？』

『咲夜さんの言うとおりですよ。私だって通したくて通したわけではないのに、あなたが帰った後で怒られるのは私なんですから』  
『そりゃ通せんぼされたら押し通るしかないだろう？ それに大体なんで私だけなんだ？ アリスや妖夢だって居るじゃないか！』

『『一緒にしないで（よ！）（くれる？）』』

こんな感じで少々（？）もめたのだが、結局はアリスが監視するという条件で入ることを許されたのである。

更には宗次郎からも……

『魔理沙。お願いがあるんだけど、今回は魔法書を持っていったりすることは諦めてくれないかな？』

『なんだよ、宗次郎まで……』

『それじゃ、もう一つのお願いを聞いてくれたら今のは取り消す

よ』

『へ？ もう一つって？』

『このカードの実験台になることなんだけど……』

『え？ そのカードって……げ！？ それは“瞬天殺” ってヤツじゃねーか！！』

『うん。このカードの技は加減が難しいんだ。だからどれだけ力を加減すればいいのか知っておきたいんだよ』

『じよ、冗談じゃねーぜ！ そんなもん喰らったらあの木みたい……に……』

『なら、最初のお願いを聞いてくれたらこっちは取り消すけど？』

『わかった！ わかったってば！！ 頼むからそれだけは勘弁してくれ！！』

……人、それを“脅迫” という……

と、まあ。こんな感じで、いい加減 宗次郎も魔理沙の扱いを覚えたと、まあ。こんな感じである。

ただでさえ紅魔館の主にとって楽しいとは言えない話題となりそうなのだ。

これ以上、機嫌が悪くなる要素は取り除いておきたいと思うのも無理はなかった。

二人とは玄関ホールで別れたが、魔理沙は最後までぶちぶちと愚痴をこぼしていた。

やはり人であれ、妖怪であれ、日頃の行いというものが大事なの

である。

（まあ、魔理沙の場合、悪気がない分、余計に性質（たち）が悪いんだけどね）

……悪気がなろうとも、分かってやっていれば更に性質が悪いだろうと思うのは筆者だけであろうか？

そんなどうでもいい突っ込みは置いておくとして、宗次郎はたった二日の付き合いで魔理沙がどういう人物か概ね把握したようだ。

どう考えても外観と大きさが噛み合わない、三人が横に並んだとしてもまだ余裕のある広い廊下。

そのカラクリについては既に仕掛けた本人から聞いていた。

紅魔館のメイド長　――　十六夜　咲夜　――

能力…『時間を操る程度の能力』

二つ名…『完全で瀟洒な従者』

その時間を操る能力で、空間をも弄ることができるという。

人の身でありながらとんでもない能力だと思っている宗次郎。

しかし、他の者たちに言わせれば彼の方がよっぽとんでもないであろう。

そんな埒もないことを考えながら歩いていると、時々メイドの格好をした妖精とすれ違う。

彼女らが、宗次郎が予め聞いていた妖精メイドたちのようだ。

だが、その仕事ぶりはお世辞にも誉められたものではなく、メイド長である咲夜の姿が見えたから仕事に戻っているという有様だ。

それでも何体かは真面目に仕事をしているらしく、そういった者は他の妖精メイドに指示を出していたりもする。

これは後に咲夜から説明されたことだが、彼女はそういった目端の利く真面目な者をリーダーにして班ごとに分け、分担して広い館内の清掃などをさせているらしい。

宗次郎は、この広い紅魔館の実務を咲夜が一人で取り仕切っていると聞いてはいたのだが、いかに時間を止めることができても、彼女一人で行うには物理的に無理があるだろうと思っていたのだ。

それゆえ、この説明には大いに納得したものである。

だが、やはり目端が利く妖精は絶対数が少なく、どうしても手が回らない所が出てしまうらしい。

妖精とは身勝手ですぐ他の事に気を取られるのがデフォルトなのだ。

宗次郎が霧の湖で出会った大妖精のように、礼儀正しく、他者を気遣えるような妖精などそうそう居ないのが当たり前なのである。

やはりメイド長である咲夜の負担は相当なものなのだろう。

（それにしても、配色はともかくとして、調度品や美術品は相当にお金が掛かっているものばかりみたいだね……）

窓が極端に少ない廊下には、様々な絵画や彫刻が飾られている。

まるでどこかの美術館のようであった。

それらを横目で観ながら、宗次郎は知識の能力で鑑定をしていく。

だが、鑑定士でもない彼が、知識だけで本物かどうかは見抜くことはできないし、どれだけの価値があるのかも現代の相場を参考にするしかなかった。

知識だけでは本物っ “ ぽい ” としか言えないのである。

紫からも指摘されたが、この辺りがこの能力の唯一と言える欠点なのだ。

鑑定士とは、長年の経験で培われた勘と、養われた感性がなければ意味がないのである。

他にもそれらが必要な職業は存在する。

例えば、演奏家の知識を検索したとして、彼が楽器を持ったしよう。

彼は初めての楽器であっても一通りは演奏することができるだろ

う。

だがそれは、ただ譜面をなぞるだけの “教科書通りな” 演奏でしかない。

プロのように人を感動させたり、気分を高揚させたりする演奏はできないのだ。

経験と勘、感性や教養といった、いわゆる “概念的” なものが必須である職業は、知識だけではどうしようもないのである。

彼が門番に 《柔術》 の技で仕掛けることができたのは、彼自身に武道の “下地” があったからこそだ。

そんな鑑定士として必須な鑑定眼すら持ち合わせてはいない宗次郎ではあるが、それでもこれらの美術品を観ているのは、一応は参考程度にはなるだろうと思つてのことであつた。

情報はどんな小さなことでも収集しておくに越したことはないのである。

何より、先ほどの妖夢との会話以降は三人とも沈黙しているために暇であつたというのが大きな理由であつたりする。

しかし、これらの美術品が本物ならば、美術館や美術品コレクターといった美術関係者が目を剥くのは間違いないであろう。

中にはレオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロ、ミケランジェロといったルネッサンス期に活躍した説明不要の三大巨匠が手掛けたと思わしき作品まであつたのだ。

大英博物館やルーヴル美術館も真っ青な品揃えである。

目を剥くどころか、卒倒……そのまま昇天してしまいかねない。

万が一にも外の世界に流出したら、近代美術史を根底からひっくり返しかねない代物まであるかもしれないのだ。

だが、彼には美術品そのものに興味はなかった。

だからこそうして冷静な目で観ていられるのであろう。

(……全体的にルネッサンス期やそれ以前のゴシック様式のもものがほとんどだね)

彼が知識からそれらの情報を得た瞬間、どう見ても胡散臭いエセ貴族の格好の太めで髭面の男性と、細めでメガネの男性二人組が脳裏に現れたのだが……

(…………削除)

彼は突っ込みを入れることもなく、それに関連した情報ごと全件削除してしまう。

気の毒に、二人組は手に持ったワイングラスを掲げて 『ルネッサンス』 という決まり文句さえ言う暇がなかったのだ。縮地にも匹敵するほどの早業である

見事としか言いようのない、華麗なスルーっぷりであった。



彼もいい加減、現代知識のカオスぶりに慣れてしまったようだ。

ちなみにルネッサンスとは、本来はルネサンスと言い、直訳すると“再生”を意味する言葉であり、主に十四世紀後期から十六世紀にかけて興った、古典古代の文化を復興しようとする歴史的文化革命あるいは運動を指す言葉である。

ゴシック様式とは、十四世紀以前の中世ヨーロッパでキリスト教と共に広がった美術様式のことであった。

《参考資料・Wikipedia『ルネサンス』『ゴシック』より一部抜粋》

他にもロマネスク様式というのがあるが、長くなってしまうため割愛する。

このように知識の能力をフル回転させながら美術品を眺めていた宗次郎だが、ある奇妙な点に気が付いていた。

（……この紅魔館が幻想郷にきたのはここ数年以内のことのはず……どうして十六世紀以降の美術品がほとんどないんだ？）

そう。十七世紀から十八世紀のバロック様式やロココ様式、十九世紀のロマン主義様式、更には近代美術様式のものがあったと言っているほど展示されていないのである。

つまりは飾られている美術品の多くが、約五百年以前のものばかりなのだ。

（確か、主のレミリアと妹のフランドールが生まれたのもその時代のはず……）

宗次郎は霊夢たちから聞いていた情報を元に、二人が生まれた年代を推察する。

どうやらその辺りにこの家の秘密があるようだが、さすがに出生に関わるようなプライベートなことなどそう簡単に聞けるはずがなかった。

下手につつけば機嫌を損ねるところか、激昂して敵対関係にまで発展しかねないのだ。

だが、彼が聞こうとしていることにはフランドールに関係したことが含まれている可能性が極めて大きいのである。

（どうやら簡単には聞きだせそうにないみたいだね……）

いずれにしても言葉を慎重に選ぶ必要があるだろう。

（ま。聞き出せないなら聞き出せないで別に構わないんだけど……）

彼にしてみれば、吸血鬼の彼女がどうして人間の創ったルールに従っているのか興味を覚えたただけであった。

別段、敵対関係になってまで聞き出すほどのことではない。

（どっちにしろ、この館の主に会ってからだね。話はそれからだ）

そう。この紅魔館に赴いた最大の目的は、レミリア・スカーレットに会うことそのものなのである。



（この人が吸血鬼のレミリア・スカーレットか……ただ座っているだけなのに物凄い威圧感だ。志々雄さんに勝るとも劣らないな。でも、見た目が幼いからなのか、どうしても小さい子供が背伸びをしている感があるなあ。失礼だと思うけど、なんだか可愛らしいって思えちゃうよ）

（ふうん？ この男が……確かに強者と言えるほどの“気”を持っているわね。でも、それ以上にこの男が纏わせている血の気配が気になるわ。いったいどれだけの同族を殺してきたのやら。こうして目の前に居てもやっぱり“観えない”し、これだけ面白そうな人間……いえ、元人間は始めて見るわね。それに写真で見るよりもずっと良い男だし）

宗次郎が応接間へと通され、紅魔館当主のレミリアと対面したときの両者の第一印象がそれであった。

どうやら両者は、少なくともお互い悪い印象は持たなかったようである。

王侯貴族が住まうような豪華な飾りつけが施された室内。

レミリアはあえて謁見の間ではなく、客人を迎える応接間で彼ら

を待っていた。

その部屋の窓際にある大きな丸いテーブルで、彼女は椅子に座ったまま彼らを迎え入れたのである。

案内役を務めた咲夜に施されるまま、宗次郎は妖夢と共にテーブルの対面へと腰を落ち着けた。

「ようこそ紅魔館へ。私が当館の主、レミリア・スカーレットよ。新たな幻想郷の住人……いえ。新たな“強者”として貴方を歓迎するわ」

「これはご丁寧に。既にご存知のようですが、瀬田 宗次郎と申します。新参者としてご挨拶をと思い、参上した次第であります。……尤も、強者と呼ばれるほどであるかどうかは分かりませんが」

「あら、意外に謙虚なのね。ウチの門番に仕掛けた者の言葉とは思えないわ」

「……“祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕わす”」

「……それは？」

「平家物語の最初の一節です。要するに、どんなに力があるうとも時の流れには逆らえず滅びてしまうという意味でして、世の中の儚さを表した言葉でもあります」

「フフ……面白いことを言うのね。どんな者でも運命には逆らえな

いということかしら？」

「さて……運命であれ、世の中の無常であれ、それを嘆いて諦めるか、それとも切り開いていくかはその者しだいだと僕は解釈しておりますが……」

「フフフ。貴方はそのどちらかしらね」

「さあ、どうでしょうか。あなたはどう思われますか？」

「少なくとも前者でないことだけは間違いないでしょうね」

「であれば、あの門番さんに仕掛けたのも無駄ではなかったようです」

「アハハ。貴方、私が思った以上に面白いわねえ」

「それはどうも。それよりも、レミリア……さんで構いませんか？」

「いいわよ」

「ありがとうございます。では、僕のことは宗次郎と呼んで下さい」

「ええ。それで、宗次郎。それよりも、何かしら？」

「レミリアさんにとって……人間とはなんでしょいか？」

「……餌よ。そして恐怖を与える対象。私にとってそれ以上でも以下でもないわ」

「それにしても、レミリアさんはその人間である博麗の巫女が定めたルールに従っているようですが……」

「郷に入れば郷に従え” これはこの国の言葉じゃなかったかしら」

「およそ完全に矛盾したことは、愚者にも賢者にも等しく神秘的に聞こえる” と感じましたもので」

「（……ゲーテの言葉ね） 私がうわごとを言っていると思うの？」

「いいえ、ただ不思議に思っただけです。一度は幻想郷の支配を目論んだあなたがなぜ……と」

「いかなる生涯においても、栄光はその最後にしかない” わ」

「（ナポレオンですか……） つまり、最後に勝っていればいいと？」

「違うわね。私は常に勝利者であり続けたいの。それに、長く生きているということは、捨てられなくなるものが増えるということですよ」

「……それは、物だけという意味ですか？」

「……意味が分からないわね。何が言いたいのかしら？」

「いえ。その捨てられなくなるものに “家族” は含まれるのかと思ひまして……」

「（！……そういうことね） 家族は捨てるものではないわ。貴方は違うのかしら？」

「……僕が最初に手を掛けた相手は、世間一般的にいう “家族” でした」

「（！？） ……そう。だから信じられないのね」

「いいえ、違います。たぶん、羨ましいんだと思います」

「羨ましい？ 私が？」

「いえ、レミリアさんにそう想われる家族が……です」

「（フランが？） ……世間一般的に言ったわね。なら貴方にとっては違ったの？」

「はい。血が繋がったという意味では家族でしたが、そこに家族の情というものはありませんでした」

「……そう」

「レミリアさん。僕は別に 「私はね」 ……はい？」

「私は私なりに愛しているの。家族をね。この答えで満足かしら？」

「（やっぱり妹さんのために……） はい。十分すぎるほどに」

「そう……なら、覚えておきなさい。私は家族を傷つけるものを容赦しないわ。そして、家族とは何も血の繋がった者ばかりじゃない

ということもね」

「（つまり紅魔館の皆が彼女にとって……） はい。心しておきます。それに……」

「それに？」

「いつ死んだらいいか、そんなことは考えてみたところで、誰にもわかりはすまい」という言葉もありますから」

出会って早々、傍から聞いている者にとってはなんとも胃の痛くなるような会話を繰り返していた両者。

少なくとも、宗次郎の隣に座る妖夢は先ほどから胃の辺りを押さえているようだ。

出された紅茶には手もつけていない。

それに比べ、この館の当主の後ろに控えているメイド長は澄ました顔のままである。

やはりこの辺りは慣れの問題のようだ。

だが、当主の言った家族のくだりでは、ほんの少し顔を綻ばせていた。

そして最後にそう返された紅魔館の当主であるが、少しでも目を見開いた後、クックククと体を小刻みに揺らしながらくぐもった笑い声を出し始め、やがてそれは大きな笑い声へと変わっていったの



である。

ちなみに、最後に宗次郎が言った言葉はシェイクスピアのハムレットの一幕にある言葉で “悪い予感がするなら決闘を辞退するべき” というホレイシヨに言った言葉であった。

「ククク……気に入ったわ。この私の前でそこまで言える者などそうは居ないわよ。いいわ、当屋敷に好きなだけ滞在してかまわないし、好きなだけ見て回るといいわ」

未だ笑いの衝動が治まらないのか、目の端に溜まった涙を拭いながらそう告げた。

だが、その直後に 「ああ。でも……」 と言葉が続ける。

「地下室の方には行かないようにしてね。 “今は” 立ち入り禁止にしてあるから」

「分かりました。不躰な物言いに、そこまでのご好意を返してください。さって心苦しく思います」

彼女の言葉に少々気になる部分があった宗次郎だが、さすがにこれ以上詮索するようなことを聞くわけにはいかず、礼儀にのっとりた言葉で返事を返していた。

だが、この後に起こることを知っていたとしたら、このような言質を取られるような言葉を選ばなかったであろう。

「（！ そうだ） そう思うなら他のことで返してもらおうかしら」

「他のこと……ですか？」

宗次郎はその言葉に少しだけ背筋が寒くなったような気がしたが、無理なことを言われたら断ればいいと判断してその寒気を見做すことにした。

この後に彼はその判断を悔やむことになるとは夢にも思わなかったのである。

「貴方。知識の能力でどんな職業でも無難にこなせるそうね？ 新聞の記事にそう書いてあったわ」

「ええ。そうですけど……でも、経験や勘を必要とされる職業だとプロ並というわけにはいきませんけど」

「別にプロと同じことをしろとは言わないわ。作り方さえ知っていればいいんだし」

「作り方ですか？」

「そうよ。最近手に入れた外界の本にあるデザートが載っていてね。ちよつと食べてみたくなったのよ」

「デザートというと……菓子職人ですか」

「ええ。その本には作り方まで載っていなかったから咲夜に教えて欲しいの。ちよつど晚餐の用意が終わるところだったから、咲夜と一緒に仕上げてくれないかしら？」

「それならお安い御用です。では、さっそく」 「お待ち下さい、お

嬢様」 え？」

それくらいならと安請け合いた宗次郎に、メイド長が口を挟んだ。

「なによ、咲夜？」

「一緒にということは、調理場に宗次郎様を入れるということです。いかに能力でその知識があるからとはいえ、調理場はプロの聖域ですので……」

「入れることはできないの？」

「いえ。ですが、入るのならばそれにふさわしい格好をして頂かなければなりません」

「そう……なら宗次郎。貴方には着替えてもらうことになるけど、構わないかしら？」

「（つまりコックさんの服を着ろってことか） ええ。別に構いませんよ」

この時の宗次郎はもっと考えるべきであっただろう。

この紅魔館は女所帯（他もそうだが……）であることに。

当然、男用の服など置いていないということに……

思えばこれが最後のチャンスだったのかもしれない。

「だそうよ。咲夜」

「かしこまりました。では、宗次郎様。ご案内いたします」

「はい」

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

調理場に行く前に着替えに行こうとした宗次郎をそれまで沈黙していた妖夢が待ったをかけた。

「どうしました？ 妖夢さん」

この時の妖夢は、漠然とした不安を感じていたのだ。

そしてある決意を思い出す。

香霖堂で咲夜と会ったときに、宗次郎と彼女を二人っきりにしてはいけないという決意が。

だが、それも……

「え？ あ、ええと……」

本人も漠然としか感じていない不安である上に、決意するに至った理由を言うわけにもいかず、言いどもってしまう。

「あ、あの。私も一緒に……「妖夢？」 あ、咲夜？」

「貴女。殿方の着替えに同行するつもり？」

「あっ!？　で、でも!　咲夜だって」

「あら。私は着替えを渡すだけよ?　まあ、着方が分からなければ教えることになると思うけど……(多少、無理矢理でもね……フフ♪)」

なにやら最後に不穏なことを考えていたようだが、この時も宗次郎の勘はうまく働いていなかったようだ。

やっぱりアリス邸の時と同じく、彼にはこのような場合は回避不可の運命ともいうべきものがあるのだろう。

それ故に、宗次郎は不安顔の妖夢にこう言って諭したのである。

「大丈夫ですよ、服の着方ぐらいなら能力を使えば分かりますから。では、咲夜さん」

「ええ、参りましょう。ご案内します」

「あ……」

彼の腕を掴もうとした妖夢の手は、虚しく宙を彷徨うだけであった。

ボタンと閉じられたドア。

そのドアを見て、妖夢は感じていた不安が現実のものとならなければいいと思うしかなかったのである。

「何をそんなに不安がっているのか分からないけど、心配することはないわ。言っただけでしょう？　好きなだけ滞在して構わないって。それは彼の安全を保障するって意味でもあるの。それともこのレミリア・スカーレットが誇りにかけた言葉が信用できない？」

「そんなつもりはないわ。でも……」

「まあ、落ち着いて紅茶でも飲んでなさいな。どうせそんなに時間は掛からないわよ」

「それならあの人がどうなるか運命だけでも　「無理よ」　……え？」

「言うのを忘れていたけど、彼の運命は私には　“観えない”　の。当然、観えない運命を操ることはできないわ。だから私も興味を持ったのよ」

「観えないって……それならどうして私達が来ることを？」

「それに答えてあげる義理はないわね。ただ、彼にはそうとうなお節介焼きが居るってことよ。勿論、それが誰なのか教えるつもりもないけど」

「……………」

「まあ、座りなさいな。それよりも、彼のことにについて貴女が知ってることを教えて欲しいんだけど、私のことは彼に教えてあげたんでしょう？　ならば私には教えないってことはないわよね？」

「う……分かったわよ。でも、教えられるのは彼の人となりぐらい

よ？」

「分かってるわ。その代わり、どうしても不安なら咲夜の方を観てあげるから」

妖夢はその条件に頷くと、宗次郎が来てからのことをかいつまんで話すことにしたのだった。



ここでようやく巻き戻した時間を冒頭に戻すことにする。

宗次郎は案内された部屋でメイド服を渡されたのだが、当然、彼は着る事を拒否していた。

しかし、一度約束したことを反故にするのかと咲夜に言われ、その言葉に動揺した隙に咲夜の号令によって妖精メイドたちが一斉に彼に群がったのだ。

妖精とはいえ、見た目が若い女性なので腕力に訴えることに躊躇してしまった宗次郎は、あっという間に身包みを剥がされ、気が付いたときは既にメイド服姿となっていた。

そして彼にとって無常とも言うべき言葉を放ったメイド長はとい

うと、しばらくはその姿を見て堪能していたのである。

（はぁ〜……やっぱり最初に会ったときから似合うと思ったのよねえ。彼のサイズに合うメイド服を作っておいてよかったわぁ）

どうやら時間を止めてまで超特急で作り上げたようだ。

その情熱はどこからくるのか。

実は、彼女は知る人ぞ知る 『可愛いもの好き』 であつたのだ。

その彼女の部屋には、これまで集めた可愛い物でいっぱいなのだ。

中には、アリスに特別に注文して作ってもらったレミリア人形や妹様人形もある。

当然、彼女には秘密にしてもらっている。

まあ、当主にはバレバレであつたが。（ちなみにその当主本人は諦めている）

ちなみに、彼女が香霖堂を出る際に内心で呟いていた 『我ながら似合わない』 とはこのことである。

「さ、咲夜さん……」

「（ボ〜〜……） え？ あ、何かしら？」

「それで、いつ僕の服は返してもらえるんでしょうか……」



もはやこうなったらさっさとそのデザートとやらを作って服を取り戻すしかないと判断した宗次郎は、陰鬱とした雰囲気隠すことなく咲夜に尋ねる。

「も、勿論、デザートの作り方を教え終わったらよ」

だったら最初にそう言って欲しかったと切実に思う宗次郎。

それならばレシピだけを教えるか、紙にでも書けばよかったのだ。

だがまあ、そのままの格好で妖夢たちの所に戻そうと思うほど彼女も鬼畜では……

（それじゃ、その前にコレとコレも付けてもらおうかしらね♪）

……………訂正。

十分鬼畜であつたようだ。

「はぁ~~~~……」

思いつき溜め息を吐く宗次郎。

幸いなのは、ここに妖夢たちが居ないということだ。

ならば直ぐにでもそのデザートの名前を聞いて……

「咲夜？　　なんだか遅いみたいだけど、どうしたの……え!？」

どうやら彼にはとことん運命の女神から見放されているようだ。

ボタンと音をたててレミリアが入ってきたのである。

「あ、お嬢様」

「さ、咲夜……これは……」

「れ、レミリアさん！ これは 「ダメじゃない！」 あ、やっぱりそう思いますよね？」

やっぱり当主であるレミリアはまともだったと思う宗次郎。

だが、その判断は早すぎたようだ。

「咲夜。これじゃダメでしょう！ ちゃんと犬耳も付けてあげなきゃ！」

「……へ？」

「勿論、それも用意してございます」

「それは重畳。それと……」

「シッポもございますわ」

「パーフェクトよ！ 咲夜」

「レミリアさん！ あなたもか！？」

どこのヘル○ングだと言わんばかりの主従と、シーザーばりの最

後の言葉で突っ込む天剣。

だが、彼の苦難はまだ終わってはいなかった。

「あ、あの……どうしたんですか？ 宗次郎さん……ええ!？」

「（ゲッ!？） よ、妖夢さん。これにはその……訳がありまして……」

「そ、宗次郎さん……どうして……」

「お、落ち着いて下さい！ 僕だって好きで着た 「どうして……」  
……妖夢さん」

ワナワナと震える彼女を見て、どうやら彼女を心底失望させてしまったようだと思う宗次郎。

これで嫌われてしまっても流されてしまった自分が悪いんだと思い、せめて言い訳はすまいと妖夢に向き直る。

「妖夢さん。僕は 「どうして猫耳じゃないんですか!？」 はい  
い!？」

「妖夢、落ち着いて。それもちゃんとあるから!」

「咲夜。シッポはあるの!？」

「勿論よ。ちゃんと肉球付きの鍋つかみもあるわ!」

「GJよ!」

「神は死んだ!!」(byニーチェ)

どこでGJなんていう言葉を覚えたんだと思いながら彼は絶叫した。

ちなみに教えたのはお前だ宗次郎。

有名な詩人の言葉で突っ込みを入れるものの、もはやこのカオスっぷりには彼のデフォースキルである現実逃避さえできそうになかった。

結局、犬耳だの猫のシッポだの肉球だのオプション装備を代わる代わる付けられながら料理を教えるハメになってしまったようだ。

キヤイキヤイと騒ぐ女性陣を横目に、宗次郎は終始半泣き状態であった。

尚、レミリアが所望したデザートとはプリンであったことを最後に明記しておく。

『答え』    への道は……………

って言うか、マジでどう收拾つけるつもりだ、この作者は。

おまけ。 — そのころの大図書館 —

「なあ、アリス……」

「ん？ なによ」

「なんだかともなく楽しいイベントを見逃した気がするんだけど……」

「バカなこと言ってないで静かにしていなさい。またパチュリーに怒られたいの？」

「いや、そのパチュリーは奥の書庫に本を取りに行っちゃったしさ。ちよっと確かめに行かないか？」

「あなたねえ……ココになににきたのよ？」

「うう……なんだか私だけ理不尽な目に会ってる気がするぜ」

「はいはい。盗まずに済むよう覚えていくんでしょ？ 集中しなさいよ」

どうやらこの二人が目撃しなかっただけマシであったようである。  
(特に魔理沙)

## 第十八話 ― 紅魔館 その1 ― (後書き)

はい。今回はここまでですが……

申し訳ありませんでしたぁー！ー！ー！！（ジャンピング土下座！）

実のところを言いますと、今回はもっとシリアスにいく予定でした。しかし、以前東京で見かけた『男の娘』メイドによる喫茶店なるものを目撃してしまったがために今回のネタを思いついてしまったんですよ……（アホ）

いや、外から見る限り、女の子にしか見えなかったんです。（勿論、入る勇気なんてありません）

しかし、アレが男って嘘だろ？ 俺の夢をかえs（ry  
いえ、すみません、今回は本当にふざけ過ぎました。

前書きではああ書きましたが、ご不快に思われた方は感想欄に不満をぶちまけても結構です。真摯に受け止めますので。

それと その1 とサブタイに書いております通り、紅魔館編はしばらく続きます。（いつまでかは分かりませんが……）

その他、気になる点や不可解な点がありましたらご指摘下さい。

## 第十九話 ― 紅魔館 その2 ― (前書き)

大変お待たせしてしまいました！

本当に申し訳ありません。(↑土下座！)

さて、今回のお話にはとあるキャラの設定を完全に破壊してしまっています。

おそらくは前回以上のキャラブレイクになるかと……(汗)  
他にも様々な独自設定が施されております。

ご覧になる方は(r y

いやもう、これ毎度ですよ。(^^;

ですが、一応は注意してご覧になって下さい。

原作にはない設定もございますので。

では、本編です。



「……………」

「な、なあ……アレ、どうしたんだろな？」

「私に聞かないでよ……でも、本当に何があったのかしら？」

この日の紅魔館における晩餐の席は常にない大人数であった。

だが、あまり楽しいと言える雰囲気ではなかった。少なくともこの二人にとっては。

宗次郎の歓迎会も兼ねた晩餐の席であったが、肝心の主賓である宗次郎は、食事が始まる前も、始まった後も沈黙を保ち続けているのだ。

いや、食べながらではあったが、何やらボソボソと独り言を呟いているようである。

その晩餐会に同席した魔理沙とアリスは、その場のなんとも言え

ない空気を感じ取り、先ほどから二人でコソコソと囁きあっていたのだ。

そして、二人が他の同席者の顔を見渡して見る。

片側だけで5、6人は座れる長いテーブルの端に当主のレミリアが、対面の端に宗次郎がそれぞれ着席しており、その両脇に他の者たちが席を埋めていた。

「シフフ。このプリンって思った以上に美味しいわねえ♪ また作ってくれる？」

「勿論でございます」

「……宗次郎さん……可愛かったです……（ポ〜）」

「……………（ジーー）」

上からレミリア、咲夜、妖夢、そして、この紅魔館にある大図書館の主であり、レミリアの友人でもあるパチュリー・ノーレッジの順である。

ちなみにそのパチュリーは、ずっとある一点を凝視していたりする。

「……ダメだこりゃ……」

「……ほんつとに何があったのかしら……」

この紅魔館の主であるレミリアは既にデザートへ入っており、幸せそうな顔で初めて食べるプリンに舌鼓を打っていた。

小さなスプーンでプリンを一口食べるたびにご満悦の表情になっているのが実に可愛らしい。

そして、その様子をニコニコと眺めながら給士を務める咲夜であるが……

とりあえず、その鼻から溢れ出ている忠誠心をどうかして欲しいところである。

はっきり言って、色々と台無しであった。

ちなみに、プリンの作り方は宗次郎から教わって一度で完璧に覚えたとか。

その辺りは、完全で瀟洒な従者の二つ名は伊達ではないといったところであろう。

だが、プリン作りには欠かせない “ 冷蔵庫で冷やす ” という工程はどうやったのであろうか？

実はあったのだ。冷蔵庫が。

それどころか、レンジやガスオーブン、ガスコンロまであったのである。

はつきり言って、電源元やガス栓はどうしてるんだと色々と突っ込みどころが満載な厨房であったりする。

この、中世の西洋屋敷そのままと言える紅魔館において、なぜ厨房だけが近代設備になっているのか宗次郎も不思議に思ったはずである。

何せ、この食堂の他、室内や廊下の光源は全て燭台のロウソクか、ランプなのだ。

しかし、そのときの――今でもあるが――彼はそのことに気付けるような精神状態ではなかったのだ。

結果、誰からも突っ込まれず、厨房の秘密は秘密のままだったりする。

ちなみに、冷蔵庫で冷やすことに費やした時間はわずか数秒……

つまり、入れて出したら出来上がりという訳だ。

咲夜が能力を使って時間を加速させたのだろう。

彼女は時々こうやって即席のヴィンテージワインを造るそうである。

だが、本来、ヴィンテージとは、収穫から醸造、瓶詰めまでの工程を意味する言葉であり、それが同じ年に一定の区域内で収穫された、いわゆる“当たり年”のワインを意味するようになっていった言葉なのであるが……

まあ、その辺りは 『こまかいことは気にするな』 的なものであろう。

派生語として認知されている、名品や一級品としての意味なのかもしれない。

類似語として、ジーンズで有名なリーバイスのヴィンテージ物という言葉もある。

間違っても、某お笑いコンビの名前から来ていないことだけは確かだ。

話を戻す。

作者による、割とどうでもいい含蓄は脇に置いておくとして、さて、どうしてものかと思案する二人。

何があったのかを聞くなり、このメンツの中では妖夢に聞くのが一番いいのだろうが、その妖夢は二人が食堂に来たときからずっと夢見心地の様子であった。

時折、宗次郎の方を見ては 「ほう」 と息を漏らして顔を赤らめているのだ。

そのくせ、食事はパクパクとよどみなく進んでいるのだから、はつきり言って不気味であった。

正直、何があったのか聞くのがためられる雰囲気である。

と言うよりは、聞きたくないというのがこの時の二人の心境であろう。

そして、聞くのがためられると言えば、彼女らが晚餐の始まる前まで一緒に居た大図書館の主であったりする。

紅魔館の魔法使い　―　パチュリー・ノーレッジ　―

能力…『魔法（主に精霊魔法）を扱う程度の能力』

二つ名…『うごかない大図書館』

能力と二つ名は以前にも紹介したが、その名の通り、普段は無尽蔵とも思える本の中で日がな一日ずっと本を読み続けているという本の虫である。

白と青のストライプワンピースに、薄いピンク色の上着。

肩と頭には、上着と同じ色のケープとナイトキャップのような帽子。

その帽子には三日月をかたどったアクセサリと、赤と青のリボンが付いていた。

まるでパジャマのようにも見える服装であるが、何よりも目を引くのがその長い髪であろう。

紫色の柔らかそうなストレートヘアで、その長い髪を後へと膝下

まで無造作に流しており、こめかみから前に流した髪の前には帽子と同じ赤と青のリボンで結ばれている。

前髪だけをきっちり切り揃えており、その下にある瞳の色は髪と同じ紫色。

変化の少ない表情の顔と合わせて、アリスとは違った意味で人形のような可愛らしさがあった。

普段から無口無表情で、話するときもボソボソと小声で早口と聞き取り辛いらしい。

まあ、無表情というよりは、無愛想というべきかもしれないが。

宗次郎が後から聞いた話では、喘息持ちであるとのこと。

生まれながらの魔法使いであるらしく、既に百年以上生きているそうである。

紅魔館当主のレミリアとは親友関係にあるそうで、いつも無茶な要求ばかりする親友の我が儘に付き合っているのだという。

そんな彼女であるが、当初、彼女はこの晩餐会への出席に難色を示していた。

飲食、睡眠をほとんど必要としない魔法使いである彼女にとって、読書こそが生きがいであり、至福の時間なのだ。

飲食など、彼女にとってはほとんど娯楽に等しいのである。

そんな暇があるならば、一冊でも多く本を読むか執筆でもしていた方がいいのだ。

しかし、客人を歓迎する席であるからと、レミリアたつての頼みで渋々出席したのだが……

その客人の顔を一目見て、渋っていた気持ちが吹っ飛んだのである。

だが、勘違いされないで欲しい。

別に一目惚れとかフラグが起ったとかいう色恋沙汰のアレではない。

彼女には読書の他に熱中している、とある趣味を持っていたのだ。

それは……

（……どう見ても “攻め” よりは “受け” よね……良い素材が来てくれたわ）

……まあ、これで察して頂けたと思うが、いわゆる “腐” の属性の持ち主なのだ。

彼女には是非、池袋の『乙女ロード』を練り歩いて欲しいところである。

さぞかし狂喜することであろう。

その意味で言えば、一目惚れと言えなくもない。



一応は宗次郎に挨拶らしきことはしたようだが、声が小さすぎる上に軽く一礼しただけであった。

彼女も紅魔館の者として、一応は歓迎する立場であるはずなのだが、その態度はあまり誉められたものとは言えないだろう。

尤も、今の宗次郎は何を言われても返事ができる状態ではなく、彼女に対して一瞥すらしていないのだから、お互い様と言うべきかもしれないが。

ちなみに表記するのが遅れたが、今の彼はメイド服ではなく、ちゃんと元の服を返してもらっている。

「それにしても、彼にメイド服を着せるなんてよく思いついたわねえ。咲夜」

「常にあらゆる可能性を考慮しておりますので」

もっと他に考慮すべきことがあるのではないかと言いたい。

だが、そんな主従の会話を聞いたパチュリーは、穴が開くほど見つめていた宗次郎への視線を外し、勢いよくブンツと二人の方へ振り向いた。

彼女にとっては聞き捨てならない単語が含まれていたからである。

「ちょっとレミィ……聞いてないわよ？ そんな羨まし……もとい、面白いことがあったなんて……いつからそんな友達甲斐のないことをするようになったの？」

「ごめんなさいね、パチエ。別に仲間外れにするつもりはなかったの。でも、彼の様子があまりにもアレだったからちよっと気の毒になってしまったの」

「だったらせめて着替える前に呼んでくれたって……」

「パチュリー様、ご安心下さい。この咲夜にぬかりはございません。妖精メイド撮影隊に命じて宗次郎様の艶姿を余すことなく撮らせておりますので」

「よくやったわ、咲夜。それで着替え中のは……」

「無論、それも盗撮済みでございます」

「GJよ。焼き増しよろしく」(グッb)

「勿論でございます。既に引き伸ばしも完了したとの報告がきておりますので、本日中にお届けできます」(グッb)

「咲夜ったらそんなことまでさせてたの……」

お互いイイ顔でサムズアップを交わす自らの従者と親友を見て、紅魔館の主は呆れた視線を二人に送る。

「どうやら彼女はそこまで堕ちて……もとい、染まっていなかったようであつた。」

「でも咲夜。写真なんか撮らせてどうするの？ ああいうのは直に見て楽しむものだと思うんだけど」

「お嬢様。その辺りのことはお嬢様にはまだ早ようございます。それよりもパチュリー様……」

「分かってるわ。次の即売会は期待していてちょうだい。それで……」

「お任せ下さい。妖怪の山、天狗印刷部、河童技術部謹製の輪転機を一つ抑えておきます。きっと彼女たちも満足されることでしょう」

……どうやら “ 腐 ” の属性は妖怪の山にも蔓延しているようである。

尚、妖怪の山で独自の社会を形成している天狗たちは、その種族別にそれぞれの役割を持つ部署に所属している。

総大将である天魔を頂点に、管理職の大天狗で構成される幹部会、射命丸が所属している鴉天狗の報道部、庶務全般を取り仕切る鼻高天狗の総務部、山の哨戒と自衛を行う白狼天狗の警備部。

そして、先ほど咲夜が発言した中にあった印刷部は山伏天狗によって構成され、印刷と製版業務の全般を取り仕切っているのだ。

その天狗たちと協力関係にあるのが幻想郷一の技術力を誇る河童たちである。

河童たちで構成される河童技術部は、その高い技術力を活かし、外の世界とほとんど変わらない性能の印刷機械やカメラなどを天狗たちに提供しているのだ。

ちなみに、射命丸が持っているカメラは彼女の個人的な知り合いの河童に作って貰ったものである。

話が逸れた。

「二人とも、なんの話しょ……」

全てを語らずとも、阿吽の呼吸で会話をする二人を見て、レミリアは仲間外れにされたと感じてしまい少々ふて腐れてしまったようだ。

だが、別の意味で腐ってしまうよりは遥かにマシであろう。

そんな彼女らの会話が聞こえたのか、先ほどまで恍惚としていた妖夢がいつの間にか咲夜の側まで来て、何やら話しかけてきた。

「わ、私にも焼き増しをお願いできる？　できれば、その……盗撮のもの……」

「あら、貴女ならその必要はないんじゃないの？　ちょっとお願いすれば……」

どの写真の焼き増しを頼むつもりだ、辻斬り庭師。後、ナニをお願いさせるつもりだ、メイド長。

「わっ、私達はそんな関係じゃありません！　まだ……」

「」「まだ？」「」

半霊庭師の言葉に、その場に居る三人から突っ込みが入る。

見事にハモっているが、咲夜とパチュリーは意味ありげに目を細めたのに対し、レミリアだけは心底不思議そうであった。

できれば彼女だけはそのまま染まらずにいて欲しいのだが……

「え!?! いえ!　　そ、そうじゃなくて!」

慌てて誤魔化す妖夢だが、想い人の盗撮に関しては何も思わないのであろうか?

「(クスッ)　　冗談よ。でも、タダってわけにはいかないわね……」

「う……今はあまり持ち合わせが……あつ、そういえばアリスから貰った服にセーラー服とかいうものがある　「定期入れサイズ、ポスターサイズ、等身大サイズで各アングル別に3セット用意するわ」十分よ。それでお願いね」

……だめだこいつら、早くなんとかしないと……

というか、定期入れだのポスターだのどこで覚えたのだろうか?

後、せっかく貰った服を躊躇なく出すなど言いたい。

それとメイド長。セーラー服がなんなのか知っていたのか?　と  
いうか、それをどうするつもりだ?

それから等身大サイズなど、技術的に無理がありすぎないか?  
というか、どんな用途でそんなものを用意するつもりなのだろうか。

いい加減、彼女らには自重して貰いたいところである。筆者の突っ込みが追いつかなくなる的な意味で。

ついでに言えば、壁際に控えている他の妖精メイドたちが頬を赤らめていたり、宗次郎の方をうっとり眺めていたりしていることにも突っ込みを入れたいところである。

ちなみに、この妖精メイドたちは宗次郎を着替えさせた者たちであり、メイド長直属のメイド隊である。

人数こそ十名にも満たない少人数であるが、以前にも述べた、目の利く任務に忠実な妖精たちのみで構成された少数精鋭のエリート部隊なのだ。

主な業務はこういった客人を迎えたときの接客や給士などであるが、通常の業務では厨房全般を任されることもある。さすがに咲夜一人では手に余るのだ。

そしてメイド長の命令一下、偵察、連絡、戦闘から盗撮まで幅広く業務をこなす。

尚、主な盗撮対象はこの紅魔館の主だったりするが、さすがに彼女相手に成功した例はほとんどなかったりする。

そして宗次郎の着替えを盗撮したのもこのメイド隊であった。

彼があの状態であるために難なく成功したようである。

いったいナニを見たのだろうか。

また話が逸れた。

そんな彼女たちを見ていた魔理沙とアリスの二人であるが……

「……なんだかあいつらのことが分からなくなってきたんだぜ……」

「……同感よ。どんどん遠いところに行ってしまったてる気がするわ……」

アリスよ、それは決して気のせいではないだろう。

魔理沙も理解しないほうが身のためである。

世の中、知らない方が幸せという言葉もあるのだから……

一方、放置されてしまった形の宗次郎であるが、未だにブツブツと呟いている。

妖夢がそんな彼に気が付くと、さすがに不味いと思ったのか、咲夜との話を切り上げてフォローを入れに彼の下へと歩み寄っていた。

今更かよと読者からの突っ込みが入りそうだが、彼女は今までずっとトリップしていた上に、紅魔館組みの会話を聞いて思わず意識がそちらに向いてしまったのだ。

どうやらメイド長の病原菌（可愛いもの大好き病）が完治不能なレベルまで感染してしまったようである。

この上、更にパチュリーの“腐” 属性まで感染しないかどうか心配であった。

そんな彼女の後に、咲夜も続いて歩き出していた。

さすがにこれ以上、紅魔館の客人を不快なままにさせてしまうのは不味いと判断したようだ。

こちらは今更な気がするが、彼女としては、これくらいで参ってしまうようではこれから先に待ち受けていることであろう幻想郷の住人たちの個性的な“歓迎” に耐えられないだろうという考えがあったのだ。

決して彼女は個人的趣味を優先したわけではない……と、思っている。ってか、思わせて欲しい。

さて、本気でどうでもいい作者の内心の思いなど放っておくとして、いい加減、メタな楽屋裏的発言は読者に呆れられるため、この辺りで自重しておく。

「そ、宗次郎さん？ あ……べ、別にあの姿の写真をどうこうしようとか思ってますから。それに、その……に、似合っていました……」

……止めを刺してどうする。(↑早速自重解除)

「宗次郎様？ その……大変申し上げにくいことではありますが、この館の者は普段、男性に接する機会がほとんどございませんから、



この機会にと思いましたもので……あの、決して宗次郎様を愚弄するつもりでは……」

……だったらどんなつもりだと言いたい。

だが、当の宗次郎はそんな二人の言葉など耳に入っていないようであった。

相変わらずブツブツと呟きながらデザートプリンを口に運んでいる。

心ここにあらずといった様子であるが、それでも食事の手が止まらずきつちりとテーブルマナーを守っている辺り、方治が彼に施した調教……もとい、教えは骨の髄まで沁みこんでいるようだ。

しかし、これでは味も分かっていないであろう。

そんな彼の様子を不審に思った二人は、彼が何を呟いているのか聞き取るため、両サイドから耳を近づけていった。

「……確かにさ、昔から女顔って言われていたけどね……それで最初の頃は配下の人たちに志々雄さんの色小姓とか思われていたし……鎌足さんからあっちの世界に來ないかと何度も誘われたし……ハハ……それにしても、ここはなんだか息苦しいなあ……ねえ、誰か開けてよ……あ、流れ星かな？ 彗星？ ……違うよ、彗星ってのはもっとこう……パーっとしててさ……」

……お前はどこのニュー○イプだ、宗次郎。

どうやら精神がどこかの世界の電波を受信してしまっているよう

だ。

ちなみに、色小姓とは武家の主に仕える側近のようなもので、まあ、つまり……『アッー！』　な目的のために眉目秀麗の若者が選ばれるお小姓衆のことである。

だが、彼の呟きに危ない気配を感じた二人にとってそれどころではなかった。

一瞬、お互いの顔を見合わせた後、揃って宗次郎の肩を掴み揺さぶって声をかける。

「そ、宗次郎さん！？　しっかりして下さい！！」

「宗次郎様！　お気を確かに！！　パチュリー様！　申し訳ありませんが来て頂けますか！？」

さすがに二人ともコレはヤバイと感じたようだ。

「お、おい？　どうしたってんだよ」

「ちょっと、ホントに何があったって言うの？」

これには白黒と七色の魔法使いたちも驚いて席を立つ。

「うゝ☆……ハッ！　さ、咲夜、落ち着きなさい。まず何があったのか正確に報告を」

「はぁ……まったく、世話が焼けるわね」

レミリアは食べ終わったプリンの小皿を名残惜しそうに見て何やら唸っていたのだが、従者の言葉にハツとして眉をしかめ、窘めるように言葉をかける。

主として慌てず騒がずの堂々とした態度であつたが、唇の端に付いたキャラメルソースと、直前の『うゝ☆』が全を台無しにしていた。主にカリスマとか、カリスマとか、後、カリスマとか……

そして、呼ばれたパチュリーは彼がどんな状態なのか概ね把握しているらしく、やれやれといった感じで椅子から立ち上がり、宗次郎の席へとトコトコ歩いていく。

「あ、はい。宗次郎様が何やらうわ言を繰り返しているようでして……パチュリー様？」

「二人とも下がりなさい」

「え？ ど、どうするつもりなの？」

宗次郎の真後ろに立ったパチュリーは、戸惑う二人を尻目にその場を譲るように告げると、ふわりと少しだけ浮かび上がって視線を彼の頭の高さにあわせる。

そしていつも片手に持っている魔法書を上に掲げた。

「こういうのはね、ショックを与えれば治るものなのよ」

そう言って掲げた百科辞典なみに分厚い本を――

「こんな感じに――」

——躊躇なく彼の頭に振り下ろした。

「——むきゅ！」

「あべし！！」

「え！？」 「ちょ！？」 「なっ！？」 「おいィ！？」 「あらま……」

振り下ろされた本は、見事に宗次郎の脳天に直撃。

どこかで聞いたような言葉を発して彼はテーブルに突っ伏した。

最後に 「サボテンの花が……」 とか言っていた気がする。

どうでもいいが、パチュリーが本を振り下ろしたときの気の抜けるような掛け声はどうにかならないのだろうか。

尚、その後上がった声は、咲夜、妖夢、アリス、魔理沙、レミリアの順である。

「あ、あの……パチュリー様？」

「咲夜。この場合は斜め45度から叩くのがコツよ」

恐る恐る声をかけてきたメイド長に、パチュリーはふうっといい汗掻いたとばかりに一息吐いて含蓄をたれる。

しかし、（外の世界にとって）昔のTVの直し方をなぜ知ってるのだろうか？

というか、それを人間（？）に適用するなど言いたい。

「宗次郎さん！？　しっかり！」

「オイオイ。穏やかじゃないぜ今の。おい、パチュリー。食事の席でそれは過激すぎやしないか？」

「全くだわ。それとレミリア？　彼にメイド服がどうこうって言うてたような気がするけど、本当に何があったっていうの？」

「どうやらこの二人にメイド服云々はよく聞こえていなかったようである。」

「まあまあ、それよりもまずは彼を運ぶのが先ね。咲夜？」

「はい。お任せ下さい」

「あ、私も一緒に行くわ」

完全に気を失っている様子の宗次郎を、咲夜と妖夢の二人がかりで運んでいく。

人外の腕力を持っていないこの二人では、成人男性を運ぶのも一苦労である。

それに、気絶した者は重いのだ。

フォローのためか、数人の妖精メイドたちがついて行くようであった。

食堂を後にした彼女らを、最後に外に出た妖精メイドが一礼してドアを閉めるところまで見送る。

「さて、何があったかはこれから説明するけど……まずはデザートを召し上がりなさいな。彼の協力で作ったものだから食べないと彼に悪いわよ?」

そう言われては二人ともおとなしく席に戻るしかなかった。

「それとパチエ? 貴女にしては随分と過激だったけど、どこで覚えたの? あんなやり方」

「……この間、香霖堂で咲夜が買ってきた本にそういうのが書いてあったわ。外の世界の本なんなんでも構わないって頼んだから、適当に選んできたんでしょうね」

「そう、まあいいわ。それで貴女の目から見て彼をどう思ったのか聞かせてもらえる? あ、勿論、変な意味じゃなくてよ?」

「……? どういうこと? 彼のことを知りたいなら能力で観ればいいのではなくて?」

「……それも含めて話したほうがいいわね。その上で聞かせてもらえるかしら? 貴方たち魔法使いの視点から見た彼のことを」

そう言ってこの場に残った三人を見渡すレミリア。

奇しくもというわけではないが、この場に居る彼女たち三人は幻想郷に存在する魔法使いの全員であった。(正確に言えば魔理沙は

違うが……)

そして、彼女の言葉に魔法使いたちはそれぞれの顔を見合わせたのである。



白くぼやけた視界がはつきりと鮮明になっていく。

どうやらココは竹林のようだ。

鬱蒼と立ち並ぶ竹が行く手を阻む。

竹の枝を掻き分けながら前に進むと、やがて開けた場所に出る。

だが、そこは先客が一人居た。

“彼” が知る半霊の庭師と似たような白く長い髪を持った女性  
のようだ。

その女性は白い長袖のシャツに、赤いモンペのようなズボン。

両肩にはモンペに繋がるサスペンダーが掛かっていた。

白い髪には御札のようなりボンが多数付いており、それを二房指に絡めるとこちらを見てニヤリを笑う。

端正で整った容姿であるが、その笑みはどこか暗い喜びを漂わせる笑みであった。

その彼女の足元には、一羽の兎が纏わり付いていたが、不穏な気配を察したのか、文字通り脱兎の勢いで竹林へと隠れてしまった。

……そうだ……確かあの兎を……

はつきりとしない記憶と意識が“彼”を戸惑わせる。

そしてあの女性の口から言葉がつむぎ出された。

「そうか——の刺——お前——だけど、そう簡単に————思わないですよ！」

途切れ途切れの言葉を言い放つと、こちらに敵意を向けて飛び上がる。

その背中には炎で構成された翼がはためいていた。

そして、その女性の手にはカードらしきものが握られて——

………

………

………



：

「はっ!？」

「宗次郎さん!？ 気が付いたんですね。よかった……」

急速に意識が戻り、目を開けた瞬間に飛び起きてしまった。

そして感じる頭痛。

特に脳天の部分がかなり痛んだ。

「妖夢……さん? えっと、ここは……」

「紅魔館の客室ですよ。気分はどうですか?」

「……なぜか頭痛がするんですけど……なんだか殴られた痛みのような……」

「え、えっと。覚えていませんか? 食堂のこととか」

「食堂ですか? ……そういえばお腹がふくれているような……でも、いつ食事をとったんだろ……すみません、まったく覚えていないんです」

「そ、そうですか。一応は歓迎会ということで皆と一緒に食事をとったんですけど……」

「そうだったんですか……でも、どうして頭が……」

「あ、あの。痛むようでしたらムリに思い出さなくても……」

「……そうですね。なぜかそんな気がします」

「そうですよ。それじゃ私は宗次郎さんが起きたことを報せてきますね」

「あ、妖夢さん？」

「はい？」

「……僕は何か言っていないませんでしたか？ 寝てる間に」

「寝てる間ですか？ ……いいえ、特に何も」

「そうですか……あ、ここまで運んでくれたのは妖夢さんですね？ すいません、お世話をお掛けして……」

「い、いいえ！ いいんですよ、これくらい、咲夜と一緒にでしたし……では、失礼します」

そう言って部屋から出て行った妖夢。

どうやら食堂での彼の精神状態を思い出して、覚えていないのならそのままにしておいたほうがいいと判断したようだ。

決して写真の取り引きのことを思い出して欲しくないからそう判断したわけではない。たぶん……

(……ごめんなさい。宗次郎さん……)

廊下に出た彼女は、内心で彼に詫びると、咲夜や魔理沙たちのところへと駆け出していった。

(うう……なんだか私、嫌な女になってしまってる……)

どうやら自分の行動を思い返して自己嫌悪に陥っているようだ。

一方、部屋に残された宗次郎は眼が覚める前に見た夢と思わしき光景に思いを馳せていた。

「アレはいつたい……」

どう考えても見覚えのない場所である。

それに出会った女性にも見覚えはなかった。

だが、その特徴は幽々子や妖夢から聞いていた幻想郷に住む主だった者たちの中で、該当する者が居たのだ。

「名前は確か……藤原 妹紅（ふじわらの もこう） だったかな」

竹林の不死人 ― 藤原 妹紅 ―

能力…老いる事も死ぬ事も無い程度有能力

二つ名…蓬莱の人の形

宗次郎がいずれ訪れることになる永遠亭の者となんらかの因縁があるらしいのだが、詳しい経緯は聞いていなかった。

どうやら彼女たちも詳しい事情は知らないようである。

蓬萊の薬という不老不死の薬を服用したことにより、不死人となつたらしいのだ。

そして、長年研鑽を積み重ねてきた妖術を駆使し、並の妖怪では歯が立たないほどの強力な力を持った人間であるとのこと。

主に炎の術を得意にしており、その術を駆使する姿は、まさに不死鳥、火の鳥の姿そのものであるという。

現在の彼女は永遠亭のある『迷いの竹林』の近くに居を構えているらしく、人里で急患が発生した場合は護衛も兼ねた案内役として永遠亭に連れて行ってくれるそうである。

また、人里に住む寺子屋の教師、上白沢 慧音と朋友関係にあるらしく、よく人里で二人が一緒に居るところを目撃されているらしい。

基本的に人間側の人物であり、近頃では妖怪退治も請け負っているとか。

「でも、どうしてそんな人が僕を……」

いくら自分が半妖とはいえ、理由もなく襲い掛かるような人物ではないはずだが。

「……とにかく、永遠亭に行ったときは要注意だね」

おそらくはこれも予知……いや、予知夢というべきか。とにかく、これで香霖堂に続く二度目の予知である。しかも、今度のそれは何やら物騒な気配を漂わせていた。

「今度こそ、この予知を活かさなきゃ」

そうでなければなんの為にこの能力があるのか分からない。

宗次郎はそう決意を固めると、寝かされていたベッドから降りることにした。

そして脱がされていた草鞋を履き始める。

（やっぱり靴じゃないとこういうとき不便だなあ……）

そんな取り止めのないことを考えていると、不意に厨房での光景が思い出される。

「……忘れよう。アレはもう終わったことなんだし……」

どうやらあれこれと考えていたのはそのことを思い出さないようにしていた意味もあったようだ。

宗次郎の中では完全に黒歴史として認定されてしまったようである。

しかも、あの後はどうやって食堂まで辿り着いたのかよく思い出

せないのだ。

妖夢が言っていたように、ムリに思い出す必要はないであろう。

やがて草鞋を履き終わり、さて、これからどうするか、妖夢が来るまで待っていかと考えていると、誰かがドアの外に来てノックをしたようである。しかも、不意に。

宗次郎に気配を察知されることなくドアの前まで接近するのは極めて困難なはずである。

(……この気配は咲夜さんか……)

どうやら能力で時間を止めてやってきたようだ。

(敵に回すと厄介だな……)

やはり時間を止めるというのは、それだけで脅威なのである。

「どうぞ。開いてますよ」

なるべく紅魔館の者とは敵対関係にならないようにしなければと、そう考えながら外に居る咲夜と思わしき人物に入室を促した。

「失礼します。気が付かれたのですがお加減はいかがでしょうか？」

「まだ少し頭が痛みますけど、もう大丈夫ですよ。ご心配をお掛けしました」

「そうですか、大事に至らず何よりです……」

宗次郎は咲夜が何やら言い淀んでいる気配を察していた。

どうやら他になんらかの用件があるようだ。

「どうしました？　僕に何か用事があるものとお見受けしましたが」

「……その通りでございます。実はパチュリー様が、宗次郎様が起きられたら図書館の方に来て欲しいと仰っておられたので……」

「パチュリー……さんですか？」

宗次郎はハテと首を捻る。

どうやら食堂で会っていたことすら覚えていないようである。

「……覚えておられないようですが、パチュリー様は宗次郎様の能力に興味を持たれたご様子でした。おそらくはその件で尋ねられるのではないかと」

本当は別の意味でも興味を持たれているのだが、彼が覚えていないことを幸いにそのまま押し切るつものようだ。

「僕的能力……ひょっとして知識の能力ですか？」

「はい。なにやら外の世界のことについて色々と尋ねられるおつものようです」

「それくらいでしたらお安い御用です。では、案内の方をお願いします」

ます」

「かしこまりました。どうぞこちらへ……ああ、お連れの方たちも既に図書館に集まっています」

「妖夢さんですか？」

「はい。私に宗次郎様が起きられたことを報せた後、私がパチュリ様の所へ案内することを教えましたら先に行っていると……」

「そうですか……」

てつきり咲夜と一緒に戻ってくると彼は思っていたのだが、考えてみれば時間を止められる咲夜一人の方が早く済むのだ。

そう判断した宗次郎であるが、実は魔理沙たちに口裏を合わせに行ったのである。

やはり、自分の嫌な部分を知られたくないという乙女心が働いたようであった。

生真面目な彼女のことだから、その後、更に自己嫌悪してしまうであろうに。

やはり乙女心というものは、男性にとって複雑怪奇なもののようなのである。

世の中、知らないほうが幸せという言葉があるが、それが全てに適用されるとは限らないのだ。



妖夢も宗次郎に秘密を抱える自分に対して嫌気が差している様子であったし、おそらくはそう遠くない将来にカミングアウトしてしまうであろう。

その時に宗次郎がどう反応するかは今の時点では分からないが、彼のことから苦笑しつつも許してしまうだろう。間違いなく。

そんなメランコリーなラブラマ的展開など、このお話しに似合うはずもなく、起こる事も無いため、読者の方々はご安心して頂きたい。

さて、自重するはずだったメタ発言など三途の川にでも沈めておくことにしよう。

「まあ、そのパチュリーさんにちゃんとした挨拶をした覚えがないですし、図書館にある蔵書にも興味がありますので丁度よかったところですよ」

「そう言って頂けるなら私としても幸いです。では、こちらに」

「はい。お願いします」

そう言って咲夜の後を着いていく宗次郎。

果たして大図書館の主は彼にどんな言葉を投げかけるのだろうか。

このお話しの一区切りが終わる前に、紅魔館の主の所へと場面を移そうと思う。



薄暗い室内。

照明のロウソクは必要最小限に抑えられている。

そこで紅い悪魔とも呼ばれる彼女は待っていた。

椅子に座り、忠実な従者が入れてくれた紅茶にも手を付けることなく冷め切ってしまったている。

地下の “あの部屋” で “アイツ” が籠ってから半日が経つ。

自らが観た運命の通りならば、そろそろのはずであるが……

「……遅いわね」

「それは申し訳なかったわ」

思わず呟いた言葉に、背後から答える声かけられた。

紅魔館の主、レミリアは驚くこともなく不機嫌そうに眉を顰める。

「……いい加減、後ろから現れるのは止めてもらいたいわね。それとも、正面から出るのが怖いのかしら？」

“後ろの正面であゝれ♪” この国の言葉よ」

「……人里の子供たちが歌っていたわね……」

「あらあら。最近の人里も物騒になったこと」

「人里で人間を襲うのはご法度。それさえ守れば吸血鬼だろうとうろついても問題はないはずよ」

「問題だと思うのは果たして妖怪かしら、それとも人間かしら」

「……そろそろ “成果” を聞かせて欲しいんだけど」

「“観ていた” 結果を知っていても、やはり気になるのは家族愛ゆえかしらね」

「……（キッ！）」

「おお、怖い怖い……心配しなくてもいいわよ。しっかり “受け止めてね”」

「……？ それってどういう （ドサッ） キャッ！？ ふ、フラン！？」

「んゝゝ……クウー……スウー……」

「大丈夫よ、寝ているだけだから。フフフ……ホント、こうして見ると天使の寝顔ね。実際は悪魔の妹だけど」

「……とりあえず前者には全面的に同意しておくわ」

「そう、それじゃ私は失礼するわね。ここ最近働き詰めなのよ。お陰で眠くて眠くて……」

「……お節介焼きが過ぎて裏目に出るってこともあるのよ」

「そのときはまた引っくり返せばいいのよ。物事の結果は常に表裏一体。ご存知かしら？ 物事の事象にも境界は存在するの」

「……運命は出た結果だけが真実よ。そこに裏も表もないわ」

「あらあら、お忘れみたいね。運命の分岐にも “スキマ” があ  
るってことを」

「…… “調整” 感謝するわ。でも、一つだけ聞かせて。この子  
は……」

「間違いなく、貴方が “知っている” フランドール・スカーレ  
ットよ。もう無闇やたらに能力を使うこともないわ。後はじつくり  
と常識とこの幻想郷のルールを教えていけば問題ないわ」

「分かっているわ。それは姉である私の役目。それだけは誰にも譲  
るつもりはない」

「フフ……いいわね、家族愛って」

「……嫌味かしら？」

「まさか……そうね。ちょっとだけ羨ましいってところかしら。一人一種の私から見れば……ね」

「……………」

「ウフフ。ちょっとおセンチになっちゃったわね。それでは良い夜を」

「ええ……良い夜を」

その言葉を最後にスキマは閉ざされた。

レミリアはスキマがあった空間から視線を外し、自らの腕の中でスヤスヤと眠る最愛の妹の寝顔を見つめる。

瞼にかかる前髪を右手で優しく左右へと寄せると、妹は少しだけ身じろぎをして、すぎるように左手で姉の服を掴む。

まるで一時も離れたくないと訴えるかのように。

その様子を見た姉は、慈しむような優しい笑みをこぼした。

「……フラン。このことを貴方が知れば、貴方は私を恨むでしょうね。でも、これだけは分かって。あのままの貴方だったらこうして一緒には居られなかったってことを……」

まるで懺悔をしているかのような姉の独白。

全てを破壊してしまう妹の能力はあまりにも危険すぎた。

そう。この幻想郷を覆う大結界をも破壊してしまいかねないほどに。

そんな能力を持つ者を、あの幻想郷の管理者が放っておくはずがなかった。

だからこそ姉はその管理者が出した条件を全て飲んだのだ。

吸血鬼異変は最も力のある妖怪が力づくで解決したことになっている。

それはある意味間違っではない。

確かに彼女は叩きのめされた。

完膚無きほどに。

だが、実際は妹を想う姉の愛情こそが膝を屈しさせたのだ。

だからこそ姉は願ったのだ。妹と同じ時を刻むことを。

妹が内包する正気と狂気の狭間。

それを分けてしまえば彼女は姉の知る妹ではなくなる。

故にその境界を曖昧にして時間を掛けて調整して貰っていたのだ。

最低限、若干の情緒不安定が見られる程度に。

そして、最終調整が終わった現在。

もはやこの子は気まぐれで物を壊すことはないだろう。

それでも、精神的には幼い子供そのものなのだ。

常識、ルールといったものはこれから教えていけばいい。

それは姉である自分の責任なのだから。

そうレミリアは自分に言い聞かせる。

最終調整前で引き伸ばされていたのは、あの管理者なりの思惑があつたのだろう。

瀬田 宗次郎。

彼のような者が現れた場合を想定して。

あの幻想郷の管理者――八雲 紫に感謝の言葉はあれど、感謝の気持ちはない。

先方もそんなものは期待していないだろう。

むしろ、この引き伸ばし状態を終わらせてくれたあの若者にこそ感謝の気持ちがあるぐらいだ。

だが、その言葉を告げることはないであろう。

「フラン。これからはずっと一緒よ。だからいっぱい、いっぱいお話ししましょうね。外には色んなものがあるわ。それを一緒に見つけましょう」

これまでは屋敷の周囲ぐらいにしか外出許可は出せなかった。

だが、これからはそうでなくなるだろう。

まあ、しばらくは保護者の同伴が必要だろうが。

「ん、ん……」

「……お越しちゃったかしら」

「ん……お姉様あ……」

「なあに？ フラン」

「だ……い好き……ムニャ……」

「……私もよ。フラン……」

おそらくは寝言だったのだろう。

しかし、それだけに嘘偽りの無い本心からの言葉であるはずである。

優しく、だが、しっかりと最愛の妹を抱きしめるレミリア。

もし、この光景を誰かが見ていたら頬が緩むこと請け合いである



う。主にメイド長。

だがそれも、姉の鼻から流れ出る赤い液体がなければ……だが。

とりあえずは、その溢れ出ている家族愛を拭いて欲しいところである。

## 第十九話 ― 紅魔館 その2 ― (後書き)

さて、今回はここまでですが……

ほんつとうに申し訳ございません！ (↑ジャンピング土下座！)

パチュリーを腐女子にしちゃいました。(ノ、＼、)

いや、このキャラブレイクも前々から考えていたんですけどね……  
他のところではあまりキャラブレイクができなかったもので、それが紅魔館で一気に吹き出してしまったようです。

それと、今回のみよんはちよつとアレな感じにしちゃいましたね(汗)。

ゴメンよ、みよん。このフォローはきっちりしておくからね。いつになるか分からないけど(オイ！)

そしてようやくフラン登場。寝てたけどw

彼女に関しては紫が完全に解決してしまいました。

さすがにあんな危険な能力を持つ者を放置するはずがないと判断したもので……

他の二次小説ではオリ主などと絡ませて狂気とかを治す方向に持っていくのがデフォのようですが、ここでは完全に紫との取り引き材料と化してます。

これは二次設定でもなかったことだと思いますが……単に私が見ていない二次小説で既に出ているのかもしれない。

ですので、もし見つけられたとしても、ココとは全く関係ありませんので、どうかご了承下さい。

では、次回の投稿でお会いしましょう。

第二十話 ― 紅魔館 その3 ― (前書き)

や、やっと……やっと仕上がった……

た、大変お待たせをしてしまいました……orz

今回は前回の反省をふまえて作者は自重しまくったのですが、それがとんでもなく筆を遅らせることになるとは……まあ、とりあえず今回は少々シリアスです。

それと地の文がかなり多くなってしまう、過去最大の容量になってしまいました。

では、本編へどうぞ。

第二十話 ― 紅魔館 その3 ―

「……申し訳ありませんが、もう一度仰って頂けますか？」

咲夜に案内され、図書館の中にあるパチュリーの書斎で改めて自己紹介を交わした後、しばらくは先に着ていた妖夢たち三人と一緒に外の世界の話を含めた雑談をしていた宗次郎。

特に外の世界の科学技術には強い興味を示してくれたようだ。

尤も、興味の対象となったのは、技術そのものではなく発想の方ではあったが。

しかし、不意に放たれたこの図書館の持ち主の言葉に、思わず尋ね返す宗次郎。

『動かない大図書館』の二つ名を持つ彼女は、そんな彼の希望に応えるためか、同じ言葉を、同じ口調、同じイントネーションで言い放つ。

それは彼女なりの誠意なのか、それとも人の話は良く聴きなさいという嫌味を含んだものなのかは判別が尽かない。

だが、言われた当の宗次郎にとって、そのようなことはどうでもいいのだろう。

なにせ、言われた言葉が言葉であつたのだから。

そう、彼女はこう言ったのだ――

「貴方……魔法使いになつてみない？」

――と。



魔法使い、パチュリー・ノーレッジが所有する蔵書は膨大な数に上る。

ココ、紅魔館の地下にある大図書館は、そんな彼女が集め、執筆し、蓄えられた知識と共に増えていった魔法書や、外の世界から流れてきた書物が収められている。

宗次郎が最初にこの図書館を目にしたときは、かつての同士であ

った方治の蔵書量とは比較にならない規模に、思わず立ち尽くしてしまったものであった。

地下にあるのだから、普通は地下への階段を下りた先に図書館の入り口があると思われるだろう。

だが、実際にその入り口があるのは紅魔館の一階なのだ。

重厚な両開きのドアを開けて中に入ると、まず目に入るのが広大な吹き抜け構造の空間である。

ドアから入ったその先はバルコニーのような広いホール状の造りとなっており、そこから両サイドの壁沿いには回廊が続いている。

分かり易い例として、まずはどの学校にもある体育館を思い浮かべて貰いたい。

大抵の体育館は、一階部分がバスケットやバレーボールができるコートとなっているはずである。

そして、二階部分に回廊があって、体育館内をぐるりと一周できる構造となっているところが多いであろう。

構造上の理由でその回廊がない場合もあるが、概ねそのような感じだと思って頂きたい。

つまり、この大図書館の場合、回廊部分が一階にあり、体育館で言えばコートのある部分が地下となっていて、そこに図書館の書棚が並んでいるのだ。

回廊の壁には教会にあるような大きなステンドグラスが何枚もはめ込まれており、ズラリと回廊に並んだそれらが、荘厳かつ厳粛な雰囲気醸し出している。

優に地下三階分はありそうなほどの、深い吹き抜け構造の大図書館。

メイド長である咲夜によって日々拡張されているという広大な館内。

何列あるのか数えるのもバカらしくなるほどに立ち並んだ書棚。

壁一面にも書棚が埋め込まれ、その全てがびっしりと本によって埋め尽くされている。

その書棚の高さは、回廊がある階層にまで届く。

つまり、二階建ての家の屋根ぐらいまでは確実にあるのだ。

文字通り見上げるほどの高さである。

通常、こういった普通では手が届かない所に物がある場合は、ハシゴや足場になる踏み台などが必ずあるはずなのだが、そのような物は一切見当たらない。

ついでに言えば、回廊から降りられるハシゴなどもない。

唯一の昇降設備として、入り口のホールから地下の図書館へと下りることができる螺旋階段があるのだが、ココの住人でそれを使う者はほとんど居らず、館内のオブジェと化している。

それも当然であろう。

空を飛ぶとこともできない “普通の” 人間が使うことなど、最初から考慮されてはいないのだ。

ココは人外の者が集う紅魔館。

咲夜のような “能力を持った” 人間でもない限り、ココを使用することはできないのである。

それに、空を飛べない者に手が届く範囲の書棚には、比較的重要度の低い、つまりはこの大図書館の持ち主にとって、あってもなくても構わない程度の物しか置かれてはいないのだ。

そして、本当に重要かつ危険度が極めて高い魔法書は、この図書館の更に奥にある書庫へと移されており、幾重もの封印によって厳重に保管されている。

それを解くことができるのは、この図書館の主にして紅魔館当主の親友でもある、パチュリー・ノーレッジただ一人であった。

この大図書館のほぼ中央に位置するホールのような開けた空間。

そこに彼女の書斎がある。

一人で使用するにはあまりにも大きすぎるテーブルが置かれており、その上には様々な道具や書物、一見しただけでは何の目的で描かれたのか分からない設計図のような図面や、魔方陣と思わしき幾何学模様が描かれた紙が散乱していた。



また、そのテーブルの周りにも、まだ整理される前と思わしき魔法書などが山積になっており、お世辞にも整理整頓が行き届いているとは言えない書斎であった。

そんな混沌とした彼女の書斎には、いつにないほど多くの来客が詰め掛けている。

その来客のために、テーブルの上に散乱していた物は隅にどけられ、人数分の椅子が運びこまれ、紅茶とお茶請けのクッキーが用意されていた。

それらを用意するために忙しく動き回っていた、頭と背中にコウモリのような翼が生えている女性――小悪魔は、初めての男性の来客に少しばかり緊張した面持ちのようであった。

司書の制服であろうか、ブレザー風の衣装と、ワインレッドの腰まであるストレートのロングヘアが絶妙にマッチしている。

白い長袖のブラウスに、黒いベストのような上着、首には赤いネクタイ。

その上着と同じ色のロングスカートに、白い靴下と黒のエナメルパンプス。

身長はやや低目だが、スタイルはかなり良く、服の上からでも分かるほどであった。

小悪魔という名前通りの魅惑的なスタイルであるが、手を前に組み、物静かな態度で主の後ろに控えている様子は、清楚で可憐な雰囲気漂わせている。

彼女を自分の使い魔だとパチュリーから紹介された男性の来客――宗次郎は、その小悪魔という名前からはあまりにも懸け離れた、恭（うやうや）しくも男性に慣れていなさそうな初々しい態度に、思わずクスツと笑みをこぼしたものであった。

その笑みと共に宗次郎から自己紹介を受けた彼女は、こあと呼んで下さいと言った後、ややうつむきながら司書の仕事へと戻っていた。

おそらくは照れているのだろう。

パタパタと背中から生えている頭の羽よりも大きなコウモリの翼を動かしながら飛び去っていった彼女であったが、少し尖った耳が赤くなっていたのがなによりの証拠であった。

それから、しばらくは本の整理をしていた彼女であったが、そろそろ紅茶のおかわりを入れなければならないだろうと考え、主の下へと戻ることにした。

紅魔館全体の家事を取り仕切っているのはメイド長である咲夜だが、図書館内においては小悪魔の管轄なのだ。

一応は何体かの妖精メイドが彼女の部下として配属されてはいるが、精々が館内の清掃をさせる程度の仕事しか任せられない。

書物の整理などをさせた日には、どこにやったのか分からなくなってしまうかねないのだ。

下手をすれば、貴重な本を傷つけてしまいかねない。

一応は魔法で、耐水、耐火、耐衝撃などの処置が施されているのだが、それでも万が一ということもある。

元々、そのような処置が施されているのは長期保存のためであったが、今では対弾幕用のためになってしまっている。

紅霧異変以降は、ほとんどが魔法書を盗みに（本人曰く、借りに）来た白黒との弾幕戦の防護処置と化してしまっているのだ。

他にも、書棚そのものに対弾幕用の防護結界が張られていたり、館内には対侵入者用のトラップなどの警備装置が設置されていたりするのだが、それでも懲りずに進入してくる白黒の根性（?）には恐れ入るしかない。

話を戻す。

そんな訳で、使い魔であり、司書も務める小悪魔の負担は相当なもののだ。

妖精メイド各班のリーダーや、メイド長直属のエリートメイド隊のような真面目で気の利く妖精などそうそう滅多には居ない。

まあ、それでも一人でこの広大な館内を掃除するよりは遥かにマシなのだが。

近いうちにメイド長直属のメイド隊の中から一人、できれば二人ぐらいはこちらに配置転換して貰うようメイド長と交渉しなければ

……

最近、疲れが溜まってきているのか、肩を揉み解しながらそう考えていた小悪魔は、紅茶を入れたポットとクッキーのお皿をお盆に乗せると、フヨフヨとゆっくり飛びながら書斎の方へと向かう。

尚、入り口のホールの真下には、それらを用意できる給湯室があり、小悪魔が主人のためにいつでも用意できるようキッチンと整理整頓されている。

この辺りは雑然とした主人の書斎とは大きく違い、彼女の性格を現しているようだ。

給湯室というよりはちよつとした厨房並の施設であるが、それはほとんど小悪魔や妖精メイドのための施設であると言っていいだろう。

何せ、睡眠や食事をほとんど必要としない小悪魔の主と違って、彼女らにはそれらが必要なのだ。

そのために、給湯室の奥には彼女らのための休憩室や仮眠室もある。

待機所も兼ねた休憩室には、いつもは非番の妖精メイドたちがお菓子を食べたりお茶を飲んだりして雑談しながらたむろしているのだが、今日は珍しく男性の来客があるためか、全員が一目見てみようと書斎の周りに集まってしまっている。

本当は魔理沙が来ているため、本を盗んでいかないうち監視のためにかりだされているはずなのだが、すっかり本来の目的を忘れて

いるようだ。

まあ、いつもは本を盗みにきた白黒が来るたびに、迎撃に出動している彼女らであるのだが、それが成功したためしはほとんどなかったりする。

ポットなどを持っていくために一度給湯室へと行っていた小悪魔は、それを思い出したのか、苦笑にも似た表情で書斎へと近づいたのだが……

「……それどういう意味だよ!？」

(キャッ!?)

不意に聞こえた大声に、思わず盆を落としそうになった。

なんとか持ち直した彼女は、ポットから紅茶が零れていないことを確かめると、ホッと息を吐く。

周りを見れば、その大声に驚いたのか、書斎を取り囲むように待機していた妖精メイドたちが一斉に飛び上がっていた。

そして、いつでも攻撃ができるようにフォーメーションを組み始める。

いつも白黒の撃退に失敗していて敵わない相手だと分かっているはずなのだが、逃げ出す者など誰一人として居なかったのだ。

どうやら、彼女たちは彼女たちなりにこの仕事を誇りに思っているのだろう。

小悪魔はそのことに軽い感動を覚えていた。

そして、役立たずと断じて代わりのメイドを配属して貰うようにと考えていた自分を恥じる。

そうこうするうちに妖精メイドの一体が彼女に気付いたのか、小悪魔の方へと近寄ってくる。

どうやら指示を仰ぎにきたようだ。

小悪魔はその妖精メイドに一言二言、とりあえずそのまま待機しているように告げると、その妖精メイドはフォーメーションを組んだ仲間の下へと戻っていった。

その後姿を眺めながら、小悪魔は後でこのことを誉めてあげようと考え、とりあえずは何が起こっているのか書斎の様子を確かめることにした。

そして、大声が聞こえてきた書斎を書棚の陰からそおつと覗き見ると、魔理沙が立ち上がって小悪魔の主に詰め寄る光景が見えたのだ。

どうやら大声を上げたのは魔理沙のようであるが、果たして何があったのだろうか。

思わず立ち尽くした小悪魔は、主であるパチュリーに念話を送って指示を仰ぐことにした。

パチュリーの使い魔として主従の契約をした彼女は、こうやって離れていても念話で会話をすることができるのだ。

この辺りは紫と藍、藍と橙のような式神の関係と似ている。

尤も、式神と違って主の能力を借りることはできないのだが。

へパチュリー様。何があったのですか？　とりあえず妖精メイドたちにはいつでも攻撃できるように待機させてありますが……

そう念話を送る小悪魔の表情は緊張しているのか、若干硬くなっているようだ。

いつもは彼女の方から念話を送ることは無い。

読書や執筆の邪魔になるからと、緊急時以外での念話の使用を禁じられているからだ。

へなんでもないわ。ただ、聞き分けの無い子供が騒いでいるだけよ。大丈夫だから妖精メイドたちには仕事に戻るように伝えておいてちょうだい

へかしこまりました。それと紅茶とお茶菓子のおかわりをお持ちしたのですが、いかが致しましょうか？

へまだ必要ないわ。あなたたちで処理してしまってちょうだい。あ、それと“作業場”の準備をしておいてね。近く“修羅場”になるから

へ……かしこまりました。それでは準備してまいりますので、何かあればお呼び下さい」

そこで念話を切った彼女であったが、その表情は『やれやれ、またか』と言わんばかりであった。

寛容であり無茶なことを言わず、知識も豊富で様々なことを教えてくれるパチュリーは、彼女にとって尊敬できる主であるのだが、ただ一つだけ困った趣味を持つのが難点といえば難点であった。

“作業場” とは彼女の主が描く “どうじんし” と呼ばれるものを執筆するための場所であり、なぜか彼女らの休憩室がそれに充てられている。

給湯室や仮眠室が隣接しているからというのが理由なのだが、それでは小悪魔や妖精メイドたちの業務に支障をきたしてしまいかねない。

いや、実際に彼女らも執筆作業にかりだされているのだから完全に支障をきたしている。

だが、小悪魔はともかく、他の妖精メイドたちはノリノリで手伝っている始末なのだ。

まあ、その “修羅場” と呼ばれる作業が終われば特別にしばしの休暇が与えられるからなのかもしれないが。

どうやら小悪魔自身はそれほど染まってはいないようである。

しかし、一番作業効率がいいのも彼女であったりする。

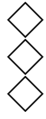


しかも、彼女だけは休暇などが与えられることはないのだから、世の中は真面目な者ほど貧乏くじを引く定めにあるようだ。

尤も、嫌がって作業を手伝ってはいない辺り、彼女もかなり染まってきたようではあるが。

何にせよ、作業場の準備をする前に、用意したお茶とお茶菓子を待機している妖精メイドたちと一緒に処理してしまおうと考え、彼女らのところへと飛び去っていく小悪魔。

その時はお礼とお詫びも言わなきゃと思う彼女であったが、背後から聞こえてくる言い争うような魔理沙の声に、しばし不安な表情を隠すことができずにいた彼女であった。



さて、小悪魔が後ろ髪を引かれる思いで立ち去った書斎で何が起っていたのか、冒頭から描写しなおすことにしよう。

「貴方……魔法使いになってみない？」

再度同じ言葉を言われた宗次郎は、わずかに眼を細めた後、思考

を落ち着かせるために用意された紅茶に手を伸ばす。

ゆっくりと香りを楽しむように一口だけ含んだ紅茶をゴクリと咽に流し込んだ。

咲夜がいてくれた紅茶には及ばないものの、それでもキチンとした手順でいれたものであることぐらいは彼にも分かる。

真面目で大人しそうな小悪魔の様子を思い返し、彼女の性格がよく現れているなど考えていた彼であったが、そんな場合ではないと一瞬で思考を切り替える。

— 魔法使い —

以前にも述べたが捨食の魔法を会得した者が成れる、人間から人外へと逸脱した者たち。

決して三十路までにあることを経験していなければ成ってしまう者のことではない。

なってみないかと言われ、はい、そうですねと答えられるような、安易に頷くわけにはいかない理由を多分に含んだ言葉である。

「ちょ……それ、どういう意味だよ」

宗次郎が、さてどう尋ねようかと思案していると、同じくその言葉の意味を図りかねた魔理沙が問い掛ける。

隣に座る妖夢も同じような表情である。

尤も、彼女は宗次郎の方を気に掛けているようだが。

魔理沙を挟んで妖夢の反対側に座るアリスも同じように疑問を持つているはずなのだが、彼女は宗次郎と同じように眼を細めて紅茶を口に含んでいた。

ティーカップに口をつけながら、視線だけはパチュリーの方を向いている。

ちなみに、彼らはテーブルを挟んでパチュリーと対面しており、彼女から見て、右から宗次郎、妖夢、魔理沙、アリスの順に座っていた。

その一番左手に座るアリスから探るような視線を。

隣の魔理沙からは戸惑うような疑問を。

妖夢からは困惑した表情を。

そして、宗次郎からはアリスと同じく意図を探るような目を向けられている。

それらを向けられた当の本人は、まったく動じた様子を見せずに紅茶を口に含んでいた。

「おい。なんとか言ったら 「聞かれたのは “成りそこない” の貴方ではないわ。静かにしてちょうだい」 なっ!?!? ……それ という意味だよ!?!?」

一向に答えようとしないう彼女に少しイラついたのか、少々荒くなった口調で魔理沙が再度問い掛けようとするが、にべも無く一刀両断に返されてしまう。

そして、あまりと言えばあまりな言葉に、魔理沙は大声を発していた。

「ちょっと、パチュリー。言い過ぎじゃないの？」

更に言葉を荒げようとした魔理沙を抑え、妖夢が弁護するかのよう言う。

確かに、魔理沙は未だに捨食の魔法を会得してはいないのだから、種族としての魔法使いに成ってはいない。

しかし、さすがに“成りそこない”は言い過ぎだろうと思ったのだ。

だが、さっきの魔理沙の大声で周りに居た妖精メイドの気配が一気に緊迫したものとなっていた。

静かだった館内の空気が、騒がしく流れ始めている。

既に、妖精メイドたちが一斉に飛び上がっていることを気配で察知していた妖夢は、これ以上刺激するのは不味いと判断したのだ。

妖精メイドなどに遅れを取るような彼女ではないが、相手のテリトリー内で戦闘行為を行うのは愚策である。

更に言えば、ココで紅魔館勢を敵に回すのはもつと愚策なのだ。

それ故に魔理沙を抑えていたのだが、それも完全に無視するかのようにパチュリーは目を閉じて紅茶のカップを口につけたまま何も言おうとはしなかった。

それは、自らの使い魔と念話のやり取りをしていたからなのだが……

しかし、それを知る由もない魔理沙は、その態度にいよいよ激昂しかけたのだが、そんな彼女の右肩を押さえる者が居た。

アリスである。

「ちょっと落ち着きなさい。気持は分からなくもないけど、元はと言えば貴方が宗次郎への質問に割り込んだのよ」

その言葉に冷静さを取り戻したのか、立ち上がりかけた椅子へと大人しく腰を下ろす魔理沙。

だが、感情が納得していないのか、思いつきり仏頂面ではあったが。

そして腕を前組にし、目を首ごと左に向けると、宗次郎の様子を窺う。

魔理沙がこうもイラついているのはアリスにも分かる。

魔法使いはなろうと思ってもそう簡単になれるものではないのだ。

確かに捨食の魔法を会得してはいないが、魔理沙の魔法の腕は十分に魔法使いとして通用するレベルである。

だからこそ 『職業…魔法使い』 である彼女でも 『種族…魔法使い』 であるこの二人と同格に扱われているのだ。

そこまで辿り着くのに、いったいどれだけの研鑽と失敗を積み重ねてきたことであろうか。

同じ魔法の森に住むアリスだからこそ、その苦勞が並大抵のことではないことを知っているのだ。

普段は飄々としていて、人をからかったり、面白いことにはすぐ首を突っ込んだりと、周りからは困ったヤツだと思われている彼女であるが、陰でそのような苦勞があったことなどおくびにも出さない。

そんな魔理沙であるが、アリスはその苦勞を知る数少ない理解者なのだ。

靈夢も薄々は気付いているようだが、彼女の性格上、そのことを尋ねることはない。

在りのままを受け入れるのが博麗の巫女でもある彼女の持ち味なのだ。

そんな彼女だからこそ、魔理沙もなにかと理由を付けては靈夢の所に入り浸っているであろう。

しかし、パチュリーも同じ魔法使いとしてその苦勞は知っている

はずなのだ。

更に言えば、成りそこないなどと彼女にしてはあまりにも挑発的な言い草である。

アリスとしては、まずはパチュリーの真意を確かめるのが先決だと判断したのだ。

それに、彼女としては気になることがある。

最初、宗次郎と出会ったときには感じなかったことなのだが、今の彼をよく見てみると、どうにも違和感を覚える。

その違和感の正体を探ろうとして……

(……え！？ まさか……)

彼女はあることに気づき、大きく目を見張るのであった。

一方、そんな彼女らの様子に困惑を隠せないのが妖夢である。

彼女は剣士であるから魔法使いの苦勞など知る由も無い。

だが、そう簡単になれるような代物ではないことぐらいは想像がつく。

しかし、彼女にとって宗次郎が魔法使いになろうがなるまいが、さして重要なことではないのだ。

問題は、彼がそれによって別の“存在”に変質してしまった

り、どこか遠い “何か” へと変貌してしまったりする方が遥かに重要かつ重大なことなのであった。

『ありえない事などありえない』 とは彼がアリス邸で言った言葉である。

この幻想郷では、普通では起こりえないことが起こるのだ。

警戒しておくに越したことは無いのである。

そう内心で決意を固める彼女は、宗次郎がどのような言葉を返すのか、彼の様子を一挙手一投足も見逃さないかのように窺い見るのであった。

尤も、結果から見ればそんな彼女の決意など取り越し苦労でしかなかったのだが。

そして、そんな彼女らに注目された宗次郎であるが、正直、どんな言葉を返そうか判断しかねていた。

それ故、まずはその言葉の意味を聞くことにしたようだ。

「……魔理沙の言葉ではありませんが、どのようなつもりで仰ったのですか？ 仮に僕がここで 『Yes』 と返事をしたところでそう簡単になれるものだとは思いませんが」

「……普通はその通りだわ。通常、魔法使いになるためには数多くの魔法書を読み、それらを理解し、実践してそれができるかどうかを独学で繰り返すか、あるいは優れた魔法使いの下で修行を積み重ねるしかない。でも、多くの者は才能の無さに気付いて挫折してく



わ。だけど、貴方の場合は別でしょうね……試しにこの魔法書を読  
んでみて、私の想像が当たっているなら読めるはずよ」

そう言って自分の手元にある魔法書を彼に差し出す。

コホツコホツと長い言葉を一気に言ったためか、差し出した後に  
咳き込んでいた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。私のことは気にしないで」

そっけないほどの言い方ではあるが、自分の体が他者よりも弱い  
ことを氣遣われたくないと思っているのだろう。

何より、宗次郎にはその態度が強がりになしか見えなかった。

パチュリーは懷から何かを取り出す。

手の平に乗せられているのは錠剤のようだ。おそらくは喘息の薬  
なのだろう。

これは宗次郎が後から聞いた話であるが、その薬は永遠亭の八意  
永琳が作った薬だそうである。

『あらゆる薬を作る程度の能力』を持つ彼女が作る薬なのだからさぞかし良く効く薬だろうと思われるだろうが、体質的な持病を  
持つ者を数回の服用で完治させるほどのものなど、いかに永琳であ  
ろうともそう簡単には作れないのだ。

原因はやはり薬の原材料であった。

いかな永琳とて、無からは作れないのだ。

閉ざされた世界である幻想郷では、入手困難な原材料が数多くある。

紫に頼めば持ってきてくれるかもしれないが、いかに賢者とまで言われる彼女であろうとも、専門外の知識で薬草がどこに自生しているのか探すのは極めて困難であるし、たとえ入手可能だとしても、彼女にはあまり借りを作りたくないという永琳の思惑もあるのだ。

だが、永琳としても完治させたくないと思っているわけではない。

しかし、本格的に治療目的で入院させようと思っても、他者に自分の体を預けることをよしとしない本人の意向によって根本的な治療ができないでいるのだ。

やはり他者に病人扱いされることを嫌っているのだろう。

それに、入院などしていたら読書や魔法の実験ができなくなってしまうのだ。

更に言えば、紅魔館の主も親友が完治できればそれに越したことはないのだが、完治できる保証が100%ではない上に、自分の側を離れてしまうことをよしとしなかったのである。

結果として永琳にできたことは、喘息の症状を抑える薬を定期的に処方してあげることだけであった。

それでも、さすがは永琳が作る薬であると言わべきか、彼女に処方される前と比べて劇的に咳き込む回数が減ったのである。

それまでは慣れない魔法薬作りでなんとか抑えていた状況であったのだ。

しかし、それが更にパチュリーの入院を遠ざけてしまう結果となったのは皮肉であると言わなければならない。

また話が逸れてしまった。

その薬を飲もうと、傍らにある水差しからコップに水を注ごうとしたのだが、咳が中々治まらずうまく注ぐことができずにいた。

そんな彼女を見かねたのか、宗次郎が差し出された魔法書を手にすることなく立ち上がろうとする。

しかし、それよりも先に彼女の水差しを持つ手に上から手を添え、コップに水を注ぐことを手伝う者が居た。

アリスの人形、上海である。

更に妖夢もいつの間にか彼女の後ろに回り、背中をさすってやっていたのだ。

彼女らのお陰でパチュリーは薬を口に含み、それをコップの水で一気に流し込むことができた。

それだけであつという間に咳が治まっていき、顔色も良くなつていったのだ。

何度も言うが、さすがは永琳の作った薬である。

それでようやく一息吐くことができたパチュリーは、二人の顔を見ると小さくボソツと、それでもはっきり聞こえる声で「ありがとう……」とお礼を言う、

まあ、言った直後に目を逸らし、うつむき加減になってしまったが。

その顔にやや赤みがさしているのは照れているのか、それとも他人に氣遣われてしまった自分を恥じているのか。

だが、そんな彼女らの様子を面白くなさそうな目で見ていたのが魔理沙であつた。

あまり禍根を残したりなどはしない、こざっぱりとした性格の彼女にしては少々根に持ちすぎのようだが、それだけに、先ほどの物言いがよっぽど腹に据えかねているのであろう。

それでも、咳き込んでいた彼女をいい気味だとか、ざまあみろとか思ったりはしていなかった辺り、そこまで根暗で陰湿な性格ではないのは確かなようである。

それどころか、先ほどのことがなければ手助けしてやったのにと思っているのだ。

やはり普段の言動がどうあれ、魔理沙もその本質はかなりお人好しであるようだ。

さて、一方で出番を取られた形の宗次郎であるが、そんな彼女らの様子を一通り見た後、苦笑を一つこぼして席へと腰を戻した。

「……読めるはずだとのことですが、やはり根拠は僕的能力ですか？」

とりあえず話を戻すことにした宗次郎は、差し出された魔法書を手に取りながら尋ねる。

「ええ。貴方の話だと、その能力は“現代の”知識の集合体。あるいは、“形の無い”図書館とでも言えればいいのかしらね。そして現代の知識とは、過去から積み重ねてきた知識の結晶でもあるの。とにかくその本を開いてみてちょうだい」

そう促された宗次郎は、恐る恐る魔法書のページを開く。

「……これは……象形文字？ いや……原初日本文字だって？ でも、どうして……」

魔法書に書かれている文字は、現代では使われることの無い……いや、使うことができない文字であった。

まるで熱にうなされるかのように呟きながら読み進めていく宗次郎。

どうやら知識の能力が自動的に翻訳しているようだ。

そして、その文字がなんであるのか知ったようである。

「……どう？　読めるでしょう？」

頃合いを見計り、そう尋ねるパチュリー。

「……はい。でも、どうしてこんな文字まで……」

「言ったはずよ、現代の知識は過去からの結晶でもあると……やっぱり思った通りだったわね。貴方はそれを読むことができるし、理解もできる……そうでしょ？」

「ええ……理解……できます。でも、これは……」

「能力のお陰であれなんであれ、それが理解できるということは、貴方は今すぐにでも魔法使いの能力を使うことができるはずよ」

あまりのことに戸惑う様子を見せる宗次郎に、パチュリーはその迷いを断ち切るかのように断言する。

「ちょ、ちょっと待てよ！　いくら能力があったからってそう簡単に魔法使いになれるはずがないはずなんだぜ！？　それに、その本はお前がさっき書庫から持ってきたヤツじゃなかったのか？　あそこにあるヤツは確か……」

「その通りよ、魔理沙。奥の書庫にある魔法書は全て禁呪や古代に書かれた原本。そして、それらを正確に翻訳した写本……それもその貴重な写本の内の一つよ」

そこで一旦言葉を切り、再び紅茶を口に含んで咽の渇きを潤す。

「確かに魔法使いは簡単にはなれない。でも、何事にも例外というものはあるの。目の前の彼がその数少ない例外の一つになりそうね」

「だから待てって！　いくら魔法書が読めたって魔力が無ければ  
「魔理沙」　……なんだよ、アリス」

魔法使いは魔力を源にして魔法を行使する。

故に、魔力を持たない者は魔法を使うことはできないはずだと彼女は主張したかったようだが、そこにアリスが待ったをかけた。

「貴方、宗次郎を見て何か感じないのかしら？　貴方も魔法使いなら分かるはずよ」

「何かってなんだよ……？　え？　ちょっと待てよ……え！？　そんな……！？」

アリスに言われ、宗次郎をジッと凝視した魔理沙は、やがてあることに気付いた。

「どうしたって言うのよ、魔理沙、アリス。宗次郎さんがどうしたって言うの？」

二人の魔法使いが宗次郎に何かを感じ取ったようだが、妖夢には何かなんだかさっぱり分からない様子であった。

「……そんな……なんで宗次郎に――」

信じられないモノを見たとはかりに驚愕の表情で魔理沙が呟く。

そして、その正体を口にした。

「――なんで “魔力” があるんだよ!？」

「ええ!？」

「……………」

その言葉に妖夢も驚愕の表情となり宗次郎を見つめる。

宗次郎も何か思い当たる節があるのか、ギュッと眉を寄せて沈黙していた。

「あ……確かに宗次郎さんから霊気と妖気以外の力がわずかに……」

そこでようやく妖夢も宗次郎から別の力を感じ取ることができたようだ。

「……妖夢さん。確か魔法の森に入ったときに説明してくれましたよね。その森には人の魔力を高める効果があると」

「え？ た、確かに言いましたけど……で、でも！ こんな短時間で……」

妖夢が説明したように、魔法の森には魔力を高める効果のあるキノコの胞子が充満しているのだ。



「妖夢の言うとおりでせ！ そんなたった数時間で魔力が発現することなんてありえないぜ！！」

そう、普通は魔法の森に並の人間が入れば、数時間も耐えられることはない。

耐え切れたとしても、一日やそこで魔力が発現することなどないのだ。

「そう、普通はね……でも、咲夜から宗次郎……でいいわね？」「ええ。構いません」 ありがと。で、咲夜から聞いた話だと、人間から半人半妖になったそうね」

「……その通りですが……まさか!？」

確認を取るようなパチュリーの言葉に、宗次郎は少しばかり戸惑いを覚えながら肯定したのだが、ある可能性に気付いて大きく目を見張った。

そして、ギュッと眉を顰めて深刻な顔となる。

「宗次郎さん。何か思い当たる節でもあるんですか？」

その様子に先ほどから彼を窺っていた妖夢が不安そうに尋ねる。

しかし、その疑問に答えたのはパチュリーであった。

「どうやら気付いたようね。その通りよ。貴方は半人半妖に変質したことにより、様々な要素から影響を受け易い体質になってしまっているのよ」

「そんな!？」

「まさか!？」

「……やっぱりそうなのね……」

「……………」

彼女の答えに、妖夢と魔理沙は驚愕の表情となり、アリスはどこか納得した様子で一人頷き、宗次郎は眉を顰めたまま沈黙していた。

思い返してみれば、思い当たる節は他にもある。

白玉楼で霊力の訓練を妖夢と行ったときも、比較的簡単に霊気を操ることができたのだ。

それまでは霊力の“れ”の字も知らなかったのにである。

幽々子の説明では、半妖化した影響により妖力に引っ張られる形で発現したとのこと。

その時はそれで納得したのだが、考えてみれば訓練を行ったのは多くの幽霊が住まう冥界なのだ。それこそ霊気などそこら中に充満しているのである。

そうでもなければ一週間もしない内に、ド素人の彼が霊力を弾幕の形で放出したりすることなどできるはずがないのだ。

これは宗次郎も知らないことだが、あの霊夢も最初は霊力を操る

のに数年の修行期間は掛かったそうである。

天性の才能と霊力を操る能力があったからこそ、それくらいの修行期間で済んでいるのだが、それでも年単位の期間を必要としたのだ。

いくら半妖化の影響とはいえ、あまりにも顕著な成長速度であった。

「宗次郎さん……」

妖夢が心配気に声をかける。

彼女自身も半妖化の影響だからとあまり深く考えていなかったのだ。

日常的に弾幕ごっこなどをしていた者の盲点であろう。

なんとも深刻な雰囲気となった彼らであったが、そこにその雰囲気を壊すような言葉を発した者が居た。

「……でも、それってそんなに悪く考えるようなことかしら？」

一人を除く一同の視線がその者に集中する。

「アリスの言うとおりね。別に悪い影響を受けているわけではないんだし」

ただ一人だけ視線を動かさなかったパチュリーがアリスの発した言葉に同意する。

「え？ それ、どういふことだよ……」

「魔理沙。何度も言ってきたことだけど、貴方も魔法使いなら少しは自分で考えなさいな。それだから “成りそこない” なんて言われるのよ」

「ぬな！？ ……ぐぬぬ……そ、そんなこと言っただけさ、色んな影響を受けちゃうんだろ？ だったら悪い影響を受けることだって

「魔理沙」 な、なんだよパチュリー」

二人の魔法使いからやれやれといった視線を向けられてアタフタする魔理沙。

確かにこれでは、成りそこない……すなわち未熟者と言われても仕方ないだろう。

そんな魔法使いたち三人の様子を、宗次郎と妖夢は一步離れた視点で観ている。

ここは下手に口を挟むよりも、彼女たちの会話を聞いた方がいいと判断したようだ。

「この幻想郷に来てからはずっと白玉楼に居たそうだけど、それならもっと死の影響を受けているはずよ。なにせあそこは冥界。浄土の住人が住む所なんだし」

「パチュリーの言うとおりね。私の家に来たときだって森の瘴気を吸っても体調に影響はなかったようだし、それどころか魔力が備わってしまった……まあ、ほんのわずかだけどね」

「そうね。そのまま二、三日アリスの所に居たらもっと増えていたでしょうね」

「更に言えば、ここは夜の眷属である吸血鬼の住まう紅魔館。当然、闇の魔力が充満しているでしょうし、この図書館に至っては古代の魔法書から“魔”の気配が溢れ出ているはずよ……どう？ 今のところ何か影響を受けた様子はない？」

交互に推論を交わすアリスとパチュリー。

そしてアリスの言葉の最後は宗次郎に向けられていた。

「……どうと言われても、特にこれといった感じはありませんね。まあ、来たばかりですし、今のところはとしか言いようがありませんけど」

「それじゃ、つまりは私の考え過ぎだったことか……」

「違うわね。貴方の場合は考え足らずっていうのよ」

宗次郎の答えに、魔理沙がホッと落ち着いた様子を見せたが、その直後のパチュリーの言葉に苦虫を噛み潰したような顔になる。

「な、なんだよ！？ さっきから人を散々虚仮（こけ）にしたようなことばかり言いやがって。何か恨みでもあるのかよ！？」

「まあ、今まで散々人の物を勝手に持ち去られた恨みはあるわね。尤も、貴方が盗んでいった魔法書は初歩的な物とか、その写本とか、あまり重要なものではないからそれほどでもないんだけど」

「だったら 「それでも」 ……なんだよ？」

「それでも、人が苦勞して書き写したり集めたりしたものであることには違いないわ。それを勝手に持っていかれたら普通はいい顔をするはずがないもの」

その言葉に魔理沙はグッと詰まる。

まあ、普通はそう思うのが当たり前であるが。

「べ、別に盗んだんじゃないくて、死ぬまで借りる 「いい加減、貴方のそのふざけた言い訳は聞き飽きたわ」 あ、う……」

それでもなんとか言い募ろうとするが、言い終える前に一刀両断にされてしまった。

「パチュリーさん。何もそこまで言わなくてもいいのでは？」

再び悪くなってしまった場の空気を変えようとしたのか、宗次郎が助け舟を出す。

しかし、彼女はそれとは別のことを口にした。

「宗次郎……ちょっと貴方に渡した本を魔理沙に見せてやって」

「……これをですか？ まあ、あなたがそう仰るなら……」

これって確かこの図書館でも貴重な本のはずだよなど、そう思いながら宗次郎は手に持っていた魔法書を魔理沙に渡す。

一応は盗んでいかないかどうか目も光らせておく。

魔理沙が腹いせに持ち去らないとも限らないのだ。

「……んだよ。今まで頼んだって見せてくれた事もないくせに……」

そう言いながら渡された魔法書を開く魔理沙。

その顔は声とは裏腹に少々緩んでいた。

なんだかんだ言っても貴重な魔法書を手にした喜びがあるようだ。

この辺りはやっぱり彼女も魔法使いである。

だが……

「……うつ……なんだよ……これ……」

魔理沙はその本を一行も読むことができなかった。

いや、正確に言えばある程度は読めるのだ。

しかし、その意味を理解することができなかったのである。

「これで分かったでしょう？ 貴方を “成りそこない” と言った訳が。それに貴方が今まで盗んでいった本の中にも理解できないものがあつたのではなくて？」

「グッ……」

「……やっぱりね。あんな初歩的な本で理解できないようでは、それを読めるはずがないわ」

「わ、解るさ！ 確かに今は難しいけど、私だっていつかは……」

「いつかはって、いつのことになるのかしら？ それに何度も盗みに来たのは読めなかったことを誤魔化すためだったんでしょう？ それをもう読んでしまったかのように振舞って……はつきり言って滑稽（こっけい）ね」

「……なあっ!？」

「ああ、それは持つて行っても構わないわよ。それはあの書庫の中でも比較的重要度が低いし、もう中身も覚えてしまっているし、私には必要ないわ」

畳み掛けるように魔理沙へと言葉を浴びせた彼女は、最後に紅茶のカップを口につけながらこう言い放った。

「大きな口を叩きたいのなら、せめてそれを宗次郎のように読破できるようになってからにしてちょうだい」

「……クソッ！」（ガタッ）

「魔理沙！」

立ち上がり、椅子を蹴倒すように駆け出して箒に跨り飛び去っていく魔理沙。



その目は悔しさに滲んでいたようであった。

「……ちよつと言い過ぎたんじゃない？」

「ちよつとどころじゃないわよ！ あんな 「妖夢さん」 ……宗次郎さん？」

アリスの言葉に、思わず立ち上がって言い募ろうとした妖夢であったが、そんな彼女に宗次郎が静かに語りかける。

宗次郎の落ち着いた様子に違和感を覚えた妖夢であったが、彼が視線で席に座るように促すと、幾分か冷静になったのか大人しく腰を下ろす。

「パチュリーさん。あなたの最初の質問に答えていませんでしたね」

「……そうね。それでどうかしら？」

「まあ、僕には向いていませんね。それに、能力はあっても才能はないでしょう。確かにあの魔法書の内容を理解することはできましたが、それを実践できるかどうかは別の問題ですし、精々が“当て馬” に使える程度でしょうね」

「え？ 当て馬？」

宗次郎の言葉にキョトンとなる妖夢。

その疑問にはアリスが答えを出した。

「そ。魔理沙にハッパをかけるためにね」

アリスはそう言って意味有り気な視線をパチュリーに送る。

「……それこそ考え過ぎよ。いつまで経っても盗むのを止めないもんだから、いっそのこと自分で魔法書を書けるようになってもらった方がいいと思ったにすぎないわ」

パチュリーはそう言って再度カップを口につけようとするのだが……

「それ。さっきから空になってるわよ♪」

アリスにからかうような口調で指摘されて、一気に顔が赤くなってしまった。

「ウフフ……早くあの子には “仲間” になってもらいたかったのね」

「……ムキュ……」

微笑ましく見つめるアリスの顔をまともに見ることもできず、謎の声を上げるパチュリー。

その様子を見た宗次郎は、なぜか『ツンデレ』という言葉が浮かんでしまったりしていた。

「……そういうこと。まったく、素直じゃないんだから」

「素直に言ったところで、あの子は奮起してくれないでしょうね。これも宗次郎のお陰かしら？」

「さあ？ 何しろ僕は当て馬ですから」

「宗次郎さんったら……」

「プッ、ククク……ウフフフ……」

宗次郎がすっとぼけた様子でアリスに言葉を返し、その言葉の本来の意味を連想してしまった妖夢が顔を赤らめると、アリスが肩を揺らしながら笑い出してしまった。

やがてその笑い声は三人による合唱へとなくなっていったのである。

さて、三人の笑い声に包まれて身の置き所がなくなってしまったパチュリーは、自らの忠実な使い魔へと念話を送っていた。

「へちよっと、こあ！ いつまで準備しているの？ 早く紅茶のおかわりを持ってきなさい！」

多分に八つ当たりを含んだ言い方であったが、小悪魔の方はこう返していた。

「パチュリー様……可愛いです♪」

「ムキュ！？」

どうやら気になって引き返してしまい、今までずっと見ていたようであった。

なんとも、この大図書館の主にとって、この日は主としての威厳

が大きく揺らぐ日であったようだ。

一方の飛び出して行った魔理沙であるが、既に紅魔館から大きく離れていた。

幻想郷最速を誇る射命丸ほどではないが、それでも、それに匹敵する速度である。

空を飛びつつ、魔理沙はふところから一冊の本を取り出した。

「……へッ。読めるもんなら読んでみろってか？」

本を見つめ、大図書館の主に言われた言葉を思い出す。

「上等だぜ……」

そう呟く彼女の顔は、既にいつもの不敵な笑みが浮かんでいるのだった。

「やああああああああってやるぜえ!!」

気合を入れるためか、そう叫びながら夜の空を猛スピードで飛び抜けいく魔理沙であった。

とりあえずその言葉はもう言わない方がいいであろう。

某獣の本能で動くマシンの中の人的な意味で。

そして場面は再び紅魔館の大図書館へと戻る。

「え？ 当て馬だけの意味ではない？」

「そうよ。それだけで貴方に魔法使いにならないかなんて言わないわ」

おかわりの紅茶を持ってきた小悪魔によって、この書齋に再び紅茶の香りが漂う。

「つまり、それは……」

「結構本気で言ったって意味よ」

そう言って宗次郎に向けた視線を鋭くする。

なんとか威厳は保たれたようだが、未だに顔が赤かったりしているのが微笑ましい。

元々色白の肌であるから余計に目立つのだ。

だが、そんな “ほんわか” とした空気も、彼女が次に言い放った言葉で引き締まっていく。

「貴方の能力……貴方が思っているよりも遥かにとんでもない能力かもしれないわ」

彼女のその言葉に、宗次郎たち三人はお互い顔を見合わせる。

「つまり、どういふことなんでしょうか？」

三人を代表して、宗次郎が尋ねた。

「つまり、貴方が魔法使いのことを知識の能力で検索しても今すぐは無理でしょう。でも、ここの魔法書を読んで魔法使いがなんであるかを理解したとき、貴方はありとあらゆる魔法を使えるようになるかもしれないってことよ」

「……それってひょっとして思いっきりとんでもない話なんじゃありませんか？」

「ひょっとしてもしなくてもとんでもない話よ。貴方はもっと自分の能力を把握するべきね」

「「「……………」」」

沈黙する一同。

どうやら宗次郎の能力には、まだまだ秘密があるようだった。

そんな彼らの思いとは関係なく時は容赦なく進む……

『答え』

への道は、魔法のようなものかもしれない。

## 第二十話 ― 紅魔館 その3 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

昨夜やっと思き上がったんですが、そのまま寝落ち（PCつけっ放しで寝ること、主にMMOでよく見られる現象w）してしまい、朝になっての投稿になりました。

いやはや、パチエと魔理沙の関係修復やら、魔理沙が魔法使いに“成らない”理由付けも考えていたのですが、あまりの文量に泣く泣く削ることに……（つд、）

結果、ちよっとパチエが嫌な印象になってしまいましたが、ラストでなんとか挽回。

そして、宗次郎が魔法使いにもなってしまふのかどうかも次回に繰り越しです。

それから、今回のテーマとして『メインキャラ以外からの描写』を試みてみましたが、いかがでしたでしょうか？

彼女たちもそこで生きて生活しているという臨場感が伝わって頂けたなら幸いです。

皆様、段々不定期な投稿になりつつありますが、どうか今後ともお付き合いのほどを……

では、次回の投稿をお待ち下さい。

あ。とりあえずこれだけは言っておきます。

次回 は は っ ちゃ け ます w

それでは、また。



## 第二十一話 ― 紅魔館 その4 ― (前書き)

はい。まったくもって大変お待たせしてしまつて申し訳ありません。今回のことは完全に私のミスです。

本当なら火曜日あたりに上げられるはずだったんですが……

活動報告にも書きましたが、完成直前の原稿をクリックミスで全消しにしてしまうというあまりにも笑えないミスをしてしまい、最初から書き直しをする羽目になってしまいました。orz

やっぱりバックアップって大事ですよねえ……

しかも、今回のお話は過去最大の容量になっているのですが、正直微妙な展開になった気がします。

それと、少々年齢制限に引っかけかねない描写があります。

これはマズインじゃないのか？　とお思ひの方は感想にてご指摘下さい。

では、本編です。

「……つまり、宗次郎殿はこの幻想郷をかき混ぜるスプーンということですか？」

酒宴の席でポツリと言った主の言葉に、九尾の狐――八雲 藍は尋ね返していた。

ココは白玉楼の客間。

宗次郎と妖夢が旅立ってから二日目の夜を迎えていた。

既にその二日で妖夢がどれだけ忙しく働き回っているのか、その大変さを十二分に噛み締めてしまっている藍。

家事全般はそれぞれを担当する幽霊たちがしているからさほど大変ではないのだが、時折言い出す幽々子の用事（主におやつ）には、妖夢の代わりに彼女が応じなければならぬのだ。

三度の食事は料理番が用意してくれるのだが、それ以外の食事や祝い事……例えば名月の月見団子などは妖夢が担当していたからで

ある。

これは、冥界に住む幽霊たちは、あくまでも転生するまでの仮の住居として白玉楼で働いているだけであり、管理者である幽々子の指示に従っているにすぎないのだ。

あまり酷使するのは云々と、閻魔との取り決めがあるらしいのだが、その辺りの事情は藍の知るところではない。

そのために昼前の小昼時や三時のおやつは勿論のこと、夜食まで彼女が作らなければならないのだ。

尤も、彼女の料理の腕前はプロも脱帽するほどの凄腕であるから、なんら問題はないのだが。

それはともかく、妖夢も苦勞しているのだなあとしみじみ思う藍。

しかし、妖夢に言わせれば 『それはお互い様です』 とでも返されたであろう。

何しろ、藍の仕事はそれだけではなく、本来の役目である結界の管理や修復などもあるからだ。

本来の役目というが、元を正せば彼女の主である紫の役目なのであるが。

その主と言え、この二日はあっちこっち飛び回っていたらしく、やっと帰ってきたかと思えば、第一声が 『お腹空いた』 である。

主がどこで何をしていたのかは藍の知るところではない。

しかし、大方の想像はついていた。

この幻想郷最古の妖怪の一人にして管理者であり賢者とも称される紫の式神であるならば、それくらいの察しの良さを発揮できないようでは務まらないのだ。

さて、そんな腹ペコの主には、温めなおされた夕食が用意されていた。

藍自身は既に幽々子と一緒に夕食を済ませていたのだが、紫の分は藍がいつでも出せるようにと準備しておいたのだ。

無駄にならずに済んだとホッとする藍だが、それならそれで幽々子の夜食になっていたのは間違いないであろう。

いつものことながら、あの体のどこに思ってしまう藍。

しかも、亡霊だからいくら食べても体形が変わることがないのだ。

ダイエットに血眼になっている世の女性たちから見れば、羨ましさに思わず嫉妬妖怪になりかねないほどであろう。

さて、その幽々子はどうしているのかと言えば、つい先ほどふらりと訪れた来客の応対をした後に、食事中の紫のところへと突撃していったのである。

今ではその客を交えての、ちょっとした酒宴の席となっていた。

無論、その世話をするのは藍である。

その席で雑談に興じていた彼女らであったが、話題が宗次郎のことに及ぶと、紫がこう言い放ったのである。

『宗君にはね、この幻想郷という皿に溜まった淀みをかき回す役目を持ってもらっているの』

この言葉に対する藍の返答が冒頭のセリフであったのだ。

「その通りよ。この幻想郷はね、結界が張られてから永い間ずっと淀み続けているの。勿論、安定した状態を保つにはその方がいいんだけど、淀んだままだといずれは腐り落ちてしまう。つまり、淀みを放置すれば結界の綻びになりかねないってことなの」

「……その考えは分かりますが、大き過ぎる変化は幻想郷の安定を崩す事態になりかねません。その場合の対処を講じておく必要があると愚考いたします」

暗に宗次郎の排斥を考慮しておく必要があるのではと具申する藍。無論、この場合の排斥とは抹殺。もしくは存在の抹消を意味している。

藍としては彼に対して含むところなどないし、信頼に値する人物だとも思っている。何より橙が懐いているし、彼女自身もかなり気に入っているのだ。

できれば、今後も良き友人として付き合っていきたいと思っているほどである。

しかし、それはそれ。これはこれである。

個人的感情と幻想郷の安寧を天秤にかけるような、そんな愚かなマネをする彼女ではない。

彼女の役目は、そんな安易な選択が出来るほど軽くないのだ。

何より、それが主である紫の意向である。

式神は、主の意向を実行するときこそ最大の力を発揮する。

式神とは、いわゆる方程式で成り立っており、主の意向を実行するようにプログラミングされた存在なのである。

そして、藍は自分の意思でそのプログラミングに従っているのだ。

別に洗脳されたり、脅されたりされている訳ではない。

自らが仕えるに値する主であり、主の考え方こそこの幻想郷にとって最上かつ最良のものであると判断したからである。

尤も、春雪異変の時には橙が霊夢たちに痛めつけられたと聞いて、紫の命令を無視して報復に出てしまったこともあったが。（その後は勿論、お仕置きされた）

しかし、それ以外では自身の感情を切り捨てて役目を優先させることができるのだ。

このように冷静かつ冷徹な判断が下せる彼女だからこそ、紫は全幅の信頼を置いているのである。

それ故に八雲の名を冠することを許されているのであろう。

さて、その藍が式神としての考えから出した意見具申であるが、主ではなく別の者が答えを返していた。

「別に大丈夫じゃないのおく？ 宗次郎はそんなヘマをするようなヤツじゃないさ。このあたいが保証するよお」

(……なぜこの方がココに居るのだろう……)

藍は能天気な答えを返した小さな百鬼夜行——萃香を見てそう思わずにはいらなかった。

そう、来客とは萃香であったのだ。

返答した後にクイツと瓢箪の酒を呷る。

どうやらかなり出来上がっているようだ。

「確かに萃香の言うとおりねえ。宗君のことだから藍が言うようなことには絶対にならないと思うわ。何より、なんの為に貴方の主人が宗君を徹底的に調べたと思うの？」

幽々子が萃香の意見に同意して自分の考えを述べる。

「そういうこと。あたいが宗次郎の噂を広めるために天狗を煽ったことも計算済みだったみたいだし。もう少し自分の主を信用するべきだと思うよお」

「……確かにその通りですね。紫様、失言でした。申し訳ありません」

二人の言葉を受けて、藍は素直に謝罪する。

「別に謝る必要はないわ。貴方の懸念する気持ちも分からなくはないもの」

でもね、と紫は言葉が続け、手に持っていた扇子を指先に持ち直し、それを下に向けてクルクルと回し始めた。

それはまるで宙に浮いた見えない皿の中身をかき混ぜているような動作であった。

「確かに大き過ぎるスプーンだと皿の中身を溢してしまうわ。でも、だからと言って小さ過ぎるスプーンだとかき混ぜても効果は期待できない……」

「……つまり、宗次郎殿は丁度いい大きさのスプーンである？」

式の問いに紫は直接には答えず、曖昧な笑みを浮かべながら再び口を開く。

「宗君はね、現代知識を持ちながら古き良き時代の考え方を持つ子なの。文明開化で科学万能の時代になる前の、幻想が幻想だけの存在ではないという考え方をね。その上、弱肉強食の、私たち妖怪の側に近い理論も持っているわ」

そう言ってかき回すのを止め、両肘を座卓の上に置き、両手を組んでその上に顎を乗せた。



そして、目を細めてどこか遠くを見るような、憂いを含んだような表情になる。

なんとも艶っぽい、大人の色香を漂わせる仕草であった。

「ホント。あんな子は探そうと思ってもしうそう見つかるものじゃないわ。あの子を観て、彼の本質を理解したときは神に感謝したくらいよ……この私がよ？ 正直、この幻想郷そのものが私の考えを察して彼を連れて来たんじゃないかって思ってしまったわ」

酔いがほどよく回ったのか、いつにも増して饒舌に語る妖怪の賢者。

しかし、なにやら手をスキマに入れて何かをしているようだが……

「さすがにそれは考え過ぎね。でも、紫がそう思うのも無理はないわ。強いし優しいし、何より美形だし、妖夢が夢中になっちゃうのも分かるわね。尤も、それで女難の相が出る気がするんだけど」

あながち間違いではない……どころか、その通りの目に遭っているのだが。

そんなこととは露知らない幽々子が能天気にとまう。

「あはは。まったく同感だねえ。まあ、なるようになるんじゃないのお？ 何せこのあたいに余興とは言え勝ったほどなんだし。滅多なことにはならないと思うよお……つと、ここら辺かな？ (ピコピコ)」

「萃香の基準は相変わらずそれねえ。でも、この幻想郷ではあなたが間違ってもないわ。だから信じましょう、宗君がこの幻想郷に新しい風を吹かせてくれることを……あ、多分そうね（ピコピコ）」

「萃香も幽々子も楽観的ねえ。あの子もそろそろ自分の能力の異常さに気付いてる頃だっていうのに……でも、ま。その上で彼が吹かせる風がどんな結果をもたらしてくれるのか楽しみんだけどね。そのために私もあっちこっちで仕込んでるんだし……あっ！ やっぱり出てきたわ（ピコピコ）」

「……あのお、お三方とも先ほどから何をされているのですか？」

真剣でありながら、どこかお気楽な調子で宗次郎のことを語り合う三者。

特に最後の紫はかなり重要なことを言っていたようだが……

しかし、さっきからその雰囲気をぶち壊しにしている妙な電子音とBGMが室内に流れているのだ。

思わず尋ねてしまう藍。

「ん？ 見て分からない？ あっ！ 誰か煙玉持っていない!？」

「私を持ってるけど……ちょっと待っててね……《ウルトラ上手に焼けましたあ♪》 やったわ♪」

「ちょっとちょっと、肉ばかり焼いてないで援護して！ 援護」

「幽々子はいつもそれだねえ。ここはいつちよあたいが麻痺ビンで

……」

「外すんじゃないわよ！ 私は練気溜めるから幽々子は抜刀術を。それで止めよ！」

「あゝん。だからちょっと待ってってばあゝ」

あれは確か “ ぴいえすぴい ” とやという遊戯道具ではなかっただろうか。

幻想郷全体に関わりかねない重要な話をしていたはずなのだが……

真剣に受け答えしていた藍の思いをほったらかしにしてゲームとやらを始めてしまった三人を見て、思いつ切り溜息を吐いてしまう藍。

これが幻想郷を代表する立場にある者たちなのかと呆れるばかりだ。

（紫様……夕食が済んだらお休みになるとおっしゃってませんでしたか？）

明日は間違いなく昼過ぎまで起きてこないだろうなあと、まず外れることはない予想を思わず立ててしまう彼女であった。

「ちょっと萃香どこ投げてんのよー！！」

「あつれえ？ おっかしいなあ……」

「キヤー！ こっちきたあー！！」

「幽々子ったらなんで避けないのよ!？ 萃香も飲み過ぎでしょ!」

「いいやあ、これはきつと酒が足りないからだよお。藍？ 悪いけどお酒もってきてくれない？ あたいの瓢箪はもう空だから次が溜まるの時間が掛かるんだよねえ」

「あ、私にも何か持ってきて。お肉焼いてたらまたお腹空いちやったの」

「ちょっと、私の式を使い回さないでちょうだい。あ、私にもお酒とおつまみの追加ね」

「……かしこまりました。お持ちしますのでしばらくお待ち下さい」

再び溜息を吐いて言われた品を用意するために一礼して部屋を後にする藍。

とりあえずそんな彼女に送る言葉があるとすれば……

……藍様がんばれ、超がんばれ……

なんともグダグダになった白玉楼から、場面を紅魔館へと移すことにしよう。



カポーン。

「（チャプ）……ふう〜〜」

顔の水滴を手で拭い、一息を吐く。

少し熱めの温度が体に心地よく染み渡る。

十数人は一度に入れそうなんだっ広い浴槽に一人で浸かる贅沢を味わう。

まるで温泉観光地の有名ホテルにあるような豪華な造りの浴室。

ココは紅魔館の大浴場。

厨房といい、この浴場といい、この館の科学水準は水周りだけが飛び抜けて近代的な造りになっているようだ。

ひよっとしたら、洗濯場などもそうなのかもしれない。

外の世界にある洗濯機が所狭しと並ぶコインランドリーのような光景を想像してしまい、この大浴場でただ一人入浴している彼——宗次郎はクスッと笑みをこぼした。

浴壁に背を着け、手を組んで両足と共に思いっきり伸ばしてみる。

「う~~~~ん……」

体の各所からポキツコキツと小気味良い音が鳴り、体の節々を心地よく刺激する。

「……っ……くはっ」

力を抜くと、全身の筋肉が弛緩されたように解れていくのを感じた。

そのままゆったりと全身の力を抜き、たゆたう湯の動きに身を任せる。

よく 『極楽、極楽』 とか 『生き返ったような気分』 と言うが、まさしく今の彼はその言葉を実感しているところであった。

浴槽の縁に頭を乗せ、体だけを湯の浮遊感の中に漂わせる。

見上げる天井には、浴室特有の淡い光を放つ照明が灯されているのが目に映る。

(……浴室用の蛍光灯なんてどうやって手に入れたんだろう……いや、そもそも電源は……)

おそらくそれは考えても仕方のないことであろう。

少しばかりのぼせてしまったのか、頭がボーっとしてきたようだ。

湯に身を任せていた体を起こすと、両手でお湯をすくってバシャッと顔にかける。

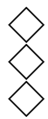
「ふー……」

再度一息吐いて思案顔になる宗次郎。

（……魔法使い……そして、僕的能力……か）

考えることは入浴の前にあった大図書館での会話。

彼はその内容を思い返していた。



「――貴方はもっと自分の能力を把握するべきね」

大図書館の主、パチュリー・ノーレッジの言葉が宗次郎の頭に響き渡る。

確かに欠点もあるが、それを補って余りあるほどの恩恵がもたらされる能力である。

当初は予測する能力の方にばかり目がいていたが、思えばとてもない能力だ。

彼の知識の能力がどれだけの範囲に及ぶのか。

下手をすれば、全人類の英知全てが収められているのかもしれないのである。

ある意味、紫の『境界を操る程度の能力』に匹敵する能力であろう。

彼女の能力は、万物の創造と破壊を司るとまで言われているのだ。

まさに神々の領域である。

—— 自分の能力はその神々の領域に匹敵しているのではないか

——

そう考えたとき、宗次郎はブルリと体を震わせた後、背中に冷たいものが流れるのを感じていた。

それは決して気のせいなどではない。

気が付けばギュッと拳を握り締め、更にそれが小刻みに震えていたからだ。

腹の底が冷えるような、胸が締め付けられるかのような感情が身体を支配していく。

それは彼がこの幻想郷に来たばかりの頃、白玉楼で幽々子と会う前に感じた感情に酷似していた。



今の彼ならば、ソレがなんであるのかはつきりと分かる。

— 恐怖 —

およそ全ての人類が抱く、得体の知れないものに対する原初の感情である。

途方もない考えに至り、それが一気に噴き出してしまったのだ。

必死に恐怖という名の感情に抗う宗次郎。

だが、慣れない感情の流れに中々上手く抗うことができない。

どうやら甦った感情が、返って彼の心を不安定なものにしてしまっているようだ。

幻想郷に來た当初ならば、まだ抑制することができていたのだが……

感情の戻っていく速度に、彼の心の成長が追いついていないのだろう。

普通なら時間が解決してくれる問題であり、あまり深刻に考えることもないのだが、この時ばかりはその時間を待っていられるほどの余裕がなくなってしまったのである。

抑制しようとすればするほど大きくなっていく恐怖という名の感

情。

表面ではなんでもない風を装っているが、次第にその余裕すら失われ始めていた。

そんな彼の様子に、二人の魔法使いが怪訝そうな顔になる。

だが、何が原因なのかも分からず、彼女らはどうしたものかと顔を見合わせた。

そして、いよいよテーブルの上に乗せられた彼の拳が傍目から見ても分かるほどに震えの幅が大きくなっていった。

叫び出したくなる衝動を抑えようと歯を食いしばり、拳を握る力を更に強めていく。

だが、そんな彼の握られた拳に――

「あ……」

――そっと手を添える者が居た。

妖夢である。

宗次郎はハッとして彼女の顔を見ると、大丈夫と言わんばかりに微笑んでくれていた。

たったそれだけ……

たったそれだけで彼を蝕んでいた恐怖が霞のように消えていって

しまったのだ。

彼には、妖夢の笑顔が朝靄を追い払う太陽のように見えたのである。

彼女の手の温もりが、宗次郎の心身に染み渡っていくように広がっていく。

(……妖夢さん。ありがとう……)

自分にはこうも想ってくれる人が居る。

それがどれだけ心を落ち着かせるのか。

今の彼は、始めてそれを実感していたのだ。

宗次郎は感謝の気持ちを込めて微笑みを返し、重ねてくれた手の上にもう片方の手を乗せる。

微笑みあう二人の間に穏やかな空気が流れていく。

場がホッとした雰囲気包まれていく。

しかし……

「コホン……」

それを壊すかのようなというわざとらしい咳払いが聞こえてきた。

二人がハッとすると、アリスが握った拳を口に当てていたのである。

る。

パチュリーも開いた本で顔を隠し、目だけを本の上から覗かせてこちらを見ていた。

慌てて重ねられていた手を離す二人。

「……仲が良いわね。でも、ココでは止めてちょうだいね、羨ましくなるから」

パチュリーが冗談めかして言えば。

「パチュリーもそう思うでしょ？ ホント、妬けちゃうくらいなのよ」

アリスもそう言って、わざとらしく手をパタパタと団扇のように振る。

暑いったらありやしないと云わんばかりの仕草であった。

更に、その様子を書棚の陰から見ていた子悪魔が 『キヤー！ キヤー！』 とまるつきりどこかの女子高生のように声を殺して騒いでいたりする。

尤も、それを知るのは主であるパチュリーだけであったりするのだが。

彼女たちの言葉に、宗次郎は照れ隠しなのか手を頭の後ろにやって苦笑しながらポリポリと掻き始める。

妖夢も真っ赤になって俯き、テーブルの下に隠した手をモジモジとしていた。

なんともピンク色な雰囲気染まった図書館内であったが、二人にとっては幸いなことに、咲夜が湯殿の準備ができたことを伝えに来てくれた。

この時の二人にとっては、咲夜が天使に見えたことであろう。

一方の咲夜にとっては、この館内に流れるなんとも微妙な空気、首を傾げるしかなかったのであるが。



「……で。妖夢さんに先に入るように言われて今に至る……」

いったい誰に向かっての説明なのだ、突っ込みが入りそうな独り言を呟きながら、彼は頭に乗せていたタオルを取ると肩にかけ、ゆっくり湯船から上がった。

湯に隠されていた彼の全身が露になる。

特に鍛えこまれた筋肉質のような印象はないのだが、それでも適度に付いた若々しい筋肉は俊敏さと力強さを兼ね備えているようで

あった。

ボディビルダーのような見せるための筋肉ではなく、実戦の中で鍛え上げられた、一切の無駄を省いた筋肉である。

軽量級のボクサーやマラソン選手を思い浮かべれば分かりやすいであろう。

そこに、この年頃の若い男性特有のカモシカのような瑞々しいしなやかさが加わり、ある種、完成された芸術品とも言える理想的な男性像がそこにあった。

男一人で居る気楽さゆえか、惜し気もなくその理想的な体を晒して歩く宗次郎。

……その一部分も男にとって理想的なようであるが……

どこが？ とか聞かないで欲しい。哀しくなるから。主に作者が。

それはともかく、先に洗い場でその体を洗っていた彼であったが、まるで銭湯のように並ぶ洗い場に最初は眼を丸くしたものであった。

一つ一つに鏡やらシャワーやら、石鹸やシャンプーまで完備しているのだ。

本当にココは文明から隔絶された地なのかと思ってしまう。

白玉楼の風呂場は江戸時代の武家屋敷にあるような古式ゆかしい総檜造りになっていてそれなりの広さがあったのだが、この紅魔館の浴場ほど広くはなかったし、近代設備もほとんどなかった。

強いて言えば、お湯と水が分かれて出る蛇口ぐらいであるが……

（……考えてみれば、あれもどこから水を引いているのか聞いてなかったな）

今までは特に気にもしていなかったのだが、考えてみれば色々と突っ込みどころがあったような気がするなと思う宗次郎。

この紅魔館のように、24時間いつでも注がれているお湯とか、どこで沸かしてるのかとか……

ついでに言えば、アリス邸のお風呂もユニットバス方式（トイレは別室、シャワー付き）であったりするのだが、宗次郎がそれを知ることとはなかったりする。

霊夢の博麗神社にあったお風呂は普通の五右衛門風呂だったのに、である。

どうやら人外の者が住む住居であるほど近代化が進んでいるようであった。

後は、住む者の個人的な趣向の差であろう。

「……なんで水周りのところだけ近代設備なんだろう……」

彼がそうポツリと呟いたように、何故か近代的になっているのは水周りに限定されているようであった。

ついでにココのトイレは水洗だったりする。（しかもウォッシュ○レ

ット完備)

いったいどこに流しているのやら……

思わずそれを想像しようとして、慌てて首を振り頭から追い払ってしまふ。

怖い考えになりそうだったからだ。

館内の部屋や廊下は中世の西洋屋敷そのままだというのに、なぜ水周りだけがそうなっているのかは……考えてはいけないことなのだろう。

どうしてかと言えば、主な住人が全て女性であるからだ。

余計な考えは身を滅ぼしかねない。

そう思いなおして、改めて浴室内を見渡す。

温泉場の浴場であれば、外に面した壁は一面ガラス張りになっているのだが、普通の壁となっていた。

やはり主な入浴者が女性であるからだろう。

浴室内は床から壁、天井までタイル張りであるが、それらがごく普通の乳白色だったのは少々意外であった。

なにもかもが真っ赤な紅魔館のことだから、浴室も真っ赤なのだろうと勝手に想像していたのだ。



しかも、浴槽だけはタイル張りではなく、檜造りになっていたのには驚いた。

なんとも “ みょん ” 　なところだけが和風になっている紅魔館である。

ひょっとしたら、外の世界の本に檜風呂が載っていたのを見た紅魔館の当主が、咲夜あたりにわがままを言って造らせたのかもしれない。

(……ありうるかも)

その光景がまざまざと目に浮かび、思わず 『咲夜さん、ご苦労様です』 　と言いつつになつてしまう。

ヒタヒタとタイル張りの床を歩きながら苦笑していた宗次郎であったが、はて、そう言えばと考えて立ち止まる。

(……確か吸血鬼って流水を嫌うんじゃないかな?)

知識の能力で 《 吸血鬼 弱点 》 を検索してみると、思ったとおり項目の中に流水が弱点であると書かれていた。

正確に言えば、流水を渡ることができないのだが。

つまりは雨の中を歩くことができないし、シャワーを浴びることもできないのだ。

(……あつ、そうか。嫌っているのは水の流れであって、水そのものって訳じゃないんだ)

この無駄に整った設備はなんの為にと思った宗次郎だが、すぐにその考えに至った。

そうでなければ紅茶も口に含むことができないはずだからである。

（でも、髪や体を洗った後はどうやって流してるのかな？）

そう思って浴場の奥を見ると、その答えがそこにあった。

（……なるほど、ジャグジー……泡風呂か。それに、奥の壁のドアはサウナ室か。これなら水に触れることも少ないし、サウナで流すってこともできるしね）

さすがに自分の流した汗まで嫌うことはないようである。

それに、泡風呂には『当主&妹様専用 他者の使用を禁ず』と書かれたプレートが貼られているから、体を洗った後はここで流しているのだろうと想像が付いた。

やはり浴槽に入って流すようなことまではしないようだ。

はしたないことだと思ったのか、それとも、あの忠実な従者に注意されたのか。

どちらにしても自分で使うつもりはなかった宗次郎は、早く上がらないと妖夢に悪いなと考えて浴場から出て脱衣所に向かうことにした。

さて、ここまで読んで頂いた読者諸兄は、こうも詳しく入浴シーンを描写するからには女性陣と遭遇する嬉し恥ずかしの展開が待ち受けているとお思いであろう。

作者としてもいい加減、男の入浴シーンなんぞ書いてても面白くないところである。

しかし、少々(?) 天邪鬼なところがあるこの作者が、そんなお約束な展開など――

「おっふろーー!!」 (ガラッ)

――してしまうのはいかなものであろうか。【注…ココは全年齢指定の小説です】

「え!？」

慌てて後ろを向き、持っていた手ぬぐいを腰に巻く宗次郎。

いきなり入ってきたのは背中に特徴的な羽(?) を生やした金髪の少女であった。

どこことなくレミリアに似た感じの容姿に、柔らかそうなショートヘアの金髪。

背中に生えている羽は、翼としての用途を果たしていない形状をしていた。

木の枝のような羽に様々な色の着いたクリスタルのような不思議

な翼。

そして風呂場に入ってきたのだから当然なのだが、身に着けている物は一切なかった。

いったい、いつの間に脱衣所に入っていたのやら。

いつもの彼なら、誰かが脱衣所に入ってくる前から気付いているはずなのだが、色々と考え事をしているうちに警戒レベルが下がってしまったのだろう。

少しばかり頭がお湯でのぼせてしまい、思考が弛緩してしまったのが原因のようだ。

「あれ？ あなただあれ？ ……あつ！ あなたが姉様の言っていたソウジロウね？ 私、フランドールっていうの！ フランって呼んでね」

元氣良く自己紹介するフランに、宗次郎は戸惑いを隠せなかった。

（彼女が噂の “ 妹様 ” か……前ぐらい隠してほしいんだけど、恥しくないのかなあ）

一瞬ではあったが、一糸まとわぬ彼女の姿を見てしまった彼としてはそう思わざるを得なかったようだ。

まあ、つるっぺたんな幼児体形と言っているいいフランに彼が欲情することは無いのだが、それでも最低限の羞恥心ぐらいは持って欲しいと思う宗次郎。

……誰だ、『浴場で欲情しないとはこれいかに!』 などと思っ  
たのは?

ついでに何度も言うようだが、ココは全年齢指定の場である。

詳しくフランの体を描写したり、ムフフな展開にしたりするよう  
なことは一切しないことをここに明記しておく。

……コラ、そこ。『濡れる場所なのに濡○場がないとはどういう  
ことだ!?』とか思わないように。

「あ、あのお……フランさん?」「フランでいいよー」 それじゃ  
フラン。もう僕は上がるから、このタオルで体を巻いておいてくれ  
ないかな?」

そう言って出入り口の脇に常備されているバスタオルを取ると、  
後ろ向きのままフランに差し出す。

とりあえずはそうして貰って自分は脱衣所に入ろうと思った彼で  
あるが、彼女の行動は宗次郎の予想の斜め上を逝っていた。(↑誤  
字にあらず)

予測する能力も、対象を見ていなければ意味はないのだ。

「ねえねえ。コレなあに? フランにはこんなの付いてないよ?」

「え? ちょ!?!?」

なんと、いつの間にか宗次郎のすぐ横まで来ていたフランが、宗  
次郎の腰に巻きつけた手ぬぐいをめくろうとしていたのだ。

先ほど一瞬だけ宗次郎がフランを見たと言ったが、つまりは逆も然りなのである。

好奇心旺盛な目でさっき見た “モノ” をもう一度見ようとしたようだ。

「ちょっと……ダメだよ？ 女の子がこういうことしちゃ」

慌ててフランの手を手ぬぐいから払った宗次郎は、幼い子供に言い聞かせるように諭す。

そして、しょうがないなあとはかりに目を閉じたまま気配のみでフランにタオルを巻くことにしたのだが……

「えー？ なんで？」 「ちょっとフラン。はしたないからお風呂場で大声を出しちゃダメよ？」 あ、姉様♪」

「「え？ ……」」

そこに入ってきたのが姉のレミリアであった。

思わず重なる声。

フランにばかり気をとられてしまった宗次郎は、不意に聞こえてきた別の声に思わず目を開けて振り向いてしまったのだ。

つまりは、レミリアの姿をしっかりと見てしまったのである。

当然、脱衣所から入ってきたのだから彼女の姿も……

しかも、フランに手に持ったタオルを向けた姿勢のままであるから、見ようによってはフランからタオルを剥ぎ取ったようにも見えてしまっていた。

「な……な……な……」

ワナワナと震えながら、自らの背中にある大きな羽で肝心な部分を覆い隠す。

小悪魔と似たような羽であるが、彼女の翼よりも大きく、かつ悪魔的な印象を与える羽が小刻みに震えていた。

「ナニを……しているのかしら？ 宗次郎……」

何やら目の部分が影となり、『ゴゴゴゴ』という擬音がどこからともなく聞こえてくるような気がした。

「あ、あの……コレはですね 「お嬢様！ 妹様！ 申し訳ありませんが、今は宗次郎様が入浴されておりますの……で？」 咲夜さん!？」

そこに飛び込んできたのが咲夜であった。

どうやら連絡の行き違いがあったようである。

これはレミリアが妹を可愛がるために人払いをさせていたのが原因であった。

無論、咲夜にも許可があるまで入ってこないように言い付けら

れていたのだ。

その為、宗次郎のことを伝えるにも伝えられず、部屋から出てきたところで伝えようと思っていた咲夜であったが、多忙を極めるメイド長の立場であるが故に行き違いとなってしまうたのだった。

事実、よほど急いでいたのだろう。

気配もなく突然現れたところを見ると、能力を使って文字通り飛んできたようだ。

しかし、それも宗次郎からすれば……

(咲夜さん……遅いですよ……)

と言いたくもなるタイミングの悪さである。

更に、追い討ちともいうべきタイミングで現れた者が居た。

「ちょっと！　今は宗次郎さんが入ってるのよ！！　……って、え？」

咲夜の後ろから妖夢の姿が見えたのである。

(……ああ。またこの展開なのか……)

思わず天を仰ぐ宗次郎。

上を見ても天井しかないのだが。



後、“また”とか言わないで欲しい。作者のボキャブラリーが貧困なだけなのだ。

「お嬢様……」

これまた底冷えがするほどの声音で咲夜がレミリアを見る。

「ええ……分かってるわ、咲夜」

彼女の呼びかけに、主であるレミリアも完全に座った目で返していた。

「Then, please give the order to me. My master. Hurry! Hurry! Hurry! (では、オーダーをお願いします。我が主よ。早く早く! 早く!)」

「Why is it English!? (何故に英語!?)」

なぜかいきなり英語になった咲夜の言葉に、宗次郎が思わず突っ込みを入れる。

その彼も英語で叫んでいたが。

どうやら知識の能力が自動で翻訳してくれているようだ。なんとも羨ましい機能である。

だが、そんな能力の恩恵など気にしてる場合ではなかったりする。

「My order is only one! Search &

Destroy! Search&Destroy! (我がオーダーはただ一つ! 見敵必殺! 見敵必殺!)」

従者に感化されたのか主も英語で宗次郎にとってはなんとも理不尽な命令を下す。

「An order was decided. Did you finish the restroom? Did you pray God? Do it tremble in the corner of the room, and is the preparation for asking for one's life good OK? (オーダーは下されました。では、お手洗いは済ませましたか? 神様へのお祈りは? 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする準備はOK?)」

「全然OKじゃありません! 後、それ、色々マズイでしょう!?! 主にネタ的な意味で!」

もはや英語で突っ込む余裕すらなくなったのか、なんともメタい台詞である。

そこへ更にレミリアも続く。

「……私も参加するわ。宗次郎……貴方を分類A以上の危険人物と認識する。拘束制御術式第3号・第2号・第1号、開放。状況A「クロムウェル」発動による承認認識。目前敵の完全沈黙までの間、能力使用。限定使用開始――」

「だからマズイですってば! 特にあなたが使うと本気でシャレになりません!」

いよいよもって冗談では済まされない雰囲気になりつつあった。

「ちょっと！ 妖夢さんからもなんとか 「……I am the bone of my sword. (体は剣で出来ている)」 って、無○の剣製!？」

宗次郎は咲夜の後ろに居た妖夢に一縷の望みを賭けるが、その彼女ですらもこのネタワールドに取り込まれてしまったようだ。

もう何でも有りである。

後、なぜにそれを知っているのだ宗次郎。

「Steel is my body, and fire is my blood. I have created over a thousand blades. Unknown to Death. Nor known to Life. Have withstood pain to create many weapons. Yet, those hands will never hold anything. So as I pray, unlimited blade works. (血潮は鉄で、心は硝子。幾たびの戦場を越えて不敗。ただの一度も敗走はなく。ただの一度も理解されない。彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う。故に、生涯に意味はなく。その体はきつと剣で出来ていた)」

しかも、何気にアー○ヤーバージョンである。

なぜ妖夢が英語を話しているのか突っ込んではいけない。ネタ的

な意味で。

そして言い終えた妖夢が今度は日本語に戻って宗次郎に問い掛ける。

「……宗次郎さん。ネタの貯蔵は十分ですか？」

「既に尽きてますよ！ 主に作者的な意味で！！」

宗次郎よ。危険すぎるメタ発言はそろそろ自重してほしい。

後、悪かったな。ネタが尽きてて。

それはともかく、三人の乙女たちからそれぞれ危険度たっぷりの言葉をかけられ追い詰められていく。

そんなふうにしてしまったのがいけないのか、フランから注意を外してしまった彼に更なる追い討ちが襲うことになる。

それまで完全に蚊帳の外であったフランであるが、周りの空気をまったく読まずに、姉や咲夜たちに向かって元気よく尋ねてきたのだ。

「ねえねえ！ コレがナニか教えて。ソウジロウは教えてくれないの」

そう言っ、宗次郎の腰に巻かれた手ぬぐいを掴み――

――ズルッ――



「みんなどうしたの？」

叫び声を上げ、真っ赤になって顔を覆う女性たち。

空ろな目で乾いた笑い声を上げる宗次郎。

心底不思議そうにしているフラン。

もはやカオスとかいうレベルではなかった……



「……………で？ どうしてこうなってるの？」

「さあ？ 私に聞かれても……」

夜もだいぶ更けてきた夜半前の時刻。

ようやく調べ物が終わつた七色の人形遣いと、どうせなら一緒に  
お風呂へ入らないかと誘われた大図書館の主は、先に入っていた者  
たちの様子に首を傾げるばかりであつた。

[illegible]

た……」

「毛の生えた象さんが毛の生えた象さんが毛の生えた象さんが……」

「宗次郎様……初めて見ましたけど……素敵でした……（ポツ）」

「ねえ……どうして教えてくれないのお？」

上から順に、妖夢、レミリア、咲夜、フランである。

うわごとのようにエンドレスで同じ言葉を繰り返す前者二人はともかく、ナニかを思い出しては頬を染める咲夜の言葉は、どこか危険な香りをそこはかとなく漂わせていた。

そして一向に構ってもらえないフランは、彼女たちの様子にほったたをプクーっと膨らませる。

なんとも可愛らしい仕草であるが、それを見たパチュリーはそんな彼女に違和感を覚えていた。

（……？　なんだか以前よりも　“子供らしく”　なったような……不安定さがなくなっただけ？）

以前からフランの存在を知っていたパチュリーであるが、実際に顔を会わせ始めたのは吸血鬼異変以降である。

それまでフランはずっと地下の特別室に幽閉されていたのだから無理もなかった。

パチュリーがどのような経緯で紅魔館に住むことになったのかは

本人たちが語ろうとはしないために不明である。

しかし、彼女が紅魔館に入ったときは既に地下へ幽閉されていたのは間違いないようだ。

一応はレミリアから詳しい事情を聞いてはいるようである。

何しろ、地下室の結界の強化を担当していたのは彼女なのだ。

それが、吸血鬼異変後は館内のみの範囲とはいえ、地下室からある程度自由に出られるようになっていたのだ。

更に紅霧異変後は保護者付き（主に咲夜）で紅魔館の周りだけとはいえ、外出まで許されるようになった。

そして今度のこれは……

どう考えても第三者が関与しているとは思えないことであつた。

（……まあ、レミィに聞いたところで答えてくれないでしょうね）

そう考えたパチュリーは、これ以上思考を巡らせたところで無駄であると判断し、フランドールが安定した精神状態を保てるのならばそれに越したことはないと思うことにした。

ちなみに彼女自身は吸血鬼異変に関与していない。

気が付いたら終わっていた、である。

「ねえねえ、パチュリー」



「ん？　なに？　フラン」

考え事をしていたからか、いつの間にか直ぐ側までフランが近寄ってきていたのには気付かなかったパチュリーは、少しだけ驚いた様子を見せた後、フランの方に目を向ける。

だが、彼女の口から放たれた言葉は、パチュリーの予想の斜め上……どころか、地平の彼方まで行った代物であった。

「ソウジロウの　《　自主規制　》　に在ったキノコみたいなのってなあに？」

「「なあっ!？」」

思いもかけないぶっ飛んだ言葉に、パチュリーはもとより、隣で聞いていたアリスも仰天した顔になる。

「ちょ、ちょっとなんでそんなこと……いったい何があったのか最初から話してくれる？」

「まったくだわ。貴方いったいどこで……ああ、そういうこと……」

「うん。ええとねえ……」

どういふことなのかアリスが説明を求め、パチュリーは大方の予想をつけていた。

そしてフランの口から事情が語られる。

…… 幼女説明中 ……

「そういうこと……それで宗次郎は “ ああ ” なっていたのね……」

「まったく……最初に食堂で会った時より酷い状態だったから何があったのかと思えば……それでアリス。宗次郎は今どうしてるのかしら？」

「上海をつかせているけど、とりあえずあのままのようね。連絡がないし」

「そう。まあ、今はそつとしておいてあげましょう。さすがに今回は気の毒過ぎるわ」

二人が宗次郎を発見したときは、脱衣所の外の廊下で膝を抱えた体育座りのまま空ろな目でボーっとしていたのだ。白い着物の寝巻き姿のままです。

何があったのか尋ねても碌に返事もない状態であったため、とりあえずは近くに居た妖精メイドたちに客室へと連れて行かせたのだ。

自分で歩ける状態のようであったからそれほど心配はなさそうであったが、一応はアリスが上海を同行させておいたのである。

そして、風呂場に入ってみればこの有様であったという訳であった。

「まったく同感ね。それでこの子たちはどうするの？ このままじやのぼせてしまうわ」

「そうね。とりあえずこうしようかしら。スキルカード…水属性仮称『コンデスドバブル』」

「わっ!？」 「キャッ!？」 「クッ!？」

アリスの言葉にパチュリーは手を掲げると、なんらかの魔法を發動させたらしく、泡状の “ 何か ” が現れて未だに呟いている三人の頭に命中した。

出現した泡は大きさが人の頭ぐらいで、命中するとシャボン玉のように弾けたのである。

「へえ？ 面白いわね。スキルカードって言ったようだけど、スペルカードとは違うのかしら？」

「ええ。スペルカードのような大技ではなくて、カードとカードの間を繋げる小技みたいなものね。八雲 紫からスペルカードルールに追加できる新しいシステムがないかどうか依頼されてたの。これはそのテストバージョンよ」

「あら、そんな面白そうなことしてたの。今度教えてくれるかしら？」

「いいわよ。近く博霊の巫女とも相談するつもりだったしね」

「うわぁ！ パチュリーすごい！ ねね！ 私にも教えて！」

二人がのんびりと新システムについて話し合い、フランがはしやいで手を叩いていたのだが、その技を喰らった方としてはたまったものではなかったようだ。

「ちょ、ちょっとパチェ！？　いきなり何するのよ！」

「そうよ！　びっくりしたじゃない！！」

「パチュリー様……」

三人とも頭を押さえて抗議の声を上げていた。

特に咲夜は妄想を中断されたのが不満なのかジト目であったりする。

何を妄想していたのやら……

「フム……とりあえず気付けの効果はあるみたいね。威力はもうちょっとあつたほうがいいかもしれないけど」

「でも、あまり威力がありすぎると小技にならないんじゃない？　消費も激しくなるでしょうし」

「そうね。もっと検証の余地があるわね」

「ちょっと！　パチェ！？　なんとか　「レミィ」　うつ……何よ？」

抗議の声もそっちのけで話し合っていた魔法使い二人に、レミリアが声を荒げようとしたのだが、その相手にジト目で呼ばれて若干

腰が引けてしまったようだ。

紅魔館当主、何気に親友には弱腰のようである。

「そっちの二人もそうだけど、いったいナニを見たのか詳しく教えて貰えるのかしら？」

「「はうっ!？」」

なんとも直接的な聞き方に、三人の乙女は一気に顔を真っ赤にしてみよう。

幻想郷の女性たちは初心な者が多いようだ。

「……結構大胆なこと聞くのね。パチュリー」

「……黒魔術関連の書物にはそっち方面の物も多いのよ……」

「……確かにそうね。それで？ 実践したことはあるの?」

「……………あるわけないでしょ……アリスこそどうなのよ?」

「……聞かなくなたって分かるでしょう……」

訂正。

初心な者がほとんどのようである。

なんとも微妙な空気となり、風呂場に居る女性たちはみんな顔を真っ赤に染めて出るようになるようであった。

「ねえ〜？ 結局アレはなんだったのお〜？」

……………訂正。

約一名ほどまったく分かっていない者が居るようであった。



さて、なんとも言いようのない雰囲気となってしまった風呂場から一転して場面を変えることにしよう。

ほとんど放置される格好となった宗次郎はどうしているのかといえは――

「こわれそうなもーのばかりあーつめてしーまうーよー」 《中略》 ガー〇スのーじゅうだーいー」

――思いつ切り棒読みで 『ガ〇スの十代』 を歌っていた。

しかも、ベッドの上で体育座りのまま。

何故知っているとは聞かないで欲しい。

明かり一つない暗い部屋でぼそぼそと言ってる様子は、見るものが居れば思いつきドン引きされること請け合いの光景であろう。

しかし、メイド服のことといい、さっきのことといい……

どうやら宗次郎のにとって、この紅魔館の訪問は、精神的死亡フラグが満載の場所であったようだ。

どう見てもしばらくは立ち直れそうにない様子である。

頑張れ宗次郎。超頑張れ。

これもこの物語の主人公として（精神的に）成長するために必要なイベントであったのだろう。

……たぶん。（↑視線を逸らす作者）

とりあえずは、このグダグダになってしまった今回のお話を終わらせるために、宗次郎を監視していた上海さんにメて貰おう。

では上海さん。コメントをどうぞ。

「ダメダコリヤー」

次（次回に）へ行ってみよう次、ですね？ 分かります。

ありがとうございました。

その声が聞こえたのか、コテンとその姿勢のまま横に倒れる宗次郎。

どうやら喋れることを知らなかったようだ。

何気に止めとなったようである。

彼の未来に幸はあるのだろうか……

旅の恥は掻き捨てという言葉があるのだが……

『答え』    への道を行く彼にはあまり意味がなかったようである。



## 第二十一話 ― 紅魔館 その4 ― (後書き)

はい。言い訳はしませんw

あまりにもメタ過ぎるはっちゃけぶりでした。

前書きにも書きましたが、これはマズイと思われた方は感想にてご指摘下さい。

それと、どうにも更新は今後不定期になりそうです。

では、次回の更新をお待ち下さい。

## 第二十二話 ― 紅魔館 その5 ― (前書き)

大変長らくお待たせしてしまいました。

言い訳の方は活動報告でづらづらと長ったらしく述べておりますので、お暇な方はそちらを見てください。

尚、今回のお話には美鈴のクンフーに対してかなりの独自設定があります。

また、宗次郎に関しても筆者の妄想全開で書いております。  
読まれる方はその点を考慮してお読み下さい。  
では本編です。

第二十二話　― 紅魔館　その5 ―

― ガッ！　ドカカッ！！　―

まだ朝靄が晴れきっていない早朝。

― ズバツ！　ビシッ！　―

美しい西洋庭園があることで知られる紅魔館に小鳥たちの歌声が響きわたる。

― ズシャツ！　バババツ！　―

正門から見えてきつちりと左右対称の幾何学模様で配置されている花壇には、この時期に咲く花が朝露に濡れて美しく朝の光を反射していた。

― ブォッ！　ヒュンッ！　パシッ！　―

湖で冷やされた新鮮な空気が風によって運び込まれ、それが花の香りと混じり合って庭の空気を香り高い清涼感溢れるものにする。

― ザザザザッ！ カカカッ！ ―

その空気を胸いっぱい吸い込めば、しぶとく残っている眠気など吹き飛ばし、今日という日が素晴らしいものになると予感させてくれるであろう。

― ドッ！ ズサー！！ ―

間違いなく外界にある都会の汚れた空気では味わうことができない贅沢であった。

さて、そんなきらびやかな光景を見せる庭であるが、その壮麗さに似つかわしくない音が先ほどから鳴り響いている。

「っ！ ……さすがですねえ、中々うまく打ち込めません」

「……どの口がそれをおっしゃいますか。これで剣が本道とはとても思えませんよ」

門と玄関のちょうど中間点には噴水が設置されており、その周囲はちよつとした開けた空間となっていた。

そこで今、二人の人物が激しい徒手空拳の打ち合いを行っているのだ。

花壇で周囲をぐるりと円形に囲まれているためか、どこかその光景は古代ローマで行われていたというコロッセウム（円形闘技場）で闘う剣闘士の姿を彷彿とさせる。

「武芸十八般、全てに秀でてこそ真（まこと）の武士と言いますからね。僕もずいぶんと仕込まれたものでしたよ」

尤も、僕は武家の出ではありませんが……と、そう続けて懐かしそうな顔をする片方の人物——宗次郎は、ゆっくりと微笑む。

おそらくは志々雄と共に旅をしながら鍛えられた日々を思い返しているのだろう。

思想を違え、袂を分かち、もはや会うこともかなわなくなった相手とはいえ、宗次郎にとって剣術を含む武術の師は志々雄であることに間違いないのだ。

今もその教えは文字通り彼の血肉となっている。

ここで少し古武術について筆者の考察を交えた解説を述べようと思う。

武芸十八般とは、馬術、槍術、弓術、柔術、抜刀術などを含む、武士が修めるべきとされる武技の総称のことであり、大正年間に確立された『武道』とは一線を画す古武術の総称のことである。

すなわち、精神修養に主眼を置いた近代の武道とは違い、戦場において確実に相手を倒す（殺す）ための教えを主眼に置いているのが武芸（武術）なのである。

その教えやルーツは近代武道のルールなどにも片鱗を残している。

例えば、柔道の試合では寝技で相手を三十秒間押さえ込めば一本

勝ちとされているが、その元となったルーツは戦場で敵将をそれだけの時間押さえ込めば、首級（みしるし）を挙げるには十分であるとされているところから来ているのだ。

つまり宗次郎は、精神修養のためにスポーツ化していった武道ではなく、一般に古武術と呼ばれる日本古来の武術を修めているのである。

これは別に宗次郎だけが特別に修めているわけではない。

幕末最強の遊撃剣士として名を馳せた、『人斬り抜刀斎』 こと 緋村 剣心。

説明不要の剣客集団、新撰組三番隊組長だった斉藤 一（さいとう はじめ）。

江戸城警護役として將軍家に仕えていた元・御庭番衆の御頭、四乃森 蒼紫。

そして “ 人斬り ” の後継者にして、日本転覆を謀ろうとした 志々雄 真。

彼と同じ時代を生きた者たちの中で、これら幕末を生き抜いた男たちを例に挙げてみよう。

宗次郎によって一時的に逆刃刀を失っていた剣心は、“ 刀狩 ” の張と闘ったとき、鉄拵（てつごしらえ）の鞘で見事な応戦をし、肘技で張の額を殴打して痛撃を与えていた。

結果的に真・逆刃刀を手に入れたことで勝利をおさめたものの、並の相手ならばそれで勝負が尽いていたであろう。

剣心の抜刀齋としての実力を測るために私闘を行った斉藤は、刀を失った後もベルトなど手近にあるもので応戦し、格闘戦で剣心と互角の戦いを繰り広げた。

その拳打は『喧嘩一番』とまで呼ばれた相楽 佐之助（さがら さのすけ）をも上回るほどである。（結果的に、それが佐之助の『二重の極み』を体得する切っ掛けとなったと言える）

蒼紫は剣心に人誅を加えんとした雪代 縁（ゆきしろ えにし）の隠れ家に赴いた際、縁の副官、黒星（へいシン）の護衛役であった四星（スーシン）の一人、朱雀と対戦し、小太刀二刀流の奥義である『回転剣舞六連』を模写されてしまうも、まったく動じることなく徒手空拳の御庭番式拳法で圧倒し、勝利をおさめていた。

そして、志々雄に至ってはもはや詳しく記述するまでもないであろう。

先に挙げた斉藤と蒼紫、そして二重の極みを体得した佐之助の三人を相手にして、手負いであつたとはいえ体術だけで圧倒したのである。

このように、幕末期の強者たちは剣が無くては戦えないなどということはなく、むしろ、剣術は戦う術（すべ）の一つにすぎないという側面さえあるのだ。

そして宗次郎はその志々雄に『俺が作り上げた最強の修羅』とまで言わしめたほどの武芸者である。

そんな彼が無手（素手）による格闘戦を不得手にしているなどありえるのだろうか？

その答えは今、彼と対戦している相手——美鈴が十二分に実感していた。

（強いすねえ。技も豊富ですし、日本の剣士 “侍” を少々甘く見ていましたか……）

剣士である宗次郎が、無手であってもここまで自分に対抗できるという事実には、内心、驚嘆の色を隠すことができずにいるようだ。

いや、初対面の一件で彼が侮れない腕前であることは分かっていた彼女だが、どうしても日本の剣士——侍は刀を振るってばかりいるというイメージが強かったのだ。（ちなみに、そのイメージの元は妖夢だったりする）

それが戸惑いを生み、動きを鈍らせてしまっているようである。

本来の彼女ならば、得意としている無手の戦いにおいて宗次郎を上回っているはずなのだが、思った以上に苦戦しているようであった。

一方の宗次郎は美鈴と同様……いや、それ以上の評価のようである。

（さすが専門家だなあ。無手の練度だけなら志々雄さんと同等かそれ以上かも……）

人間と妖怪では身体能力のスペックが違いすぎるために同一視はできないものの、変幻自在かつ多彩な技を持つ美鈴に、宗次郎は内



心で感嘆の声を溢していた。

美鈴の技は、その一つ一つを見ても十分に磨かれ、練り上げられており、彼女がどれだけの時間を掛けて鍛錬を積み重ねてきたのかは想像に難くないほどである。

そして、彼にとって志々雄と同等という評価は最大級の賛辞でもあった。

すなわち、美鈴のクンフーは宗次郎から見ても達人の域を遥かに超えたものであると言っているのだ。

ここで更に、日本古来の武術——古武術と中国のクンフーについて触れておこう。

そもそも格闘技の技は大別すれば以下の三つに分類することができる。

拳打や蹴り技の『打』。

関節技や締め技の『極』。

そして、投げ技の『投』。

古武術の技は、これらの複合技が多いのが特徴であると言える。

古流柔術などを見てみるとそれがよく分かるであろう。

極めながら投げる。あるいは、投げながら打つ。もしくはその三つの複合。

一度決まれば確実に相手を倒せることを主眼に置いているのだ。

初対面の際は確実に技を仕掛けられるよう万全を期すために、知識の能力で専門的な柔術家を検索していた宗次郎であるが、それがなくても十分な鍛錬を修めているのである。

以前にも記述した“下地”とはこのことであり、知識の能力の『専門職には遠く及ばない』という欠点を十全に補っているのだ。

一方、有名な武術だけでも400を越えると言われるクンフーは、一概に『これがクンフーである』と呼べる物は存在しない。

外家拳や太極拳などを代表とする内家拳の北派。

広東南派系や福建南派系の南派。

大別すれば北派と南派の二つに分けることもできるが、歴史的にそれぞれが影響しあっており、どれが起源でどれが源流であるとは言えず、分ける意味がほとんどないのが実情である。

特に同じ流派でありながら北派と南派で大きく特徴の違う少林拳が  
いい例であろう。

一応は禅宗の祖、達磨大師が少林拳の開祖にして中国武術の源流とされているが、学術的根拠に乏しいために確証はないのである。

（現在も研究中であるが……）

だが、日本武術の源流はその中国を祖としているためか、練習法

や心構えの多くに禅宗の影響が色濃く伺える。（座禅や練習開始前の神棚への礼といった宗教的側面等）

更に言えば、先述した武芸十八般という言葉も、元は中国から来ているのだ。

尤も、元となった中国の場合では全て武器の扱い方であるのだが。

ちなみに、よく間違う方が居られるようだが、少林拳と日本の少林寺拳法は全くの別物であることを明記しておく。（映画『少林寺』で有名になったためか、混同する者が増えたようである）

さて、その美鈴が使うクンフーであるが、動きそのものを見れば少林拳に最も近いように思える。

香港のカンフー映画で有名になったのも、多くがこの少林拳であろう。

その意味で言えば、これが代表的なクンフーであると言えなくも無い。

しかし、専門家からすれば『最も分かり易いクンフーの代表例』ではないのだ。

先述した通り、数多くの流派や門派が存在するクンフーでは、歴史的観点から見ても分ける意味がほとんどないのである。

ちなみに、一般的に広く認知されているカンフーという呼び方は、広東語の英語読み表記であるウェード式“K u n g - f u” か

らの発音が元となっており、香港のカンフー映画で中国武術の総称として爆発的に世界中で知られるようになった。（ウェード式とは中国語をローマ字によって表記する方法の一つ）

尚、クンフーという発音はカンフーのもう一つの読み方である。（ちなみに、かのブルース・リーは映画の中で本来の広東語読みであるグンフーと発音していた）

そして、『カンフー』とは、武術、武芸、修練、更には様々な健康法をも含めた総称であり、『中国カンフー』とは、中国独自の技術、すなわち『国術』と同義であり、中国武術の尊称なのである。

《参考文献・Wikipedia | 功夫 | より一部抜粋》

かなり脇道へと逸れてしまったが、話を戻す。

宗次郎が微笑みながら懐かしそうにしている様子を見た美鈴は、彼も強くなるために日々努力していたことを感じ取っていた。

そして、それは彼女にクンフーを体得するに至った経緯を思い返させる。

決して強力な妖怪の部類に入るとは言えない彼女は、自身を強くするために人間の修練法であるクンフーを取り入れたのだ。

本来、人間よりもあらゆる面で優れた身体能力を持つはずの妖怪が、である。

妖怪は自身の持つ妖力や妖術など、生まれ持った能力で人間を襲うのが普通なのだ。

それこそが妖怪を妖怪たらしめている部分であり、存在理由（アイデンティティ）にも直結している重要な要素なのである。

その妖怪である彼女が、能力で圧倒的に劣り、襲われる側であるはずの人間からクンフーを学び取ろうと思った時、そこにどれほどの葛藤があったのか窺い知ることはできない。

本来なら妖怪として自己の否定にも繋がりがねない行為だからである。

しかし、宗次郎から見ても、彼女の気質・考え方はあまりにも人間臭い。

一見して普通の人間とまったく区別がつかない外見と合わせて、本当に彼女は妖怪なのかと思わせるほどである。

おそらく、彼女の在り方は妖怪としてかなり異質なのであろう。

人間であれ、妖怪であれ、そして半人半妖の宗次郎であれ、分け隔てなく接することができ、声を掛ければ気さくに応じてくれる美鈴。

それはある意味、あの博麗の巫女に通じるところである。

尤も、その巫女よりも他者に対する気遣いが色濃く伺える美鈴の方がよっぽど人間らしく見えてしまうのは皮肉としか言いようがな

いのだが。

いずれにせよ、なぜ彼女がクンフーを修めたのかは彼女自身の問題であり、他人が安易に詮索していいことではないであろう。

今も、朝の鍛錬をしていたところを宗次郎からその相手をして欲しいと請われ、嫌な顔一つせず気軽に応じてくれているのだ。

つまり彼女の本質は “最も人間に近い妖怪” なのであろう。

更に言えば、その性格はかなりの “お人好し” でもあるようだ。

だが、彼女のクンフーに掛ける情熱は相当なものであるらしく、宗次郎の言葉を受けてその対抗心が燃え上がったようである。

「……なるほど。良い師にめぐり会えたようですね。ですが、それが私のクンフーに勝るなどとは思わないで下さい——よっ！」

そう応えた美鈴は、最後の言葉と同時に鋭い蹴りを放つ。

カモシカのように長く美しい脚が鞭のようにしなり、宗次郎の頭に襲い掛かっていく。

見た目の美しさとは裏腹に、その脚には必殺の破壊力が込められていた。

「まさか——フッ！ そんなこと——ハッ！ 思いもしません——よっ！」

その蹴りを“フッ”でしゃがんで避け、“ハッ”で美鈴の軸足を払い、“よっ”でそのまま追撃の踵落としを払った方の足で仕掛ける。

だが、その追撃は成功せず、むなしく地面をえぐっただけであった。

脚を払われた美鈴はそのまま無様に倒れたりなどはせず、両手で着地した後、すぐに逆立ちをし、見事な両足を大車輪のように回転させ、その勢いのまま起き上がったからである。

その様は、まるで香港映画に出てくるカンフースターを彷彿とさせるものであった。

ある年代の者ならばブレイクダンスのようだと言えば分かり易いであろう。

起き上がった美鈴はそのまま両足を大きく前後に開いた構えを取り、宗次郎も立ち上がって左足を半歩引いた半身の構えとなる。

その構え方から見るに、美鈴のクンフーは南派少林拳の影響が強いようだ。

そのまま静かに対峙する両者の間には、ピンと張り詰めた空気が流れていく。

両者ともかなり激しく動き回っていたはずなのだが、その姿勢にはまったく揺らぎがなく、汗一つ掻いておらず、呼吸さえ全く乱れていない。

これは、お互いが本気の殺し合いではなく、あくまでも鍛錬の一つであると自覚しているからであろう。

何より、多少激しく動き回ったくらいで呼吸を乱すような“ヤワ”な鍛え方をしている両者ではないのだ。

これまでの攻防は全くの五分と五分。

どうやらこれまでの手合わせは、互いの力量を測る意味もあったようだ。

力は完全に互角。

速さは宗次郎が、技は美鈴が上回っているようである。

これまでの攻防はスピードを活かし、引っ掻き回して仕掛ける宗次郎に対し、長年培った技で巧みに返していく美鈴という構図であった。

先ほどは対抗心を燃やした美鈴が珍しく先に仕掛け、それを宗次郎が彼女のお株を奪うほどの巧みさで返していたのだ。

一進一退、長期戦の様相を呈してきた観のあるこの戦いもそろそろ終わりを迎えそうな雰囲気である。

尤も、宗次郎が『縮地』を使えばもっと早く勝負は尽いていたと思う者が居るのかもしれないが。

しかし、それは机上の空論である。



素早く移動できることと、素早く攻撃できるということとは必ずしも“Ⅱ”（イコール）ではないのだ。

何も知らない者が見れば『刀で出来るのだから素手でも出来るのでは?』と考えるだろう。

確かに彼は別に『瞬天殺』など使わなくても普通に斬りかけることはできる。

だが、それこそ素人考えというものである。

刀と素手では、間合いも動作もまるで違うのだ。

一つの完成された流れを変えようとするのならば、一から鍛錬の練り直しをしなければならない。

その鍛錬の末に昇華されたのが奥義と呼ばれる技なのである。

かの剣心が瞬天殺を『縮地から“天剣”の抜刀術へと繋げる連続技』と解説したことがあったが、素人が聞けば『ただ走って刀を抜くだけ』の技と思ったことであろう。

だが考えてもみて欲しい。

あの超スピードを制御するだけでも至難の業であるというのに、その上、相手の動きを読み、刀の間合いを見計らって当てなければならぬのだ。

それがどれほど困難な動作であるのかは想像に難くないであろう。

そして、それが無意識でもできるようになって初めて “技” と呼べるのである。

宗次郎が唯一名前を付けた技 『瞬天殺』。

実戦において多くの技を持つ者よりも、一つの技を極めた者の方が恐ろしいのだ。

かの斉藤 一も突き技である 『片手平刺突』 を 『牙突』  
へと昇華させている。

どんなに威力のある技であろうと、当たらなければ意味がないのである。

確かに、予測する能力を使って相手の動きを読めばできないこともないのかもしれない。

しかし、これは鍛錬を目的とした手合わせなのだ。

それ故に、宗次郎は自身の能力を一切使ってはいなかった。

実戦とは違い、互いを鍛え合う稽古である。

だからこそ、宗次郎は純粹に自分の身体能力と培った技のみでこの手合わせに挑んでいるのだ。

それは美鈴も同様であった。

彼女の 『気を扱う程度の能力』 は、クンフーと極めて相性の良い能力である。

美鈴が己を鍛えるにあたってクンフーを選んだのもそこに理由があるのだろう。

何しろ、クンフーでは“氣”を最も重視する傾向にあるからだ。

先ほど美鈴の動きは少林拳に近いと記述したが、彼女の鍛錬の様子を見てみると太極拳の技も取り入れているようだ。

すなわち、妖怪としての身体能力を最も活かせる南派少林拳と、気を扱う能力を活かせる北派の太極拳の両方を修めているということであろう。

つまりは北派と南派のクンフーの良いところ取りというわけだ。

だが、並の人間では一生涯を費やしてもどちらかを極められるかどうかであろう。

圧倒的に長い寿命を誇る妖怪の彼女だからこそできる芸当なのだ。

そして、その二つの拳の組み合わせは絶大な効果を生む。

気を打撃（打点）に集中させれば、それは驚異的な破壊力を生み、攻撃される部分に気を張り巡らせれば、それは強固な鎧（盾）となる。

更に、気を扱うということは、相手の気を読むことと同義でもあるのだ。

相手が身体のどこに気を集中させているか、どこに張り巡らせているのかを一目で“読む”ことができる。

それは相手の動きを読むことに繋がるのだ。

つまり、剣士による“剣気”の先読みと同じことなのである。

クンフーを修めた美鈴は、既に能力を使わなくてもそれができるようになっていた。

だからこそ彼女も、この手合わせにおいては能力を使っていなかったのである。

尤も、それは“使わない”のではなく“使う必要が無い”  
と言い換えた方がいいのかもしれないが。

かつての宗次郎ならば剣心と同様に気を読むことができず戸惑ってしまっただけかもしれないが、感情を取り戻している今の彼ならばその心配も無用のようであった。

「……行きますよ」

その宗次郎が静かに声を掛ける。

スウーハァーと呼吸を整えて丹田（ヘソの下にある部分）に気を溜めていく宗次郎。

剣気、闘気と、呼び名こそ違い、やはり同じ武術の祖を持つ同士である。

日本古来の武術においても、気が重要な要素であることに違いはないのだ。

相手が気を溜めて必殺の一撃を放たんとしているのを察した美鈴は、自身も同じように丹田に気を溜めていく。

「……ええ。いつでもどうぞ」

こちらはやはり気の扱いに慣れている彼女である。

ほぼ数瞬で溜め終えてしまっていた。

だが、一瞬一秒を争う勝負においては、その数瞬の間でさえも致命的な隙になりかねない。

故に彼女としては、これでもまだまだ修行不足であると思っているようだ。

ピンと張り詰めた緊張感が漂う。

だが、それも両者にとっては心地良ささえ感じるようであった。

弾幕ごっこという “遊び” を真剣にやり合う幻想郷。

遊びは真剣にやってこそ面白いとは誰の言葉であっただろうか……

そんな共通する思いを感じ取ったのか、言葉を交わした両者の顔には穏やかな笑みさえ浮かんでいる。

まるでこれからちょっとした散歩にでも連れ立って出かけるので

はないかと思えるほどだ。

そう、二人は今、この瞬間を楽しんでいるのである。

血と汗を流し、歯を食いしばりながら習い覚えた技をなんの遠慮もなく使うことができる。

武芸者として、また、武闘家としてこれ以上の喜びがあるであろうか。

しかし、そんな穏やかさと緊張感が同居する空気も長続きはしなかった。

サアツと湖の方から流れてきた一陣の風が、花壇に落ちていた花びらを両者の間に運んだのだ。

そのうちの一枚がほんの一瞬だけ――

――ガカツ！――

――両者の視界を遮った。

一瞬。

ほんのまばたきをする程度の時間。

両者の激突は既に完了していた。

「……………」

沈黙。

穏やかだった顔は修羅のごとき形相となり、お互いを睨み合っている。

だが、それも次の瞬間にはフツと綻ばせて笑顔になっていた。

「……引き分け……ですかね」

「……そう、ですね……」

宗次郎が先に話しかけ、美鈴がそれに同意する。

宗次郎の右の貫手が美鈴の喉に。

美鈴の右の崩拳（中段突き）が宗次郎の水月（みぞおちの部分）に。

お互いの体勢はそれらの攻撃が放たれたまま止まっていた。

いや、“止まっていた”というのは語弊を招く言い方であろう。

お互いの左手で軌道を逸らされて “止められていた” が正解である。

どちらも決まればその一撃で相手を倒せるほどの威力が込められていた。

やがて、どちらともなく構えが解かれ、場はリラックスした雰囲気となっていく。

両者とも相手の急所へ必殺の攻撃を放っているながら、である。

それはやはり互いの力量を良く理解し合っていたからであろう。

この一撃を放っても大丈夫であると確信していたからこそである。

それに、宗次郎は萃香との戦いで学んでいたのだ。

相手を信じるということを……

「すみません美鈴さん、僕のわがままを聞いて下さって」

晴れやかな顔でそう話しかける宗次郎。

彼としては一刻も早く昨夜のことを忘れ去りたかったようである。

何しろ、夢にまで見てしまったほどののだ。

なんとか気持ちを切り替えようと庭を散策していた彼は、門の前で朝の鍛錬をしていた美鈴を見かけ、これ幸いとばかりに鍛錬の相手を申し込んだのだ。

勿論、断る理由もない彼女はこの申し出を快諾し、今に至るとい



う訳である。

「いいえ。私にとっても得がたい経験になりました。でも、剣士である貴方がここまで出来るとは……恥ずかしながら、自分の未熟ぶりを痛感するしだいであります」

彼の言葉に自分も良い経験になったと返す彼女であつたが、彼の實力を見て自分の修行不足を嘆（なげ）くかのように言う美鈴。

それに対し、宗次郎はこう返した。

「とんでもない。僕の方こそ大変勉強になりました。美鈴さんのクンフーは中国武術の奥深さを十分に思い知らせてくれるほどです」

「そう言って頂けるのなら私も今後の鍛錬のしがいがあるということです。また機会がありましたらお手合わせを願えますでしょうか」

「それは僕の方こそお願いしたいことです。次こそは一撃を入れられるくらいに精進してまいりますので、そのときはよろしく願います」

「それこそ願っても無いことです。ですが、容易に入れられるとは思わないで下さい」

「勿論です。では、朝早くからありがとうございました」

「いえ。こちらこそありがとうございます」

最後はお礼を言い合って一礼をする二人。

宗次郎は普通に会釈して、美鈴は拳と掌を合わせるクンフー式で、それぞれの健闘を称える意味と再戦の願いを込めた一礼をしたのであった。



「うう……いいなあ……」

花壇の陰からなんとも羨ましそうな声が漏れる。

先ほどから二人の手合わせを伺っていた者が居たようだ。

「そんなに羨ましいなら一緒に混ざればよかったんじゃないの？」

「みよんっ!？ あ、貴方いつからそこに……って聞くだけ無駄よね」

突然、背後から話しかけられて体をビクッと強張らせるが、それがメイド服を着た女性であると分かってホッと息を吐く。

その様子を見たメイド服の女性――咲夜は呆れた視線をその者に送った。

「さっきから見ていたわ。昨日の“アレ”で話しかけ辛いのは

分かるけど、いい加減割り切ったほうがいいわよ？ 当人も気にしてない……と言うか、忘れることにしているみたいだし、こっちがいつまでも気にしてたらお互い気まずいでしょ。一緒に住んでるんなら尚更なんじゃないの？」

咲夜にそう言われ、その者――妖夢はウツと言葉を詰まらせてしまう。

昨日のアレとやらを思い出してしまったか、その顔には赤みが差していた。

確かに白玉楼と一緒に住んでいるのだからそういうハプニングもありうるだろう。

しかし、幸いというべきか、これまではそういった場面に出くわさなかったのだ。

だからこそ昨日の一件は彼女の記憶に鮮明に残ってしまったのである。

「そ、そういう咲夜はどうなの？」

照れ隠しなのか、そう尋ね返す妖夢。

「私はもう気にしないことにしたわ。勿論、お嬢様もね。妹様には私から言い含めておいたからその話題がぶり返すことはないわ。だから貴方も気にするのはおよしなさい」

腕を前組にしてピシャリと言い放つ咲夜に、妖夢は少々むくれ顔になる。

まるで年上のお姉さんぶった物言いが気に触ったのだろう。

本来なら人間である彼女よりも半人半霊の妖夢の方が年上であるはずなのだ。

しかし、時間を操れる彼女のことで。ひょっとしたら見た目通りの年齢ではない可能性もある。

この年齢不詳のメイドに何か言い返せる言葉はないかと模索する妖夢であったが、そんな彼女の思惑などおかまいなしに咲夜が言葉を続けた。

「はいコレ、お願いするわね。私は朝食の用意があるから後は任せるわ」

そう言って差し出したのは、水差しと二つのコップが乗ったトレイであった。

更にタオルを二枚、ついでとばかりに差し出す。

さっきまで何も持っていなかったはずなのだが……おそらく能力を使ったのだろう。

「え？ ……あっ！？ ちょっと、任せるって……」

思わず受け取ってしまった妖夢だが、その言葉の意味を図りかねて思わず尋ね返す。

「いいから持って行きなさい。どうせ私たちがここに居ることくら

いとおくにバレてるでしょうし、こっちから話しかけないと向こうもどう対応すればいいか困るでしょ？」

つまりは “ 稽古が終わるまで待っていた ” という理由を作ってくれたのである。

ついでに昨日のことは気にしていないという意思表示にもなるだろうと言っているのだ。

完全にして瀟洒な従者とまで言われる彼女らしい粹な計らいである。

あっけに取られた表情のまま、手に持ったトレイを見下ろす妖夢。

おそらくはキンキンに冷えた水と氷が入っているのだろう。その金属製の水差しには大量の水滴が張り付いていた。

その直後、ハッとして顔を上げる。

咲夜から目を離れたわずかな時間、彼女の気配が消えたのを感じ取ったからだ。

そしてやはりと言うべきか、既に彼女の姿はどこにも見えなくなっていた。

「はぁ……まったくもう……」

溜息と共に口から吐き出されたのは文句らしき言葉であったが、その顔は嬉しげにほころんでいた。

どの道、この場はあのメイドの言うとおりにするしか方法はないのだ。

ならばここは彼女の粹な計らい——妖夢にしてみればおせっかい——に乗ることにしよう。

そう思い直した妖夢は迷いを断ち切るかのように一步を踏み出す。

その歩く先には、さも今気付いたとばかりにこちらへと振り返る二人の姿があった。



「……随分とおせっかい焼きになったじゃない？ 咲夜」

そんなやり取りを先ほどから眺めていた者が居た。

ココは玄関ホールの上にあるテラス。

パラソル付きのテーブルセットで朝の日差しを防ぎつつ紅茶を楽しんでいた紅魔館の主——レミリアが、いつの間にか傍らに控えていた忠実な従者に声をかける。

だが、その言葉と共に意味ありげな視線を向けられた当の本人は、

庭の花壇にも劣らぬほどの花の顔（かんばせ）を一切崩すことなく優雅に一礼するのみ。

一分の隙も見せない様子の彼女にレミリアはクスツと笑みを零すと手に持っていたティーカップをソーサーに戻す。

「まあいいわ。それよりも朝食の用意が整ったら全員を食堂に呼びなさい」

カチャツと響くカップとソーサーの音と共に発せられた命令。

その命令の中に気になる単語が含まれていた。

「…… “全員” でございますか？ お嬢様」

「そう、 “全員” よ」

確認するように尋ね返した咲夜に、レミリアは意味ありげに眼を細めて同じ言葉を告げる。

「……かしこまりました。では、失礼いたします」

その言葉の意味を正確に読み取った忠実な従者は、それまで一切崩さなかった表情を少しだけ――ほんの少しだけ――ほころばせると、一礼してその姿を消した。

「フフ。今日も楽しい一日に……いえ、これからはもっと楽しい日が続くことになるでしょうね」

そう言って再度ティーカップに手を伸ばそうとした彼女の顔には、

見た目どおりの幼さと老成した落ち着きが同居した優さしい笑みが  
浮かんでいた。

「そう……私とフランの、待ち焦がれていた本当の生活がこの日から始まるのよ」



《作者注…シリアス終了のお知らせ》

「……と、そう思っていた時期が私にもありました……」

「お嬢様。現実から眼を背けても何も変わらないかと」

「だってだって！ アレ見てよ！？ フランってば宗次郎にばっかりいー！」

と、駄々っ子のように言うレミリアが指差した先には自らの妹と宗次郎が仲良くおしゃべりしている光景があった。

「へえ、そうなんだあ。じゃ今の外の世界って乗り物がいっぱいあるんだね」



「そうだよ。道を走る自動車に空を飛ぶ飛行機、海を進む船とかね」

「海ってなあに？」

「ああ、幻想郷には海がないんだったね。海っていうのは……」

どうやらフランは外の世界から来たという宗次郎の話に興味津々の様である。

それまで知ることのなかった話にすっかり夢中になってしまっているようだ。

しかも椅子に座る宗次郎の膝の上に座って……である。

いわゆる膝抱っこの状態であった。

その様子を見た忠実な従者はというと……

「……兄妹のようで微笑ましいですわね」

「他にコメントすることは無いの!？」

「……配膳を移さなければなりませんね。このまま妹様の席に置いておくとお料理が無駄になりそうですから」

「貴方本当に私の従者!？」

「お嬢様。せっかくの料理が冷めてしまいますのでお早めにお召し上がり下さい」

「だーかーらー!!」

「ああ、そうでした。前掛けがないとお洋服が汚れてしまいますわね。直ぐにご用意いたします」

「ちっがーう!!　　ってか、私はそんなに溢してなんかいないわよ!?!」

「お嬢様。食後のデザートは宗次郎様からご教示して頂いた私（わたくし）特製のプリンでございます。ですので、まずはお食事を召し上がって頂かなければお出しすることができません」

「（プ、プリン!?!）　　う、うゝゝ……」

喚く主人にそれを軽くないなす従者。

ほとんどコントである。

やはり幻想郷ではカリスマは投げ捨てるものであるようだ。

さて、この状況を説明するために、まずこの場に居る面々を記述しよう。

まずはレミリア、フランドールのスカーレット姉妹、メイド長の咲夜と客人の宗次郎は先述した通りである。

そして妖夢、アリス、パチュリー、小悪魔、そして美鈴がこの場に居る全員であった。

他にもメイド長直属の妖精メイドが十数名ほど居たりするが、彼女たちは料理を運んだり空になった食器を片付けたりするだけの者たちであるため、この際、彼女らを頭数に入れる必要はないであろう。

それはともかく、キョトキョトと落ち着き無く回りを伺う者が居た。

美鈴である。

彼女はこの場に自分が居てもいいのだろうかと戸惑っているのだ。

小悪魔もそうだが、本来なら彼女はこの席に座れる立場ではない。

通常、雇い主とその従者が食事の席を共にすることは無いからだ。

西洋貴族の流れを汲むこの紅魔館でもその傾向は強く、昨日の晩餐でも美鈴や小悪魔は同席せず、咲夜も給士に専念していただけである。

主であるレミリアと同席できるのは妹のフランか、立場的に同格である親友のパチュリーぐらいで、後は招かれた客人が同席できる程度であった。

しかし、これまでフランが同席することではなく、幽閉されていた地下室にて咲夜が運ぶ食事を取るだけであったし、パチュリーは滅多に図書館から出てくることはなく、年末年始の祝いの席のような何らかの特別な日でもない限り同席することはなかった。

美鈴や小悪魔といった使用人の立場である彼女らは、他の妖精メイドたちと使用人専用の食堂で交代しながら食事を取っていたし、咲夜に至ってはいつ食事をしているのかも不明であった。

つまり、客人が来ない限りはレミリアが一人で食事を取っているのが日常であり、咲夜たちメイドが給士を務める以外は同じ部屋に入ることさえなかったのだ。

それが宗次郎との稽古の後、差し入れを持ってきた妖夢と三人でしばらく雑談をしていた所に咲夜から食事の用意ができたことを告げられたのである。

最初は客人の二人に言ったものと思っていた美鈴であったが、その咲夜から同席しなさいと言われて困惑顔のままついてきたのだ。

勿論、メイド長直属のメイド隊の中から数名が代わりの門番として配置されたのを確認してからである。

そして、いつもは入ることのない食堂へと来た瞬間に困惑顔が驚愕顔に変わった。

まず、彼女の目に入っただのは宗次郎ら来客組みの三人。

魔理沙が昨夜のうちに帰ったのは知っていたし、その後姿を見送ったのも彼女なのだ。

だから先に食堂へ入った宗次郎と妖夢、そしてアリスの三人が居るのは分かる。

しかし、普段は食堂に来ることは無いパチュリーと小悪魔の図書

館組みが居たのには驚いてしまった。

だが、その直後の驚愕に比べれば軽いものである。

何しろ、テーブルの上座に座っていたのはレミリアと――

（い、妹様！？）

――フランドールであつたのだから。

普段なら一人で上座の席を占めているレミリアであるが、その椅子を右にずらしてもう一つ席が用意され、そこにフランが座っていたのだ。

そして咲夜も含む全員が席に着いたのを見たレミリアが、開口一番に発した言葉がこれであつた。

『今日からフランも食事に同席することになったわ。今回はそのお披露目……ってほど大げさなことじゃないけど、特別に咲夜たちにも同席してもらうことにしたの』

そう宣言したレミリアの顔は普段の彼女からは想像もできないほど穏やかな笑みが浮かんでいた。

その宣言に対する反応は十人十色であつた。

姉と同席できることが嬉しくてたまらない様子のフラン。

なにやら思案顔の様子であつたが、やがて静かに微笑を浮かべたパチュリー。

仲睦まじい様子の姉妹を見て感極まったのか、そつと目頭を押さ

える咲夜。

美鈴同様に居心地悪そうにしていたが、咲夜の様子を見て眼を潤ませる小悪魔。

あまり興味なさそうであったが、他の面々を見てクスツと苦笑するアリス。

訳は分からないが、仲良きことは良いことだとアリス同様の笑みを浮かべる妖夢。

そして、いつもと変わらぬ笑みで『おめでとう』と祝辞を述べる宗次郎。

それに釣られて他の者たちもそれぞれの祝辞を姉妹に送ったのだった。

そんな中で未だに混乱から復帰していなかった美鈴は呆然としながらもややぎこちなく『お、おめでとうございます……』と述べていた。

さて、そこまではなんの問題もなく食事もあり、仲良く並んで食べるスカーレット姉妹の様子も見ていて微笑ましいものであったのだが……

『あ。ねえねえ、宗次郎お兄ちゃんって外人なんですよ?』

唐突に放ったフランの一言がその後の雰囲気さがらりと変えることになる。

以上、説明終わり。

「って、全然説明になってないでしょ!？」

「お嬢様。フォークに食べ物を刺したまま振り回すのはお行儀が悪うございます」

「そうじゃなくて！　なんでフランが宗次郎のところにいるのよ！？」

「外の世界の話をもっとよく聞くために妹様がねだられたからでございますが？」

「だからって止めもしなかったのはどういうこと！？」

「お嬢様の命令がなかったからでございますので……ああ、そう言えばそのときはスープを口に運ぶ姿勢のまま固まっておいででしたね」

「もう一度聞くけどアンタ本当に私の従者！？」

「はい。私はお嬢様の完全にして忠実な従者でございます」

「だったら……って、その庭師！　羨ましそうな目で見てるくらいならどうにかなさいよ！」

「え！？　わ、私は別に……」

「お嬢様。お洋服にソースがかかりますのでフォークを振り回すのはお止め下さい。染みになってしまいますと落とすのが大変でございますので」

「そういう問題じゃ　「お姉さま？」　……あ、な、何？　フラン」

「お姉さま……うるしい……」

「ぐはぁ!？」

レミリアは9999のダメージを受けた!

レミリアはしんでしまった!

「……おお、レミィよ。死んでしまうとは何事だ……」

「……って、死んでないわよ! パチエ!」

「あ、復活した」

「ええ。復活の呪文はいらなかったようね、小悪魔」

「……ドラクエって幻想入りするほど忘れられてるのかなあ?」

「突っ込むところはそこ!？ ねえ! そこなの!？」

「お兄ちゃん。どらくえって?」

「ああ、ドラクエっていうのはね……」

もはやカオスという言葉が霞むほどの有様である。

そんな中で一人、我関せず朝食をさっさと終わらせた者が居た。



「……あ！ アリスさん。どちらへ？」

そこを呆然としたまま成り行きを見ているしかなかった美鈴が声をかける。

席を立ち、このカオス空間から逃れるように歩き出したアリスは振り返って美鈴の顔を見ると呆れたような口調で言葉を返した。

「どちらへって帰るのよ。調べ物も終わったし、早く帰って実験と実証をしておきたいから。本当はこの主に一言挨拶するのが礼儀なんですよけれど……あの様子じゃねえ……」

そう言って視線をカオス空間の方へ向ける。

「あー……まあ、そうかもしれませんね。分かりました。アリスさんの帰宅は私の方から伝えておきます」

アリスの困ったような、呆れたような表情を見て納得した美鈴はアリスにそう告げた。

「ええ、お願いね。それじゃ」

ヒラヒラと手を振りながら食堂のドアへと歩き出すアリス。

その背後には上海がふよふよと浮かびながらついて行く。

ドアの向こうへと消えていくアリスの後姿を見送った美鈴は、さて、どう切り出そうかとしばし思案に暮れるのであった。



（まったく……宗次郎と一緒にだと退屈しないわね）

そう考えつつ玄関のドアをくぐるアリス。

その事実苦笑しながらも、しばらくは退屈と無縁の日々が続き  
そうである。

そう思うと自然と苦笑が微笑に変わっていった。

だがそれも、次の瞬間には凍りつくことになる。

「——っ！？　これって……！！」

玄関の正面。門の方から強力な妖気を感知したからだ。

しかも、覚えのある——というよりは忘れ難い妖気を……

見れば門には美鈴の代わりであろう数名の妖精メイド達が門の角  
に身を寄せ合っている。

よく顔を会わせるために彼女たちの顔はアリスも覚えているのだ  
が、他の妖精メイドたちとは違い、咲夜が見込んで直々に鍛え上げ  
た彼女らは不測の事態にも対応できるよう躰けられているのだ。

その彼女たちが固まり、互いに抱き合って震えているのである。

しかし、そうなるのも無理はないだろう。

何故なら――

「あら？　こんな所で会うなんて珍しいわね？　アリス」

そこに居るのは――

「……ええ。そう言う貴方こそこんな朝から珍しいんじゃない？

――――幽香」

――風見　幽香（かざみ　ゆうか）

幻想郷で代表的な強者を五人述べよと言われれば、必ずその内の一人に挙げられるであろう古参妖怪である。

彼女はなんの目的でココを訪れたのか……

賑やかな朝食で幕を開けた紅魔館。

しかしそれは波乱の一日の始まりを告げる鐘であつたのかもしれない。

『答え』    への道は、常に波乱に満ちたものであるようだ……

第二十二話 ― 紅魔館 その5 ― (後書き)

はい。今回はここまでです。

すぐ続きを執筆しますので、できればまた見てやって下さい。  
でも、流石にもう週一とかは無理ぽ……

## 第二十三話 ― 紅魔館その6 ― (前書き)

皆様開けましておめでとうございます。

……というには少々遅いですね、はい。

大変長らくお待たせしました。

今回で紅魔館編は終わりです。

更に今回のお話は非常に長いです。過去最多の文章量です。

いやはや、本当なら分けるべきかもしれませんが、そのまま投稿いたします。

それと、今回は霊夢の能力に関してかなり独自の設定をしております。

そして、宗次郎の能力に関してもかなり明かされることになります。更にはゆかりんの……つとと、まあとにかくそれでもOKという方は本文へとお進みください。

「……どうしても、かしら？」

とある一室。

凜とした中に若干の失望がブレンドされた声はその室内に響く。

壁際にタンスや戸棚がある以外は大きめのちゃぶ台が室内の真ん中に置かれただけの簡素な和室。

室内に見える人影は三人分。

そんな中でわずかに緊張した空気が漂う。

三人の内、二人の間にその空気が漂っていた。

尤も、その発生源は片方の人物のみであったが。

その問い掛けに答えたのは子供特有の甲高い声にどこか老成したような落ち着きを併せ持つ声の持ち主であった。

「どうしても、だよ。そんなに心配しなくても今は紅魔の所に居るんでしょ？ それに聞いた限りじゃそこのお嬢に随分気に入られたようだし、少なくともそこに居る間は手を出されることはないと思うよ。あんたもそう思ったからこそ出てきたんじゃないの？」

その言葉に問い掛けた側の人物はわずかに眼を細める。

まるで全てを見透かしたような言葉。

「……確かにそうね。でも、それはあの館に居る間だけのこと。いずれはそこを出ることになるわ。そうになったら……」

下手な言い回しが通用する相手ではないことを思い出したのか、観念したようにその言葉を認め、その上で自分が懸念していることを伝える。

「そうなたらまず間違いなくちよつかいかけてくるだろうね。アイツが一度狙った獲物をそう簡単に諦めるとは思えないし」

「っ……だったら！」

自分があえて語ろうとはしなかったことをお気楽な口調で続けられ、分かってんならなんとかしなさいとばかりに身を乗り出す。

その動作にちゃぶ台の上に乗った飲みかけの湯飲みが倒れそうになる。

が、わずかに中身がこぼれただけでなんとか持ち直したようだ。



「そういきり立つもんじゃないよ？ それに宗の字なら大丈夫さ。あの庭師も一緒に居るんだしね」

そんな相手の剣幕などこ吹く風。あくまでもお気楽な口調のまま言い放ち、手に持った大きな瓢箪を傾け、グビリとその中身をおった。

その人物の頭にあるのは小柄な体に不釣り合いなほど大きな二本の角。

「はあ……随分と信用してるのね？ 貴方に勝ったっていうあの天狗の記事、やっぱり本当だったの？」

いっそ清々しいほどのお気楽ぶりに諦めにも似た溜息を一つ。

続く言葉を投げかける人物の手元には、零れたお茶を布きんで器用に拭き取っている小さな西洋人形。

「あっはっは！ 信用ないねえ、あの天狗も……ああ、本当さね。とは言っても弾幕ごっこをほんの余興程度に、それも殴り合い無しだったからねえ。もしも……」

「『もしも本気の殴り合いなら負けることはなかった』 ……でしよ？ だいたい “彼女” がただの弾幕ごっこだけで満足すると思う？」

「思わないねえ」

相手の質問に角のある人物は眼を閉じて答えた。

件の“彼女” がどのような人物であったのか思い出しているようである。

「……それでも動くつもりがないってことは貴方の眼から見ても彼の実力は本物って訳ね。まあ、確かに私もその一端は見せてもらったからそこまで心配しちやいないけど……」

「でも不安は消えない、だからココに来た……か。それにしてもアంతがそこまで他人を気に掛けるなんてねえ」

そう言いつつ閉じていた眼を片方だけ開くと、口の端を吊り上げた。

ニヤリ——という擬音が聞こえてきそうな仕草である。

「……何よ？ 含みのある言い方ね」

その言葉と仕草が気に入らなかったのか、緊張した雰囲気剣呑さのエッセンスを加えて問いただす。

「べっつに。珍しいこともあるんだなって思っただけさね」

そう言っ眉を顰（ひそ）めて身を乗り出してきた相手を軽くいなした。

どうにも先ほどから片方の人物にとって分の悪いやり取りのようである。

「だったらその嫌味ったらしい笑みは止めてちょうだい。だいたい彼とは別に何も……」

「ふゝゝん。 “彼” ねえゝゝ？」

「だから！ そのニヤニヤした笑いは止めなさいって言ってるでしょう！」

はてさて、これはどういう茶番劇なのか。

先ほどからこのやり取りを見ていた三人目の人物はそう思った。

この部屋……というか、この建物の持ち主であるはずなのだが、目の前の二人はそんなことなどお構いなしにこのやり取りを繰り返している。

（ウチは人外の寄り合い所じゃないんだけどねえ……）

そう思いつつ、手に持った湯飲みからお茶をズズツと一口。

はぁーっと息を吐くと、この建物——博麗神社の持ち主である博麗の巫女 霊夢は、どうしてこのようなことになったのかを思い返していた。

事の起ころいはほんの四半刻（約三十分）ほど前。

朝食を終え、さて食後のお茶を楽しもうかとしたところに朝っぱらから二人の来客。

一人は何故かこの神社に居つくことが多くなってしまった小さな

百鬼夜行、伊吹 萃香。

あの三日置きの宴会以来、気が付けばそこに居て酒やら飯やらを強請（たか）ってくるこの小さな鬼に、霊夢も最初は追い出そうとしたものだ。

だが、結局は押し切られたというか、半ば強引に半同居人となっていた。

とは言っても、いつも神社に入り浸ってるわけではなく、ひがな一日幻想郷中をあっちにフラフラこっちにフラフラしているものだから、霊夢としても『まあ、いっか』と思うようになってしまったというのが実情だ。

それに彼女の能力は中々に便利で、宴会の後片付けも一瞬で済ませてしまうし、風呂を沸かすときもあつという間に水を溜めて直ぐに沸かせてしまうのだ。

更にはどこで身に付けたのか、大工の心得があるらしく、古くなって建てつけが悪くなった神社の修復を文字通り朝飯前で済ませてしまったのである。

まあ尤も、能力の応用で小さな分身を大量に作り、それが神社のあちこちにわらわらと取り付いて作業をする光景は中々にシュールなものであったが。

だが小さくても流石は鬼と言うべきか、大人でも数人がかりで運ぶような材木を軽々と持ち運んでいたのだ。

……その際、あの大きさ（手の平サイズ）でどうやって持ち上げ

ているのかは考えないようにしたようである。

ともかく、そんなこんなで便利な同居人として認識しつつある霊夢であったが、この小さな百鬼夜行が何を思っているのかは尋ねていない。

最早そんなことはどうでもいいのだろう。

さてその鬼であるが、昨夜はどこかに泊まっていたらしく、珍しく朝帰りであった。

いつもなら夕食時にちゃっかりと居て、それを肴に酒をかつくらくと早々に寝てしまうのだ。

その際、客間の一室を宛がうのだが、時々霊夢の布団に潜り込んでたりする。

それさえ無ければ良い同居人なのだがとは思っているようだ。（主に角が危ないという意味で）

まあ、神社に寝泊りするのとは二、三日に一度の頻度なのでそれほど疎ましくは思っていないようだ。

そして、その萃香に先ほどから話しかけているのがもう一人の客人、七色の人形遣い、アリス・マーガトロイドである。

霊夢にとってこの人形遣いとはそれほど縁の深い人物ではない。

普段の彼女は魔法の森にある自宅で人形作りに精を出しているた

めか、宴会や異変のときぐらいしか顔を会わせることがないのだ。

しかし、他の連中と違って礼儀や常識をわきまえており、それ故、彼女に対する印象はそう悪いものではない。

だからと言って特段に良いという訳でもないのだが。

二人とも他人にはそれほど興味を持たない性格であるためか、お互いの領域には深く踏み込まず不干渉を貫いている。

それ故、この二人の関係はよく言ってやや友好よりの中立。

つまりは人里などで見かけても遠くであればそのまま無視（スルー）し、近くで出会えば軽く挨拶して、時間があれば少々雑談に興じるといった程度のものである。

そんな彼女がこんな朝っぱらから神社に訪ねてくるのは非常に珍しいと言える。

しかも何やらただごとではない雰囲気をもとって、である。

朝帰りしてきた萃香と食後のお茶を――萃香は瓢箪の酒を――のんびりとすすろうかとしていたところに突然やって来て開口一番に『萃香は居る！？』と言い放ったのだ。

どう考えても厄介ごとを持ち込んできたとは思えなかった。

そして家主の霊夢に対しては挨拶もそこそこに、小さな鬼に対して宗次郎に助勢するよう頼み込んできて今に至るというわけである。

（確かに “アイツ” が絡んできたのなら萃香を助っ人に呼ぼうとするのは理解できるけど……心配のしすぎじゃないかしら？）

話の内容を横から聞いていた霊夢は、遅かれ早かれそうなるのは時間の問題ではなからうかと思っていた。

確かに弾幕ごっこならばともかく、ガチの殴り合いで勝てそうな者となるとこの幻想郷中を探しても限られてしまう。

その点、この鬼ならば確実にまでは言わないまでも五分以上の勝負に持ち込めるだろう。

しかし幻想郷にこれからも住んでいくつもりならばいつかは通る道なのである。

最初から他者の力を当てにするような者に先はないのだ。

もし宗次郎がなんの能力も持たないただの人間であつたのなら “彼女” も興味を持たず相手にしないか、あるいは普通に接していただろう。

そういう性格なのだ。

“彼女” の領域（テリトリー）さえ侵さなければ……という条件はあるのだが。

しかし幸か不幸か、彼は半人半妖であり、能力を三つも持ち、しかもかなりの実力者なのだ。

ちよっかいをかけてくるのは目に見えていた。

だが、あの庭師との一戦でその実力の一端を見ていた霊夢としてはそれほど心配する必要はないだろうと判断していた。

接近戦であれほどの動きを見せ、しかも弾幕ごっこでも目の前の鬼と引き分けるほどなのだ。

何よりあの庭師が同行しているのだ。勝つにせよ負けるにせよ、命の危険があるほどのことではない――

――と、思っていた彼女なのだが……

（……まいったわねえ……私まで心配になってきちゃったじゃないの）

唐突にこみ上げてくる不安感。

霊夢は自分のその気持ちに戸惑いを覚えていた。

いつもなら何事もなく終わるかそうでないかはなんとなく分かる彼女なのだが、こと宗次郎に関しては何故かいつもの勘が働かないようである。

だが、それ以上に“他人の心配をする自分”というのが戸惑いの大半を占めていた。

いつもの彼女ならばたとえ見知った相手であつても自分の知らない所で死のうが生きようが知ったことではないはずなのに、である。

とは言え、別にこの巫女が薄情であるという訳ではない。



誰か知人の死を知らされたのならば哀しみもするしその死を悼みもするだろう。

だが、それだけである。

決してその死を引きずったり囚われてり振り返ったりはしないのが霊夢という人物なのだ。

彼女の持つ『空を飛ぶ程度の能力』とは決して読んで字のごとくだけの能力ではない。

ありとあらゆる重力、重圧、威圧などの束縛から自由でいられるというのがその能力の真骨頂なのである。

そしてそれは肉体的なものに止まらず、精神的なもの——例えばなにがしかの縁のある相手からも縛られず自由でいられるのだ。

更には『霊気を操る程度の能力』で霊弾、霊撃を放ったり、御札や結界を操ったりとまさしく博麗の巫女として相応しい能力を持っている。

他にも第六感というか、もやは未来予知に等しいほどの勘の良さや極めて高い運の良さなどがあるのだが……

ともあれ、どうも当の本人はその能力を完全に理解しているわけではないようだ。

何しろ、弾幕ごっこにおいて能力を使って避けているというのに『弾幕が勝手に避けていく』などと言い放つ始末である。

——閑話（脇道に逸れるのは）休題（これくらいとして）

ともかく、そんな彼女が出会って間もない相手を心配するというのはかなり異例のことであった。

確かに香霖堂の店主、霖之助が普段は拾った物を売ることによって日々の生活を賄っていると聞いたときにはそれを心配して様子を見に行ったこともある彼女だが、今回のことはそれとは意味合いが異なっているようだ。

普段は意識していないようだが、彼女にとって香霖堂の店主は兄や父親といった近しい異性という関係なのであろう。

ならば、彼女にとって宗次郎は――

（私にとって宗次郎さんは……どうなんだろう？）

確かに強いし優しいしイケメンだし（↑ココ重要）……と、彼についてあれこれと考えを巡らせる紅白の巫女であったが結論は出てこないようである。

初対面の時こそお賽銭云々は別として線の細い優男だなあと思っていた彼女であったが、話をしているうちに他人とは思えなくなってきたのだ。

故に、最初に出会ったのが自分であればと仮定の話に想像を巡らせたりもした。

だが、それはあくまでも仮定の話であり、直ぐに思っても詮無きことだと判断してその考えを振り払ったのである。

しかし、今思えばあの時の気持ちはなんだったのだろうかという思いが頭をもたげてくる。

そして、そのときの気持ちを思い返せば思い返すほどなにやらモヤモヤとしたモノが心の中に充満していくような不快な気分になってしまうのだ。

確かにあの半人半霊の庭師が彼を好いているのは傍目にも丸分かりであったし、同じ女として応援してやりたいと思ったのも嘘偽りのない事実である。

とりあえず、そのモヤモヤを洗い流すようにぬるくなったお茶を一息に飲み干すと、改めて宗次郎をどう思っているのか考えを巡らせる。

（好きか嫌いかって聞かれたら……たぶん、好ましい人だって答えると思うけど……）

だが、異性としてはと聞かれたらどうであろうか。

（……分かんないと言いたいようがないわよねえ……うーん……）

思考の海に潜ったままあれこれと考えていた彼女であったが、その思考も自分に向けられた声によって遮られることになる。

「……っと、霊夢？　霊夢ってば！」

「え!?! あっ……な、何? アリス」

見れば不機嫌な顔をした人形遣いがこちらを睨むように見ていた。

「何? じゃないわよ。呼びかけても全然反応がないんだから……  
もしかして何か貴方の勘に引っかかることでもあったの?」

博麗の巫女の勘の良さは幻想郷のほとんどの者に知れ渡っている。

故に何か悪い予感でもしたのではないかと表情を不機嫌から不安なものに変え、声音をやや低くして尋ねてきた。

「ううん、なんでもないわ。というか、宗次郎さんに関してははっきり分かんないのよ」

二重の意味でね、と、心の中で言葉を付け足す。

「分かんないって……どういうこと?」

言葉の意味が分からず、姿勢を巫女の方へと向け直して更に尋ねる人形遣い。

「そのまんまの意味よ。いつもならなんとなく分かるんだけど……」

その言葉に瓢箪の酒をあおっていた鬼が片方の眉をピクリと跳ね上げた。

「へえ? 霊夢の勘が働かないなんてねえ……」

ポツリと零した意味ありげな鬼の言葉に、紅白の巫女と人形遣いは顔を見合わせると、そろって鬼へと首を向けた。

「萃香。アンタ何か知ってるんじゃないの？」

「そうね。確かあのスキマと古い友人だって言ってたし、何か聞いていてもおかしくないわね」

追求の眼差しでこの小さな百鬼夜行を見る二人。

その眼は嘘や誤魔化しは許さないと雄弁に語っている。

「そんなに睨んだって私も詳しいことは何も知らないよ。ただ、紫のヤツが何か知っているのは確かだろうね」

「何かって何よ？」

「さあ？ 私だって付き合いが長いとは言え、あの人攫いが何を考えているのなんて分からないしねえ。たぶん、アイツの式神すら何も聞かされてなんじゃないかな？」

尋ね返してきた巫女の言葉に疑問符を付けて返した鬼であったが、まず間違いなく何かを知っており、自らの式神にすら何も話してはいないだろうと確信を持っていた。

ちなみに他の二人は内心で『鬼のお前が言うな』と突っ込みを入れていたりする。人攫い的な意味で。

「だったら何よ？ さっきの思わせぶりな台詞は」

「そうね。鬼の貴方のことだし何も知らないっていう言葉自体は本当のことでしょうけれど、ある程度は推察できているのではなくって？」

“まだ話していないことがあるんじゃないの？”

追求の手を緩めない二人の眼はそう語っているようであった。

いや、実際口に出していないだけで間違いなくそう語っているのだろう。

流石に居心地が悪くなってきたのか、当の鬼はポリポリと頭を掻きながら「うーん」と一つ唸ると、仕方がないなあとばかりに口を開く。

「いや、私だって推察できてるわけじゃないよお？　ただ、宗の字の能力に予測と知識に関する能力があったでしょ？」

「『出来事を予測する程度の能力』と『知識を操る程度の能力』だったわね。確かにそんな能力を持ってるって言ってたけど……それがどうしたって言うの？」

目の前の鬼が何を言わんとしているのか分からず、紅白の巫女は困惑した表情で尋ね返した。

「いやあ、そこでさっきの霊夢の言葉にちょっと引っ掛かちゃってさ。ホラ、霊夢の勘ってある意味未来予知って言ってもいいくらいじゃない？　それに悪運……じゃなかった、運も強いでしょ？」

「……悪運はともかく、勘の方は確かに宗次郎さんの能力に近いも

のがあるわね。でも、それがどうしたって言うの？ もったいぶってないでちゃっちゃと話さないよ」

困惑の度を深めた紅白の巫女が少々イラつきながら次の言葉を催促すると、横で聞いていた人形遣いが口を挟んできた。

「……ちょっと待って。それって運の方も宗次郎の能力に関係してるってことなの？」

「はあ？ アンタ何を言って 「さっすがアリス。もう気付いたんだね」 ……ちょっと、二人して私をのけ者にする気？ いい度胸してるわね……」

言葉の意味がまったく分からず、青筋を立てながら声音を落とす巫女。

見る者が見れば分かるのだが、巫女の体から靈気があふれ出て来ていた。

低くなった声音と相まって中々に迫力がある。

「ちょっと落ち着きなさいよ。まったく、相変わらず感情の起伏が激しいんだから……」

なんとかたしなめようとする人形遣いであるが、この場合は逆効果であろう。

「いいからちゃっちゃと話す！」

案の定、イラつきを増した口調で言い放つと、ダン！ と手に持

っていた空の湯飲みをちゃぶ台に叩きつけていた。

「あいよく。と言っても私も紫のヤツからかなり前に聞いたことがあるだけなんだけどね。ええと、確かこの世界を構成する三つの層がなんとかって話なんだけど……」

「そこからは私が話すわね。世界を構成する三つの層っていうのは、『物理』『心理』『記憶』のことよ。その内の物理と心理はそのままの意味ね。つまり、物理とは今私たちが眼にして触れられる物……例えばこの手に持っている湯飲みとかね。そして心理とは心や精神……いわゆる深層心理とか言われているもののことよ。そして、それら全てに時間軸の流れがあってそれを読み取ることによって未来を知ることができると言われていているわ」

鬼の言葉を引き継いだ人形遣いの説明であったが、その言葉を今一つ理解しきれなかったのか、紅白の巫女はポカンと口を開けた後、確かめるように質問してきた。

「え、ええと……つまり宗次郎さんの能力はその二つの時間軸とやらを読み取れる能力だってこと？ あ、でも、記憶の方はどうなの？ それに運の方も関わってるって言ってたけど、それが私とどう結びつくっていうの？」

「それを今から説明するわ。まず、他の二つと違って記憶の層は確定した未来への時間軸が存在しないの。まあ、当然よね？ 記憶っていうのは過去からの積み重ねなんだから。だとしたら、その先はどのようなにして決まるのか、その答えは……」

そこで一旦言葉を切り、眼を閉じる。



そして一呼吸置いた後に閉じていた眼を見開いてこう言い放った。

「……『確率』　つまり　“運”　よ」



「確率……それと、運ですか」

時をほぼ同じくして同様の言葉を口にした者がいた。

（しかし、これってどういう状況なんだろうね）

内心でそう思いながら、彼——宗次郎は改めて今の状況について思考を巡らせていた。

ここは紅魔館にあるテラス。

玄関ホールの屋上にある見晴らしの良い場所であった。

朝食後、門番を代行していた妖精メイドからなにやら報告を受けた紅魔館の主は、しばし考え込むとメイド長に対しテラスで茶会を開くよう命じたのだ。

（そしてその茶会に参加して欲しいって言われて来ちゃったんだけど……）

なんともピリピリとした緊張感が漂う茶会である。

（やっぱりこの人が原因なんだろうなあ）

そう思っただけと横目でその原因とやらを窺う宗次郎。

（うっ……目が会っちゃったよ。なんでそんな殺気がこもった目で見えるのかなあ……僕、この人になんかしたっけか）

考えたところで思い当たることがあるわけもなく、彼にとってはなんとも居心地の悪い茶会になってしまっていた。

「……ええ。つまりその確率による不確定要素を決めるのが『運』なのよ。そうでしょ？ パチエ」

先ほどの彼の発言の後、出された紅茶の香りをゆったりと楽しんでから答えたのはこの紅魔館の主——レミリアである。

『紅い悪魔（スカーレットデビル）』とも呼ばれる紅魔館の主は持っていたティーカップを置くと隣の席に座る親友へと言葉を投げかけた。

場の空気をものもしないその仕草は気品と威厳にあふれている。

「その通りよ、レミィ。貴方の持つ『運命を操る程度の能力』と、宗次郎の持つ『出来事を予測する程度の能力』は、呼び名

こそ違えどかなり似通った能力なのよ」

そう言っている間にも主の親友——パチュリーは手に持った魔法書から一時も眼を離してはいなかった。

彼女も場の空気をものともしていない……というよりは、気にもしていないようだ。

（これって並列思考っていうのかな？ 魔法使いつてホントにとんでもないんだな……）

そのとんでもない人物から同じ魔法使いにならないかと誘われた者の台詞ではないのだが、この時の宗次郎は本気でそう思っていたりする。

とりあえず、殺気をぶつけてくる人物に対してはスルーを決め込むことにしようだ。

「まあ、似通っているだけで決して同じな訳じゃないんだけど……ね？ レミィ」

「そうね。私は世界を構成する三つの層の内、物理と心理からはある程度未来を読み取ることができるわ。でも、記憶の層による『確率』によっていくらでも未来は変わってしまうの。だからこそ私は記憶の層からその者が辿るであろういくつかの未来への糸をたぐり寄せることで運命を操ることができるのよ。それこそが運命の糸。それこそが私の能力の正体……」

両肘をテーブルの上について手を組み、その上に顎を乗せるとあっさりと自分の能力の正体を語った。

その言葉に宗次郎は内心で驚きを隠せないでいた。

それもそうであろう。

何しろ出会って二日と経っていない相手に能力の正体を明かしたのだ。

見れば隣に座る白玉楼の庭師も、主の後ろに控える瀟洒なメイドも、そしてテラスの片隅に立っていた門番も驚きの表情でこの館の主を見ていた。

広いテラスの真ん中にパラソル付きの丸いテーブルセットが置かれており、それを囲むようにして宗次郎の右から順に妖夢、パチュリィ、レミリアと “もう一人” の人物の五人が席についている。

立っているのはこの館のメイド長と門番の二人だけであった。

それらの内、パチュリーと “もう一人” の人物以外の全員が一斉に視線を向けたのである。

ちなみにこの場に悪魔の妹の姿はない。

吸血鬼にとって既に就寝の時間だからだ。

「……まあ、そうは言ってもそれほど万能な能力じゃないわ。どうあがいても変えられない運命は存在するし、私より実力が上の者には通用しないし、同じような能力を持つ者によっては相殺されてしまうしね。それに、あくまでもある程度までだし……」

彼女にしては珍しく謙遜するように言うと、再びティーカップを持つとその中身を口に含んだ。

どうやら一斉に向けられた視線が照れくさかったようである。

だが、その言葉は暗に宗次郎には能力が通用していないと白状しているも同然であった。

「……ともかく、レミィの能力はそれで置いておくとして、宗次郎。貴方の持つ能力は言ってみれば未来予知に近いわ。あのスキマがそう言っていたんでしょう？」

そのことを誤魔化すためか、照れ隠しをする吸血鬼の言葉を引き継いだ紅魔館の『動かない大図書館』が宗次郎に尋ねた。

「え？ ……え、ええ。紫さんの話だとそうなるだろうと……」

この館の主の可愛らしい一面に一瞬あっけに取られた宗次郎だが、すぐに持ち直すとその質問に答える。

「……だとしたら貴方の能力は三つの世界の層を完璧に読み取れるようになれる可能性が高いわ。つまりは完全な未来予知ね。今はまだ記憶の層から読み取れていないようだから予測するに止まっているようだけど……とんでもない能力ね」

そこで言葉を切ると初めて手元の魔法本から目を離し、視線を宗次郎へと向けて言葉を続けた。

「更に言うと、『知識を操る程度の能力』はその記憶の層から来ている可能性が高いわ。過去から連綿と続く人々の記憶はその記憶

の層そのものと言っても過言ではないし……どうして世界を構成する三つの層がその二つの能力に分かれているのかは私にも解らないけれど……ねえ、宗次郎？」

「はい？　なんですか？」

次々と語られ、そのたびに大きくなっていく話にいい加減理解が追いつかなくなっていた宗次郎は、最後に名前を呼ばれ、思わず平坦な答えを返してしまっていた。

「貴方、やっぱり魔法使いになるべきよ」

再度繰り返されたあの図書館での言葉。

しかも今度はきっぱりと断定口調である。

かなり本気であることは間違いないようだ。

その証拠に彼女の口調も視線も、そして表情も真剣そのものである。

「ちょっと待って下さい。どうしてそれが魔法使いになることへと繋がるんですか？」

と、そこに口を挟んだのは、それまでずっと空気と化していた半人半霊の庭師であった。

「……貴方に言っても理解できないでしょうけれど……まあ、いいわ。ついでに説明してあげるわね」

大図書館の主の言葉に一瞬ムツとした表情になる庭師であったが、魔法に関しては丸っきりのド素人なのだ。

ならば余計な口は挟まず拝聴したほうがいいと判断したようである。

そもそも彼女が口を挟んだ理由は、宗次郎が魔法使いになるのなら白玉楼から離れてこの紅魔館に住むことになるのではと懸念したからだ。

図書館で誘われるのを聞いたときは宗次郎の変質を恐れた彼女であったが、話を聞く限りではそう心配することもないようである。

その代わり、別の懸念が頭をもたげてしまったが。

とりあえず、そう判断するのは話を聞いてからだと思い直した彼女は、ジッとこの紫色の髪を持つ魔法使いを見据えると、次の言葉を待った。

「……魔法使いになるということは、言ってみれば世界を知るということと同義なのよ。自然の摂理、人の理（ことわり）……そういつた世界の真理を“識る” ことこそが魔法使いになるための第一歩なの。あの魔理沙だってほんの入り口程度とは言え理解しているわ」

そこまで語った後しゃべり過ぎて喉が渴いたのか、コホッと一回だけ咳き込むと自分のティーカップを手に取り喉を潤おす。

なにやら最後の方で酷いことを言っていたような気がするが、この場に居るもの全員がその言葉をスルーしていた。

……どこかの森の中から盛大なくしゃみが聞こえてきたような気がするが、気のせいであろう……

それはともかく、自分なりに考え、ある程度理解が追いついてきた宗次郎は、この喘息持ちの魔法使いに問い掛ける。

「……だからこそ世界を構成する三つの層に関しても詳しくあったという訳なんですね？」

「その通りよ。魔法を行使するにあたって最も重要な要素を占めるのは“運”なのよ。例えば縁起物とかいわく付きの物とかね。何故かと言えば人や物が“そういうものだ”と記憶しているからなの。魔理沙はともかく、アリスとはそのことについて色々議論を交わしたものだわ」

宗次郎の言葉に、自分以外にも詳しい者が居ることを含めて答える魔法使い。

「……さて、もう一度言うわね。貴方、魔法使いになりなさい。魔法使いになるためにはまず才能ありきな。魔法の素質……つまり、魔力を持たない者はどんなに知識を深めても魔法使いにはなれないわ。今の貴方の魔力はほんのわずかだけど今後魔力を高める研鑽を積みば済む話だし……なにより」

そこまで言った後、ずいっとテーブル越しに身を乗り出して宗次郎に詰め寄る。

反射的に身を引きそうになる宗次郎だが、彼女の目に宿る真剣な眼差しを見て、ここは引くべきではないと判断し、真正面からその



視線を受け止めることにした。

「貴方は世界の真理の一端に触れているのよ。そんな人が魔法使いにならないなんて嘘を通り越して詐欺だわ」

喘息持ちであるためか、病弱な印象を持つ彼女からは想像できないほどの力強い言葉である。

（うっ……だから近い、近いですって！　なんでこんなに強引にな  
ってるのかなあ……あ。なんか良い匂いがする……って、そうじゃ  
なくて！）

表情こそいつものニコニコ顔なのだが、内心は受け止めない方が  
よかったかなあなどと思いながらフワリと流れてきた目の前の少女  
（？）の匂いに当惑する宗次郎。

目の前で互いに息がかかりそうなほど近づいた両者の様子を見て、  
それまで黙って拝聴していた庭師が割り込んできた。

「だから待って下さい！　今の話であればなにがなんでも魔法使い  
にならない必要なんてないじゃないですか！」

そう言って乗り出していた魔法使いの肩を掴んで席へと押し戻す。

さすがに剣士と魔法使いでは腕力が違うためにあっさりと元の席  
に戻る。

思わぬ邪魔をされ、不愉快そうに眉をひそめた魔法使いは庭師へ  
と向き直った。

「やっぱり理解していないわね……一端とはいえ、世界の真理を知るということがどれだけ大変なことだと思っているのよ？」

「そんなこと分かるわけありません！　ですが、無理に勧誘することはないと言っているんです！！」

「だとしても別になってはいけない理由はないはずよ？　それに彼  
の能力はまだまだ未知数。今でさえ真理の一端に触れているという  
のにその先まで見込める……これほどの逸材はそうそう居ないわ。  
貴方はその邪魔をしようというの？」

「そんなつもりはありません！　ですが宗次郎さんは剣士なんです  
よ！？　剣士は日々の研鑽が大事なんです！　魔法を習う暇なんて  
ありません！！」

「別に剣士が魔法を習ったっておかしいことはないわ。それに研鑽  
といってもまさか一日中刀を振り回しているわけでもないのでしょ  
う？　それに昔の武士は剣術だけでなくお茶や和歌、舞や能といっ  
た芸能も修めていたと文献で見たことがあるわ。それでも習う暇が  
ないなんて言えるの？」

ヒートアップし、強硬に反対する庭師に対してあくまでも理詰め  
で論破しようとする魔法使いとの口論であるが、庭師の形勢はかな  
り不利になりつつあった。

「うっ……で、ですが！　「妖夢さん」　え？　あ、そ、宗次郎さ  
ん？」

だが、そんな彼女を見かねたのか、宗次郎が声をかける。

「心配しなくても僕は白玉楼を出るつもりはありませんよ。まあ、先のことは分かりませんが、ご迷惑でなければ今しばらくはお世話になりたいと思っていますんですが……」

彼女が何を懸念しているのかを察した宗次郎は少々照れくさそうにしながら助け舟を出した。

「迷惑だなんてとんでもありません！ それに、その……しばらくじゃなくてずっとでも……」

思わぬ助け舟に舞い上がってしまったのか、歓喜の表情で言葉を返す庭師。

尤も、その台詞の後半はごによごと小声になってしまっていたが。

（なんだ……そういうこと。ムキになっちゃってバカみたい……）

どうやら目の前の魔法使いにしっかり聞こえていたようである。

つまりは他の者にも……

「パチュリーさん。お誘いはありがたいのですが図書館でも言ったように今のところ魔法使いになるつもりはありません。それに、今すぐ習わなければならないというわけでもないんでしょう？」

その言葉に魔法使いはそれもそうねと言って椅子に座りなোস。

考えてみれば彼は半人半妖。

別に焦る必要はないのだ。

そう思いなおした彼女はあっさりと勧誘を止め、閉じていた魔法書を再び開いて目を通し始めた。

そんな彼女の耳にクスクスと忍び笑いが聞こえてくる。

「……なによ、レミィ？」

見ればその笑い声の主は彼女の親友であった。

「ククク……振られたわね？ パチェ」

「……別にそんなんじゃないわよ。互いに研鑽しあえる相手が増えるというのは魔法使いにとっても貴重なことなの。それに彼の言うとおり今すぐしなきゃいけないって訳じゃないわ。だからその忍び笑いはよしてちょうだい」

そう言いながらも顔は魔法書で隠していたりする。

なんとも微笑ましい親友の姿に笑いの度を深める吸血鬼であったが、内心では彼女がこれ以上強引に勧誘するようであれば止めさせるつもりであったのだ。

（ま、あのスキマとの協定もあるしね。それに……）

そこでチラリと横目で “もう一人” の姿を盗み見る。

この茶会に誘われ、宗次郎に対して自己紹介をした後は一言もしやべらず空気に徹している人物。

今も目の前のやり取りにはまったく興味を示さず、優雅に紅茶を楽しんでいるようであった。

しかし、時折見せる宗次郎に対する鋭い視線は獐猛な肉食獣を思わせる。

（これで諦めてくれれば御の字だったんだけど……そう上手くはいかないか）

そもそもこの茶会を開き、自らの能力の正体を明かしてまでも宗次郎の能力について話をしていたのはそれが目的であったのだ。

“あの” スキマ妖怪と冥界の管理者の肝煎りで幻想郷中を見て回っているという事実を知らしめることと、その理由がおそらくは彼の持つ能力であろうと思わせること。

何より冥界の亡霊姫が自らの従者をお供につけているほどののだ。

証拠としては十分すぎるだろう。

更にはこの紅魔館の者たちも彼の味方だと暗に知らしめることも含まれていた。

それに昨夜、その庭師と二人きりになった時、色々と宗次郎に關して話を聞いて自らの能力が通用しない理由を彼女なりに考察しており、それを確かめる意味でも親友の魔法使いに同席してもらったのだ。

まあ、それでその親友の方が釣れてしまったのはご愛嬌ではある

のだが。

それで宗次郎が “ 自分の意思で ” 紅魔館に来てくれるのであれば万々歳であったし、なにより妹も彼に懐いている。

彼女自身も彼を気に入っているし、彼の持つ能力にも大いに興味を持っていた。

当初こそ能力が通用しないことに警戒し、初対面ではあのような会話となってしまったが、話してみれば中々好ましい人物であるし、今では能力が通用しないということが逆に彼女の好奇心を大いに刺激しているのだ。

運命が視えないということは何が起こるのか分からないということである。

永く生きる者にとって最大の敵は “ 退屈 ” なのだ。

もし宗次郎がこの紅魔館に来てくれるのであればさぞ退屈とは無縁な日々を送れることであろう。

どちらかと言えば、この茶会を開いた最大の目的はそれであった。

あのスキマとの協定のせいでこちらから強引に勧誘することができない為、成功すれば儲けもの程度ではあったが。

そのためにも、この “ もう一人 ” の人物にちよっかいをかけられるのは避けたいところであったのだ。

それに、彼が災いを起こすような人物であれば、あのスキマがと

つくに “ 処分 ” しているはずである。

その点においては彼女もあの妖怪の賢者を信頼していた。

だからこそ最愛の妹の “ 処置 ” を任せただ。

尤も、そのことを取引の材料に使われたのは憤懣やるかたない思いであったが。

それでも有無を言わず “ 処分 ” されてしまうよりはマシであろうと内心の憤りを抑えて思いなおす。

姉である彼女の目から見ても妹の能力は危険すぎたのだ。

だからこそ無闇に能力を使わないように運命を操作し、地下室に幽閉するしかなかったのである。

その間、実に495年。

だが、それも限界に近づいていた。

歳を重ねるごとに妹の力は増していき、能力で抑え込むのが難しくなっていたのだ。

だからこそこの幻想郷に流れ着いた際に吸血鬼異変を起こしたのである。

妖怪の力は、何も歳を経るばかりが増やす方法ではない。

人々から多くの畏れを集めれば、対象となった妖怪も力を増すこ

とができる。

何しろ妖怪とは人間の恐怖や畏れから生まれ出てくるものだからだ。

だからこそ幻想郷の妖怪たちは機会があれば異変を起こそうとしているのである。

まあ、それが目的ではない場合も多々あるのだが。

ともかく、科学万能の世の中となった外の世界では、もはやその方法は望めない。

だが、妖怪への畏れが色濃く残るこの幻想郷ならば……

つまり、吸血鬼としての支配欲を満たすためだけに起こした異変ではなかったのである。

尤も、吸血鬼としてのみ畏れられたら妹の力も増す可能性はあったが。

それでもやらないよりはマシと考えてのことであつた。

しかし、その目論見も幻想郷の管理者が乗り出したことによって費えてしまった。

彼女にとっては屈辱的な条約を結ばされ、安易に異変を起こせなくなってしまう、どうしたものかと他に良い方法がないか模索していたとき、条約とは別の取引を持ちかけてきたのが条約を結ばせた当の本人であつた。



あのスキマ妖怪が何を思っただけその取引を持ちかけたのかは今でも不明である。

何しろ妹の持つ 『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』は幻想郷を管理する者の側から見ても危険極まるものであったはずなのに、だ。

下手をすればこの幻想郷を覆う博麗大結界を破壊されてしてしまう可能性さえあったのである。

それでも取引として扱ってくれたのは、おそらくは幻想郷のパワーバランスを考慮してのことであろう。

それに安易に処分しようとするれば必死の抵抗を受けることは目に見えていた。

それこそ吸血鬼異変どころではない大異変に発展する事態になりかねない。

そこまで読んだ上での取引であったのだろう。

何より、紅魔館の主の妹を任されたということは、そのまま妹を質に取れるということに等しいのだ。

無理に処分しようとして自暴自棄になられるよりは取引の材料に使い、時間を置いて段階的に処置を施した方が色々と要求を飲ませやすいと判断したのであろう。

紅霧異変を起こさせる際に条約の一部を緩和したのも駆け引きの

一つであったようだ。

要求するばかりではいらぬ恨みまで買ってしまったかねないのである。

この辺りの匙加減の絶妙さは流石であった。

（まったく……癪に障るけど、フランの処置……いえ、治療に時間がかかるのは事実でしょうし、実際上手いやり方だとは思うけどね。それに治療自体は完璧にやってくれたし、もうあの子を地下室に軟禁せずに済むのは感謝してるんだけど……）

だが、それとこれとは話が別である。

どんな思惑があるにせよ、身内を取引の材料に使われるのは愉快的な気分ではない。

（大人しく要求を飲んでさえいてくれれば、こっちがどう思おうが知ったことではないんでしょうね）

実際、幻想郷の管理者にはそういう一面がある。

そうでもなければ管理者など務まらないのであろう。

（全ては幻想郷の為……か）

自分がこの紅魔館のことを常に考えているように、あのスキマ妖怪もこの幻想郷全体のことを考えているのだ。

そのこと自体は理解できるし共感もできる。

（だからと言って身内を使われるのは業腹ものだわ）

全ては自分の力が及ばなかったが故……

そう思うことで納得するしかなかった。

（それにしても……）

そこで視線を宗次郎へと移す。

今も自らの親友と庭師も交えて談笑している。

勧誘自体は諦めたようだが、いずれは教えるつもりなのだろう。

宗次郎の能力について考察を交えながら魔法使いの心得についても話をしているあたりは流石であった。

まあ、勧誘へと話が行かないようにあの庭師がストッパー役になっているようだが。

（あのスキマが肩入れしてるって時点で只者ではないのは確かよね）

何しろ 『妹』 というこちらに対して最大の切り札を今回の件で使い切ったのだ。

あのスキマが宗次郎に大きな期待——あるいはなんらかの企みを持っているのは間違いなかった。

だからこそ貸しを作る意味でもこの茶会を開いたのだ。

その上で彼をこちらに引き込めればあのスキマに対して大きなアドバンテージを取ることができるはずなのだが……

（そうそう上手くはいかないわよねえ……まあ、とりあえずは“彼女”も大人しくしてくれているようだし、今回は牽制と勧誘の切っ掛けにはなったことで満足しておきましょう）

それに宗次郎の身が本当に危なくなれば、あのスキマとてなんらかのアクションを起こすはずである。

貸し借り云々は最初からあまり期待はしていなかった。

と、そこに――

「考え事は終わったかしら？」

――唐突にかけられる自分に対しての声。

カチャリと置かれたティーカップの音。

声のした方を見れば、それまで完全に沈黙を保っていた“もう一人”の人物が彼女を微笑みながら見ていた。

目だけを動かし周りを見渡せば他の三人も談笑を止め、そろってこちらに注目している。

背後に控える彼女の従者も、そして反対側に居る門番も警戒レベルを跳ね上げてこちらを注視しているようだ。

「……まあね。紅魔館の当主ともなれば色々考えることもあるものよ」

「へえ？ そうなの……例えば、私をどうやってココから追い出そうか、かしら？」

宗次郎と同じようにニコニコと微笑みながらそう言い放つ。

それに対して紅魔館の当主はさも心外とばかりに目を見開いた。

「あら、それは心外ね。貴方には日頃ウチの門番が庭の花について色々とお世話になっているのだし、追い出すようなマネはしないわ。それに、せっかく尋ねてきてくれた客人にお茶一つ出さずに帰したとあっては紅魔館の名折れですもの」

それに追い出すつもりなら最初っから誘ったりしないわ、と言葉を続ける。

「そう？ 別にたいしたことを言った覚えはないんだけど」

と、返事を返しながら “彼女” は背後に居る門番へと振り向いた。

「あ、あはは……いえ、本当に助かっております。ハイ」

いつでも飛びかかれるようにするためだろう。腰を落とすし、やや前傾姿勢になっていた門番はその視線と言葉に思わず愛想笑いを浮

かべ、慌てて姿勢を直立不動のものへと戻した。

（まったく、こと戦いとなると勘が鋭いんだから……それに美鈴も情けないわねえ。愛想なんて振りまいてないでしゃんとしなさいよ）

門番の対応に思わず額を押さえてしまふ紅魔館の当主。

だが、その内心の言葉は少々酷ではなかろうか。

「あら、貴方にしては謙遜が過ぎるわねえ。こと花に関してはこの幻想郷で貴方の右に出る者は居ないでしょうに……違つかしら？

“フラワーマスター”」

そんな内心の思いなどおくびにも出さず、押さえていた手をティーカップへと移してそう問い掛ける。

その言葉にフラワーマスターと呼ばれた女性は前に向き直り、ニコリとした笑みを更に深めて肯定の言葉を返した。

「ええ。勿論、花に関して私以上の者は居ないと自負しているわ。尤も――」

そこで一旦言葉を切り、それまでことの成り行きを見守っていた宗次郎へと視線を移す。

「――戦いにおいてもそうだと自負しているんだけど、ね」

ね、の部分で目を細め、視線を意味ありげなものへと変える。

（うっわぁ……最初に会ったときからそう思っていたんだけど。や

っぱりこの人、女性版の志々雄さんだよ……)

その視線を向けられた当の宗次郎は内心で冷や汗を流しながら思うってしまった。

何しろ最初に挨拶を交わした時、こちらを(文字通りに)舐めるような視線で見っていたのだ。

その後も時折、殺気のこもった鋭い視線を向けてきていた。

隣に座る庭師もそれには気付いており、いつでも抜刀できるように刀をテーブルにかけ、椅子も浅く座ることによって素早く立ち上がれるようにしていたのである。

何より、全員が席に着いた時、門番がさりげなくフラワーマスターの後ろの位置についており、給士を務めるメイド長も常に警戒心を彼女に対して向けていたのだ。

いかにこのフラワーマスターと呼ばれる女性が危険人物であるのか如実に語っている。

(ホント。話には聞いていたけど、聞くのと見るのでは大違いだね)

フラワーマスター ― 風見 幽香(かざみ ゆうか) ―

能力…花を操る程度の能力

二つ名…四季のフラワーマスター

幻想郷の住人では珍しく、頭に帽子やリボンといった装飾品を全く付けておらず、髪は濃い緑色で、軽くウェーブがかかったミドルショートヘア。

瞳の色は紅魔館の主と同じく紅い光彩を放っており、美しいと言える容貌をいっそう引き立てていた。

服装は薄いクリーム色の長袖ブラウスに赤と小豆色のチェック柄ベスト。襟元には薄い黄色のネクタイを締めており、ベストと同じ柄のロングスカートに折り返しが付いたフリル付きの白いソックスと、赤のエナメルパンプス。

出会った時は白い無地の日傘を差していたが、今は膝の上にたたんで置いてある。

外見上の年齢は二十歳すぎぐらいであろうか、ここの門番のように出るところは出ていて引っ込むべきところは引っ込んでいるという女性として理想的なボディラインをしており、特に胸の母性的な部分は服の上からでも分かるほどはちきれんばかりであった。

常にほがらかな笑顔を振りまいており、日傘を差して歩く姿はどこかいいところのご令嬢のようである。

それはともかく、彼女の持つ能力は枯れた花を元に戻したり、花の向きを変えたりできる程度で戦いにはまったく役に立つ能力ではないらしい。

だが、稗田家の阿求が執筆している『幻想郷縁起』において唯一人間友好度が“最悪”と記されており、危険度も極高とそ



うとうに危険な妖怪であることは間違いないようだ。

だが一方で人里に出入りし、普通に買い物をしている光景を目撃されているらしく、その際は人間とも礼儀正しく挨拶しているそうである。

阿求曰く、強い妖怪ほど紳士的であり、また、強者は常に笑顔であるとのこと。

宗次郎は阿求から『幻想郷縁起』に自身の項目を書き加えていかどうか尋ねられた後、どのような妖怪が記載されているか雑談混じりに話を聞いていたのだ。

尤も、記載された内容は妖怪本人から脚色された部分もあるらしく、足りない所は阿求が転生を繰り返した記憶から補填されており、筆者である彼女自身の独自の解釈もあってあまり正確なものとは言えないと苦笑混じりに言われたものであったが。

だからこそ阿求は輪廻転生を繰り返してでも書き続けているのであろう。

いずれは完全な『幻想郷縁起』が出来上がることを目指して

……

しかし、それは終わらない悪夢と同じではないかとその時の宗次郎は思った。

転生する間にも新たに書き加えなければならぬ者達が増えていくのだ。

目の前の吸血鬼や彼自身がそのいい例である。

だが、宗次郎はあえてそのことを告げたりはしなかった。

阿求自身、そんなことなど百も承知なのであろう。

（まあ、それが阿求さんの選んだ道であり、彼女が見つけた“答え”なんだろうね）

正直、宗次郎はそんな彼女を羨ましいとさえ思っていたのである。

「あら？ 私は貴方に言ったつもりなんだけど、もしかして聞こえなかったのかしら？」

ツラツラと考え事をしていた宗次郎の態度が気に触ったのか、フラワーマスターがわずかに不機嫌さを加えた声音で尋ねてきた。

だが、表情はあくまでもニコニコ顔であったりする。

「ああ、いや。そんなつもりはありませんよ。ええと……「幽香でいいわ」では、幽香さんと……すみません、ちょっと考え事をしていたもので」

「へえ？ 私を前にして考え事……ねえ？」

（うわっ。地雷踏んじやったかな？ 目が全然笑ってないんですけど）

更に強まっていく殺気。

普通の一般人ならとつくに失神レベルである。

（フフ……私の殺気をこれほど受けても尚これほど平然としているとはね。どうやら思った以上に楽しませてくれそうだな）

どうやら殺気を送り続けていたのは様子見と挑発を兼ねた実力判断であつたようだ。

だが、彼女にとってその目論見はいささか分が悪い……というよりは、的外れと言わざるを得ない。

なにしろ以前の宗次郎は闘気や剣気、殺気などをぶつけられても暖簾に腕押し、ぬかに釘、柳に風であつたのだ。

感情を取り戻した今でもやろうと思えばできるのである。

彼のスルースキルの高さもそこにあるのかもしれない。

尤も、彼の生い立ちを考えればそれが幸か不幸かは判断が分かれるところである。

まあ、彼女からすればそんな事情があつたことなど知る由もないことであろうが。

……そんなところも博麗の巫女と似通っているのは偶然であろうか……

「……分かっているとは思うけれど、彼は当紅魔館にとって大事な客人よ。もしこの場で仕掛けるつもりならば……」

未だに殺気を収めようとはしない彼女を見て、紅魔館当主が待ったをかける。

流石に見かねたのであろう。

あれだけ牽制となる材料を示されても尚矛を収めないようであれば、それはもはや紅魔館全体の問題である。

紅魔館の面目、当主としての面子、吸血鬼としてのプライド。

それら全てが掛かっているのだ。

その辺りは『強さ』にのみ依って立つこの幻想郷における妖怪同士の実情を物語っていた。

ある意味、宗次郎の持つ『弱肉強食』の理念そのものと言えなくもない。

だからこそ妖怪の賢者も宗次郎に幻想郷を見て回らせているのであろう。

この幻想郷は彼の理念を体現した世界でもあると……

「フフ……分かってるわ。流石に私でもこの人数を相手にするのは骨が折れるしね。それに今日ここに来たのは噂の彼の顔を見にきただけだし……」

そう言って席を立つフラワーマスター。

彼らの覚悟を目の当たりにしてもそのような口がたたける辺りは

流石であつた。

何しろ、『骨が折れる』　とは言っても　『敵わない』　とは言っていないのだ。

（まさに傲岸不遜だなあ。やっぱり志々雄さんにそっくりだ）

席を立った彼女を見た一同が一斉に身構える中で、彼だけは身動き一つせず素直に感心していた。

見れば、ある者は刀を手に取り、ある者はナイフを取り出し、ある者はスペルカードを取り出している。

それまで読書をしていた魔法使いでさえ読んでいた魔法書を閉ざし、懷からスペルカードを取り出しているのに、である。

そんな一触即発の雰囲気が漂う緊迫した場を何事もないかのように歩き出すフラワーマスター。

まさに強者とはかくあるべきという姿を体現していると言えよう。

そして何を思っているのか、宗次郎の背後へと周り、後ろ向きのまま彼に話しかける。

「宗次郎……だったわね。今日は貴方に会えて本当に良かったわ」  
嬉しそうに語りかける彼女からは、既に殺気は消えている。

だが、その右手は左手に持つ折りたたまれた日傘の持ち手を握っていた。

「僕の方こそ光栄です。いずれは貴方の所にもご挨拶に伺わせていただきますので……ところで幽香さん？」

「楽しみに待っているわ。それで何かしら？」

互いに背中越しで会話をする二人。

話しかけた後、ぬるくなった紅茶の残りを飲み干し、ソーサーへと戻す宗次郎。

カチャっという音がやけに大きく響き渡る。

「僕がこの紅魔館に居ることをご存知だったようですが、どこで聞かれたんですか？」

それは同時にこの場に居る一同が思っていた疑問でもある。

そう、彼女は先ほどう言っただ。

『噂の彼の顔を見にきた』 と……

偶然と言うにはあまりにもタイミングが良すぎた。

「あら、別に誰かに尋ねたわけではないわ。そんなことしなくても花たちが教えてくれるんですもの」

「花たちが……ですか」

「ええ。私の能力は誰かに聞いているのでしょうか？」

その言葉に宗次郎を除く全員が納得する。

「確か『花を操る程度の能力』でしたね。聞いてはいましたけど、そんなことまで出来るとは知りませんでした」

「フフ……なら今後は知っておくことね。人間とは違って花たちは嘘をつかないということも……」

そう言っすうと眼を細めるフラワーマスター。

その意味をいち早く察した者が居た。

妖夢である。

（つまりこの幻想郷のどこであろうと居場所を知られてしまうということ……！）

その事実彼女の顔は青ざめる。

自然あふれるこの幻想郷では、花はどこにでも咲いているのだ。

確かに魔法の森のように普通の花が育ちにくい場所もあるが、逆を言えば居場所を特定されやすいことを意味していた。

その意味では冥界とて同様である。

事実上、このフラワーマスターから逃げ場はないと宣告されたも同然であったのだ。

思わず椅子から立ち上がり、手にした刀を抜こうとする。

だが、そんな彼女の肩を押さえ、動きを制した者が居た。

（そ、宗次郎さん？）

立ち上がりかけた彼女の肩を掴み、そのまま席へと戻す宗次郎。

（……どうしてですか？　今なら彼女を倒すことも……）

そう目で問い掛ける妖夢に、宗次郎はただ首を左右に振るだけであつた。

確かに今この場に居る者たちの力を借りればいかに相手がフラワーマスターといえども倒すことは容易……とまでは言えないまでも可能であろう。

しかし、それは同時に宗次郎の実力はその程度であると知らしめる結果となり、彼に対する評価は地に落ちることとなる。

それに、いかに相手がフラワーマスターであるとはいえ、女一人を相手に大の男が数を頼みにするなど彼の男としてのプライドが許さなかつた。

何よりそんな方法をよしとする訳にはいかない事情もある。

彼自身、自分への評価がどうなろうと知ったことではないのだが、ほんの余興であつたにせよ、この幻想郷で最強の一族と目されるあの鬼に勝っているのだ。



既にその事実是天狗の新聞によって幻想郷中に知れ渡っている。

自分に勝ちを譲ってくれた（と思っている）彼女の顔に泥を塗るようなマネをする訳にはいなかった。

更に言えば、彼が世話になっている白玉楼の亡霊姫や、同じように彼を目に掛けている幻想郷の管理者の面目を潰す結果にもなりかねない。

向こうから仕掛けてきたのならまだしも、こちらからそのような手段で仕掛ける訳にはいかないのだ。

（……っ！？ 確かに、その通りですね……申し訳ありません、幽々子様、紫様）

彼の眼を見てそれらのことを察した妖夢は、心の中で主人とその親友に詫びる。

「あら残念。私としては別に構わなかったんだけど……ね」

わずか数秒のやり取りであったが、こちらの事情など全てお見通しであったようだ。

そしてフラワーマスターがそう言い終ったその直後――

――ガキイイイン！！――

鳴り響く鈍い金属音。

幽香が持つ日傘と、宗次郎が持つ逆刃刀。

その二つの武器（？）が互いの空間で交差していた。

まるで刀を抜刀するかのように振り向きざまに斬りかかるフラワーマスターと。

いつの間に手にしていたのか、その斬撃を逆刃刀による抜刀術で迎撃した宗次郎。

見れば、彼が座っていた席はテラスの端まで飛ばされている。

衝撃で脚が折れてしまったその椅子の惨状が彼の動作の激しさを物語っていた。

「ウフフ……やっぱり思っていた以上ね。貴方」

嬉しそうに満足気な笑みを浮かべるフラワーマスター。

「それはどうも。御目鏡に合ったようですねによりです」

いつもと変わらない笑みで答える宗次郎。

両者共にその場の現状にすぐわなほがらかな笑顔である。

やがて同時に武器を収める両者。

あまりにも一瞬の出来事であったためか、一同の中で誰一人として反応できたものは居なかったようだ。

いや、妖夢と美鈴。

庭師と門番。お互い仕える主と居場所を守るために日夜研鑽を惜しまなかった両者だけが今にも飛び掛る体勢になっていた。

咲夜も従者として主を守る立場であるが、彼女はあくまでもメイドである。

ナイフを構えた体勢のまま反応できずにいた。

この辺りはやはり生粋の武芸者とそうでない者との差であろう。

それ以前にこのメイド長は能力に頼りすぎている嫌いがあるようだ。

「……そこまでしておきなさい。これ以上はいくらなんでも見過ごせないわよ」

両者が武器を収めたことでとりあえずこの場は治まったと判断したのだろう。

紅魔館の主が低い声音でフラワーマスターに最後通告を出していた。

この吸血鬼も動くことはなかった一人であるが、彼女の場合は反応できなかったのではなく、反応 “しなかった” ようである。

事実、彼女の紅い瞳は両者の動きを正確に捉えていた。

これは武芸者云々以前に、種族的優位さからきているようだ。

流石は妖怪の中でも最強の一角を占める吸血鬼といったところであらう。

「ええ、分かっているわ。これはほんの挨拶代わりですもの。それじゃこれでお暇させてもらうわね」

これ以上留まるのは懸命ではないと判断したのか、フラワーマスタ―は持っていた日傘を開くと、そのままフワリとテラスの手すりの上へと飛び乗った。

「次に会うときを楽しみに待っているわ宗次郎。では、皆さんごきげんよう」

手すりの上でこちらを向き、優雅に一礼をしながら別れを告げるフラワーマスタ―。

気品さえ漂うその仕草は先ほどのやり取りなど微塵も感じさせなかった。

ゆったりと飛び去っていく彼女の姿を見送ると、ようやく一同の緊張が解かれる。

「なんともまあ、嵐みたいな人でしたねえ」

そんな一同の胸の内を知ってか知らずか、能天気なそのたまう宗次郎。

更に内心では日傘を差して空を飛んでいった彼女を見て 『……』

メ〇ー・ポ〇ンズ?』 などとしよーもないことに能力を使ったりする。

「そんなのん気な……宗次郎さん。本当にあの人の所も回るおつもりなんですか?」

呆れた様子でそう尋ねる庭師。

同行する身としてはそう言いたくもなるであろう。

「ご心配なく。あの人の所に行くときは一人で行きますから」

だが、返ってきたのはなんとも的外れな言葉であった。

「そんな訳にはいきません! って言うか、そうじゃなくてですね……!?!」

宗次郎の言葉に感情が昂ったのか、少々言葉遣いを崩しながら言い募ろうとする彼女であったが、その彼の眼を見て言葉を飲み込んだ。

「大丈夫ですよ。僕は負けませんから」

いつもと変わらない笑み。

だが、その眼差しからは強い信念が込められている。

「宗次郎……さん」

彼の眼差しを正面から見た彼女の口からは、弱々しく名前を呼ぶ

言葉しか出てこなかった。

（ずるいです、宗次郎さん……そんな目をされたら何も言えないじゃないですか……）

ぎゅっと右手を握り締め、胸に当てながら顔をうつむかせる。

そんな彼女の様子に、宗次郎も胸を締め付けられる思いを感じていた。

（ごめんなさい、妖夢さん。でも、避けて通る訳にはいかないんです）

そう、“答え”を見つけるためにも……

彼女に心で詫びながらも、新たな決意を胸に秘める宗次郎。

その瞳に一切の迷いは無い。

（でも——）

そこでチラリと右手を見る。

（——言うは易し、行うは難し……だけどね）

“未だにシビレが残る右手” に渴を入れるように力を込め、握り締めていた。

なんととはなしに二人だけの空間を作った両者であるが、この場には二人以外の者も居ることを忘れていようである。

「あー……いい雰囲気のところ邪魔して悪いんだけど、この後どうするのか決めているのかしら？」

なんとも言えない口調で話しかける紅魔館の主。

その言葉にハツとする両者。

「あ、す、すいません。ええと、ここを発った後は迷いの竹林という所に行く予定なんです」

「そ、そうです。永遠亭の薬師に宗次郎さんの経過観察をしてもらうことになってまして……」

少々慌てながらも今後の予定を告げる二人。

「永遠亭で経過観察ですか？ 宗次郎様、どこかご病気でも……」

庭師の言葉にこの館のメイド長が少し不安気に話しかけてきた。

（あら。咲夜ったら珍しいわね……何かあったのかしら？）

従者の様子にその主が内心で首を傾げる。

本来、主人とその客人の会話に割り込むのは従者として礼儀に反する行為である。

勿論、いつもの彼女であればそのようなマネはしない。

彼女の主としてそのことを咎めなければならぬはずなのだが、

何があっただろうという好奇心の方をいたく刺激されたようであった。

……流石にメイド服の一件までは知らなかったようである……

尤も、それだけではないようだが。

「ああ、違いますよ。僕は元々人間でして――」

見れば事情を知らないメイド長に宗次郎がこれまでの経緯を説明していた。

庭師からある程度事情を聞いていた彼女にとって、さして真新しい情報でもないために聞き流すことにすると、他の二人の様子を窺うことにしたようだ。

（ふうん？ パチエったらなんでもない振りをしているけど、聞き耳を立てているのが丸分かりよ。それに美鈴も随分心配そうにしてるし……）

どうやら紅魔館の者全員が宗次郎を気に掛けているようである。

（まいったわねえ……アイツってとんでもない天然ジゴロだわ）

その言葉をメイド長が聞いていれば 『そんな言葉をどこで覚えられたのですか！？』 とばかりにお小言をもらうハメになっていたであろう。

従者とはいえ、メイド長である咲夜は時として主人を叱り飛ばせるほどその立場は高いのである。



（まあいいわ。咲夜には後でじっくり話を聞かせてもらおうとして、宗次郎がああフラワーマスター相手にどう切り抜けるのか見届けさせてもらうわね）

そう内心でつぶやく彼女であったが、何気に紅魔館の中で彼女が一番宗次郎を気に掛けているようであった。

ちなみにこの直後、壊してしまった椅子のことで謝罪する宗次郎にメイド長から苦笑混じりのお小言をちょうだいしたことについては完全に余談である。



一方、場面は再び博麗神社。

「……つまり、私と宗次郎さんは共通する点が多いってことなのね？」

すっかり長くなってしまった話にいい加減 頭が疲れたのか、淹

れなおしたお茶をズズッと一口。

うん。やっぱり茶葉が良いと味もちがうわねえ……などと思っている辺り、いい感じに脳ミソが温まっているようだ。

ちなみにこの茶葉は宗次郎の土産品の一つである。

「ことはそんな単純な話ではないわ。単に似通ってるってだけならそれだけの話なんだけどね」

三行どころか一行でまとめてしまった巫女に人形遣いもしゃべり疲れたのか、少々気だるそうにそれだけの話ではないことを告げる。

「だからそれがなんだって言うのよ……もういい加減疲れちゃったわ」

「もう少しで終わるからちょっとだけ我慢してちょうだい。それでね、彼がこの幻想郷に来る切っ掛けになった……」

「博麗大結界のこと？ 旅をしてたらそれに巻き込まれちゃったって言ってたわね」

宗次郎の話を思い出しながらそこまで言うとはて、そう言えばさっきからあの鬼がやけに大人しいなと思い、首を横に向ける。

「んにゃ……お酒もうないぞ……ムニャ……」

見れば幸せそうに寝息をたてる小鬼の姿が。

「「……………」」

巫女の首の動きにつられた人形遣いもそれを見て、お互いなんとも言えない表情となっていた。

「……ま、いいわ。どうせ起きてたって茶々入れてくるだけですの」

「……そうね。でも、言い出しっぺがぐーすか寝てるってのも腹立つわねえ……」

「止めなさいよ。うるさくなるだけだから、その御札はしまいなさい」

「……分かったわよ。で、話の続きなんだけど」

のん気に寝ている鬼の頭に御札を投げつけてやろうかとした巫女であったが、なだめられて渋々と懷にしまいこむと、気を取り直して続きをうながした。

「ええ、続けるわね。それで、彼が博麗大結界に巻き込まれ、気が付いたらこの幻想郷に来ていた。それだけなら経緯こそ特殊だけど今までの外来人とそう変わらないわ。でも、百年以上も前の人間が何故今になって現れたのか……」

「ん？ それなら最近、妖怪の山に来たっていう神社が原因じゃないの？ まあ、あの神社も今のところ挨拶にも来てないし、あの山の中で大人しくしてるのならこっちから首を突っ込む気はないけどね」

「守矢神社とかいったかしらね。まあ、それは置いておくとして、

私としてはその神社が原因じゃなくて、ただの切っ掛けだったんじゃないかと思うのよ」

「切っ掛け？」

この人形遣いが何を考えてそう思うのか全く見当がつかない巫女は、首を傾げると相手の言葉を待った。

その人形遣いも、これは言ってもいいことなのだろうかと一瞬迷いを見せるが、ここまで話してしまったのならばと思いい口を開いた。

「……いいこと？ 貴方は博麗の巫女でこの博麗大結界の要。そして宗次郎はその大結界に巻き込まれていた……もし、もしよ？ もしも彼が時間を飛び越えてきたのではなくて、今までずっと大結界の“中”に居たとしたら……もしもそれが彼の半妖化と能力を“植え付けられる”原因となっていたら……」

慎重に言葉を選びながら語る人形遣いの仮説に、さしもの巫女もサッと顔色を変えた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！ まさか貴方……」

巫女の様子にやはり言うのは早まったかと思った人形遣いであったが、やはりここは言っておくべきだと判断し、言葉を続ける。

「……そう。世界を構成する三つの層がその博麗大結界によって分けられ、貴方は内側、宗次郎は外側……方法こそ違えどなんらかの形でリンクしていたとしたら……」

「もう止めなさい！！」

なおも仮説を述べようとする人形遣いの言葉を博麗の巫女が遮る。

そして立ち上がると障子を開いて廊下へと出ようとしていた。

「……どこに行くの？」

「ちょっと頭を冷やしによ。それとアリス」

「……何？」

「今の話は聞かなかったことにするわ。だから貴方も頭を冷やしなさい」

「……そうね。そうするわ」

巫女の言葉に彼女も結論を急ぎすぎたようだと判断すると、自身も立ち上がり巫女の後に着いて部屋の外へと歩き出す。

そして、彼女の後ろを小さな西洋人形——上海がフヨフヨと浮かんで着いて行くと、開かれた障子を器用に閉めていくのだった。

さて、部屋に一人残されることとなった小鬼であるが……

「……やれやれ。こりゃ思った以上に複雑になってきちゃったなあ」

それまで寝息を立てていたはずの小さな百鬼夜行が片目を開け、そうつぶやいた。

どうやら狸寝入りをしていたようだ。

「さてさて。紫のヤツは何を企んでいるんだろうかねえ……ま、大体は想像つくけど」

小声でそう言った後、瓢箪の酒をクイッとあおる。

起き抜けの一杯というヤツであろう。

そして、流石にこれは小声であっても、誰一人聞く者が居なかったとしても口には出せないであろうと思うことを胸の中でつぶやいた。

（たぶんこう企んでいるんだろうねえ——

——宗の字……宗次郎を “ 博麗の巫女の予備 ” にと……）

博麗の巫女といえども人間である。

人間であれば病気や事故——つまりは妖怪退治などで——命を落とすこともある。

なにより人間の寿命は百年ともたないのだ。

確かに巫女が寿命などで居なくなれば、次の巫女がその任に着く。

だが、すぐに都合のいい人物が見つかるとは限らないのだ。

博麗大結界も巫女が不在になったからといって、一年や二年でガ

タがくるほどヤワな代物ではない。

だが、巫女の役目はそれだけではないのだ。

博麗の巫女が不在となれば、またぞろ好き勝手に異変を起こそうとする者が現れるだろう。

ここ最近では巫女以外にも異変を解決しようとする者——例えば白黒の魔法使いなど——が居るが確実とは言えない。

ならばその任を恒常的に、かつ確実にこなせる者が居たとしたら？

(……霊夢としちゃ複雑だろうねえ)

そう。そんな者が現れたとしたら博麗の巫女は名ばかりのものとなってしまうだろう。

(まあ、どっちが“予備”なのか分かんなくなっちゃうよね)

だが、それならば更に疑問は残る。

(だとしたら霊夢には知られないようにしなきゃいけないはずなんだけど……それ以前にこんなこと、勘のいい連中ならいずれは考え付くことだしねえ)

今しがたの人形遣いのように。

何より、このようなことを今代の巫女に知られれば確実に自分の存在意義を見失いかねない。

そうならば結界の維持や異変の解決にも支障が出てしまうだろう。

それ以上にこのことが幻想郷中に広まれば、博麗の巫女的重要性が著しく低下してしまい、妖怪に対する抑止力が失われる可能性さえあるのだ。

あのスキマ妖怪がそのような事態を容認するはずがなかった。

（……ひょっとして、ただ単に“予備”にするだけじゃない？  
いや、そもそも予備にするかどうかさえも……）

うんうん唸りながら考えを巡らせる小鬼であったが……

（ダメだねえ。だいたい私は頭を使うことは向いていないんだよ）

何も思いつかず、考えを放棄してしまう。

そして瓢箪の栓を抜き、もう一度中身をあおろうとして――

「はてさて、アンタはいったい何を企んでいるんだい？」

――不意に首を上げ、何も無いはずの天井を見上げる。

そこには一瞬ではあったが、空間の切れ目とその両端にあるリボンが見えたような気がした。





「フッフ……流石は私の旧友ね」

そこは暗闇の中にギョロリと光る眼だけが浮かぶ空間であった。

そんなある種、気味の悪い空間に漂う一人の女性の姿。

「心配しなくてもいいわよ。霊夢にとっても貴方にとっても悪い結果にだけはならないわ」

扇子で口元を隠し、胡散臭い雰囲気を漂わせる女性――八雲 紫は独りごちる。

と、そこに新たな空間の裂け目が出来、そこからもう一人の女性が姿を現す。

「紫様……」

「ご苦労様、藍。それで紅魔館の方はどうだったの？」

それは九尾の狐にして八雲 紫の式神、八雲 藍であった。

「ハッ。一時は一触即発のようでしたが、なんとか治まったようです」

「そう……ま、あそこはあまり心配する必要はなかったんだけどね」  
式の報告を受け、そうつぶやく主に、彼女の忠実な式神は恐る恐る声を掛けた。

「あの、紫様。宗次郎殿はあのままでよろしいのでしょうか？ あ  
のフラワーマスターに目を付けられたとなると……」

「彼に関しては現状維持よ。余計な手出しは必要ないわ。それに……」

「……それに、なんでございましょう？」

「いえ、なんでもないわ。貴方は白玉楼に戻りなさい。幽々子がお腹を空かせてるでしょうから」

「……ハッ。畏まりました」

そう言っただけで命令を受けた彼女はスキマを開き、その中へと消えていく。

式神は主と力のリンクを繋げてさえいれば、主の能力を使うことができるのだ。

スキマが閉ざされ、その切れ目も消えた空間をしばし眺めるスキマ妖怪。

やはり納得がいかなかったであろう。

命令を受諾したときの彼女の様子はどこか不満気であった。

「……ごめんなさいね、藍。貴方にもまだ話せないわ」

もはや誰もその言葉を聞くことのない場所で、一人彼女は自らの式に詫びる。

そして扇子を閉じ、別の空間に向かってその扇子の先を横に滑らせた。

「宗次郎……貴方がこの試練に打ち勝つことを信じているわ」

再度開かれたスキマの先には、紅い屋敷の門をくぐり、半人半霊の少女を伴って歩き出す宗次郎の姿があった。

「そう……この試練に打ち勝って、貴方が “ 真の能力 ” に目覚めれば、その時こそ全てを話しましょう」

だから……と、言葉を続ける。

「……その時は私を恨んでも憎んでも罵ってくれても……いいえ、その刀で貴方が気の済むまで打ちすえてくれたって構わないわ」

そう語りかける彼女の眼には深い慈愛と少しばかりの哀しみが同居していた。

今の彼女の姿を見知っている者が見れば自らの目を疑っただろう。

いつも振りまいている胡散臭さは微塵も感じられず、そこに在るのはただ我が子を未来を案じる母のごとき一人の女性の姿であったのだから……

「その代わり私のたった一つの願いを聞いて欲しいの。だからもつとこの幻想郷を見て欲しいの。そして、もっと知って欲しいのよ……」

そこで一旦言葉を切ると、眼を閉じて言葉を続ける。

「私の願いは貴方がこの幻想郷を愛してくれること……そう――――」

――――私に万一のことがあっても幻想郷を護ってくれる――――

――――守護者（ガーディアン）になって欲しいの……」

――――幻想郷の守護者――――

彼女は懸念していた。

この幻想郷の行く末を。

自分が居る間はその心配もないであろう。

だが、もし自分に万一のことがあれば？

無論、そう簡単にどうこうなるような自分ではない。

しかし、たとえそれが数百万、数千万分の一の確率であったとしても不安は消えないのだ。

だからこそ彼を見たとき、その能力（ちから）の真の理由を知ったとき。

彼女は歓喜した。

彼ならばと……

“ 答え ”    への道は、更にその厳しさを増していく……

## 第二十三話 ― 紅魔館その6 ― (後書き)

はい、皆様お疲れ様です。かなりの長文でしたがいかがでしたでしょうか？

今回はかなりのネタバレをさせていただきました。

なぜそうしたかと言いますと、このタイミングを逃すと明かすのがかなり先になってしまからです。

あ、それとゆかりんがなにやら不穏なフラグを立てたような感じになってますが、別にどうこうなるわけではありませんので、皆様ご安心を。

まあ、ここでぶっちゃけますと、ゆかりんは『自分の代わりになる人材』を欲していたという訳なんです。

それにはスキマの能力が使えるか使えないかは関係ありません。

それ以上に彼には博麗の……まあ、皆様がご想像されている通りかと。

それでは次回までしばしのお別れを……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4557j/>

---

東方天剣録

2011年1月6日07時35分発行